一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第5集

諸田仮塚遺跡

福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田所在遺跡の調査

1998

福岡県教育委員会

諸田仮塚遺跡

（もろたかんづか）

福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田所在遺跡の調査

(1)　1号墳石室と盛土下1～3号土坑(空中写真　上空から)

(2)　1号墳盛土土層と盛土下3号土坑(西から)

(1)　4 号土壙墓(北西から)

(2)　4 号土壙墓轡・馬歯出土状況(東から)

(1)　大溝 2 の地崩れ(東から)

(2)　大溝 2 の地崩れ(西から)

(1)　1号墳出土玉類

(2)　2号墳出土須恵器子持器台

序

福岡県教育委員会は，建設省九州地方建設局の委託を受けて，昭和56（1981）年度から一般国道3号筑紫野バイパスの建設に先立って埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。発掘調査は平成6年度に終了し，平成10年度に筑紫野バイパスが全線開通する予定です。

この報告書は，平成2年度から平成3年度に発掘調査を実施した筑紫野市大字諸田所在の諸田仮塚遺跡の記録です。この地域は「二日市地峡」と呼ばれ，古代より福岡平野と九州各地を結ぶ交通の要所として筑紫神社が鎮座しております。今回の調査では，旧石器時代から中世におよぶ遺跡や出土品があり，この中でも旧石器の多さ，初期須恵器と埴輪をもつ古墳，馬を埋葬した土壙墓群などが目立っており，この地域の重要性を知ることのできる大変意義のある成果を得ることができました。

本書が，地域間交流の研究や文化財保護思想の普及などに広く活用していただければ幸甚に存じます。

発掘調査および整理作業や報告書の作成にあたって，御協力いただいた方々に対しまして深甚の謝意を表します。

平成10年3月31日

福岡県教育委員会
教育長　光　安　常　喜

例　　言

1．　この報告書は，平成２（1990）年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道３号筑紫野バイパスの建設予定地のうち，第１地点についての埋蔵文化財発掘調査記録である。

2．　本書は，一般国道３号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第５集で，福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田に所在する「諸田仮塚遺跡」に関する報告書である。

3．　出土遺物は，九州歴史資料館において，土器類を岩瀬正信氏，金属器を横田義章氏が，それぞれ指導してその整理を行った。

4．　本書に掲載した遺稿の実測図は，柳田康雄・小川泰樹の調査担当者と久住猛雄・田中紘子・田中シゲ子・友永澄子・松尾千代子・吉野マサ子・片田清子・風間久子・相良幸子が，遺物は棚町陽子・坂田順子・堀江圭子・柳田・小川が作成し，製図を豊福弥生・原カヨ子が行ったが，特定の遺物について九州歴史資料館横田義章・杉原敏之と文化課岸本圭の各氏に担当していただいた。

5．　本書に掲載した写真は，遺構を柳田・小川が，遺物については九州歴史資料館において，石丸洋と北岡伸一の各氏が担当した。また，気球写真は空中写真企画に委託した。

6．　本書に使用した方位は，座標北（Ｇ．Ｎ）の他，特記しないものは磁北である。

7．　本書の執筆は，Ｉ章を柳田が，２章のうち諸田仮塚地区の遺構を小川が，南斜面地区と永岡地区の遺構を柳田が，遺物とIII章を柳田・小川・杉原・岸本が行い，担当箇所は文末に明記してある。また，編集は各担当者と協議のうえ小川が行った。

本　文　目　次

Ⅰ．　はじめに …… 1
1．　調査の経緯と調査組織 …… 1
2．　位置と環境 …… 3
Ⅱ．　遺構と遺物 …… 8
1．　諸田仮塚地区の調査 …… 8
1）　古墳 …… 8
2）　土壙墓 …… 43
3）　竪穴状遺構 …… 48
4）　土坑 …… 48
5）　1号墳墳丘下の土器 …… 49
6）　地割れの調査 …… 54
7）　その他出土の遺物 …… 55
2．　南斜面地区の調査 …… 66
3．　北斜面地区の調査 …… 67
4．　永岡地区の調査 …… 68
1）　落とし穴群 …… 68
2）　北区土坑群 …… 73
3）　大溝 …… 76
4）　永岡地区出土土器 …… 83
5）　常松地区東斜面出土土器 …… 85
6）　その他の出土遺物 …… 86
Ⅲ．　おわりに …… 91
1．　1号墳について …… 91
2．　土壙墓（馬土壙）について …… 92
3．　朝倉窯系初期須恵器 …… 96
4．　埴輪について …… 105
5．　石器 …… 106
Ⅳ．　科学的分析 …… 110
1．　諸田仮塚1号墳出土初期須恵器と埴輪の蛍光X線分析 …… 110
2．　筑紫野市諸田仮塚遺跡出土の馬歯 …… 118

図 版 目 次

巻頭図版 1　(1) 1 号墳石室と盛土下 1 ～ 3 号土坑（空中写真　上空から）
　　(2) 1 号墳盛土土質と盛土下 3 号土坑（西から）
巻頭図版 2　(1) 4 号土壙墓（北西から）
　　(2) 4 号土壙墓轡・馬歯出土状況（東から）
巻頭図版 3　(1) 大溝 2 の地崩れ（東から）
　　(2) 大溝 2 の地崩れ（西から）
巻頭図版 4　(1) 1 号墳出土玉類
　　(2) 2 号墳出土須恵器子持器台

図　　版 1　(1) 諸田仮塚遺跡全景（空中写真，北上空から）
　　(2) 諸田仮塚遺跡全景（空中写真，東上空から）
図　　版 2　(1) 1 ・ 2 号墳全景（空中写真，南西上空から）
　　(2) 1 号墳全景（調査前，南東から）
図　　版 3　(1) 1 号墳全景（空中写真，南西上空から）
　　(2) 1 号墳全景（空中写真，上空から）
図　　版 4　(1) 1 号墳石室（南西から）
　　(2) 1 号墳石室（盛土除去後，北東から）
図　　版 5　(1) 1 号墳石室奥壁石材（南西から）
　　(2) 1 号墳左側壁石材（南東から）
図　　版 6　(1) 1 号墳右側壁石材（北西から）
　　(2) 1 号墳左手前隅部（東から）
図　　版 7　(1) 1 号墳横口部（北東から）
　　(2) 1 号墳横口部と前庭部側壁（北西から）
図　　版 8　(1) 1 号墳盛土土層（北東から）
　　(2) 1 号墳北東ベルト土層（北から）
図　　版 9　(1) 1 号墳北西ベルト土層（西から）
　　(2) 1 号墳南東ベルト土層（南から）
図　　版10　(1) 1 号墳盛土除去後全景（空中写真，上空から）
　　(2) 1 号墳石室と盛土下 1 ～ 3 号土坑（空中写真，上空から）
図　　版11　(1) 1 号墳盛土下 1 号土坑（南東から）
　　(2) 1 号墳盛土下 1 号土坑埋土土層（北東から）

(3) 1号墳盛土下2号土坑（北西から）
図　版12　(1) 1号墳盛土下2号土坑埋土土層（北東から）
(2) 1号墳盛土下3号土坑と盛土土層（南から）
図　版13　(1) 2号墳全景（空中写真，上空から）
(2) 2号墳石室（北西から）
図　版14　(1) 2号墳と1～4号土壙墓（空中写真，上空から）
(2) 3号土壙墓（南東から）
図　版15　(1) 3号土壙墓馬歯出土状況（南東から）
(2) 3号土壙墓埋土土層（北東から）
図　版16　(1) 4号土壙墓（南から）
(2) 4号土壙墓轡と馬歯出土状況（南から）
図　版17　(1) 4号土壙墓埋土土層（東から）
(2) 1号竪穴状遺構（北東から）
図　版18　(1) 1号土坑（南から）
(2) 1号土坑埋土土層（南から）
図　版19　(1) 地割れ断層（B）
(2) 地割れ断層（D）
図　版20　1号墳出土土器①
図　版21　1号墳出土土器②
図　版22　1号墳出土埴輪（円筒・朝顔形）
図　版23　1号墳出土埴輪（形象-家・馬・鶏・靫）
図　版24　1号墳出土玉類・鉄器①
図　版25　1号墳出土鉄器②・2号墳出土土器①
図　版26　2号墳出土土器②
図　版27　2号墳出土土器③
図　版28　2号墳出土土製品・玉類・馬具　1・4号土壙墓出土土器・轡
1号竪穴状遺構出土土器
図　版29　1号墳墳丘下層出土土器
図　版30　(1) 旧石器時代の石器①（表）
(2) 旧石器時代の石器②（裏）
図　版31　(1) 旧石器時代の石器②（表）
(2) 旧石器時代の石器②（裏）
図　版32　(1) 旧石器時代の石器③（表）

(2) 旧石器時代の石器③（裏）
図　版33　(1) 旧石器時代の石器④
(2) 旧石器時代の石器⑤
(3) 旧石器時代の石器⑥
図　版34　縄文時代以降の石器
図　版35　その他出土の縄文土器・銅製品・瓦
図　版36　(1) 永岡地区全景（空中写真，上空から）
(2) 永岡地区南部（空中写真，上空から）
図　版37　(1) 1号落とし穴
(2) 2号落とし穴（東から）
図　版38　(1) 3号落とし穴（南東から）
(2) 4号落とし穴（北西から）
図　版39　(1) 5号落とし穴（南西から）
(2) 7号落とし穴（南西から）
図　版40　(1) 1号土坑（風倒木）（東から）
(2) 2号土坑（北東から）
図　版41　(1) 3号土坑（北西から）
(2) 4号土坑（南東から）
図　版42　(1) 5号土坑断面土層（南東から）
(2) 5号土坑（南東から）
図　版43　(1) 大溝1（東から）
(2) 大溝1（西から）
図　版44　(1) 大溝2（東から）
(2) 大溝2（西から）
図　版45　(1) 大溝2の東側地滑り（東から）
(2) 大溝2の東側地滑り（南から）
図　版46　大溝1・2出土の土器・鉄器・石器
図　版47　永岡・常松地区出土土器・陶磁器　諸田仮塚遺跡出土土器・耳環
図　版48　(1) 旧石器時代の石器（表）
(2) 旧石器時代の石器（裏）
図　版49　(1) 縄文時代の石器①
(2) 縄文時代の石器②
(3) 縄文時代の石器③

挿　図　目　次

第 1 図　国道3号筑紫野バイパス用地内の各調査地点（1/10,000）……折込
第 2 図　諸田仮塚遺跡周辺の主要遺跡分布（1/50,000）……折込
第 3 図　諸田仮塚遺跡位置図（1/5,000）……6
第 4 図　諸田仮塚遺跡と周辺地形図（1/1,000）……7
第 5 図　1号墳地形測量図（1/200）……9
第 6 図　1号墳土層断面図（1/100）……折込
第 7 図　1号墳石室実測図（1/60）……11
第 8 図　1号墳盛土下1・2号土坑実測図（1/60）……13
第 9 図　1号墳盛土下3号土坑実測図（1/60）……14
第 10 図　1号墳出土土器実測図①（1/3）……15
第 11 図　1号墳出土土器実測図②（1/3）……16
第 12 図　1号墳出土土器実測図③（1/3）……17
第 13 図　1号墳出土土器実測図④（1/4）……18
第 14 図　1号墳出土埴輪（円筒）実測図①（1/4）……20
第 15 図　1号墳出土埴輪ハケ目の比較（1/2）……21
第 16 図　1号墳出土埴輪（円筒）実測図②（1/4）……21
第 17 図　1号墳出土埴輪（朝顔形）実測図（1/4）……22
第 18 図　1号墳出土埴輪（形象-家）実測図①（1/4）……24
第 19 図　1号墳出土埴輪（形象-家）実測図②（1/4）……25
第 20 図　1号墳出土埴輪（形象-鶏）実測図（1/4）……26
第 21 図　1号墳出土埴輪（形象-馬）実測図①（1/4）……27
第 22 図　1号墳出土埴輪（形象-馬）実測図②（1/4）……28
第 23 図　1号墳出土埴輪（形象-靫・その他）実測図（1/4）……29
第 24 図　1号墳出土馬・鶏形埴輪の復元図……29
第 25 図　1号墳出土玉類実測図①（1/1）……30
第 26 図　1号墳出土玉類実測図②（1/1）……31
第 27 図　1号墳出土玉類実測図③（1/1）……32
第 28 図　1号墳出土鉄器実測図（1/2）……35
第 29 図　2号墳地形測量図（1/100）……36
第 30 図　2号墳石室実測図（1/60）……37

第 31 図　2 号墳出土土器実測図①（1/3）……38
第 32 図　2 号墳出土土器実測図②（1/3）……39
第 33 図　2 号墳出土土器実測図③（1/3）……40
第 34 図　2 号墳出土土器実測図④（1/4）……41
第 35 図　2 号墳出土土製品実測図（1/2）……42
第 36 図　2 号墳出土土器実測図⑤（1/5）……42
第 37 図　2 号墳出土玉類実測図（1/1）……43
第 38 図　2 号墳出土鉄製品実測図（1/2）……43
第 39 図　1 ～ 3 号土壙墓実測図（1/30）……44
第 40 図　1 号土壙墓出土土器実測図（1/3）……45
第 41 図　2 号土壙墓出土土器実測図（1/3）……45
第 42 図　4 号土壙墓実測図（1/30）・轡および馬歯出土状態実測図（1/10）……46
第 43 図　4 号土壙墓出土轡実測図（1/3）……47
第 44 図　1 号竪穴状遺構実測図（1/40）……48
第 45 図　1 号竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）……49
第 46 図　1 号土坑出土土器実測図（1/3）……49
第 47 図　1 号土坑実測図（1/50）……50
第 48 図　1 号墳墳丘下層遺構実測図（1/120）……51
第 49 図　1 号墳墳丘下層出土土器実測図①（1/4）……52
第 50 図　1 号墳墳丘下層出土土器実測図②（1/4）……53
第 51 図　溝状土坑（地割れ1）断面実測図（1/40）……54
第 52 図　諸田仮塚地区出土石器実測図①（2/3）……56
第 53 図　諸田仮塚地区出土石器実測図②（2/3）……57
第 54 図　諸田仮塚地区出土石器実測図③（2/3）……58
第 55 図　諸田仮塚地区出土石器実測図④（2/3）……59
第 56 図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑤（2/3）……60
第 57 図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑥（2/3）……61
第 58 図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑦（2/3）……62
第 59 図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑧（2/3）……63
第 60 図　諸田仮塚地区出土縄文土器実測図（1/3）……64
第 61 図　諸田仮塚地区出土金属製品実測図（1/2）……64
第 62 図　諸田仮塚地区出土瓦実測図（1/4）……65

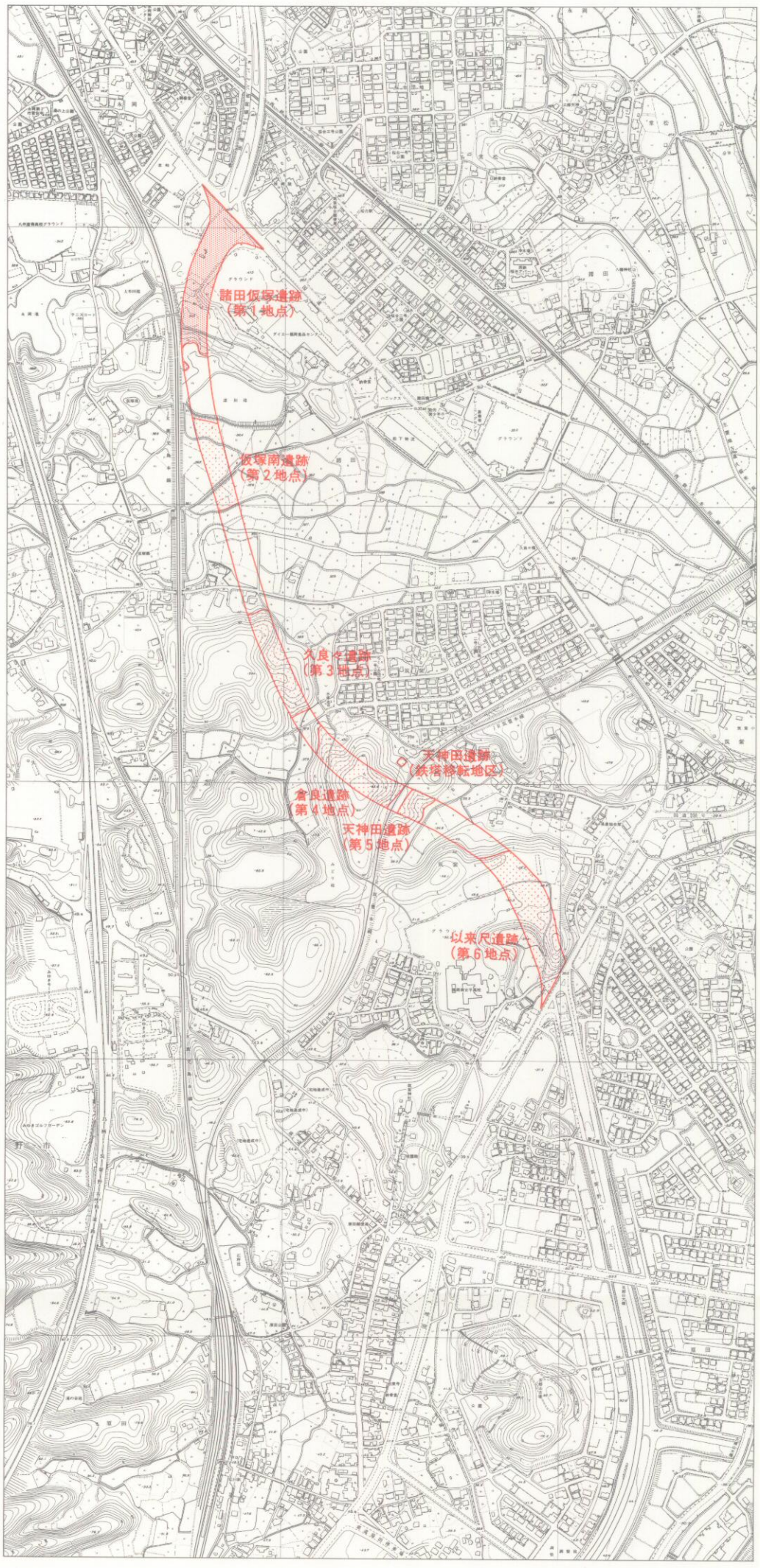
第 63 図　住居状遺構実測図（1/60）……66
第 64 図　南斜面出土土器実測図（1/4）……67
第 65 図　落とし穴実測図①（1/30）……69
第 66 図　落とし穴実測図②（1/30）……71
第 67 図　落とし穴実測図③（1/30）……72
第 68 図　土坑実測図①（1/40）……73
第 69 図　土坑実測図②（1/40）……74
第 70 図　土坑実測図③（1/40）……75
第 71 図　大溝土層断面図①（1/40）……77
第 72 図　大溝土層断面図②（1/40）……78
第 73 図　大溝 1 出土土器実測図（1/4）……79
第 74 図　永岡・常松地区大溝 2 崩壊状況実測図（1/60）……折込
第 75 図　大溝 2 出土土器実測図（1/4）……81
第 76 図　大溝出土鉄器実測図（1/2）……82
第 77 図　大溝 2 出土石器実測図（1/2）……83
第 78 図　永岡地区出土土器実測図（1/3）……84
第 79 図　常松地区出土土器・陶磁器実測図（1/3）……85
第 80 図　永岡地区出土石器実測図①（2/3）……86
第 81 図　永岡地区出土石器実測図②（2/3）……87
第 82 図　永岡地区出土石器実測図③（2/3）……88
第 83 図　永岡地区出土石器実測図④（2/3）……89
第 84 図　永岡地区出土縄文土器実測図（1/3）……90
第 85 図　池の上・古寺出土初期須恵器編年図……99
第 86 図　朝倉窯系初期須恵器分布図……104

付　図　目　次

付図 1　諸田仮塚地区遺構配置図（1/200）
付図 2　永岡地区遺構配置図（1/200）

表　目　次

表１　一般国道３号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財一覧表…… １
表２　１号墳出土玉類一覧表……33・34
表３　２号墳出土ガラス玉一覧表……43
表４　朝倉窯系初期須恵器出土地名表 ……101
表５　旧石器時代の石器観察表 ……108



第１図　国道３号筑紫野バイパス用地内の各調査地点（1/10,000）

Ⅰ．はじめに

1　調査の経過と調査組織

一般国道３号線筑紫野バイパスは，同福岡南バイパス（福岡市東区二又瀬～筑紫野市永岡の19.08km）に続く，筑紫野市永岡～同原田・佐賀県三養基郡基山町白坂までの総延長4.3kmである。同バイパスは，福岡南バイパスとの接点で３号線と交差し，筑紫野市筑紫で再度交差して３号線の東側を南下する。さらに筑紫野市原田で一般国道200号線バイパスの基点となり，その南側で200号線と直交して，さらに南下し３号線と合流することによって，以下３号線の拡幅となる。この地域は，福岡市と久留米市の中間地点にあたり，低丘陵地帯であることから「筑紫野小郡ニュータウン」の大規模宅地造成が実施され，歴史的な要所に加えて現在でも交通上極めて重要度を増幅した地域となっており，14ヶ所の埋蔵文化財要調査地点が計上された。

筑紫野バイパスのうち，３号線で交差する筑紫地区以南は工事が先行することから，第７地点以南が昭和56年度から昭和59年度に埋蔵文化財の発掘調査が実施され，建設工事が昭和59年度に着手され，昭和62年４月には筑紫野市原田～佐賀県基山町白坂間の延長2.04kmを暫定２車線で供用開始している。なお，発掘調査地点の第７～14地点を試掘調査したところ，遺跡として発掘調査を実施したのは，第９地点の合の原遺跡と第12地点の真竹遺跡であり，福岡県教育委員会「合の原遺跡」『一般国道３号線筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第１集，1986，として報告されている。

筑紫野市永岡～筑紫間の第１～６地点の埋蔵文化財の調査地点については，まず永岡・諸田地区を平成２年３月２日に立会調査し，用地範囲・土地買収状況など試掘調査と本調査に向けた現地打合せを実施した。試掘調査は，同年３月８日～12日に永岡・諸田地区（第１～２地点），平成４年２月６日～３月31日に筑紫地区（第３～６地点）を実施した。

第１地点の諸田仮塚遺跡（永岡地区を含む）の本調査は，未買収用地があったことから，２次に分けて実施した。第１次調査は，永岡地区の平坦地と，諸田仮塚地区の丘陵地区を平成２年８月３日～平成３年４月８日の間，第２次調査は，永岡地区に属する諸田仮塚丘陵地区の北

表１　国道３号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財一覧表

地点	遺跡名	所在地	面積 ㎡	調査期間	遺跡の概要
1	諸田仮塚	大字永岡字原、大字諸田字仮塚	15,000	H２・８・３～３・４・８ H４・２・４～４・２・28	縄文住居・弥生大溝 古墳群・旧石器
2	仮塚南	大字諸田字仮塚	8,000	H３・４・９～３・11・15	弥生・古墳集落 銅戈鋳型
3	久良々	大字筑紫字久良々	6,600	H５・６～５・10	縄文晩期弥生掘立柱 建物・土壙墓
4	倉良	大字筑紫字倉良	7,000	H４・２・５～４・５・６	縄文土壙・弥生墓地 近世墓
5	天神田	大字筑紫字天神田	1,400	H２・５・10～６・11 H４・２・12～20	中世土壙・道路 太型石斧表採
6	以来尺	大字筑紫字以来尺	14,400	H４・２・20～H７・１	旧石器・弥生集落・ 大型建物・古墳・中世

斜面を平成4年2月4日～2月28日に実施した。

各地点の遺跡名と所在地・調査期間等は，表1のとおりである。

なお，諸田仮塚遺跡の発掘調査と報告書作成にあたっての組織と関係者は，下記のとおり。

建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所

	平成2年度	平成3年度	平成9年度
事務所長	中垣　光弘	清水　英治	藤本　　聡
副所長	岩田　秀人	岩田　秀人	兼武征二郎
〃	横溝　敏治	横溝　敏治	別府　五郎
建設監督官	山田　茂利	池田　勝美	柴田　　智
調査第二課長	中川　蔵太	中川　蔵太	田中　義高
専門職	石田　満之		
調査係長	松尾　義信	島　　義博	沓掛　　孝
建設技官	清時　義雄	清時　義雄	島田　隆一
工務課長	肥後橋譲治	久原　義宣	河野　良行
工務第一係長	笹山　勝之	永渕　　昭	黒木　俊彦
工務第三係長	小島　一郎	西島　正男	斉藤　啓嗣

福岡県教育委員会

	平成2年度	平成3年度	平成9年度
総　括			
教育長	御手洗　康	御手洗　康	光安　常喜
教育次長	濱地　甫伯	光安　常喜	松枝　　功
指導第二部長	月森清三郎	月森清三郎	竹若　幸二
文化課長	六本木聖久	森山　良一	石松　好雄
参事兼文化財保護室長		石松　好雄	柳田　康雄
課長技術補佐	石松　好雄		井上　裕弘
課長補佐	安野　義勝	国武　康友	城戸　秀明
参事補佐兼総括	柳田　康雄	柳田　康雄	橋口　達也
参事補佐	井上　裕弘	井上　裕弘	木下　　修
	副島　邦弘	副島　邦弘	新原　正典
			中間　研志
庶　務			
管理係長	池原　脩二	岸本　　実	黒田　一治
事務主査	東　　勇治	東　　勇治	久保　正志

調査（報告書）

参事兼文化財保護室長			柳田　康雄
参事補佐	柳田　康雄	柳田　康雄	
主任技師			小川　泰樹
技師	小川　泰樹		岸本　　圭
九州歴史資料館技師			杉原　敏之

2　位置と環境

諸田仮塚遺跡は，福岡県筑紫野市大字永岡字原，大字常松字女久保，大字諸田字仮塚に所在する。遺跡内に永岡・常松・諸田の大字境界があり，北側の微高地平坦部の東側に大字常松，西側に大字永岡，南側の丘陵尾根部以南が大字諸田が位置している。

この地域は，背振山系から派生する丘陵群の東側端部と，三郡山系から派生する西側丘陵端部が最も近接し，福岡平野と筑後平野を分割する幅約２㎞の通称「二日市地峡」を形成する。遺跡は，その地峡の西側の背振山系の低丘陵上に位置し，北側に永岡の平坦な低丘陵群，南側に第２地点の仮塚南遺跡の河岸段丘と低地が開けている。遺跡の標高は，北側の永岡地区が42ｍ，南側の諸田地区が51ｍの低丘陵となっている。諸田仮塚遺跡の南側には，仮塚南遺跡との間に仮塚池や諸田池があることでわかるように谷が形成されているので，両遺跡の間に直接的関連は少ないと考える。

この地域は，地峡であるがために当然のこととして，九州の主要地域へ向う交通の要所として福岡平野の奥に大宰府が設置され，『延喜式』に記載されている筑紫神社が鎮座している。近年の発掘調査では，東側に隣接する大字岡田地区遺跡群で，両側溝をもった幅約９ｍの道路（官道）が検出され，これが永岡地区に所在が推定されている『延喜式』に記載された「長丘」駅から東南に向う「西海道豊後路」と考えられている（註１）。当然のこととして，筑後に向う筑後路や肥前路，東に向う豊前路が近隣地域を通過すると考えられるし，近世の長崎街道原田宿の調査も進んでいる。現在でも，JR鹿児島本線・筑豊本線の分岐点，西鉄大牟田線，九州縦貫自動車道，国道３・200・386号線の分岐点，鳥栖筑紫野有料道路などが結束されたように通過しており，古代から現在に至るまで交通の要所として変わることがない。

次に周辺遺跡を紹介するが，交通の要所にふさわしく重要な遺跡が集中している。

旧石器時代の遺跡としては，本書で報告する国府系ナイフ形石器と角錐状石器が発見されている遺跡に小郡市横隈山遺跡（註２）・三沢遺跡・一ノ口遺跡，筑紫野市野黒坂遺跡・峠山遺跡（註３）・宗原遺跡（註４）などがある。

縄文時代の遺跡は，早期の夜須町東小田峰遺跡・向福島遺跡，小郡市干潟向畦ケ浦遺跡，筑

紫野市原遺跡，中期の蔵役遺跡，後期の金山遺跡などがある。

弥生時代には一変して三国丘陵地帯と宝満川の対岸の段丘群を中心に遺跡が集中して，奴国の中心地帯を取り巻く一画として重要な位置を占めるようになる。早・前期では，夜須町大木遺跡，初期墳丘墓の東小田峰遺跡（註５），小郡市一ノ口遺跡（註６）・北松尾口遺跡・横隈山遺跡・津古内畑遺跡・三国ノ鼻遺跡などがある。

前期末～中期初頭になると，三国丘陵全体に遺跡が密集すると同時に規模も増大する様子は奴国の中心部と同じである。中期の代表的遺跡として，多鈕細文鏡２面を埋納した小郡市若山遺跡（註７），前漢鏡を副葬した夜須町東小田峰遺跡，筑紫野市二日市峰遺跡・隈西小田遺跡群第13地点，23号甕棺（註８），金属器関連で小郡市大板井遺跡の中細形銅戈７本，岩田の中細形銅戈，乙隈東畑の中広形銅戈２本，乙隈天道町の細形銅戈鋳型，筑紫野市隈西小田第７地点の中細形銅戈23本，同第３地点の細形銅剣と貝輪８個，夜須町東小田峰と中原前遺跡の細形銅剣の副葬と青銅器関連鋳型類，ヒルハタ遺跡の鏡・十字型銅器・鏃・勾玉の５面鋳型，宮ノ上遺跡の有鉤銅釧鋳型，三並ヒエデ遺跡の中広形銅戈17本，吹田小路田遺跡（註９）・東小田峰・東小田七板遺跡の鉄戈計４本などがある。なお，諸田仮塚遺跡の北側には，列状埋葬で有名な永岡遺跡があり，別に調査された２条の条溝が今回調査の２条の大溝と関連してくる。

弥生墳丘墓では，東小田峰（実際は沼尻所在）弥生前期前半例から，東小田峰に中期例が２基以上，筑紫野市池ノ上遺跡の中期例が数基（註10），小郡市一ノ口遺跡の後期後半（木棺墓）例（註６）などがあり，他に可能性が強いものとして，隈・西小田第３地点の中期前半，第23地点の中期後半例などもあり，この地域も特定集団墓が普遍的に営まれているのが確実となった。

古墳時代になると，初期の纒向型古墳として小郡市津古生掛古墳（註11），筑紫野市原口古墳（註12），前期古墳として小郡市津古１～３号墳・三国ノ鼻古墳，前方後方墳の夜須町焼ノ峠古墳，銅鏃を多数副葬した筑紫野市阿志岐24号墳・夜須町中牟田古墳（註13）などがある。

５世紀の古墳としては，諸田仮塚１号墳のように埴輪をもつものとして，夜須町小隈古墳，小郡市横隈山古墳の両前方後円墳。古式横穴式石室や初期須恵器をもつものとして，筑紫野市平原古墳群（註10），小郡市津古片曽葉２号墳などがある。

６世紀になると，筑紫神社の南東に位置する装飾古墳の五郎山古墳や諸田仮塚２号墳のように馬土壙墓を伴なう小郡市三沢古墳群・三国の鼻遺跡・津古生掛遺跡・横隈井の浦遺跡（註14）があり，三国丘陵には多数の群集墳や須恵器窯跡が営まれている。　（柳田）

註１　筑紫野市教育委員会の小鹿野　亮氏のご教示。
註２　松藤和人「筑後平野北部の国府型ナイフ形石器」『旧石器考古学』27，1983
註３　福岡県教育委員会『福岡南バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』１，1970
註４　「宗原遺跡」『福岡県文化財調査報告書』116，1993

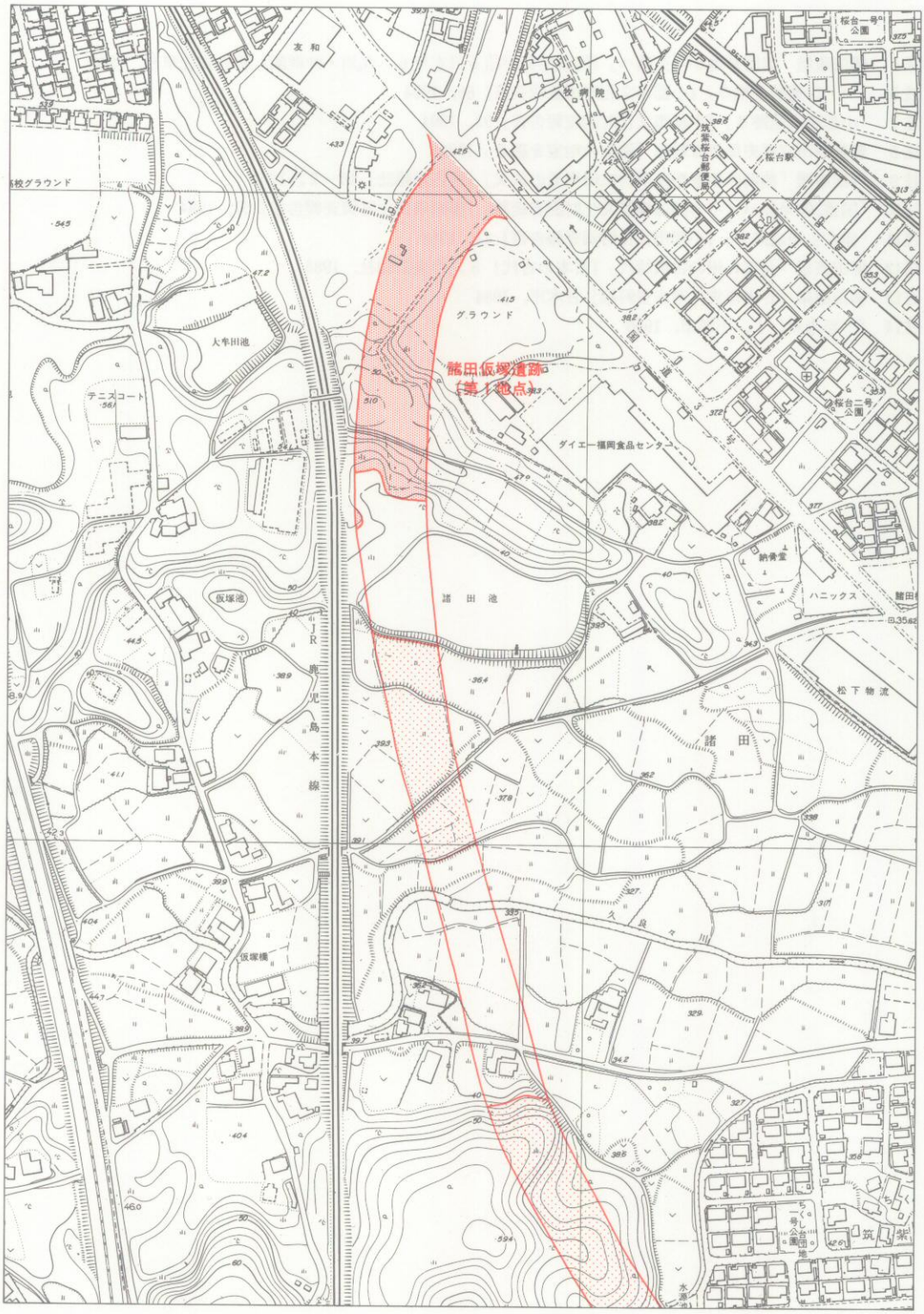
諸田仮塚遺跡周辺主要遺跡

1 諸田仮塚遺跡
2 仮塚南遺跡
3 久良々遺跡
4 倉良遺跡
5 天神田遺跡
6 以来尺遺跡
7 合の原遺跡
8 野黒坂遺跡
9 峠山遺跡
10 二日市峰遺跡
11 道場山遺跡
12 原口古墳
13 貝元遺跡
14 吉ケ浦遺跡
15 御笠地区遺跡群
16 阿志岐古墳群
17 岡田遺跡群
18 永岡遺跡
19 常松遺跡
20 原田地区遺跡群
21 筑紫台団地遺跡
22 筑紫神社
23 五郎山古墳
24 池ノ上遺跡
25 平原古墳群
26 橋詰遺跡
27 天神遺跡
28 隈・西小田３地点
29 隈・西小田７地点
30 隈・西小田13地点
31 津古内畑遺跡
32 津古片曽葉遺跡
33 津古遺跡
34 津古古墳群
35 津古生掛古墳
36 三国ノ鼻古墳
37 三沢種畜場遺跡
38 三沢古墳群
39 横隈山古墳
40 横隈山遺跡
41 横隈狐塚遺跡
42 一ノ口遺跡
43 北松尾口遺跡
44 北牟田遺跡
45 干潟遺跡
46 乙隈天道町遺跡
47 松尾古墳群
48 焼ノ峠古墳
49 城山遺跡群
50 小隈古墳
51 小隈窯跡
52 山隈窯跡
53 金山遺跡
54 向畦ケ浦遺跡
55 宗原遺跡
56 向福島遺跡
57 東小田七板遺跡
58 東小田峰遺跡
59 中原前遺跡
60 上の原遺跡
61 八並窯跡
62 八並遺跡
63 三並ヒエデ遺跡
64 琴ノ宮遺跡
65 下町遺跡
66 ヒルハタ遺跡
67 大木遺跡
68 松延遺跡
69 鷲尾塚古墳
70 惣利遺跡
71 吹田小路田遺跡
72 宮ノ上遺跡
73 中牟田古墳群
74 中島堤遺跡
75 観音塚古墳

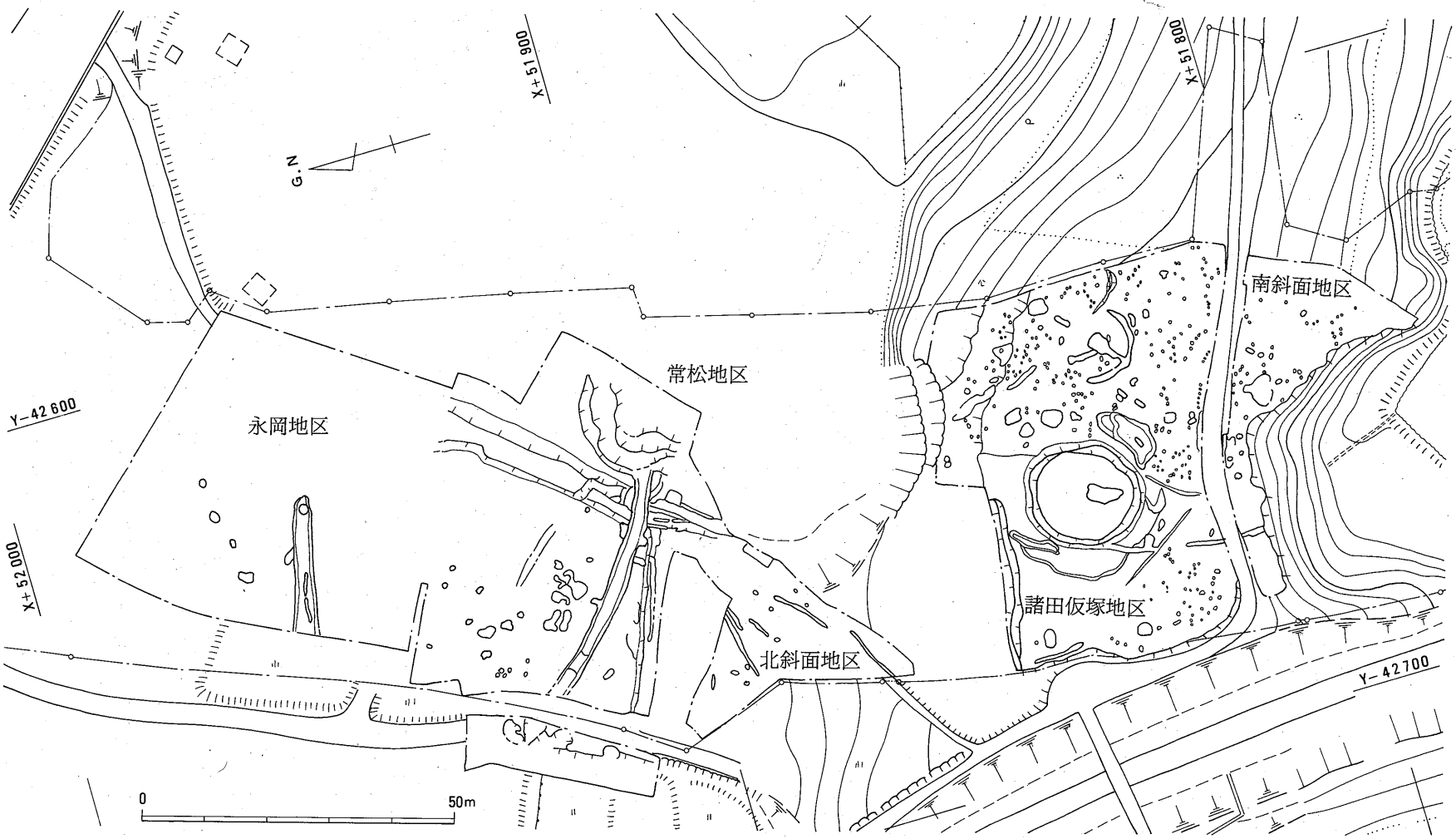
△ 旧石器・縄文時代
● 弥生時代
▲ 青銅器関連遺跡
■ 古墳時代
□ 歴史時代

第２図 諸田仮塚遺跡周辺の主要遺跡分布（1/50,000）

註５　柳田康雄「集団墓地から王墓へ」『図説発掘が語る日本史６，九州・沖縄編』新人物往来社，1986
註６　「一ノ口遺跡Ⅰ地点」『小郡市文化財調査報告書』86，1994
註７　「小郡若山遺跡３」『小郡市文化財調査報告書』93，1994
註８　筑紫野市立歴史民俗資料館「弥生の地宝を掘る」1988
註９　柳田康雄「福岡県朝倉郡夜須村吹田発見の鉄戈」『考古学雑誌』48－２，1962
註10　「国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報」『福岡県文化財調査報告書』67，1984
註11　「津古生掛遺跡Ⅱ」『小郡市文化財調査報告書』44，1988
註12　柳田康雄「北部九州の古墳時代」『日本の古代』５，中央公論社，1986
註13　柳田康雄『甘木市史，考古資料編』甘木市，1984
註14　『小郡市史』１，小郡市，1996



第3図　諸田仮塚遺跡位置図（1/5,000）



第 4 図　諸田仮塚遺跡と周辺地形図（1/1,000）

II. 遺構と遺物

1　諸田仮塚地区の調査

1）古墳

1号墳

調査区のほぼ中央で検出した。諸田仮塚遺跡は調査以前は畑地として使用されてきたが，この部分は高まりとして残っており，当初から古墳等の存在が予想された（図版2）。調査の結果，墳丘の南東側が耕作時に大きく削り取られており，また周溝も含めて削平を受けていた。

墳丘（図版3，第5・6図）

墳形は円墳で，削られた南東側を除いて周溝がめぐる。南東側でも一部分辛うじて周溝が残存しており，埴輪片が多く出土した。この周溝の位置から失われた墳丘を復元すれば，古墳の規模は周溝の内側下場で測って径19.5～20.2mのほぼ正円形になる。墳丘を断ち割った結果，盛土は旧地表面と考えられる黒色有機物層の上面から始まっており，盛土端で測った径は北東-南西方向（第6図B-B′）で15.9mとなる。

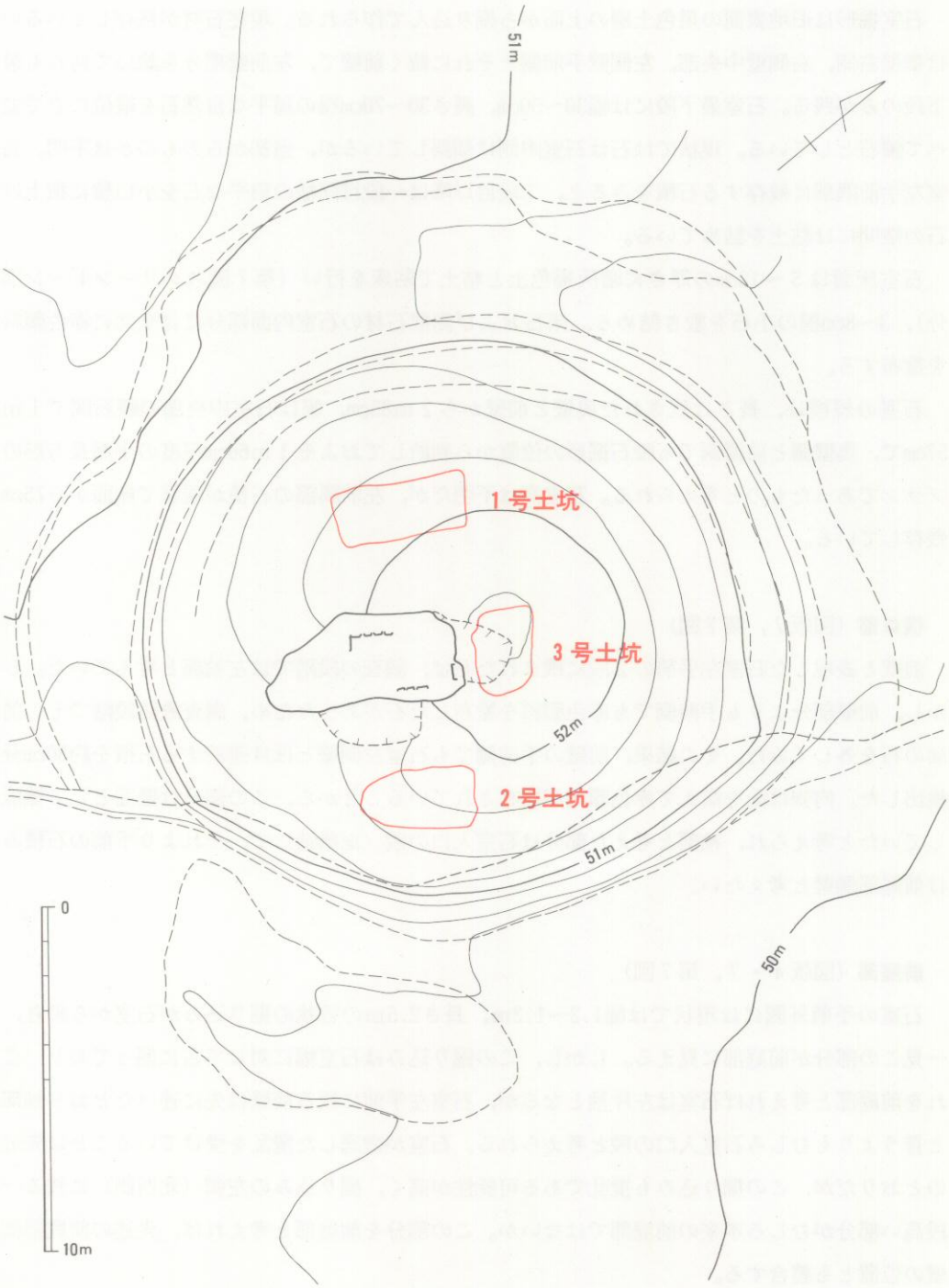
盛土は，灰褐色系の土と灰色系の土を基本として，主として厚さ10cm程度，幅50～80cm程度の比較的細かい単位で，旧地表面と水平に積み上げている。盛土一単位の主として下面に旧地表面と同質の黒色土がみられる部分が多くあり，周溝を掘り上げた土等の手近な所からモッコ等で運んできた土を引っ繰り返した様子が窺える（巻頭図版1・図版8・9）。盛土の高さは現状で旧地表面から最高所で1.1mが残存する。

周溝（図版3，第5・6図）

周溝の幅は，盛土端部から測って残りの良い北東側で6.5mある。周溝底面は西側が最も高く両側に低くなっており，最大65cm程の高低差がある。旧地表面から測った周溝の深さは南西側で50cm，北東側では85cmとなる。

主体部（図版4～6，第7図）

石室は墳丘のほぼ中央部に奥壁があり，南西方向に開口する横穴式石室で，主軸方位はN-31°-E。石室は激しく攪乱を受けており，石材はほとんどが抜き取られている。さらに，石室掘形の北東側と南東側には盗掘坑かと思われる攪乱があり，副葬品もほとんど残存していなかった。



第5図　1号墳地形測量図（1/200）

石室掘形は旧地表面の黒色土層の上面から掘り込んで作られる。現在石材が残存しているのは奥壁右側，右側壁中央部，左側壁手前側とそれに続く前壁で，左前壁部分を除いて何れも最下段のみが残る。石室最下段には幅30～50cm，長さ30～70cm程の扁平な自然石を縦位に立て並べて腰石としている。現状では石は石室内側に傾斜しているが，当初からのものかは不明。石室左手前隅部に残存する石積をみると，二段目以降は一段目同様の扁平な石を小口積に積上げ，石の隙間には粘土を詰めている。

石室床面は5～12cmの厚さに暗灰褐色土と粘土で貼床を行い（第7図スクリーントーン部分），3～8cm程の小石を敷き詰める。床石および側壁石材の石室内面部分には全面に赤色顔料を塗布する。

石室の規模は，長さは残された奥壁と前壁から2m85cm，幅は石室中央部の腰石間で1m57cmで，奥壁側と前壁側でも腰石掘形の位置から判断しておよそ1m60cm程度の平面長方形のプランであったものと考えられる。石室高は不明だが，左前隅部の石積が現状で床面から75cm残存している。

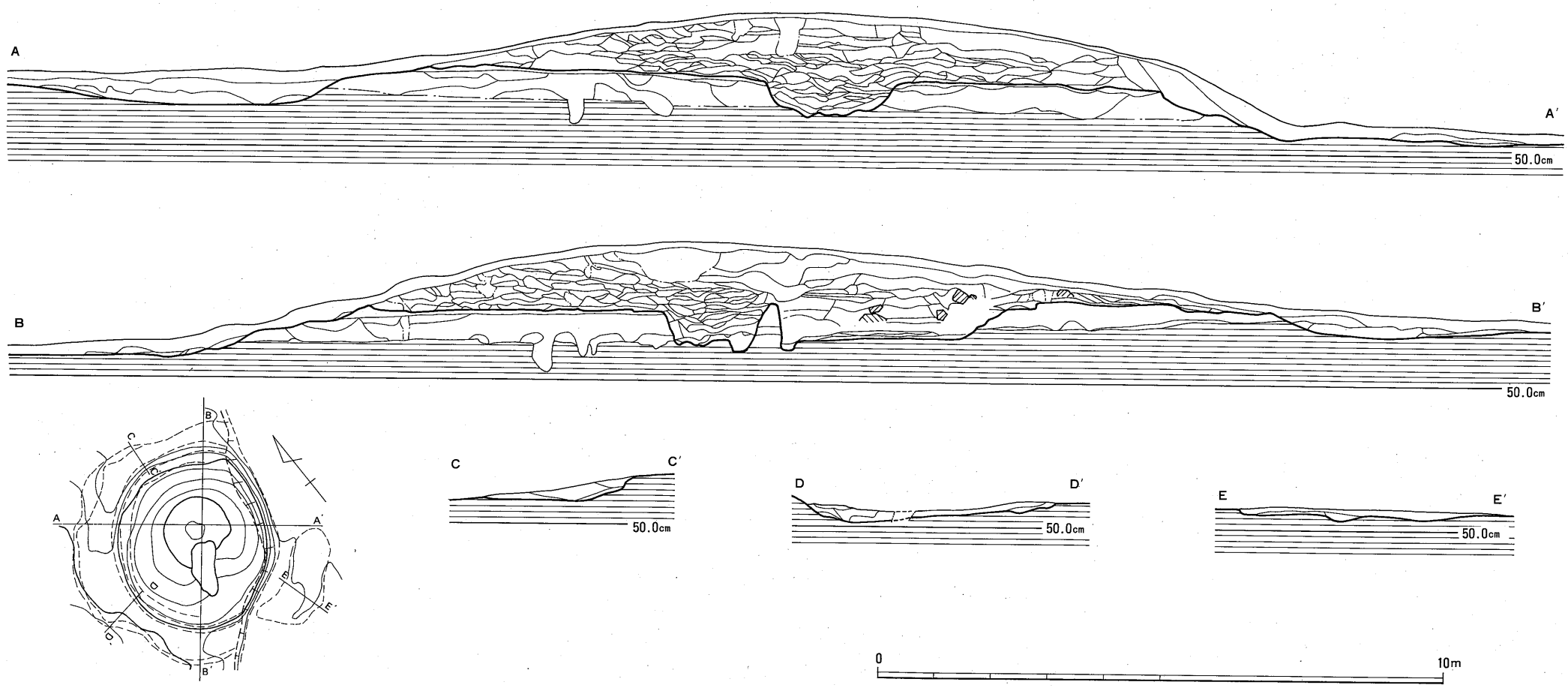
横口部（図版7，第7図）

前壁と表現した石室左手前の2段に積まれた石は，調査の段階では左袖部と考えていた。しかし，前壁部分よりも手前側でも赤色顔料を塗布した石があったため，調査最終段階でその前面の石を外してみた。その結果，前壁の手前側でも石室左側壁とほぼ連続する石積を約50cm分検出した。内側は面を揃えて赤色顔料が塗布されていることから，この部分は壁面として機能していたと考えられ，袖部と考えた部分は石室入口の段（框構造）で，それより手前の石積みは前庭部側壁と考えたい。

前庭部（図版4・7，第7図）

石室の手前外側には現状では幅1.2～1.3m，長さ2.5mの舌状の掘り込みが石室から続き，一見この部分が前庭部に見える。しかし，この掘り込みは石室幅に対して右に偏っており，これを前庭部と考えれば石室は左片袖となるが，石室左手前に残る前壁は先に述べたとおり袖部と言うよりもむしろ石室入口の段と考えられる。石室が徹底した攪乱を受けていることは先述のとおりだが，この掘り込みも攪乱である可能性が高く，掘り込みの左側（北西側）に残る一段高い部分がむしろ本来の前庭部ではないか。この部分を前庭部と考えれば，先述の前庭部側壁の位置とも整合する。

いずれにしても，石室内には斜め上方から前庭部を通って入る構造で，横口部には段があって石室内が低い。この段（框構造）は，現状では2段分約40cmであるが，前庭部側壁最下段の石の高さを生かせば，框部分の2段目の石は当初のものではないことになり，1段分約25cmと



第 6 図　1 号墳土層断面図（1/100）

第７図　１号墳石室実測図（1/60）

なる。後者の可能性が高いものと考える。

盛土下の土坑（巻頭図版１・図版10，第７図）

墳丘測量と石室実測が終了した後，土層観察用ベルトを残して墳丘盛土を掘り下げたところ，旧地表面上で３基の土坑を検出した。土坑は石室の奥壁側と左右の側壁側にそれぞれ１基ずつが石室を取り囲むように配置する。さらに興味深いのは，３基の土坑の長軸の長さは石室掘形の長さ（幅）にほぼ一致し，しかもこれと位置を揃えて配置する点である。1・２号土坑は，石室を中心にして左右にほぼ等間隔に配置するが，２基の土坑の北東側短辺と石室掘形の北東（奥壁）側短辺は一直線上に並ぶ。同様に２基の土坑の南西側短辺を結ぶと石室の框石の手前を通り，前庭部を除いた石室掘形の南西（前壁）側短辺を示すものと考えられる。３号土坑も石室掘形の左右の長辺を奥壁側にそれぞれ延長した線上に土坑短辺が揃う。３基の土坑と石室掘形が計画的に配置されていることは確実であろう。

土坑の埋土は墳丘盛土と同質で，細かい単位で均一に埋めている。土層観察用ベルトの位置にあった３号土坑では土坑埋土と盛土の境は特になく，土坑が開いた状態からこれを埋めるのと同時に順次盛土を行っている。埋土の状態から１・２号土坑も同様であろう。

３基の土坑からはいずれも遺物の出土はない。

１号土坑（図版11，第８図）

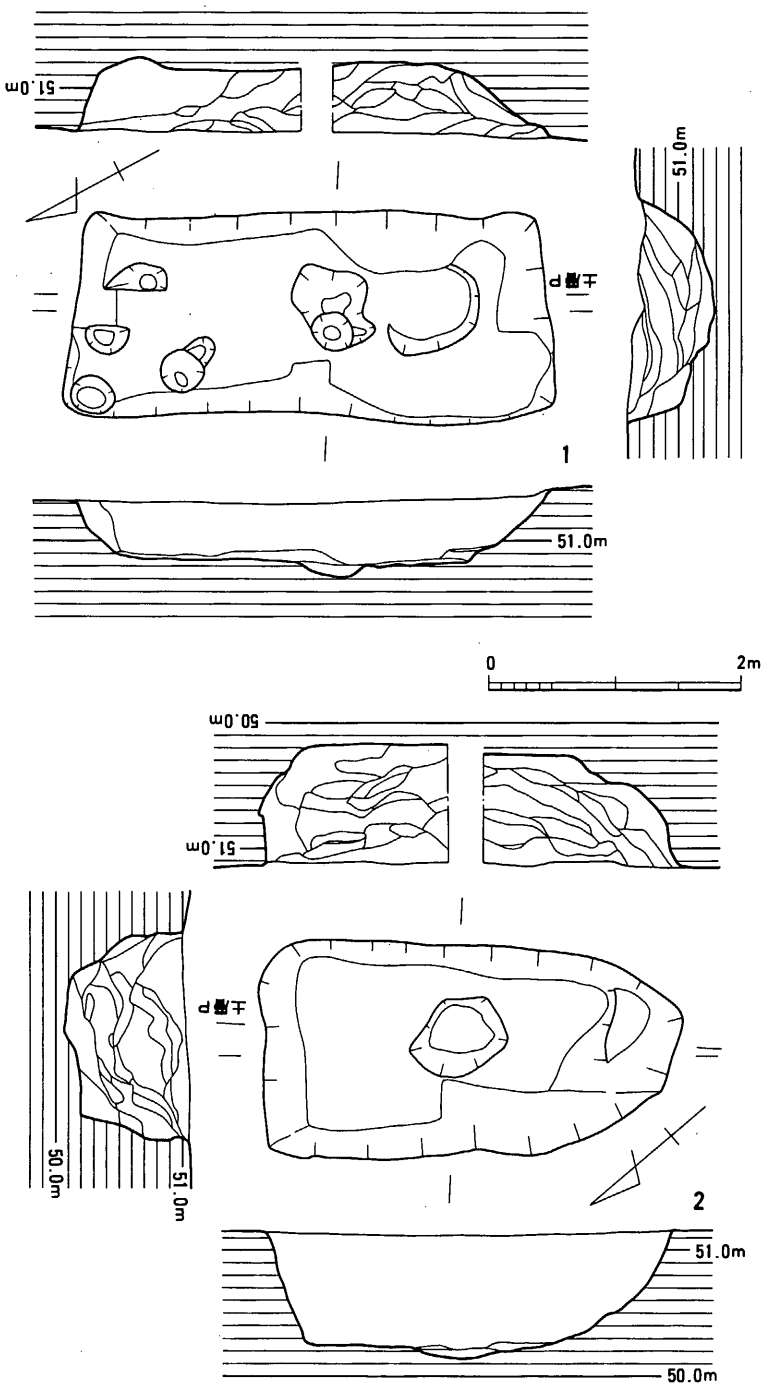
石室掘形の左側壁側（北西側）にあり，間隔は１m95cm～２m40cm。平面形はわずかに歪んだ長方形で，長さは北西側長辺で３m90cm，南東側長辺では３m50cm，幅は北東側と南西側の短辺でそれぞれ１m55cmと１m45cmである。埋土と地山の土が同質であったため部分的に掘り過ぎているが，土坑の深さは40～45cm。

２号土坑（図版11・12，第８図）

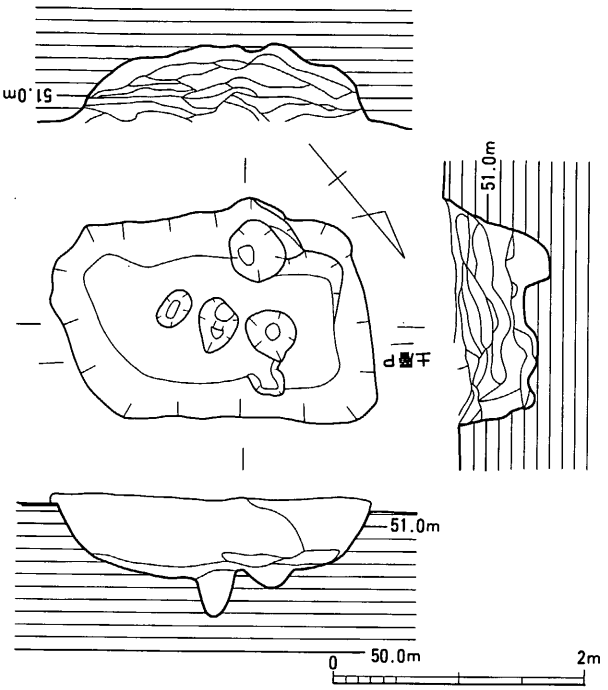
石室掘形の右側壁側（南東側）にあり，間隔は２m5cm～２m30cm。平面形は南西側が狭くなった変形長台形とでも言う形で，長さは最大で３m30cm，幅は北東側短辺と南西側短辺でそれぞれ１m65cmと60cm，深さは85～90cm。

３号土坑（図版12，第９図）

石室掘形の奥壁側（北東側）にあり，間隔は35cm～75cm。平面形は長方形と言うよりも平行四辺形で，長さは北東側と南西側でそれぞれ２mと２m35cm，幅は北西側と南東側でそれぞれ１m60cmと１m55cmで，深さは50cm～65cm。



第8図　1号墳盛土下1・2号土坑実測図（1/60）



第9図　1号墳盛土下3号土坑実測図（1/60）

出土遺物

土師器（図版20，第10図）

杯（1～3）　口縁部は内湾し，1・3は口唇部を細くシャープに仕上げる。器面は風化気味だが，内外面ともミガキ調整を施しているようである。3点とも胎土には精良な土を使用するが，1は赤褐色土粒を多く含み，2は石英の微粒子を多く含む。1は橙褐色，2は赤褐色，3は淡褐色を呈する。1は口径12.0cm，器高5.5cm，2は復元口径12.2cm，3は復元口径11.0cm。

須恵器（図版20・21，第10～13図）

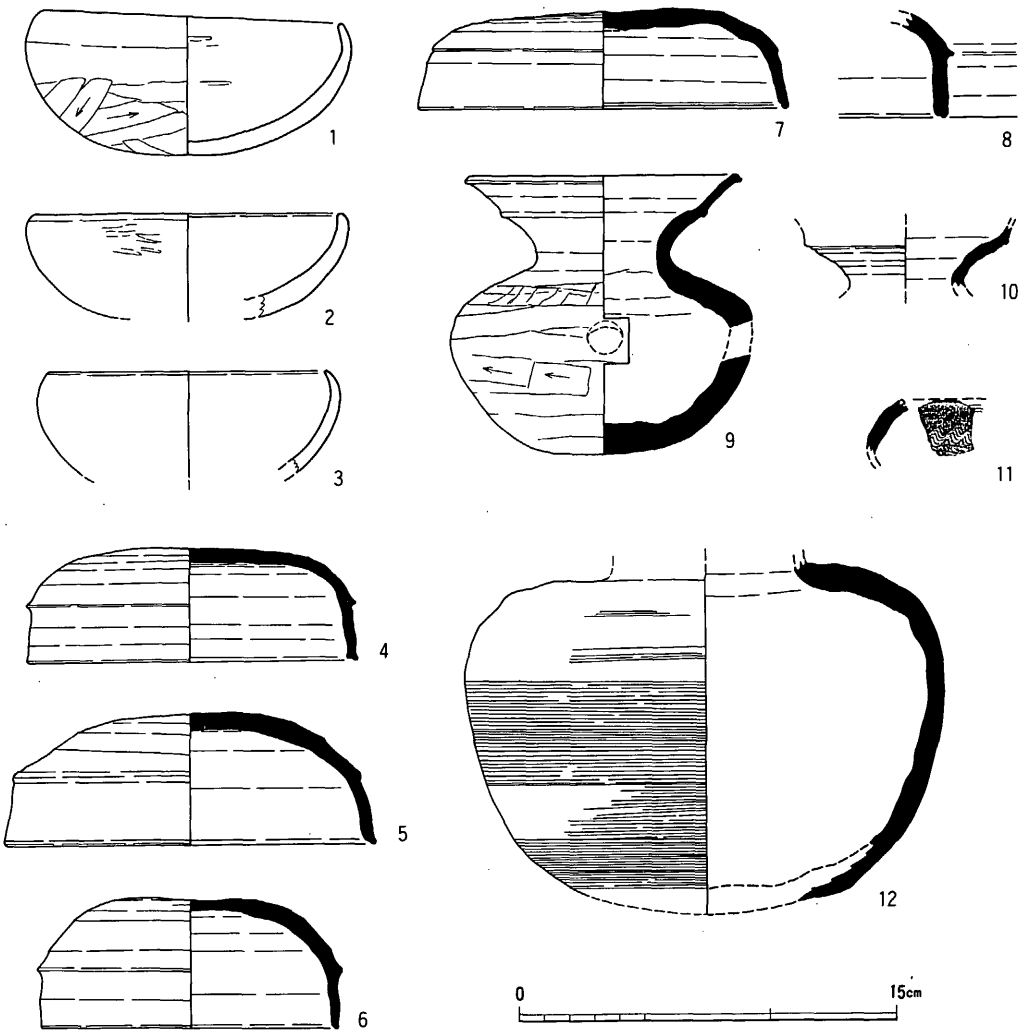
杯蓋（4～8）　4～6・8は天井部と口縁部境の稜が突帯状に外側に張り出し，天井部は高く口縁部との比率は1：1に近い。口唇部には内傾する平坦面を持ち，内面に稜を作る。天井部外面は回転ヘラ削り調整，その他はヨコナデ調整。4・8は青灰色から暗灰色を呈し焼成良好，6は灰色でやや軟質，5は灰白色で軟質である。4は口径13.2cm，器高4.5cm，5は口径14.8cm，器高5.2cm，6は口縁部より稜の方が張り出しており，口径11.9cm，稜径12.1cm，器高5.2cm。7は新しい要素を持っており，天井部と口縁部境の稜はシャープではあるが張り出さず，天井部の低く扁平な器形である。口唇部は丸く，内面には細い沈線をめぐらす。天井部外面は回転ヘラ削り調整，それ以外はヨコナデ調整で仕上げ，焼成は良好で暗灰色を呈する。口径14.7cm，器高4.0cm。

瓹（9～11）　体部の最大径が上位にある肩の張った器形で，底部は平底気味の丸底である。口頸部は外反して開き，口縁部と頸部の境は屈曲して外面に突帯状の稜をつくり，口唇部は四角く仕上げる。体部外面は横方向のヘラ削りで底部はその後ナデ，内面はナデ，口頸部はヨコナデ調整。復元口径10.9cm，復元体部最大径12.0cm，器高11.1cm。10は口頸部の破片で，9と同じく口縁部と頸部の境が屈曲する。内外面ともヨコナデ調整。11は頸部の破片で，形状は9・10と同様であろうが，頸部下位に櫛描波状文をめぐらせる。

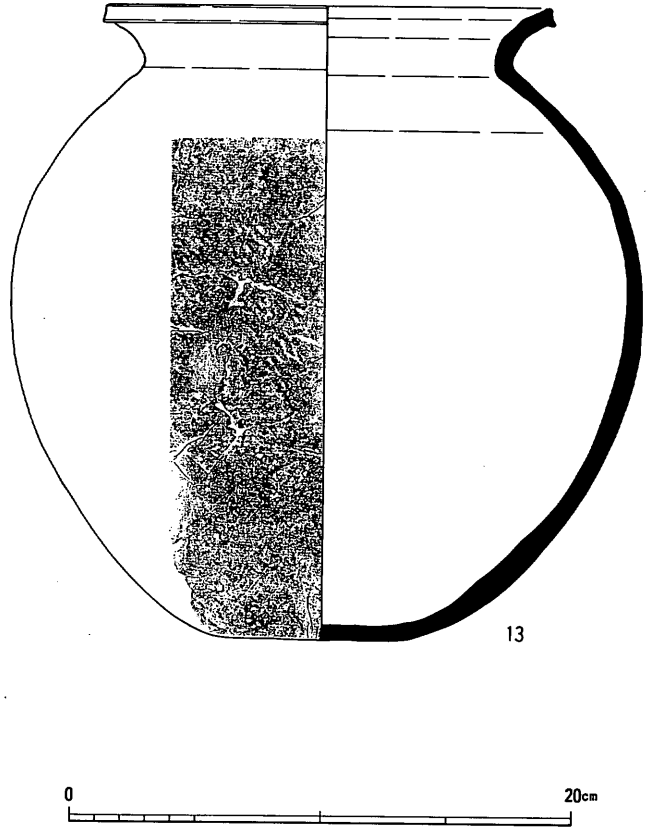
壺（12）　口頸部を失う。体部の最大径は上位にあり，頸部の基部は小さく締まり，底部は平底気味になる。体部外面は上半部が縦方向に，下半部は横および斜め方向に平行叩目文が残り，その上から粗いカキ目調整を施す。内面は丁寧にナデる。肩部と底部内面は厚く灰をかぶ

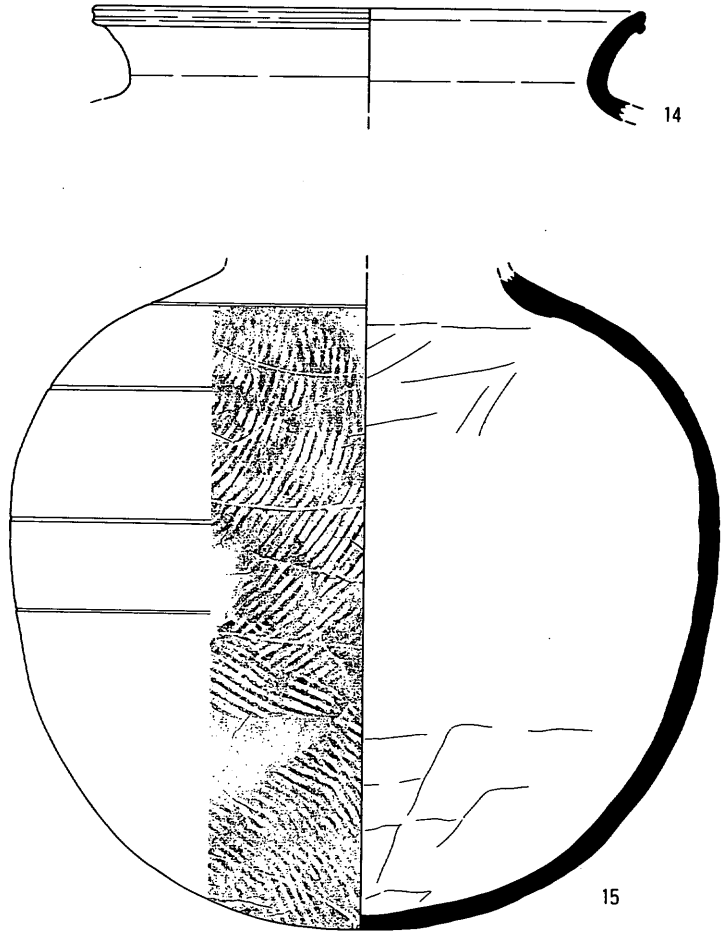
り，また焼膨れが内外面に多くみられる。趣はあるにしても良品とは言い難い。体部最大径19.0cm。

甕（13～23） 13～22は中型の甕。13は底部が平底で，最大径が中位にあるほぼ球形の体部に短く外反して開く口頸部が付き，口唇部は四角く下端が若干張り出す。体部外面は斜め方向の平行叩目文をヨコナデで撫で消し，それ以外の部分はヨコナデ・ナデ調整。胎土には砂粒を多く含み，焼成は普通。色調は明灰色だが，口縁部から肩部の外面は灰小豆色，底部外面は橙褐色を呈する。復元口径18.0cm，復元最大径25.0cm，底径7.7cm，復元器高25.4cm。14・16・17の口頸部は13とほぼ同形であるが，口唇部に凹線をめぐらせる。3点とも胎土に砂粒をそれ

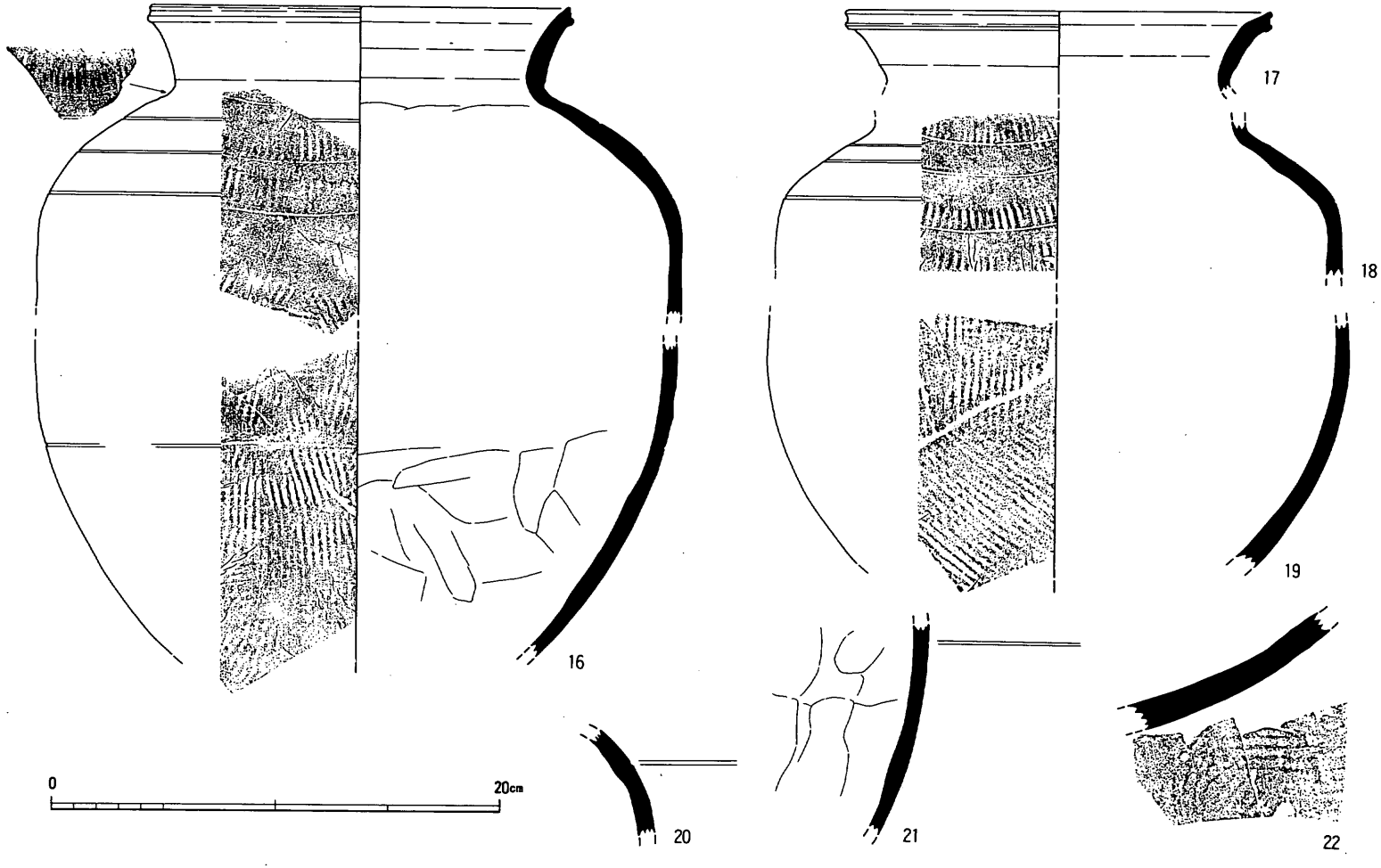


第10図 1号墳出土土器実測図①（1/3）





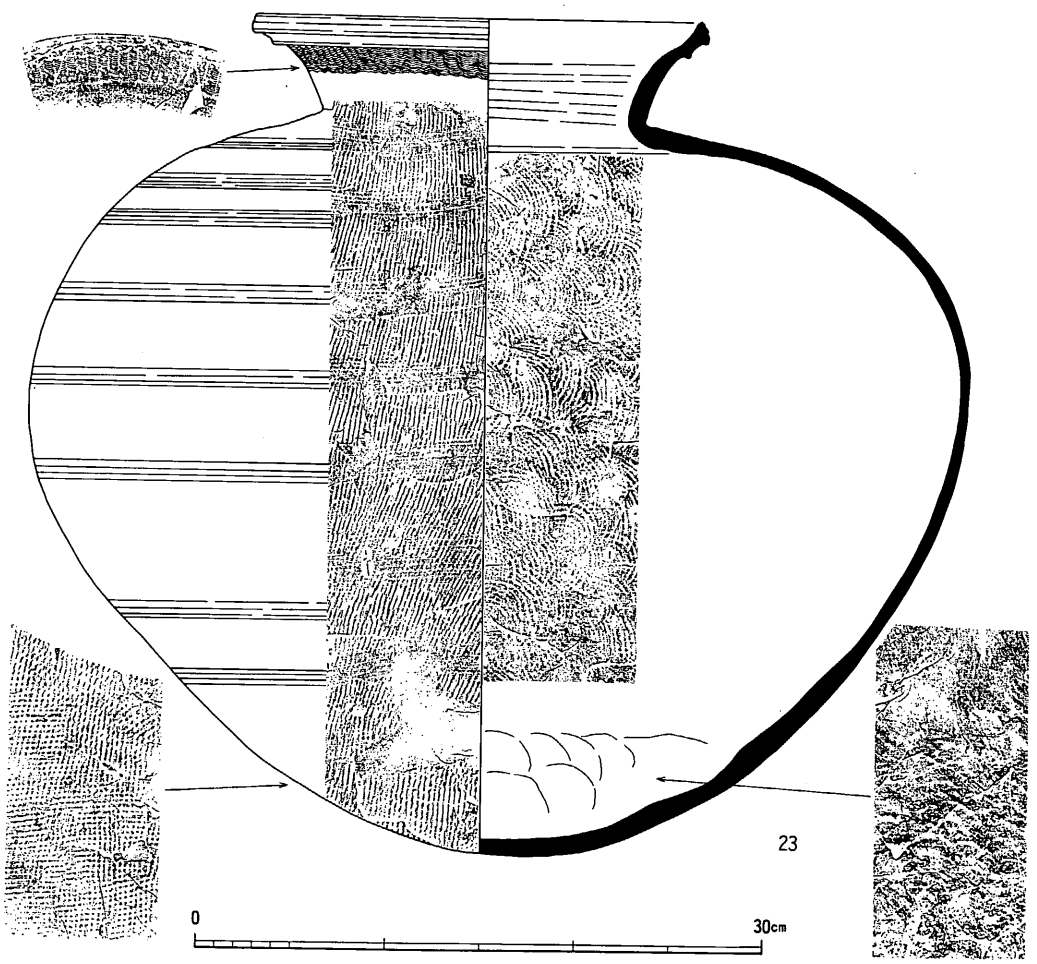
第11図　1号墳出土土器実測図②（1/3）



第12図　1号墳出土土器実測図③（1/3）

ほど含まず，焼成は良好。14は復元口径21.0cm，16・17は19.0cm。15は体部の最大径が上位にあるが丸味のある器形で，底部も丸底である。外面は上半部と下半部で逆を向く斜め方向の平行叩目文の後上半部に4条の沈線をめぐらせる。内面は当具痕をヨコナデ・ナデ調整で消す。胎土には砂粒をあまり含まず，焼成は普通で明灰色を呈する。復元体部径28.2cm。16・18・19はほぼ同器形で，肩が張り体部中位が平坦になる。体部外面は縦および斜め方向の平行叩目文を施し，16・18は沈線をめぐらせる。内面は上半部をヨコナデ調整，下半部はナデ調整で仕上げる。19は土師質に焼けており黄灰色を呈する。

23は大型の甕。体部の最大径が中央よりやや上にあり，底部は尖り気味の丸底である。体部に比較して小さい口頸部は外反して開き，口縁部下には断面三角形の突帯を作り出す。体部外面は縦方向の丁寧な平行叩目文を施し，その上から幅1.0〜1.5cmの細いカキ目を10段めぐらし



第13図　1号墳出土土器実測図④（1/4）

て縞模様をつくる。底部は平行叩目文を交差させて格子目状にした部分がある。体部内面は青海波状の当具痕が，底部は別の原体による凹凸の激しい当具痕が残る。口頸部は頸部外面の上位に櫛描波状文をめぐらし，その他はヨコナデ調整であるが，頸部内面は工具による強いヨコナデのためにミガキ風の痕跡が残る。胎土には砂粒をあまり含まず，焼成は普通で明灰色を呈する。復元口径24.1cm，復元体部最大径49.5cm，器高44.3cm。（小川）

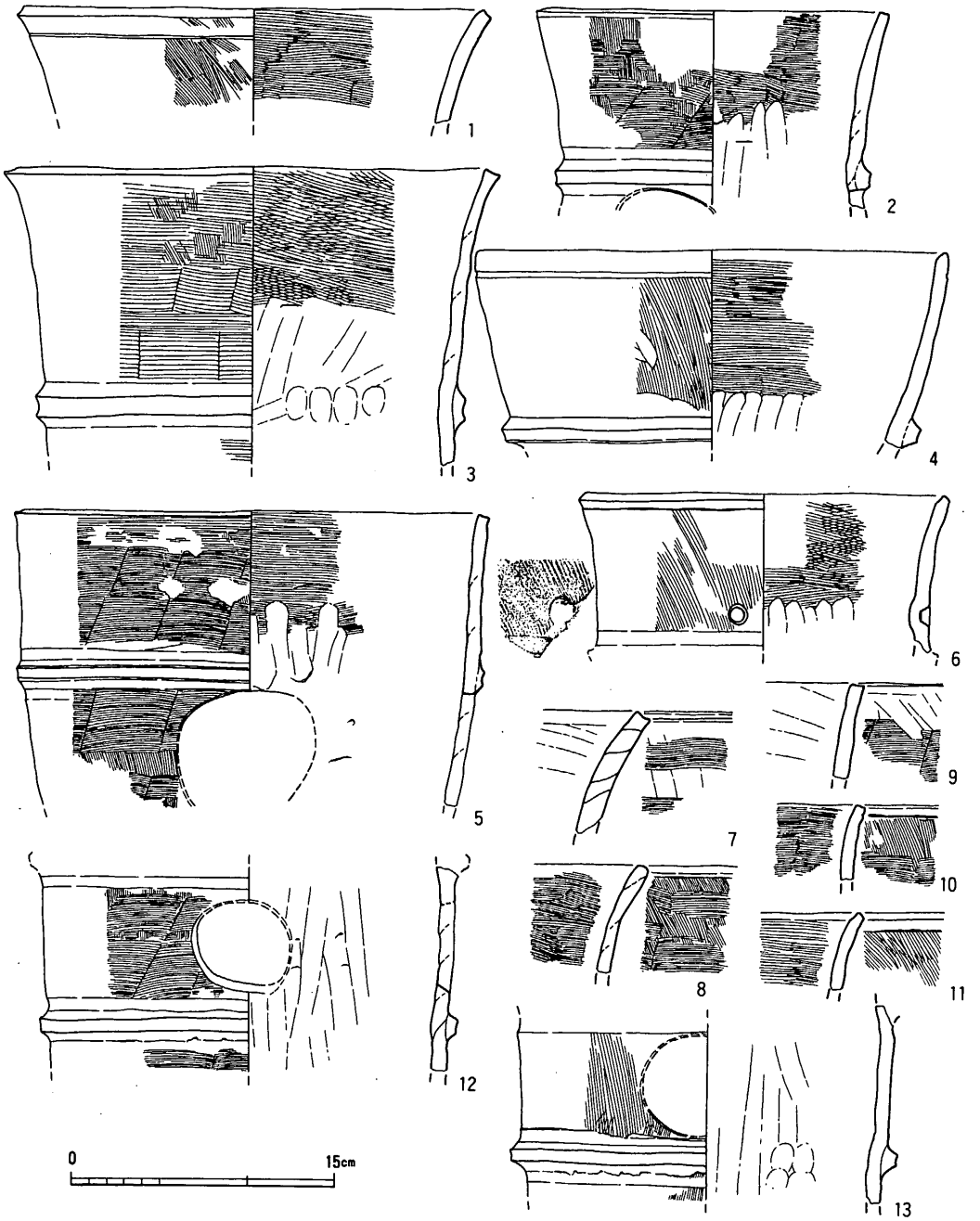
埴輪（図版22・23）

円筒埴輪・朝顔形埴輪（第14～17図）

円筒埴輪はパンケースで6箱程度出土しているが，細片が多く全体の器形を窺えるものはない。なお朝顔形埴輪とは口縁部でしか判別できないために，胴部以下に関しては円筒埴輪と朝顔形埴輪は区別せずに説明せざるを得ない。なお記述に用いる用語・編年基準は川西宏幸のものに従う（川西1978）。

黒斑は認められず窖窯による焼成である。焼成度の違いから大きく二種に分類できる。すなわち①土師質で黄褐色・茶褐色を呈するもの，②須恵質或いは半須恵質で色調は灰褐色を呈するものである。前者は更に焼成が悪く脆いものと，硬質のものとに分類できる。土師質で焼成不良のものは少数であり，土師質で硬質のものと須恵質・半須恵質のものとはほぼ同じ割合で出土している。外面調整は一次調整としての縦ハケの後に二次調整として横ハケを加えるものが大部分を占める。ただし二次調整横ハケとはいえ，突帯設置時の横ナデによって消されている部分があり，調整過程に関しては再検討が必要であろう。横ハケはいわゆるB種横ハケであり，静止痕を横ハケに対して垂直に残すものと，約20～30度の角度をもって残すものとがある。基底部に横ハケは施されない。内面調整は基本的には縦・斜方向のナデであるが，口縁部付近では横ハケを施す例が多い。また基底部には部分的に縦ハケが施される。突帯部分の内面及び基底部端付近には指頭圧痕が多く認められる。ハケの原体は数種類認められるが，大きく次の3種に分類できる（第15図）。①11本/cmの非常に細かいもの，②8本/cm，③5本/cmの粗いものの3種であり，②が多く①③は少ない。また①③は土師質のものに限って認められる。器壁は薄くつくられており，8㎜程度を計る。突帯は側面幅8㎜，基底部幅18㎜，高さ7㎜程度の断面台形のもので，シャープな印象を与える。胴部との接合部は横ナデが十分に及ばず接合痕を顕著に残しているものがある。ヘラ記号に関しては，通常見られるようなヘラ描沈線によるものはなく，棒状工具の押圧によるものが1点確認できたのみである（6）。

1～11は口縁部。緩やかに外反するものと，ほぼ直立するものの二者がある。口縁端部の形状は断面方形で上面に横ナデによる若干の凹部をもつものが大部分である。口縁端部外面に沈線を巡らすものが約半数程度にみられ，幾つかは横ナデのためにつぶれている。12と13は胴部。透孔は大きく，復元径で60㎜前後である。14～17は基底部。底径は72～85㎜の間に収まり，同

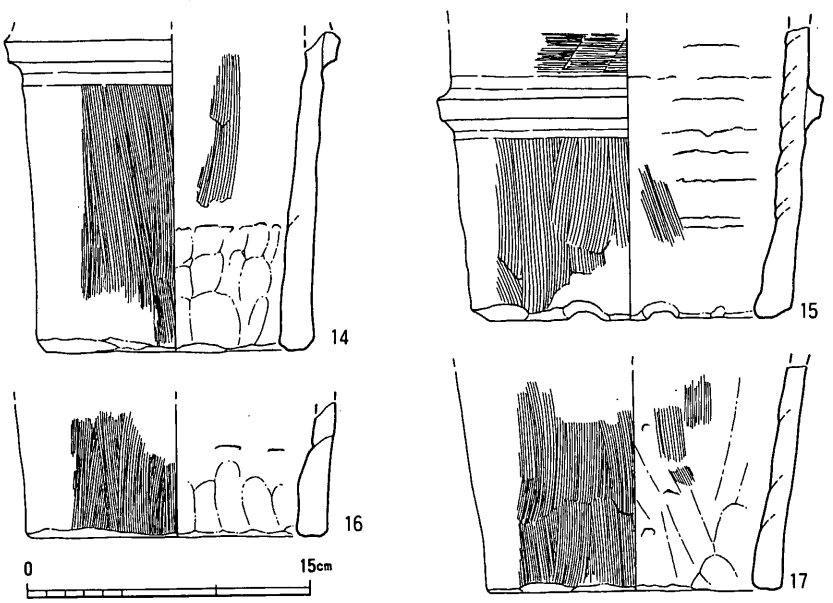


第14図　1号墳出土埴輪（円筒）実測図①（1/4）

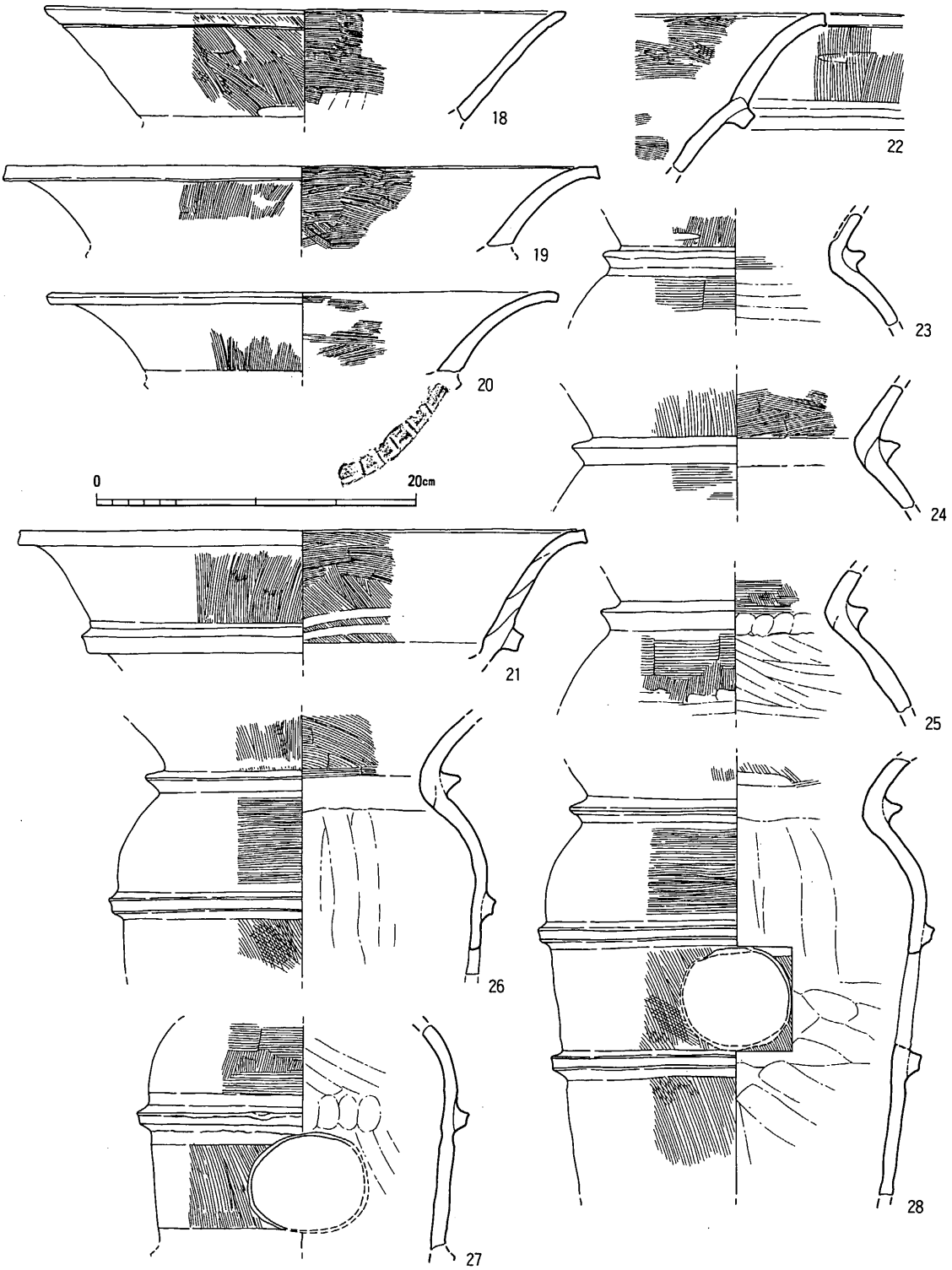
第15図　1号墳出土埴輪ハケ目の比較（1/2）

一規格でつくられたものであろう。底面は未調整で棒等の圧痕が残り，特に15は顕著である。

18～28は朝顔形埴輪。18～22は口縁部だが，18は円筒埴輪と諸特徴が共通し，傾きの大きい円筒埴輪かもしれない。21は頸部からほぼ直線的に開いてくる形態をとるようであるが，他は擬口縁部で一旦屈曲して口縁端部へと続く。擬口縁部から口縁端部にかけては弧を描きながら大きく外反し，その高さは50㎜程度で短い。口縁端部は強い横ナデにより下方へつまみ出される形状をなす。擬口縁部の上面には接合を良くするための刻みが施されていたようで，19と20の接合面にはそれが写って方形の突部が出来ている。口径は160～180㎜と幅があるが，小片からの径復元のために誤差が生じた可能性がある。23～28は頸部を含む資料。胴部から頸部にかけては丸みをもってくびれ，その間隔は約40㎜である。頸部には断面三角形の突帯を巡らし，その頂点で径を求めれば82～104㎜となる。頸部から口縁端部にかけての外面調整は縦ハケ，内面は横ハケで擬口縁部周辺には強い指頭圧痕が残される。胴部から頸部にかけては横ハケで，25・27はB種横ハケ，26・28は静止痕を残さない。



第16図　1号墳出土埴輪（円筒）実測図②（1/4）



第17図　1号墳出土埴輪（朝顔形）実測図（1/4）

形象埴輪

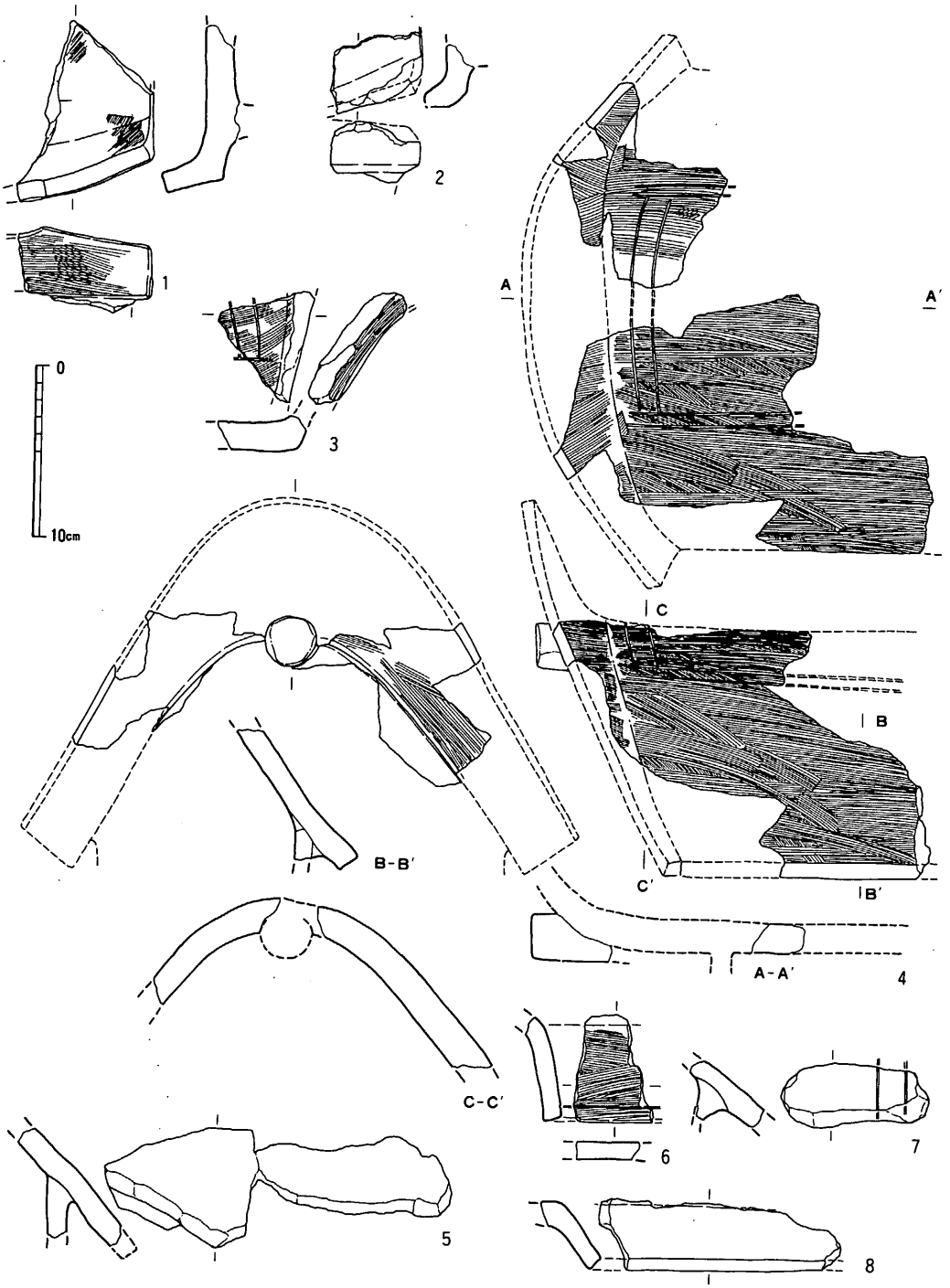
形象埴輪には家・動物（馬・鶏）・器財（靫）がある。いずれも小破片が多く全体を復元するには困難を伴うが，ある程度の様相は明らかにすることができる。各器種毎にその概要を記す。

家（第18～19図） 胎土は1㎜大程度の石英・長石粒を比較的多く含む。焼成は良く，色調は橙と黄褐色の2種があり，複数個体あったことが考えられる。外面調整はハケメ，内面調整はナデ及び指オサエである。他の形象埴輪がハケメをナデ消すのに対して家の場合はほとんどそのまま残している。ハケメは円筒埴輪のところで述べた②のタイプである。

1～10は屋根部。1と2は平屋根のようであるが，小破片のために全体がつかめない。もう少し傾きがついて片流れの家になろうか。この2点以外は切妻造であり，入母屋造とわかるものはない。4・9には棟木の突出がつく。円柱形であり，指の圧痕が著しい。屋根には2条の沈線が走り，屋根を区画するものと考えられる。5・7は庇部。6と8は基壇部。11は基底部近くの突帯（剝離）と窓の一部。12はコーナー近くの窓。16は基底部で，半円形の切込みを有し，高さ75㎜の所で高い突帯を巡らす。13にも突帯が剝離した面が確認でき，突帯割付時の沈線が引かれている。半円形の切込みの一部が含まれることから，基底部近くであると考えられる。17は基底部コーナー近くで半円形の切込みを持つ。14～15は2条の沈線が入り家形埴輪と思われるが具体的な部位は不明。

鶏（第20図） 胎土は0.5～1.5㎜大程度の石英・長石粒を含む。色調は橙で，焼成は良好。調整は外面がハケメ後ナデ，内面は粗いナデである。ハケメの密度は11本/cmと細かく，円筒埴輪の中で述べた①のタイプである。

37は頭部。粘土塊を整形してつくられる。鶏冠は欠損しており，頭頂部に15～18㎜幅の接合面が残る。目は径7㎜の棒状工具を刺突することにより表現しており，貫通はしていない。嘴に関しては刀子（？）で片方につき2度切り込みを入れることにより表現している。両側の目の後方に径14㎜の指オサエによる凹部があり，耳朶を貼り付けてあったと思われる。42は首部。やや先細りとなる円筒状のもので，沈線を首の方向に沿って8～14㎜間隔で全周にわたって入れ，羽根の表現を行っている。43も同様の資料であるが，沈線の間隔が狭いこと，器壁が薄いことを考えれば，42の先端に続く部位（頭に近い位置）とすることができる。38・39は羽部。胴部に粘土板を貼って羽とし，それに沈線を加えることで羽根を表現する。沈線の方向から38が左，39が右となる。38では尾羽との境に突帯を設け，その境界を明かとしている。40は尾羽。断面アーチ形に大きく開く形状をなし，さらに稜から高さ3cmの羽が直立する表現を持ち，羽部と同様の沈線が施される。41は尾羽の先端角である。44～57は鶏と考えられる小破片。いずれも胎土と色調が類似し，沈線を入れているものである。44～46は粘土板を貼り付けてそこに沈線を入れることから羽部。47～48はその屈曲と沈線の密度から尾羽の付根。50は両面に沈線を入れており，40のような尾羽の直立部分。56も沈線間に突帯が剝離した痕跡があり，尾羽直



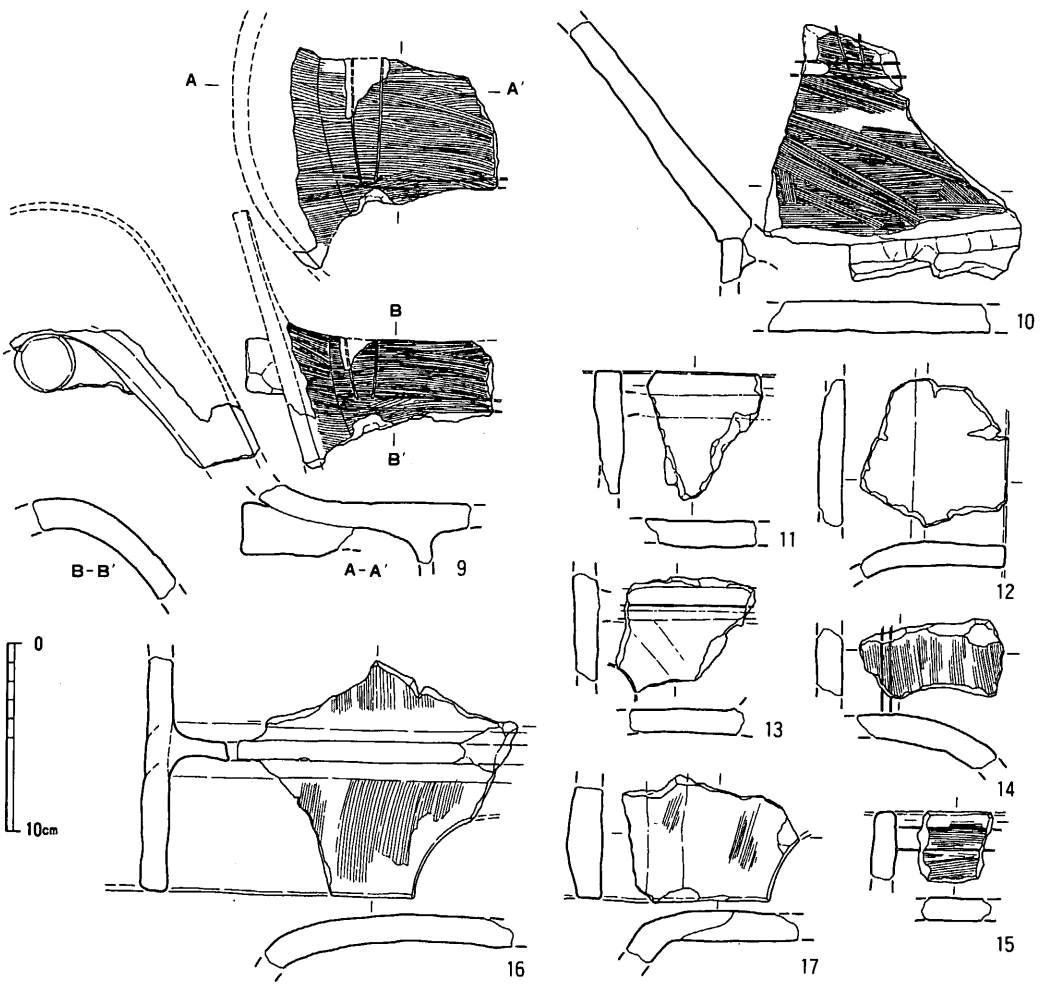
第18図　1号墳出土埴輪（形象-家）実測図①（1/4）

立部分が落ちたものである。その他は羽，或いは頸部であろうが，断面が円弧をなすものは後者の可能性が高い。

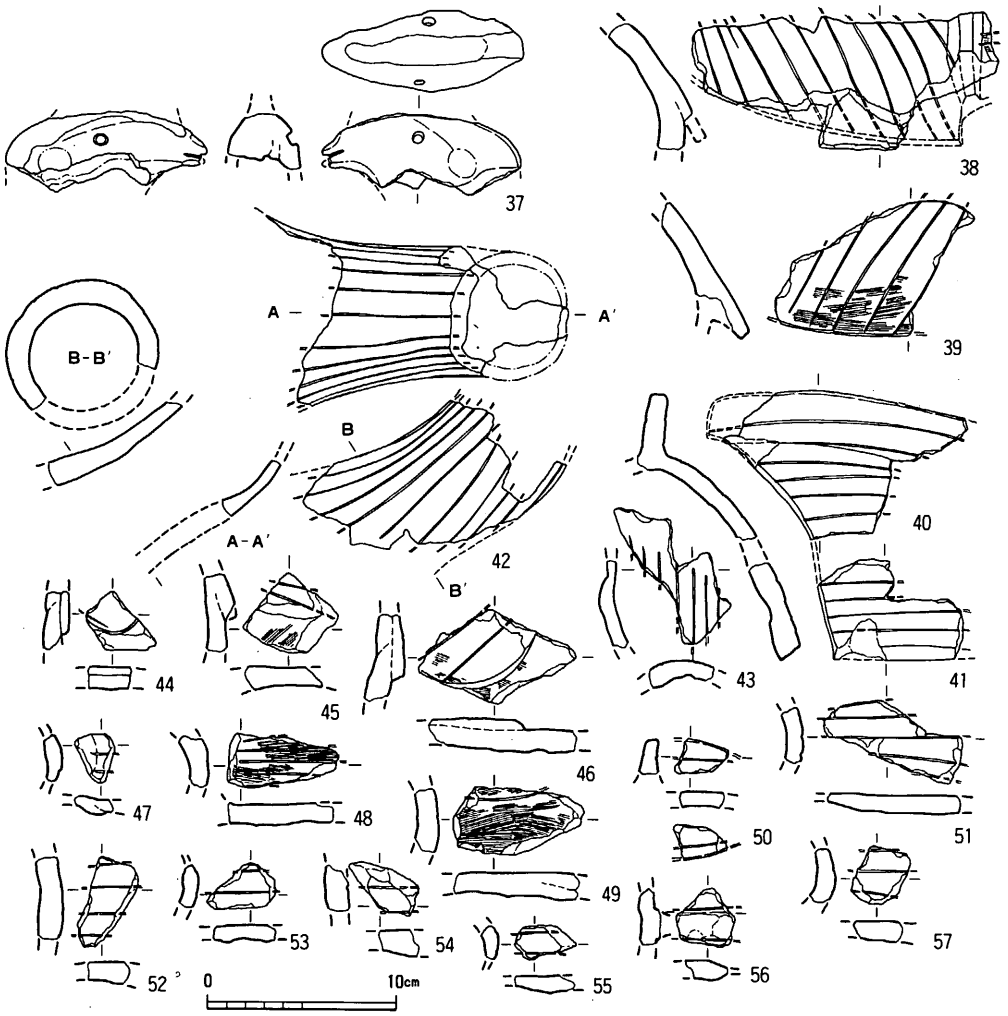
これらの破片資料は諸特徴において共通点が多いことから全て同一個体の可能性がある。ほぼ鶏の全容が明かとなり第24図のように復元できる。ただし台部に関しては資料がないが，他資料から考えて円筒状をなすものであろう。今回図化した円筒埴輪基底部中には同種のハケメで調整された資料も含まれており，同一個体の可能性がある。

馬（第21～22図） 色調は黄褐色。焼成はやや悪く，器壁が摩滅気味である。胎土は1㎜大程度の石英・長石粒を含む。調整は内外面ともナデであるが，内面は粗い。

18は頭部で残存状況は悪いものの，鬣・手綱・耳の様相がわかる。鬣は上面幅22㎜，付根幅

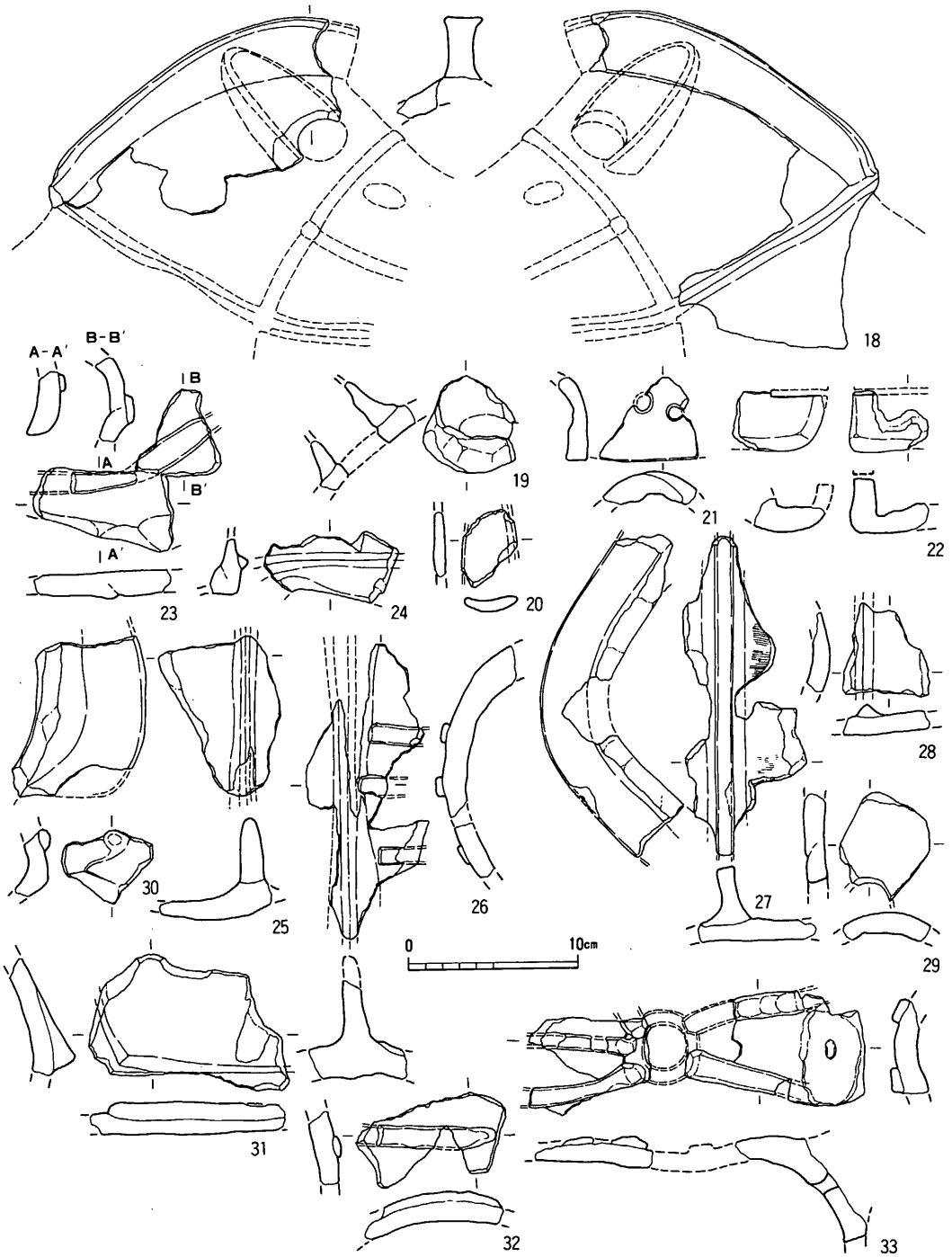


第19図 1号墳出土埴輪（形象-家）実測図②（1/4）

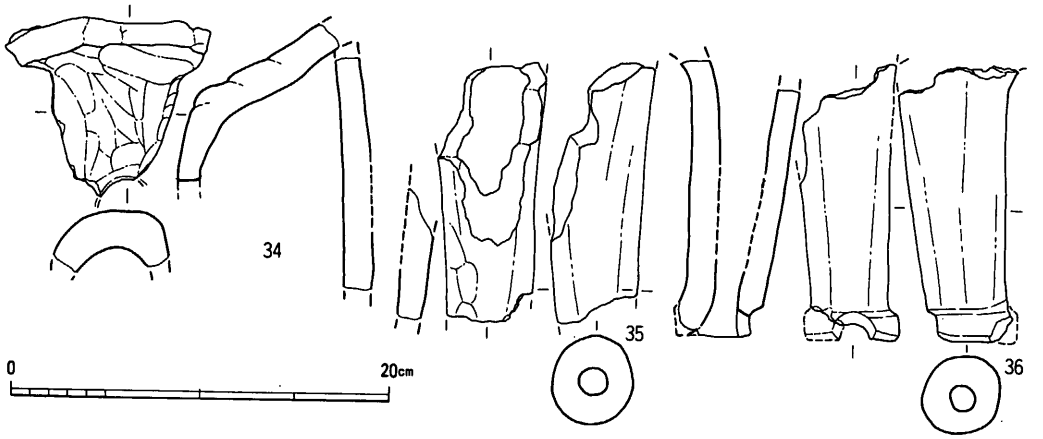


第20図　1号墳出土埴輪（形象-鶏）実測図（1/4）

14mmの台形をなし，しっかりとしたつくりである。手綱は断面三角形の突帯で表現する。19と20は耳であり，厚さ6～8mm程度の薄い粘土板を筒状にして，本体に穿孔された径約25mmの耳の穴に合わせてとりつけられている。18では耳が欠損し，その穿孔のみが残っている。21は上顎で鼻孔が伴う。鼻孔の径は10～12mmで，口のラインを水平にすると2つの鼻孔は上下に約5mmずれて配置されることになる。22は下顎。口の切込みは手前に約30mm入っている。23～24は手綱であろうか。綱の表現は23が粘土帯の貼付，24は三角形にナデ調整される。25～27は鞍部。26は後輪で，3本の綱が後方へ続く。25は鞍の断面がやや丸みをおび，高さは約40mmであるが，それに対して27は中央がややくびれ，先端も角張っており、家形埴輪の突帯かもしれない。26



第21図　1号墳出土埴輪（形象-馬）実測図①（1/4）

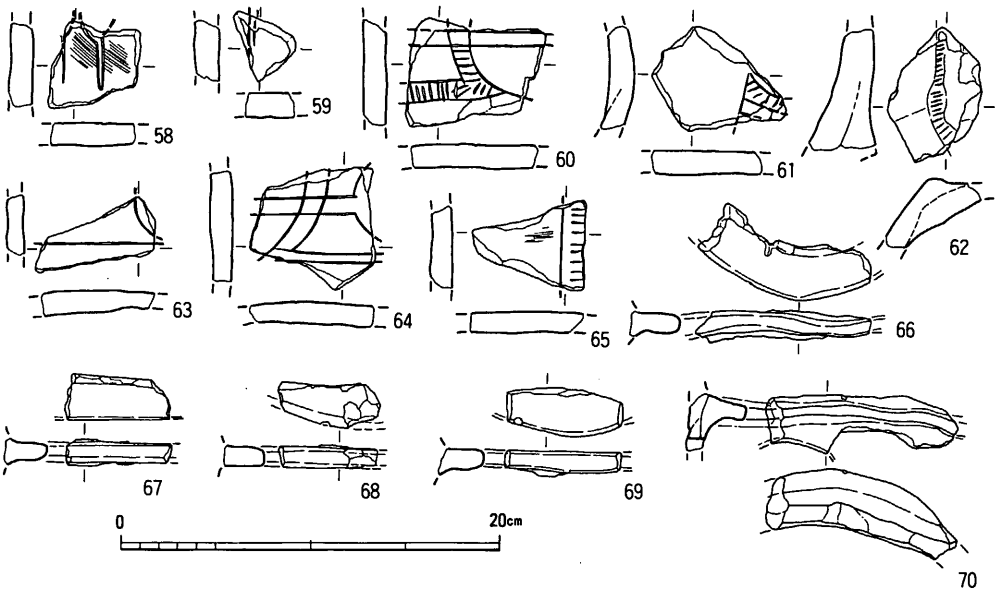


第22図　1号墳出土埴輪（形象-馬）実測図②（1/4）

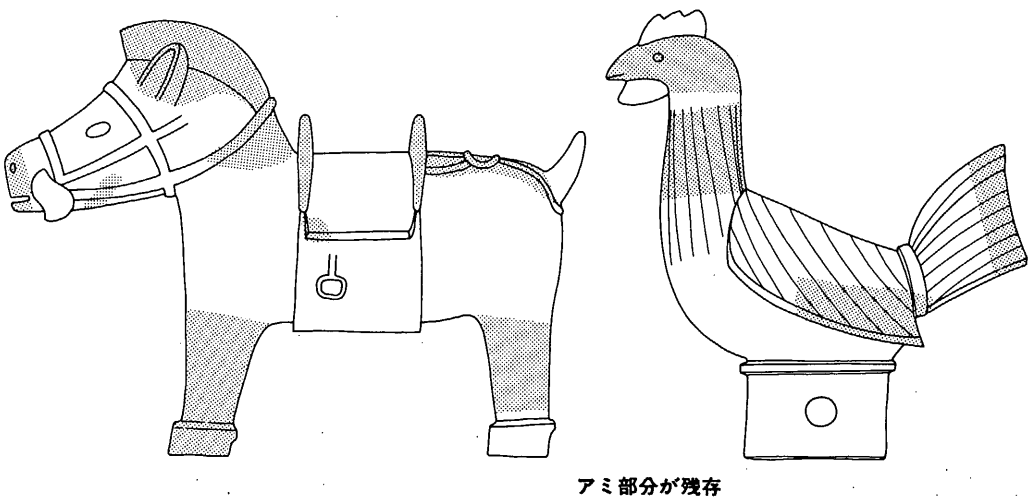
は先端を欠損するが，25に近い形状であると考えられる。31は障泥で，円弧を描く胴部片に粘土板を貼り付けて平坦面を作る。33は背部で雲珠がつく。尾が欠損しているが，胴体に径10mmの小穿孔があり，ソケット状に取り付けられていたことがわかる。接合痕の範囲から，尾は付根で径約60mmを測るものと考えられる。尾の下方には復元径20mmの穿孔がある。28・30・32は綱の表現がある小破片であり，やはり断面が三角形でナデで仕上げられるものと，低長方形で単に貼り付けてあるだけのものの二種がある。29は復元径30mmの透孔をもつ小片。胴部の透孔であろうか。34は脚の付根部であるが，粗いナデで仕上げられており，他とは別個体。脚とした部分には透孔らしい円弧の一部が確認でき，馬の脚とするにも疑問を残す。35～36は脚部。36は底面を基準とすると後傾し，前脚であることがわかる。下端に突帯を巡らし後部に半円形の切り込みを入れることで蹄の表現がなされる。また上端近くはやや外反しており，付根に近いと思われる。そうすると脚の長さは15cm程度となり，馬の脚としては短い。35は上端・下端を欠損する。特徴や長さに不明な点はあるが，36と類似度し，同一個体であろう。

靫（第23図）　靫と考えられる小破片が8点出土している。62は馬具（障泥）の可能性を残している。胎土は0.5～1.5mm大の石英・長石粒を含む。焼成は良く，黄褐色を呈する。すべて内外面ともにナデ調整。62を除き厚さ約12mmの扁平な破片である。58は鏃を描いた部分。59は鏃の中子かと思われるが，小破片のため判断しがたい。60～65は背板の文様と考えられるが，60～61・65は平行沈線の間に約4mm間隔で刺突を加え，63～64は沈線のみで文様を構成する。

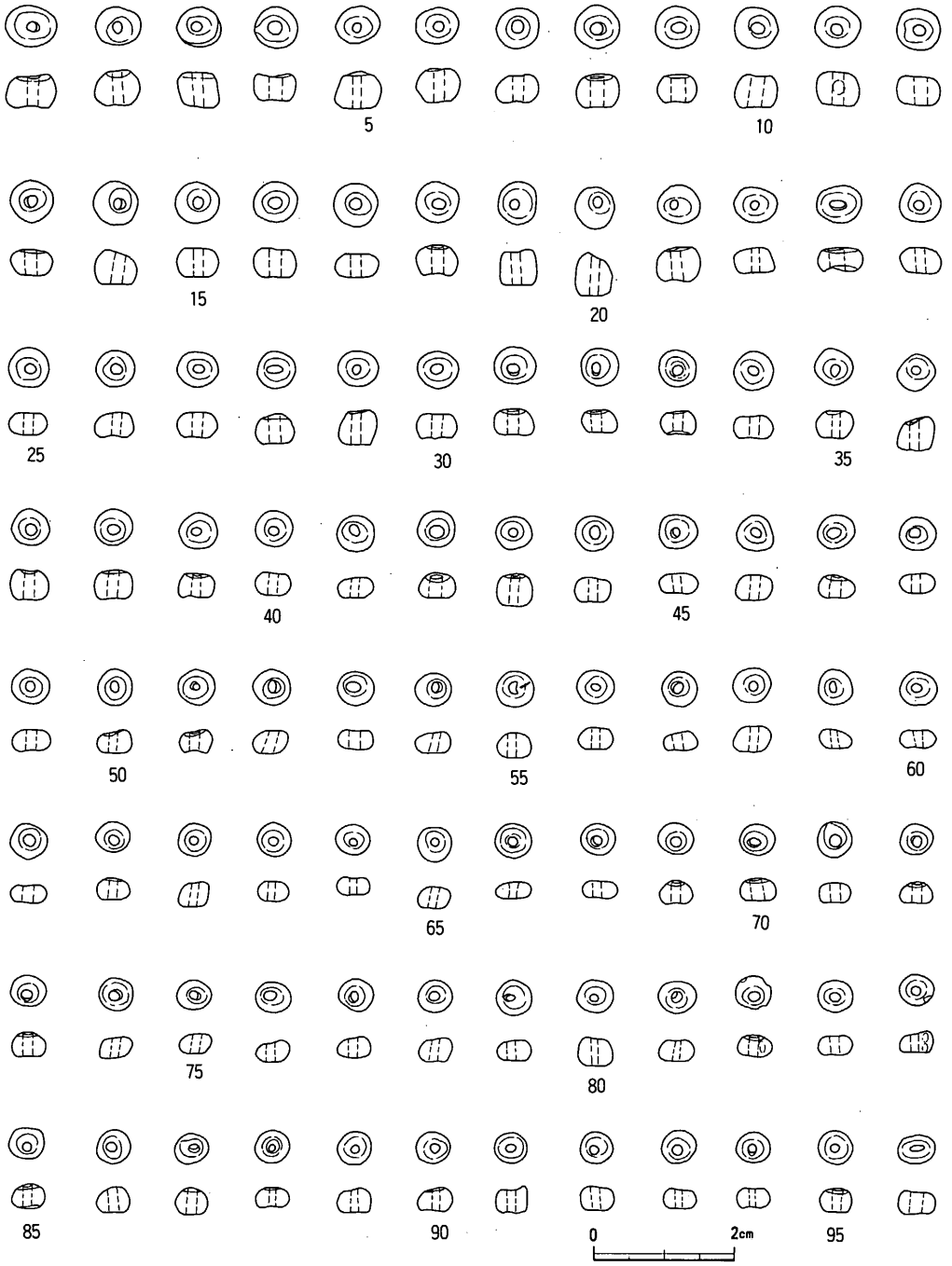
不明品（第23図）　66～67は円筒に貼り付けられた突帯状の小片であるが，明らかに円筒埴輪の突帯とは異なる。どの形象埴輪に伴うかは不明であるが，おそらく台部に巡らされた突帯であろう。胎土は1.0mm大程度の石英・長石粒を含む。焼成は良く橙色を呈する。つくりは粗雑で厚みは一定せず，かつ蛇行する。角は丸みを持つ。幅1cm，高さ2cm程度の大きさである。70には円形の透孔の一部がかかっている。　（岸本）



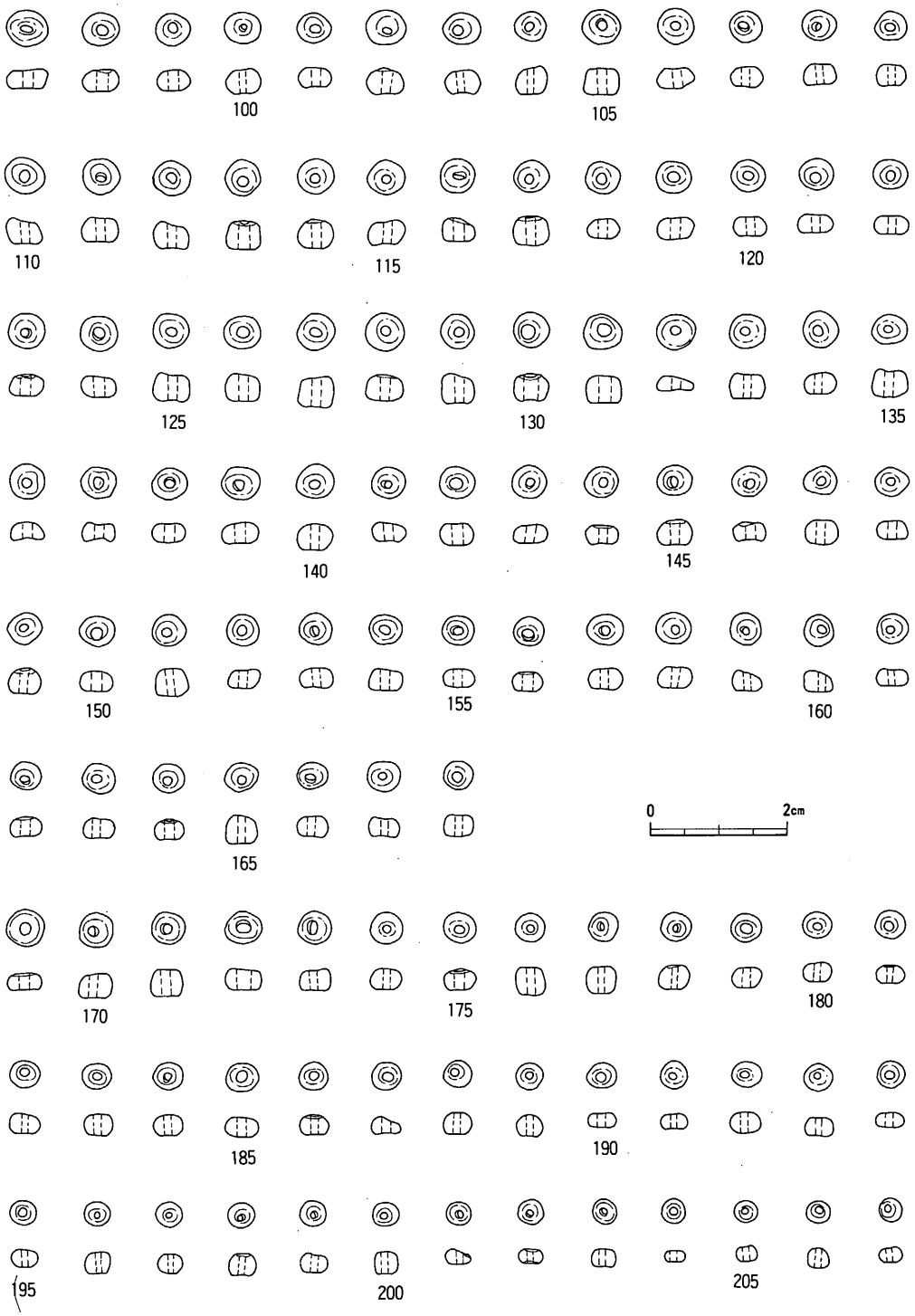
第23図　１号墳出土埴輪（形象-靫・その他）実測図（1/4）



第24図　１号墳出土馬・鶏形埴輪の復元図



第25図　1号墳出土玉類実測図①（1/1）



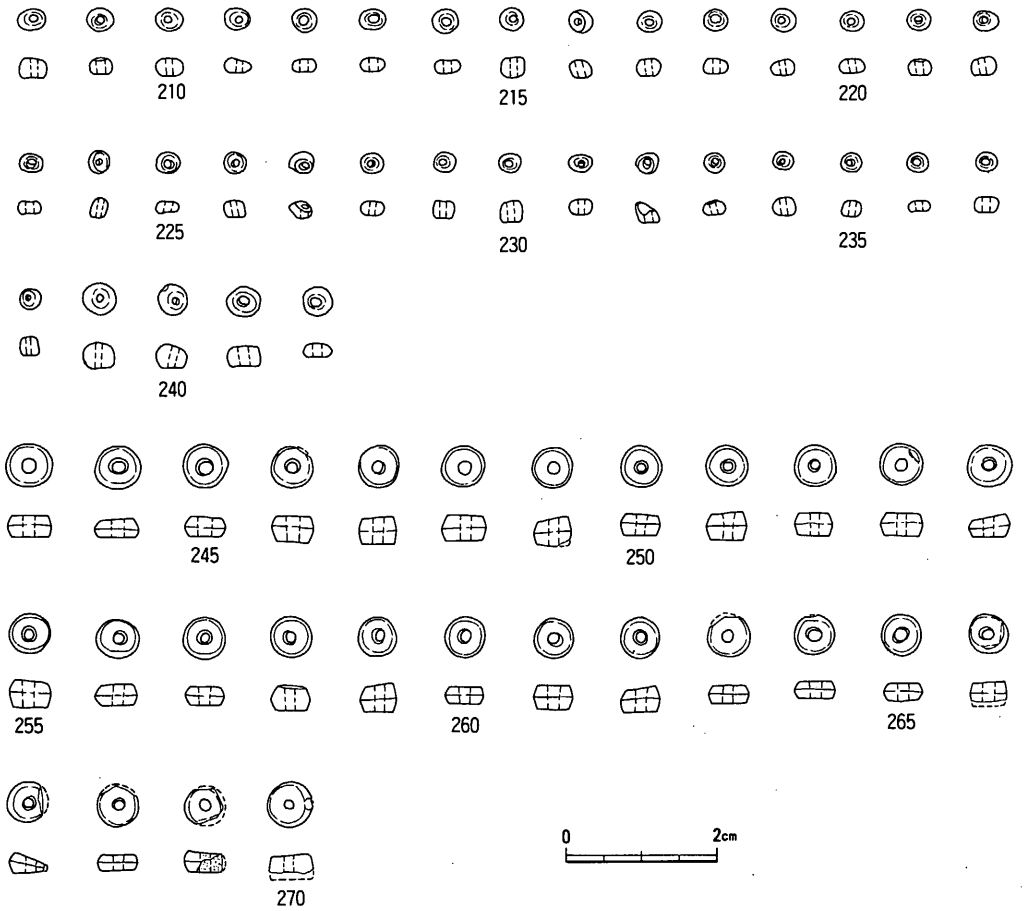
第26図　1号墳出土玉類実測図②（1/1）

玉類（巻頭図版４・図版24，第25～27図）

石室内からガラス小玉242点と滑石製臼玉27点が出土した。

ガラス小玉（１～242）　黄緑色，コバルトブルー，青～水色の３種類に大別できる。すべて細管切断法で作り，孔と平行する筋が特に黄緑色の小玉に顕著にみられ，また切断部分の角はきれいに取れて全体的に丸味を持った形状のものが多い。黄緑色小玉は径7.0～4.1㎜，コバルトブルー小玉は径5.5～2.6㎜で，径３㎜程度以下のものは粟玉と言っても良いかもしれない。

臼玉（243～270）　厚さは不揃いだが，直径は5.9～5.1㎜と割合規格的な大きさである。側面中央に稜をもつ「算盤形」の形状であるが，稜は明瞭ではない。270は南側周溝内から出土したもので，径・孔径ともに石室内出土のものとは相違し，別種のものであろうか。



第27図　１号墳出土玉類実測図③（1/1）

1号墳出土玉類一覧表

番号	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	色	備　考
1	5.9−7.0	3.9−4.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス
2	5.5−6.3	4.4−4.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
3	5.4−5.8	4.7−5.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
4	5.7−6.0	3.0−3.7	2.0	黄緑色不透明	ガラス
5	5.1−6.3	4.4−5.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス
6	5.2−6.0	4.5−4.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
7	5.7−6.1	3.7−3.9	2.0	黄緑色不透明	ガラス
8	6.0−6.3	4.2−4.4	2.0	黄緑色不透明	ガラス
9	6.0−6.3	3.6	1.5−2.5	黄緑色不透明	ガラス
10	5.8−6.2	4.2−4.6	2.0	黄緑色不透明	ガラス
11	5.5−6.5	4.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
12	5.7−6.2	3.7−3.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
13	5.7−5.9	3.4−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
14	5.8−6.0	3.5−4.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
15	5.5−5.9	3.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
16	5.6−6.0	3.5−4.0	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
17	5.8−6.0	3.4	1.5	黄緑色不透明	ガラス
18	5.8	3.5−4.0	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
19	5.6−5.8	4.1−5.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
20	5.5	4.6−5.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
21	5.2−6.2	4.2−4.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
22	5.0−5.8	3.5−3.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
23	5.1−6.2	2.2−3.0	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス　いびつ
24	5.5−5.7	3.3−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
25	5.5−5.7	2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
26	5.3−5.5	2.8−3.4	1.5	黄緑色不透明	ガラス
27	5.0−5.7	3.4	1.5	黄緑色不透明	ガラス
28	5.2−5.4	3.4	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
29	4.8−5.5	4.4−4.5	1.0	黄緑色不透明	ガラス
30	4.9−5.5	2.9−3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
31	4.9−5.7	2.8−3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
32	5.2	2.5−3.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
33	5.3	2.8−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
34	5.2−5.5	3.1−3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
35	4.8−5.3	3.7−3.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
36	4.6−5.3	3.6−4.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
37	5.1−5.2	3.7−4.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
38	5.0−5.3	3.3−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
39	4.8−5.4	2.7−3.3	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
40	5.0−5.3	2.6−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
41	5.0−5.2	2.4−3.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
42	5.0−5.2	2.5−3.4	2.0	黄緑色不透明	ガラス
43	4.8−5.2	4.2−4.4	1.0	黄緑色不透明	ガラス
44	4.8−5.2	2.6−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
45	4.8−5.2	2.2−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
46	5.0−5.3	2.7−3.1	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
47	4.8−5.1	2.5−3.0	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
48	4.9−5.0	2.3−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
49	4.8−5.2	2.3−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
50	4.9	2.5−3.0	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
51	4.8−5.0	2.2−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
52	4.8−5.0	2.5−2.7	2.0	黄緑色不透明	ガラス
53	4.8−5.1	2.3−2.5	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
54	4.5−4.8	2.6−3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
55	5.0	3.0−3.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス不純物含
56	4.6−5.0	2.7	1.0	黄緑色不透明	ガラス
57	4.8	2.3−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
58	4.7−5.2	3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
59	4.6−5.0	2.4−2.8	1.0−2.0	黄緑色不透明	ガラス
60	4.7−4.9	2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
61	4.7−5.1	2.2−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
62	4.2−4.8	2.4−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
63	4.5−4.8	3.0−3.3	1.0	黄緑色不透明	ガラス
64	4.7	2.7	1.0	黄緑色不透明	ガラス
65	4.3−4.8	2.4	1.0	黄緑色不透明	ガラス
66	4.8	2.7	1.0	黄緑色不透明	ガラス
67	4.8−5.1	1.9−2.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
68	4.5−4.8	2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
69	4.5−4.7	2.5−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
70	4.4−4.8	2.4−2.8	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
71	4.6−4.8	2.5−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
72	4.4−4.6	2.1−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
73	4.4−4.9	2.4−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
74	4.6	2.7	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
75	4.2−4.6	2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
76	4.3−5.0	2.2−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
77	4.3−4.7	2.2−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
78	4.5−4.8	2.6−3.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス
79	4.8	2.5−2.8	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
80	4.6−5.0	3.6−3.8	1.0	黄緑色不透明	ガラス
81	4.5−5.2	2.6−2.7	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
82	4.6−4.9	2.2−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
83	4.4−4.8	2.3−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
84	4.5−4.8	2.1−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
85	4.4−4.9	2.7−3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
86	4.4−4.7	3.0−3.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
87	4.2−4.7	3.1−3.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
88	4.5−4.8	2.2−2.4	1.0	黄緑色不透明	ガラス
89	4.5−4.8	2.8−3.3	1.0	黄緑色不透明	ガラス
90	4.5−4.8	2.5−3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
91	4.2−4.5	3.1−3.5	1.0	黄緑色不透明	ガラス
92	4.4−4.6	3.0	1.0	黄緑色不透明	ガラス
93	4.5−4.7	2.3−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
94	4.1−4.7	2.3−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
95	4.6	1.8−3.0	1.0	黄緑色不透明	ガラス
96	4.0−5.1	2.8−3.2	1.0−2.0	黄緑色不透明	ガラス
97	5.0−5.9	2.5−2.7	1.0−2.0	黄緑色不透明	ガラス
98	4.7−5.2	3.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
99	4.7−5.0	2.5−3.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
100	4.5−5.0	3.3	1.0	黄緑色不透明	ガラス
101	4.4−4.8	2.4−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
102	5.1−5.6	3.0−3.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
103	4.8−5.2	3.2−3.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
104	4.3−4.5	3.4−4.0	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
105	5.0−5.5	3.3−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
106	5.0−5.3	2.5−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
107	4.5−4.8	2.4−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
108	4.4−4.7	2.8−3.0	1.0	黄緑色不透明	ガラス
109	4.1−4.4	3.0−3.1	1.0	黄緑色不透明	ガラス
110	5.3−5.6	2.8−3.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
111	5.0−5.4	3.2−3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
112	5.2	3.1−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
113	4.5−5.3	3.0−3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
114	4.7−5.2	3.0−3.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
115	4.8−5.3	3.0−3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
116	4.7−5.0	2.6−3.3	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
117	4.4−4.7	3.7−4.1	1.0	黄緑色不透明	ガラス
118	4.6−4.9	2.5−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
119	4.5−4.9	2.7−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
120	4.6−4.9	2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
121	4.3−4.9	2.2−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
122	4.3−5.0	2.4−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
123	5.1	2.6−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
124	5.1−5.2	2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
125	4.9−5.1	3.5−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
126	4.5−5.2	3.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
127	4.9−5.4	4.0−4.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス
128	5.2−5.5	3.3−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
129	4.7−5.0	3.7−4.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス
130	5.0−5.2	2.9−3.5	2.0	黄緑色不透明	ガラス
131	4.9−5.3	3.5−3.9	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
132	5.0−5.4	1.5−2.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
133	4.9−5.3	3.5−3.7	1.0	黄緑色不透明	ガラス
134	5.0−5.2	2.8−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
135	4.5−4.9	3.6−3.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
136	4.8−5.1	2.3	1.5	黄緑色不透明	ガラス

番号	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	色	備　考
137	4.7−5.1	2.1−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
138	4.5−5.0	2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
139	4.8−5.5	2.6−3.1	1.5	黄緑色不透明	ガラス
140	4.8−5.2	3.4−3.5	1.0−1.5	黄緑色不透明	ガラス
141	4.5−4.8	2.3−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
142	4.5−5.0	2.5−2.9	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
143	4.8−4.9	2.5−2.6	1.5	黄緑色不透明	ガラス
144	4.5−4.7	2.5−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
145	4.5−4.9	3.2	1.5	黄緑色不透明	ガラス
146	4.4−4.6	2.2−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
147	4.3−4.8	3.4−3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
148	4.3−4.8	3.4−3.7	1.0	黄緑色不透明	ガラス
149	4.3−4.9	3.1−3.6	1.0	黄緑色不透明	ガラス
150	4.4−5.1	2.6−3.0	1.5−2.0	黄緑色不透明	ガラス
151	4.4−4.7	3.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
152	4.5−4.8	2.5−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
153	4.5−4.7	2.6−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
154	4.3−5.0	2.6−3.0	1.5	黄緑色不透明	ガラス
155	4.3−4.6	2.5−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
156	4.1−4.5	2.3−2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
157	4.5−5.1	2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
158	4.5−5.0	2.5−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
159	4.3−4.6	2.4−3.2	1.0	黄緑色不透明	ガラス
160	4.1−4.3	2.9−3.4	1.5	黄緑色不透明	ガラス
161	4.3−4.5	2.4−2.6	1.0	黄緑色不透明	ガラス
162	3.9−4.4	2.2−2.5	1.5	黄緑色不透明	ガラス
163	4.5−4.7	2.7	1.5	黄緑色不透明	ガラス
164	4.2−4.5	2.4−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
165	4.1−4.6	3.3−3.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
166	3.7−4.4	2.6−2.9	1.5	黄緑色不透明	ガラス
167	4.1−4.6	1.9−2.5	1.0	黄緑色不透明	ガラス
168	4.1	2.6−2.8	1.5	黄緑色不透明	ガラス
169	5.2−5.5	2.1−2.4	1.5−2.0	コバルトブルー	ガラス
170	5.1	3.2−3.8	1.5	濃コバルトブルー	ガラス
171	4.5−4.9	3.8−4.0	1.5	濃コバルトブルー	ガラス
172	4.9−5.2	3.0−3.4	2.0	濃コバルトブルー	ガラス
173	4.7	2.7−3.1	1.5−2.0	コバルトブルー	ガラス ひび割れ
174	4.6	3.0−3.3	1.5	コバルトブルー	ガラス
175	4.4−4.9	2.2−2.8	1.5	コバルトブルー	ガラス
176	4.1−4.2	3.6−3.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
177	4.1	3.6−3.7	1.0−1.5	コバルトブルー	ガラス
178	4.0−4.3	3.0−3.2	1.0	コバルトブルー	ガラス
179	4.2−4.5	2.7−2.8	1.5	コバルトブルー	ガラス
180	3.8−4.1	2.6	1.0	コバルトブルー	ガラス
181	4.1−4.4	2.5−2.6	1.0−1.5	コバルトブルー	ガラス
182	4.0−4.3	2.4−2.7	1.5	コバルトブルー	ガラス
183	3.8−4.3	2.6−2.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
184	4.0−4.4	2.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
185	4.3−4.7	2.4−2.5	1.5	コバルトブルー	ガラス
186	4.0−4.2	2.3−2.5	1.5	コバルトブルー	ガラス
187	4.0−4.3	1.8−2.5	1.5	コバルトブルー	ガラス
188	3.8−4.2	2.7−2.8	1.0	コバルトブルー	ガラス
189	3.8−3.9	2.8−2.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
190	3.8−4.0	2.0	1.5	コバルトブルー	ガラス
191	4.0	2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
192	3.8−4.2	2.8−2.9	1.0−1.5	コバルトブルー	ガラス
193	3.9−4.0	2.6−2.8	1.0	コバルトブルー	ガラス
194	3.9−4.0	2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
195	3.6−3.8	2.3−2.5	1.0	コバルトブルー	ガラス
196	3.5−3.7	2.8−2.9	1.0	濃コバルトブルー	ガラス
197	3.5−3.7	2.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
198	3.5−3.7	3.0−3.2	1.0	コバルトブルー	ガラス
199	3.6−3.8	2.2−2.5	1.0	コバルトブルー	ガラス
200	3.5−3.7	3.0	1.0	コバルトブルー	ガラス
201	3.3−3.5	1.5−2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
202	3.5	1.5−1.8	1.0	コバルトブルー	ガラス
203	3.4−3.6	2.5	1.0	コバルトブルー	ガラス

番号	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	色	備　考
204	3.3	1.5	1.0	コバルトブルー	ガラス
205	3.1−3.3	2.2−2.4	1.0	コバルトブルー	ガラス
206	3.3	2.8−2.9	1.0	濃コバルトブルー	ガラス
207	2.3−3.5	1.9−2.4	1.0	コバルトブルー	ガラス
208	3.0−3.3	2.3−2.6	1.0	濃コバルトブルー	ガラス
209	3.0−3.2	1.8−2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
210	3.2−3.5	2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
211	2.9−3.3	1.6−2.2	1.0	コバルトブルー	ガラス
212	3.1−3.2	1.4−1.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
213	2.9−3.3	1.7	1.0−1.5	コバルトブルー	ガラス
214	3.1−3.2	1.6	1.0	コバルトブルー	ガラス
215	3.0	2.2−2.4	1.0	コバルトブルー	ガラス
216	2.8−3.1	2.3−2.5	1.0	コバルトブルー	ガラス
217	2.8−3.1	2.0−2.1	1.0	コバルトブルー	ガラス
218	2.9	1.6−1.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
219	3.0	1.8−2.0	1.0	コバルトブルー	ガラス
220	2.9−3.1	1.7−1.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
221	2.8−3.0	1.7−2.0	1.0	コバルトブルー	ガラス
222	2.7−3.1	2.1−2.4	1.0	コバルトブルー	ガラス ひび割れ
223	2.6−3.1	1.5−1.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
224	2.5−3.0	2.6−2.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
225	2.8−2.9	1.4−1.6	1.0	コバルトブルー	ガラス
226	2.8−2.9	2.0	1.0	コバルトブルー	ガラス
227	2.8−3.5	1.5−2.4	1.0	コバルトブルー	ガラス
228	2.7−2.9	1.7−1.8	1.0	コバルトブルー	ガラス
229	2.7−2.8	2.5	1.0	コバルトブルー	ガラス
230	2.5−2.8	2.4−2.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
231	2.4−3.1	1.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
232	2.6	1.5−2.2	1.0	コバルトブルー	ガラス 歪み
233	2.6	1.4−1.6	1.0	コバルトブルー	ガラス
234	2.6−2.8	2.0−2.2	1.0	コバルトブルー	ガラス
235	2.6−2.7	1.8−1.9	1.0	コバルトブルー	ガラス
236	2.6−2.8	1.3	1.0	コバルトブルー	ガラス
237	2.5−2.7	1.7	1.0	コバルトブルー	ガラス
238	2.6−2.7	2.0−2.3	1.0	コバルトブルー	ガラス
239	4.1−4.3	3.2−3.5	1.0	青色半透明	ガラス
240	3.8−4.1	2.4−3.1	1.0	濃青色透明	ガラス
241	4.0−4.3	2.2−2.4	1.5	水色不透明	ガラス
242	3.7−3.8	1.6	1.5	水色透明	ガラス
243	5.7−5.9	2.6−2.8	2.0		滑石
244	5.6−5.9	2.0−2.5	1.5		滑石
245	5.7−5.9	2.3−2.4	2.0		滑石
246	5.4−5.6	3.1−3.5	1.5		滑石 一部欠
247	5.3	3.3−3.5	1.5		滑石
248	5.3−5.5	3.0−3.3	1.5		滑石
249	5.3	3.0−3.8	1.5		滑石 一部欠
250	5.2−5.3	2.6−2.9	1.5		滑石
251	5.3−5.4	3.3−3.6	1.5		滑石
252	5.3−5.4	2.7−2.9	1.5		滑石
253	5.2−5.4	3.0	1.5		滑石
254	5.4−5.5	2.3−2.8	1.5		滑石
255	5.1−5.4	3.3−3.6	1.5		滑石
256	5.0−5.5	2.6	1.5		滑石
257	5.3	2.3−2.5	1.5		滑石
258	5.2−5.3	2.7−3.5	1.5		滑石
259	5.1	3.5−3.7	1.5		滑石
260	5.2	2.3−2.4	1.5		滑石
261	5.0−5.1	3.3−3.5	1.5		滑石
262	5.0−5.2	3.2−3.7	1.5		滑石
263	5.4	2.5	1.5		滑石 一部欠
264	5.1−5.2	2.3−2.4	1.5		滑石 一部欠
265	5.1−5.3	2.6	1.5		滑石
266	5.1	2.9+α	1.5		滑石 下部剝離
267	5.2	1.5−2.8	1.5		滑石 一部欠
268	5.4	2.2	1.5		滑石 一部欠
269	5.1+α	2.3−3.1	1.5		滑石 一部欠
270	6.5−6.7	2.6+α	1.0		滑石 下部剝離

鉄器（図版24・25，第28図）

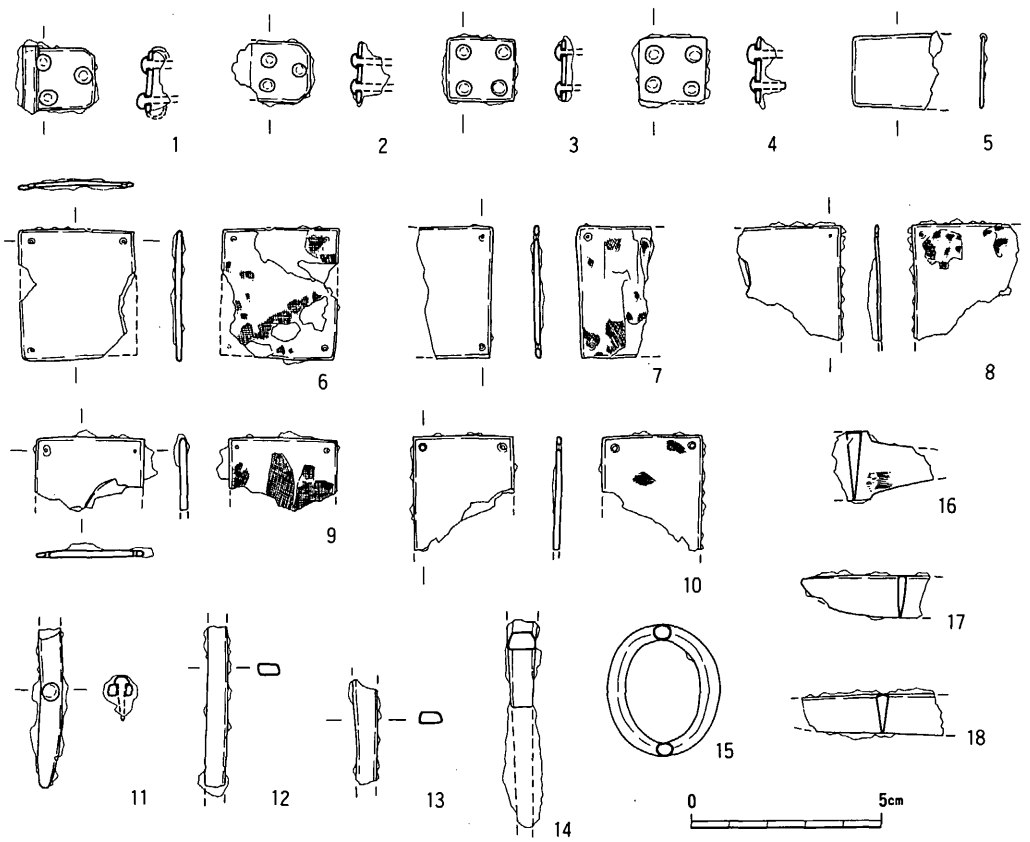
革金具（1～4） 1・2は辻金具等の脚部で，截頭方形で3個の鋲を打ち，無文の責金具を伴う。幅，長さともに1.6cm。3・4は方形の金具で，4個の鋲を打つ。3は1.8×1.7cm，4は1.8×1.8cm。

不明鉄器（5～10） 5は幅1.9cm，長さ2.4cm以上の板状長方形の金具。6～10は板状長方形で，裏面に布の痕跡が残り，四隅には孔があり布に縫い付けたものであろう。6は3.0×3.5cm，7も長さは同じく3.5cm，9・10は幅の狭いタイプで9が幅3.8cm，10が3.7cm。用途は不明だが，胡籙等の飾金具の可能性はないか。

鞍金具（11～13） 11は磯金具等に伴う縁金具の端部であろう。幅6㎜，厚さ3㎜の断面長方形で，鋲を打つ。12・13も同様の形状であるが鋲が認められず，別の製品である可能性もある。

鉄鏃（14） 最大幅6㎜，厚さ4㎜の断面長方形で，長さ5.4cmが残存する。

不明鉄器（15） 長径3.4cm，短径2.9cmの楕円形環状の鉄製品。表面は黒色をしている部分



第28図 1号墳出土鉄器実測図（1/2）

があり，漆等を塗布したものかもしれない。北側周溝から出土したもので，古墳に伴うものかは不明。

刀子（16～18）　16は茎部分に柄の木質の痕跡が残る。

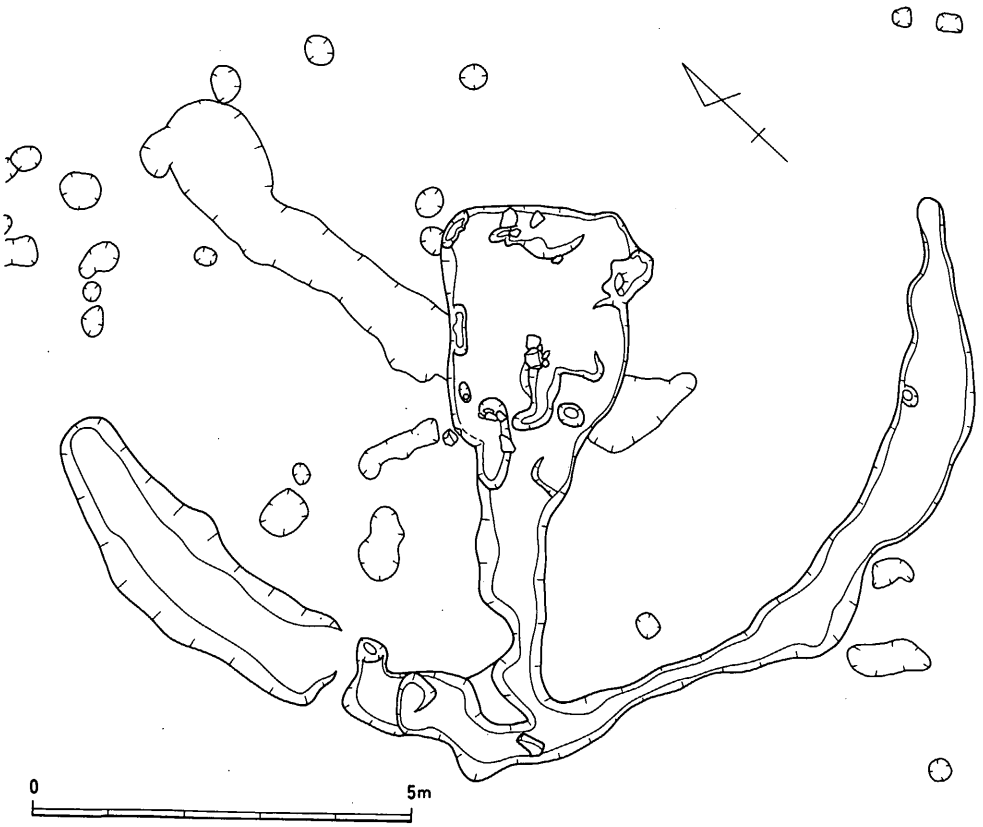
2号墳

調査区の東側，1号墳の南東側に位置し，2基の古墳は8.5mの間隔をとって隣り合う。

古墳は後世に削平を受けて墳丘の全てと周溝の北東側約半分は既に失われており，石室も床石の一部が辛うじて残存している程度である。

周溝（図版13，第29図）

北東側の約半分は失われ，残った部分も上半部を削り取られている。現状で最大幅1m50cm,



第29図　2号墳地形測量図（1/100）

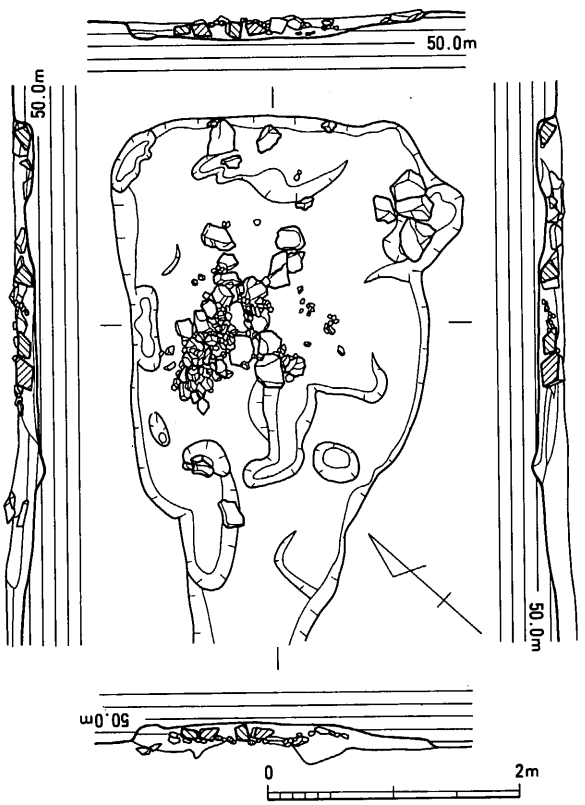
最大の深さ35cmが残る。周溝の位置から復元される墳丘の径は11m程で，そのおよそ中心に石室がある。周溝の南西部は墓道に接続し，石室につながる。2号墳から出土した土器の大半は西～南西側周溝内から出土した。

主体部（図版13，第30図）

南西方向に開口する横穴式石室で，主軸方位はN-57°-E。石室掘形の底から15cm程を残して削平され，石材はほとんどが抜き取られて床石の一部が残存するだけである。

石室掘形の長さは墓道との境が不明瞭だが左側で測って3m15cmで，幅は奥壁側で2m40cm，手前側で2mである。石室掘形の形状と石材の抜き取り痕から，石室は両袖で長方形または奥壁側が若干広い形状であろう。

床面は15～25cmの角張った自然石を並べ，その上に5cm程の小石を敷き詰める。



第30図　2号墳石室実測図（1/60）

出土遺物

土師器（図版25，第31図）

高杯（1）　杯部は内湾しながら大きく開き，口縁部は外反する。脚部は直線的に広がり，端部は屈曲して開く。器面の風化が著しいが，全面に丹塗りの痕跡があり，磨いて仕上げたようである。胎土は精良で，褐色土粒を多く含む。杯部径24.3cm，脚部径18.3cm，器高18.0cm。

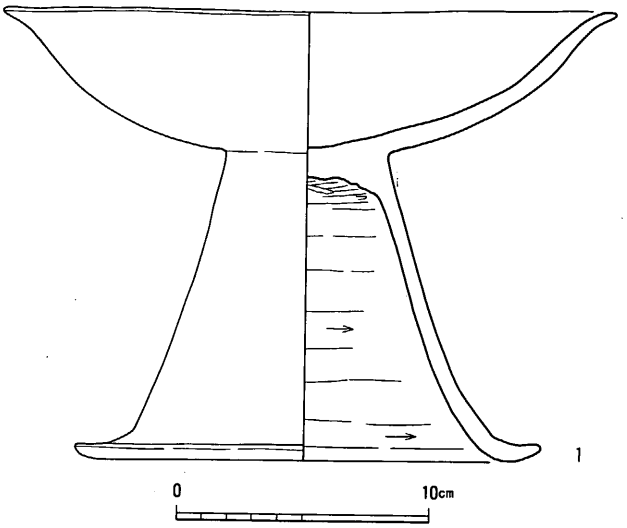
須恵器（図版25～27，第32～36図）

杯蓋（2～6）　2～4は口径13.6～15.0cm，器高4.6～5.0cmで，天井部と口縁部の境と口唇部内面に段がある。天井部内面には当具痕が残る。5は口径11.8cm，器高3.6cmで，天井部と口縁部の境は稜をもち，口唇部は丸くおさめる。6は復元口径10.4cmと小さく，壺等の蓋の可能性がある。天井部と口縁部の境に沈

線をめぐらし，口唇部内面には段をもつ。

杯（7～10） 口径12.3～13.4cm，受部径14.6～16.2cm，器高は10が5.1cm。比較的長いたちあがりは内傾して，10の口唇部内面には沈線がめぐり，底部内面には青海波文状に当具痕が残る。

高杯（11） 高杯の脚部で，「八」の字に開き端部は下方につまみ出す。



第31図 2号墳出土土器実測図①（1/3）

壺蓋（12） 壺類の蓋であろう。口径8.3cmで，天井部と口縁部の境は稜をもって屈曲し，口縁部は下方を向き，端部は四角く仕上げる。天井部外面はヘラ状工具による粗いナデ調整。

壺（13～15） 壺類の口縁部。13・14は口縁部外面を肥厚させ，15は四角い口縁部の下を突帯状に作りだす。

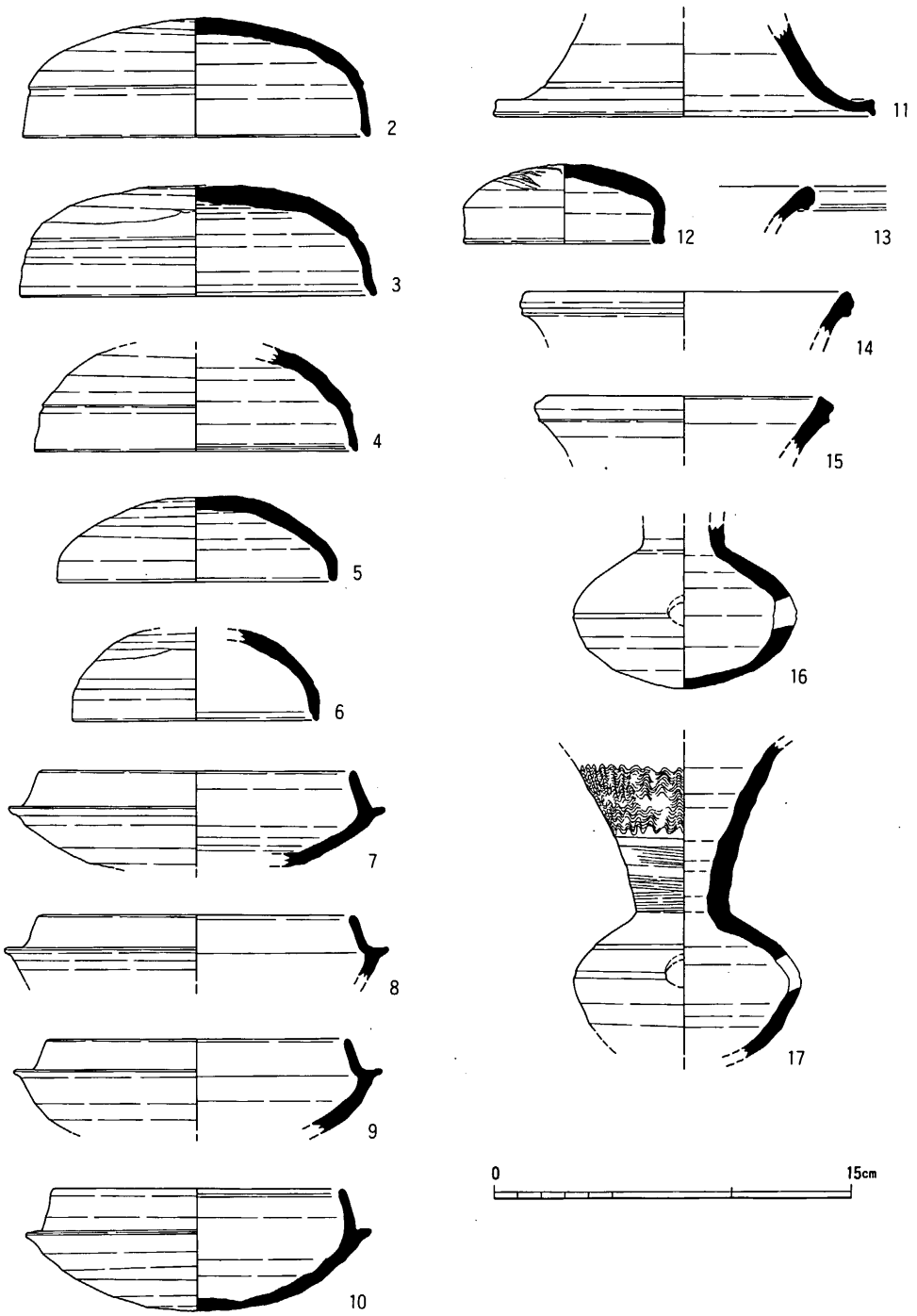
甕（16・17） 2点とも体部が扁球形をしており，最大径のある中央部と17は肩部にも沈線がめぐる。17の頸部は長く，上半部は櫛描波状文，下半部にはカキ目調整を施す。16はやや軟質で，灰白色を，17は焼成良好で灰～暗灰色を呈する。

提瓶（18・19） 18は体部の片面が平らで回転ヘラ削り調整，被蓋部側は丸味をもちカキ目調整の上に二重に櫛描波状文をめぐらし，中央には同様の櫛状工具で×を描く。肩部の把手は鍵状になるのであろう。外湾して開く頸部は上方で段をもって軽く屈曲し，口縁部を作る。胎土には若干の砂粒の他に炭化物粒を含み，焼成は普通で明灰色を呈する。器高17.6cm，体部径15.2cm，厚さ10.7cm。

19は体部の破片で，平らな面を作り，カキ目調整をした上に櫛状工具で×を描く。胎土には砂粒を多く含み，焼成は堅緻で灰色。

平瓶（20） 口頸部を欠く。体部は丸味をもち，最大径は中央部よりやや上にある。底部と体部の下位は回転ヘラ削り調整で，その他は全面カキ目調整を施す。体部下位にはヘラ記号があり，また底部には指頭痕が多くみられ，指紋までが残る。体部径22.5cm。

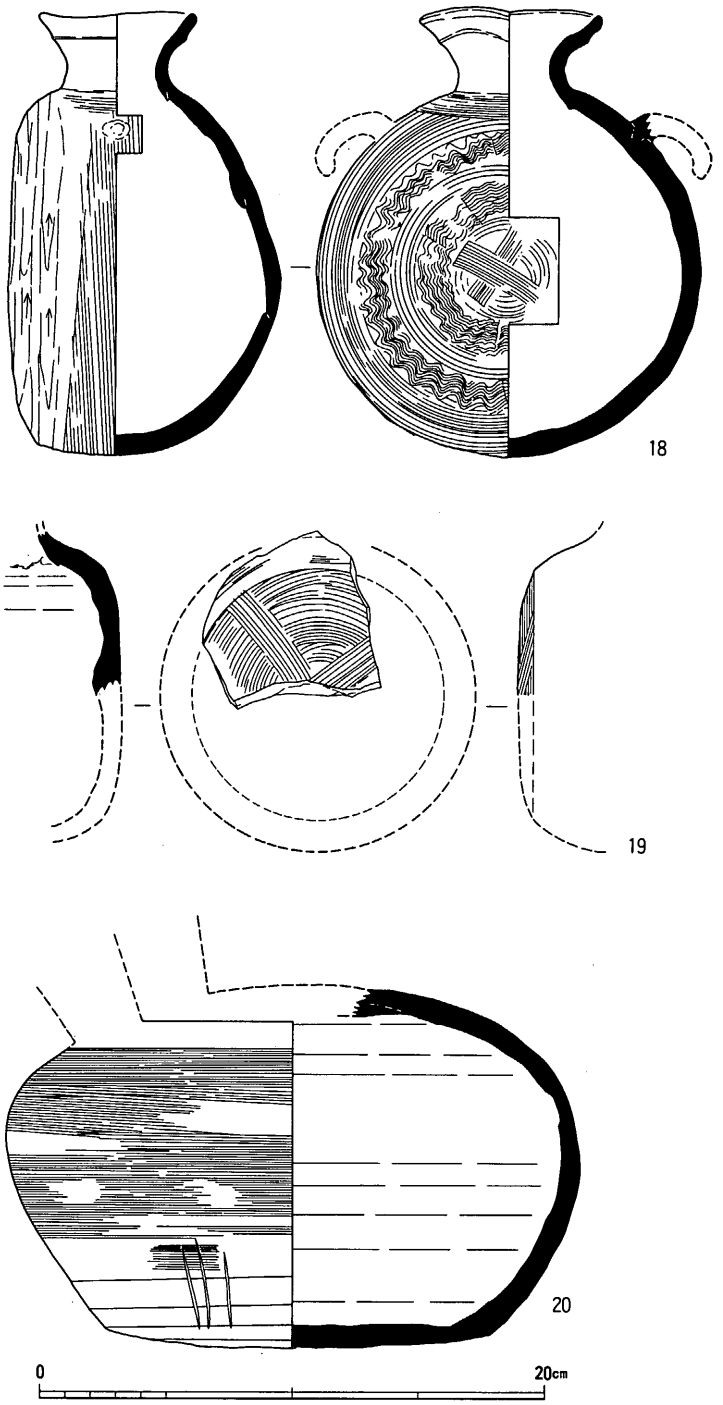
器台（21） 子持器台。親器の器台は鉢部が内弯気味に立ち上がり，口縁部はシャープで内面にも張り出して上部に平坦面をもつ。子器はこの平坦面上に取り付ける。鉢部は底を作らず，



第32図　2号墳出土土器実測図②（1/3）

そのまま脚部へとつながる。鉢部と脚部との境には剝離した痕跡があり，本来この部分に高杯形の子器が付いていたものと考えられる。鉢部外面下半には擬格子叩目文が，内面には青海波状の当具痕が残り，上半部はそれをヨコナデで消している。脚部は下半部を失っているが，筒形で下位で広がる。外面は櫛描波状文で飾り，沈線をめぐらして5分割し，長方形透し孔を4方向に入れる。口径34.5cm。

子器の杯は5個が残存しており，蓋は4個残る。杯は口径9.6～10.4cm，受部径12.1～12.8cmで，たちあがり部は内傾して端部を丸くおさめる。器台の口縁には粘土を使って取り付けており，撫でつけた痕跡が内外面に残り，杯の底部内面にはこの時に付いた指頭圧痕が多く残る。蓋は天井部の中央にボタン状のつまみが付き，天井



第33図　2号墳出土土器実測図③（1/3）

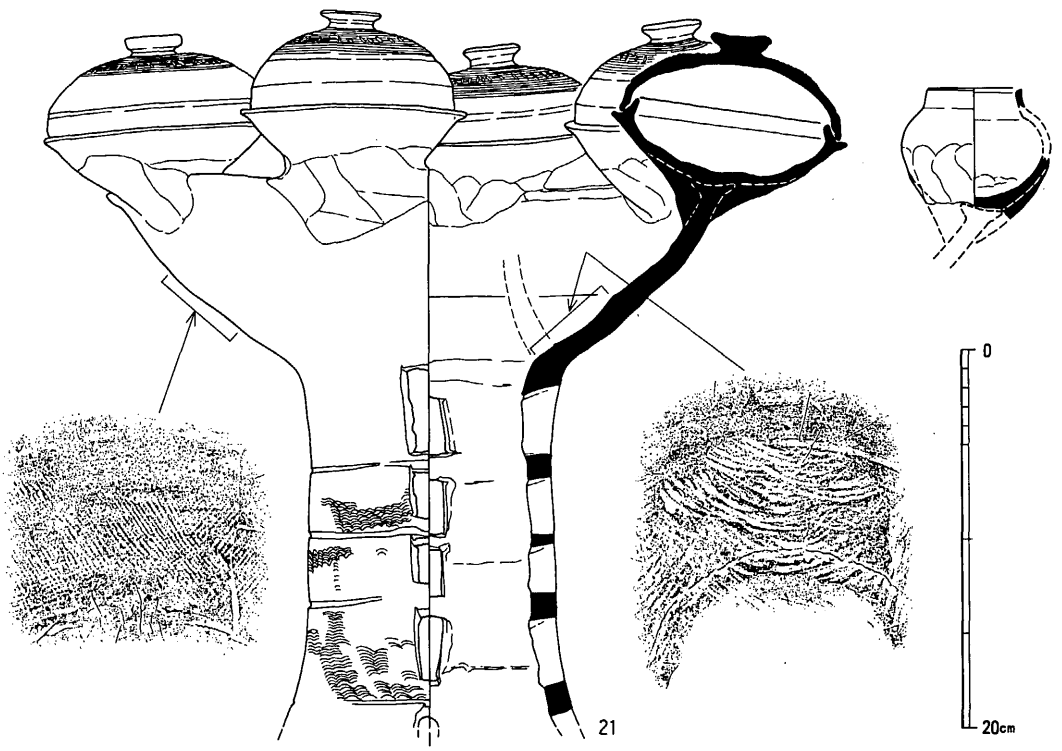
部は丸く口縁部との境には沈線がめぐり，また口唇部内面には段をもつ。天井部にはカキ目調整を施し，その上に列点文をめぐらす。

子器はこの他に小型壺がある。底部の剝離痕をみると杯と同じく器台の口縁部に取り付いたものである。最大径が体部の上位にある短頸壺で，口径4.7cm，壺自体の器高は6cm程度である。焼成や胎土などからも同一個体のものであろう。復元すると，器台の口縁部に蓋杯7個と小型壺1個が，中央部には高杯が付いていたものと考えられる。壺が付くとバランスが悪いように感じるが，類例が佐賀県東脊振村松葉2号墳にある。胎土には砂粒を含み，焼成は良好で灰色～暗灰色を呈する。

甕（22） 口縁部は外側を肥厚させて頸部と区別する。体部の外面は擬格子叩目文で，内面は青海波状の当具痕の他に，下位にはその上から別の原体によるものと思われる単位の小さな平行文状の当具痕が残る。

土製品（図版28，第35図）

土錘（23） 装身具の可能性もあるが，大きさと胎土からみて土錘とした方が良いであろう。



第34図 2号墳出土土器実測図④（1/4）

球形に近く，径2.2～2.4cm，厚さ2.0cmで，11.0ｇ。

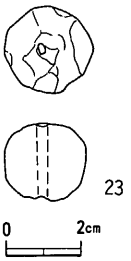
玉類（図版28，第37図）

小玉（１～４） 石室内から径3.5～4.0cmのガラス小玉４点が出土した。１・２は青緑色半透明，３・４は水色透明。

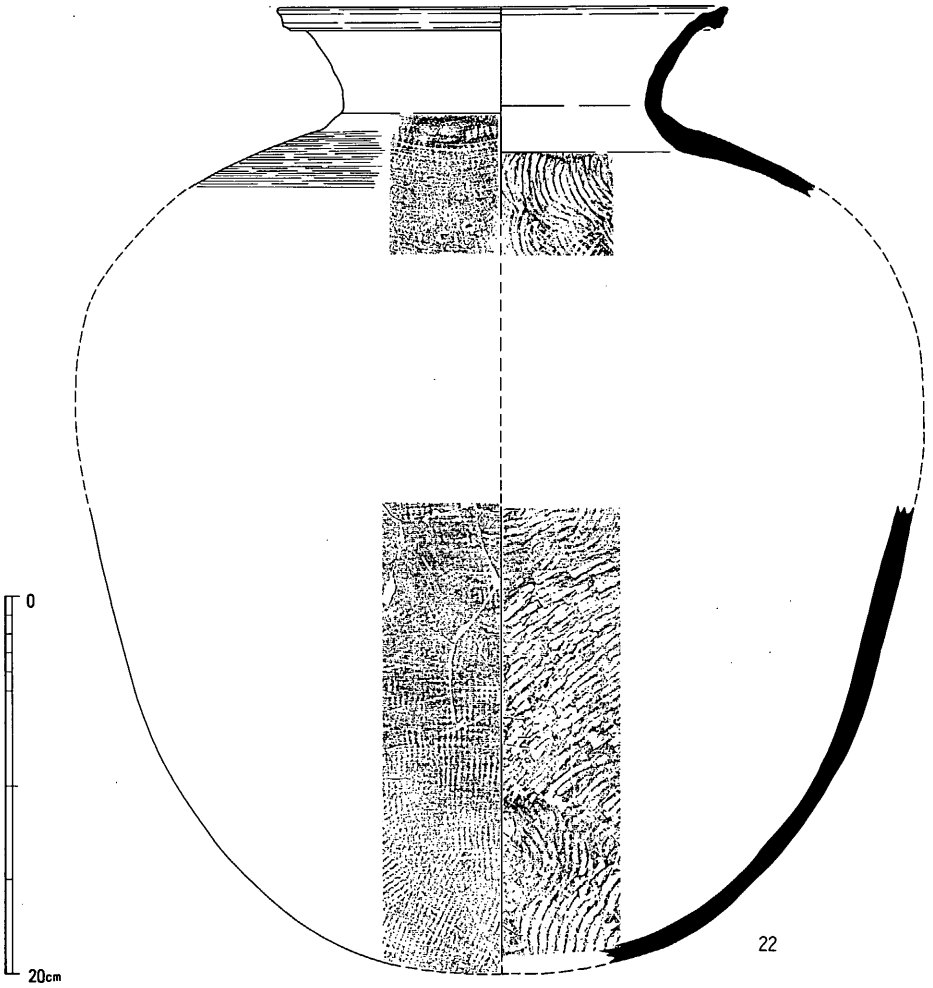
鉄器（図版28，第38図）

轡（１） 環状鏡板付轡の鏡板部分か。断面は幅0.7cm厚さ0.5cm程の長方形で，復元すると径６cm程度の円形または楕円形になる。

鉸具（２） 鉸具の破片であろう。断面は0.3cm程度の円形。



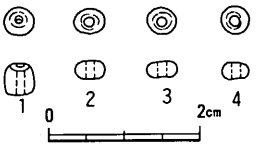
第35図
２号墳出土
土製品実測図
(1/2)



第36図 ２号墳出土土器実測図⑤（1/4）

2）土壙墓

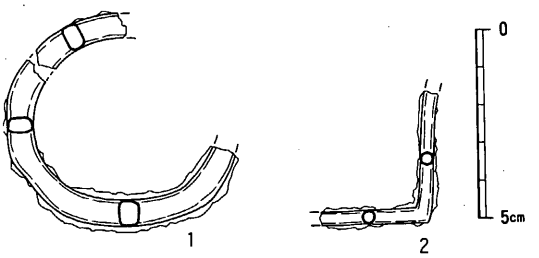
1号墳の南東周溝内から2号墳周溝の南側にかけて4基の土壙墓を検出した。1号土壙墓を除いて馬歯が出土しており，土壙の大きさ，馬歯の出土位置からみて馬の全身を埋めたものであろう。土壙墓という名称は人間を埋葬したものをイメージするため，馬土壙等としたほうが良いかもしれないが，かえって混乱を招く恐れもあるため，ここでは土壙墓とした。



第37図　2号墳出土玉類実測図（1/1）

番号	径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	色	備考
1	3.4～4.0	3.8～3.9	1.0	青緑色(半透明)	ガラス
2	3.4～3.9	2.1～2.4	1.0	青色(半透明)	ガラス
3	3.5～3.8	1.8～2.1	1.5	水色(透明)	ガラス
4	3.6	1.8～2.1	1.5	水色(透明)	ガラス

表3　2号墳出土ガラス玉一覧表



第38図　2号墳出土鉄製品実測図（1/2）

1～3号土壙墓は比較的密集しており主軸の方向もほぼ揃うが，4号土壙墓はこれから少し離れており主軸の方向も2号墳周溝に沿っている。

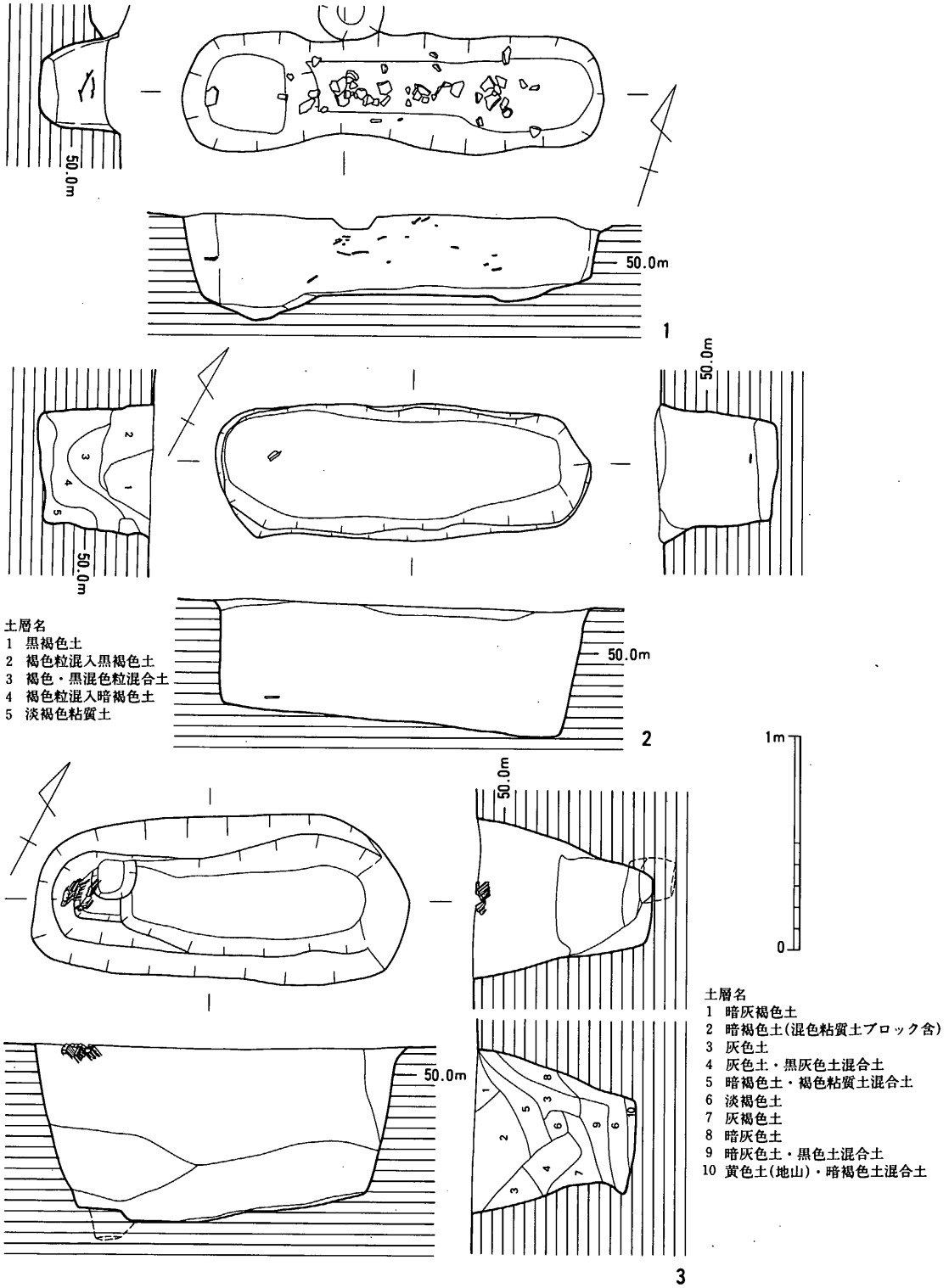
1号土壙墓（第39図）

1号墳の南東側周溝内で検出した。主軸は北東-南西方向のN-107°-Wで，土壙の形状と2・3号土壙墓との関係から，頭位は南西方向と考えられる。平面形は長円形で，長さ1m95cm，幅45～55cm。底部は南西側の40cm分が一段低くなり，この部分で深さ40～50cm，北東部で30～35cm。埋土には1号墳に伴うと思われる土師器甕の破片が多数含まれる。馬歯は出土していないが，土壙の形状，主軸方位と位置から土壙墓とした。当初は馬を埋葬した土壙墓とは考えていなかったため，遺構の個別写真を撮影していない。赤面の至りである。

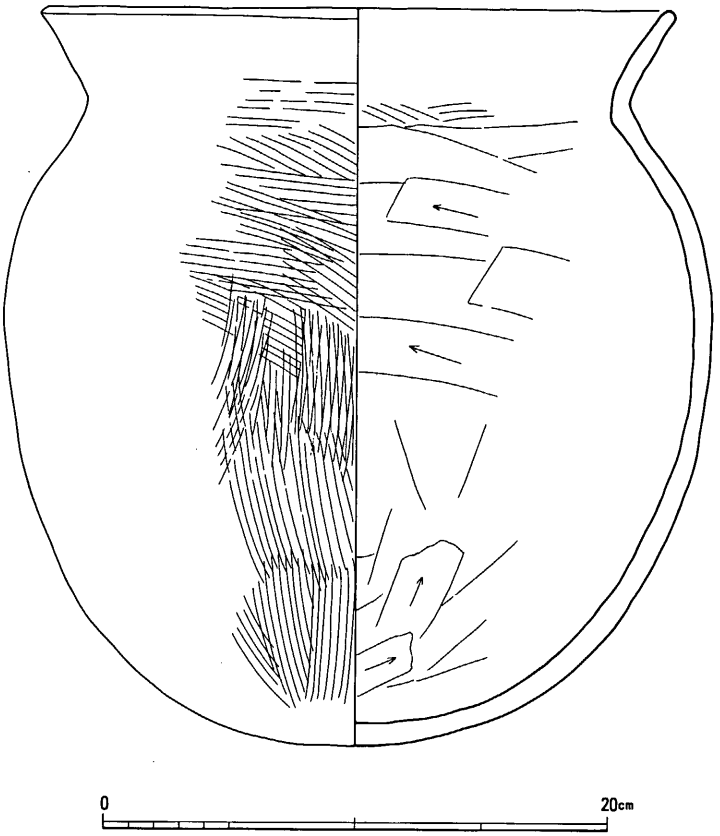
出土遺物

土師器（図版28，第40図）

甕　胴部の最大径が上位にあり，口縁部は直線的に開く。復元すると，口径25.0cm，胴部最大径28.0cm，器高29.5cmである。胴部外面は粗い刷毛目調整，内面はヘラ削り調整，口縁部は刷毛目の後ヨコナデ調整。底部外面には径20cm大の黒斑がある。周りは黄褐色に変色し，また黒斑は内面にまで到達して黒褐色化している。



第39図　1～3号土壙墓実測図（1/30）



第40図　1号土壙墓出土土器実測図（1/3）

2号土壙墓

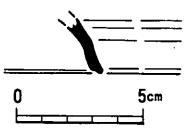
（第39図）

1号墳南東周溝と2号墳周溝の間のある。主軸は1号土壙墓とほぼ同方向のN128°-Wで，馬歯の出土位置から頭位は南西を向くと考えられる。平面形は長円形で，長さ1m75cm，幅55～65cm。壁面は垂直に近く立ち上がり，底面は北東側に低く傾斜しており，深さは南西側が50cm，北東側で60cm。南西側底面近くから馬歯片が出土した。1号土壙墓と同様個別写真を撮影していない。

出土遺物

須恵器（第41図）

杯蓋の破片である。口縁端部内面に段をもつ。



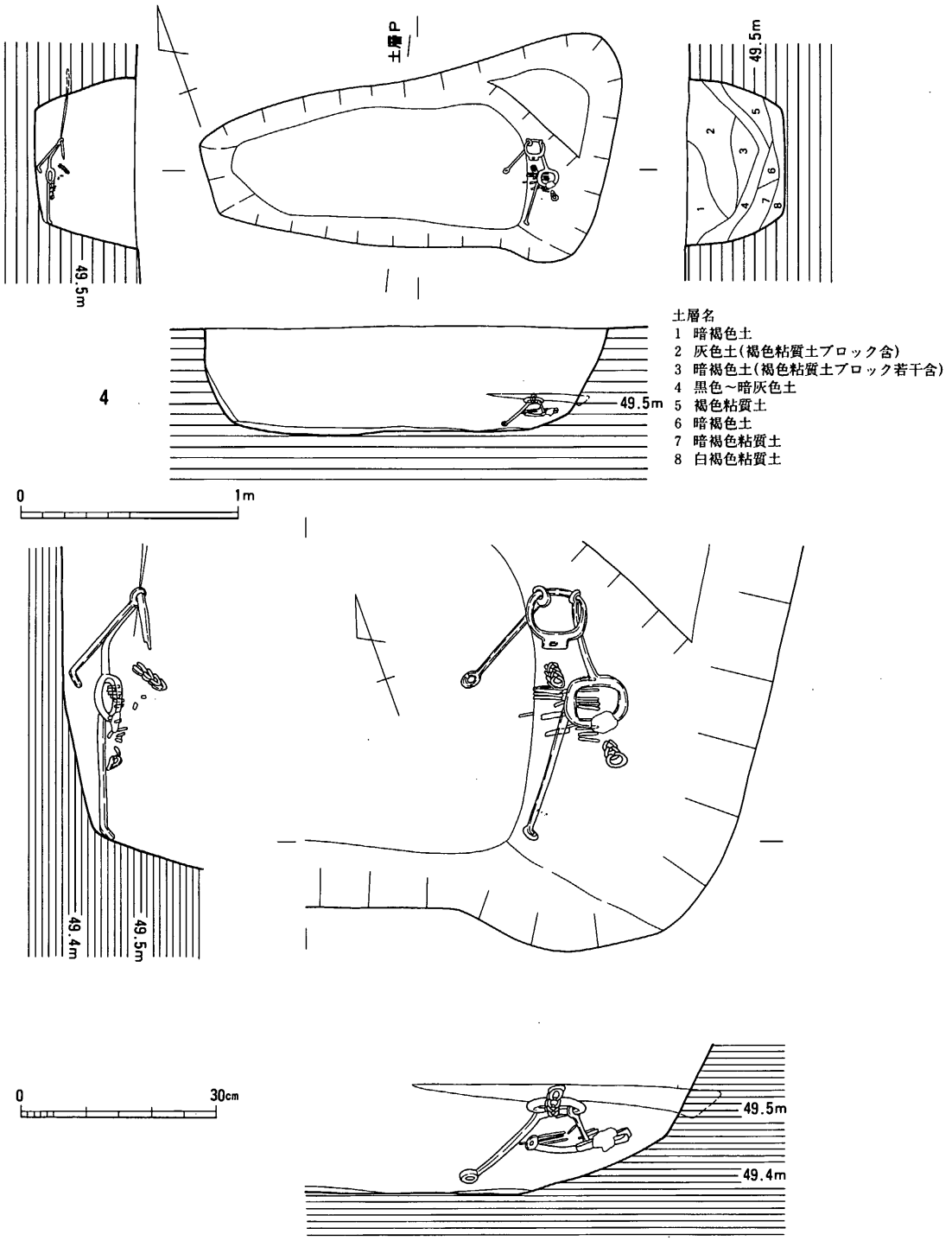
第41図
2号土壙墓出土土器実測図(1/3)

3号土壙墓（図版14・15，第39図）

2号土壙墓の北東側1.5m離れた位置にある。2号土壙墓とは主軸の方向がほぼ揃いN-117°-Wで，前後に並んでいる。馬歯の出土位置から頭位は南西を向く。平面形は長円形で，長さ1m75cm，幅は南西側で65cm，北東側は広くなって80cmある。底面は南西側に若干凹凸があるが，深さは70～80cm。南西側の上層から馬の上下臼歯列がほぼ完全な形で出土した。

4号土壙墓（巻頭図版2・図版16・17，第42図）

2号墳の南東側周溝の脇にあり，周溝とは30cmの間隔を開ける。主軸も他の3基とは違い北西-南東方向で，N-109°-E。馬歯と轡の出土位置から頭位は南東を向く。土壙の東側隅部に



第42図　4号土壙墓実測図（1/30）・轡および馬歯出土状態実測図（1/10）

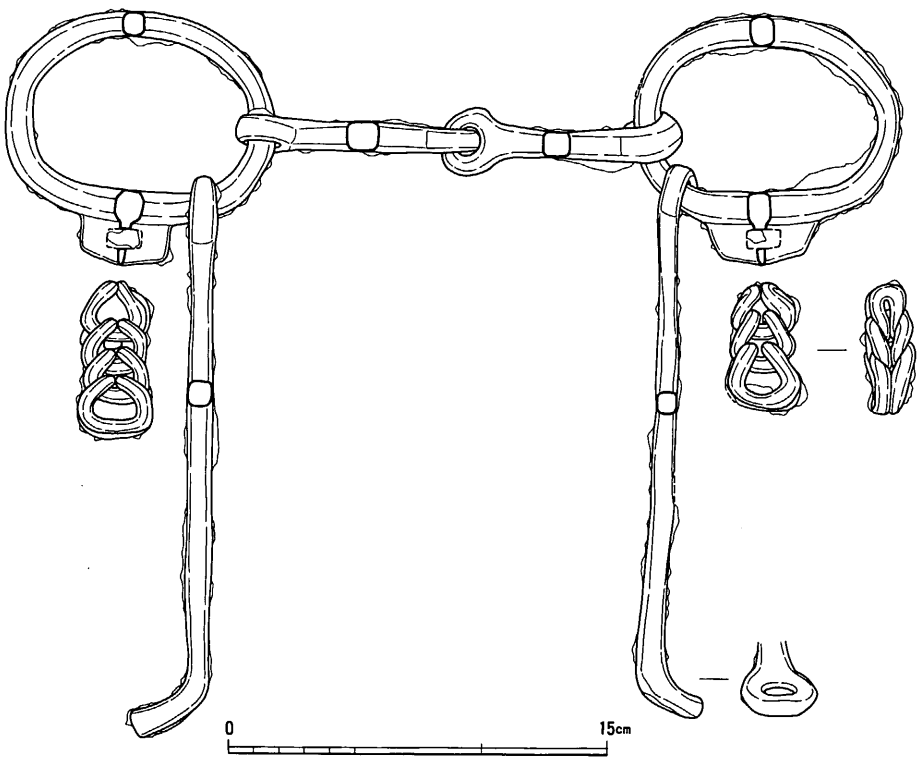
は底面が一段高くなった部分があり，その分だけ南東側の方が幅が広くて１ｍ５cm，中央部付近で75cm，北西側端部は極端に狭くなっており35cm，長さは中心で測って１m85cm，深さは一段高くなった部分で30～35cm，その他は45cm。

土壙の南東端部の底面近くから鉄製轡と馬の臼歯片が出土した。轡は引手を南西に，鏡板の立聞とこれに接続する兵庫鎖を南に向け，馬歯片は右鏡板の上部から多く出土しており，轡を着装したままの馬を埋葬したものである。轡と馬歯の出土状況から，馬は頭部の右側を下にして鼻先を北東に向けて埋葬されたものと考えられる。

出土遺物

鉄製品（図版28，第43図）

轡　環状鏡板付轡である。鏡板は断面隅丸方形で，右鏡板（装着した時に馬の右側になるもの。以下同じ）が長径10.5cm，短径8.4cm，左鏡板は長径10.8cm，短径8.5cm。これに作り付ける立聞は尖頭形のもので，右が長さ1.6cm，幅は基部で測って4.6cm，左は長さ1.7cm，幅3.7cm，中央部に長方形の孔がある。兵庫鎖が右側で３連，左側は４連分立聞から遊離した状態で出土



第43図　４号土壙墓出土轡実測図（1/3）

したが，出土位置からこれと繋がっていたことは確実であり，連結部分の１連ないし２連分は既に失われたのであろう。銜は２連で，左側柄の左右にある円環（銜先環と啣環）の方向は平行するが，右側ではこれが90度ねじれる。引手は銜と別に鏡板の環と直接繋がり，壺の円環は「く」の字に屈曲しており，装着状態では上を向いていたと考えられる。断面が隅丸方形なのは鏡板・銜と同様で，長さは右側が22.0cm，左側は22.2cm。

３）竪穴状遺構

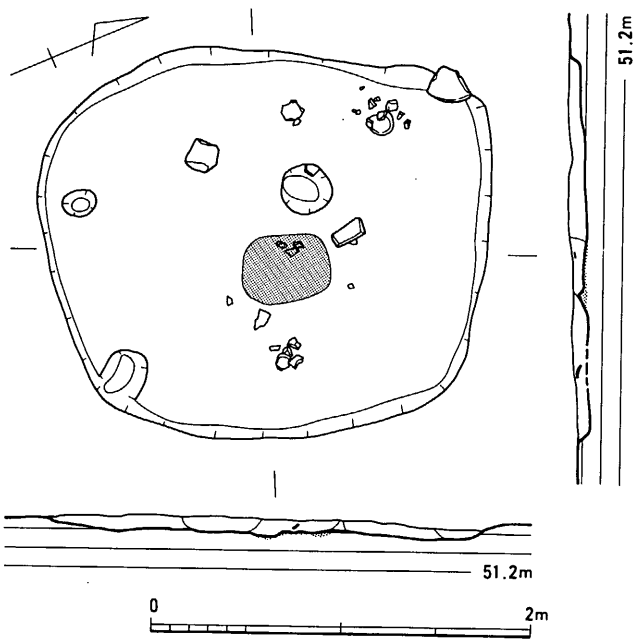
１号竪穴状遺構（図版17，第44図）

調査区の西端部で検出した。平面形は隅丸正方形の南西辺が丸味をもった形状で，北東-南西方向２m40cm，北西-南東方向２ｍ５cmで，深さは５cm程度である。底面からは縄文土器が出土し，中央部の土は焼けている（第44図アミ部分）。住居跡としても良いかもしれないが，主柱穴は未検出である。

出土遺物

縄文土器（図版28，第45図）

１は胎土が粗く，内外面ともナデ調整で器壁が厚い。口縁部の形状などからも早期のものであろう。紛れ混みか。２は外反気味に立ち上がる口縁部。内面はナデ調整，外面は強いヨコナデ調整で痕跡が残る。胎土は比較的精良。３は底部で，若干上げ底になり，底径12.1cm。内面にはナデによる指の痕跡が多く残る。２・３は後～晩期のものであろう。

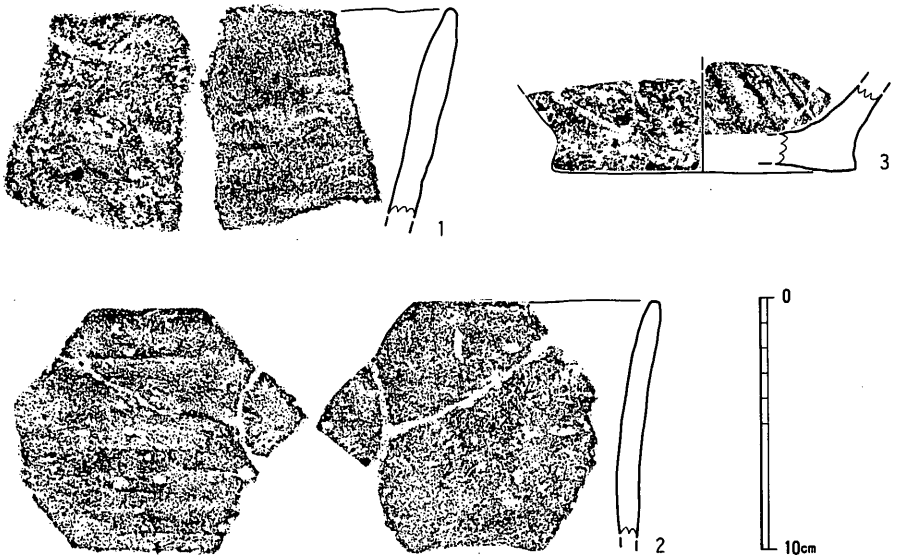


第44図　１号竪穴状遺構実測図（1/40）

４）土坑

１号土坑（図版18，第47図）

１号墳の北東側にある。平面形は上縁部では不整形だが，底部は隅丸長方形になり，本来長方形プランであったものが上部



第45図　1号竪穴状遺構出土土器実測図（1/3）

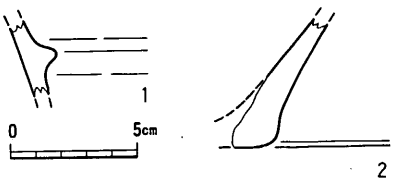
は崩れたのであろう。上縁部で長さ2m25cm，幅1m60cm，底部では長さ1m5cm，幅75cm，深さは1m95cm。形状的には井戸でも良さそうだが，砂層まで到達していない。貯蔵穴の可能性がある。

出土遺物

弥生土器（第46図）

壺（1）　わずかな破片であるが，傾きから壺の肩部であろうか。断面三角で1条の突帯を付す。

甕（2）　底部破片で平底のもの。器面の風化が著しく，調整は不明。　（小川）



第46図　1号土坑出土土器実測図（1/3）

5）1号墳墳丘下の土器

諸田仮塚遺跡は，1号墳において若干の墳丘が残存している以外，周辺の地山が著しく削平されていた。1号墳墳丘の調査において，1号墳の直径は周溝内側径20m，盛土部分径約18mであった。墳丘断面調査の際に，墳丘下の旧地表において，古墳以前の土器が含まれていることが判明していた。頭初旧地表の高さが古墳周辺より高い位置にあったことから，古墳以前の墳丘墓の存在の可能性を考えていた。しかし，1号墳墳丘盛土除去後の調査では，1号墳石室掘方周辺に1号墳関連の方形大型土壙が3基確認された以外に，無数のピットが確認されただ

けであった。土器は，厚さ５～10cmの旧地表とその直下の火山灰と思われる黄褐色斑混入褐色系粘質土との間に散乱しているだけであった。

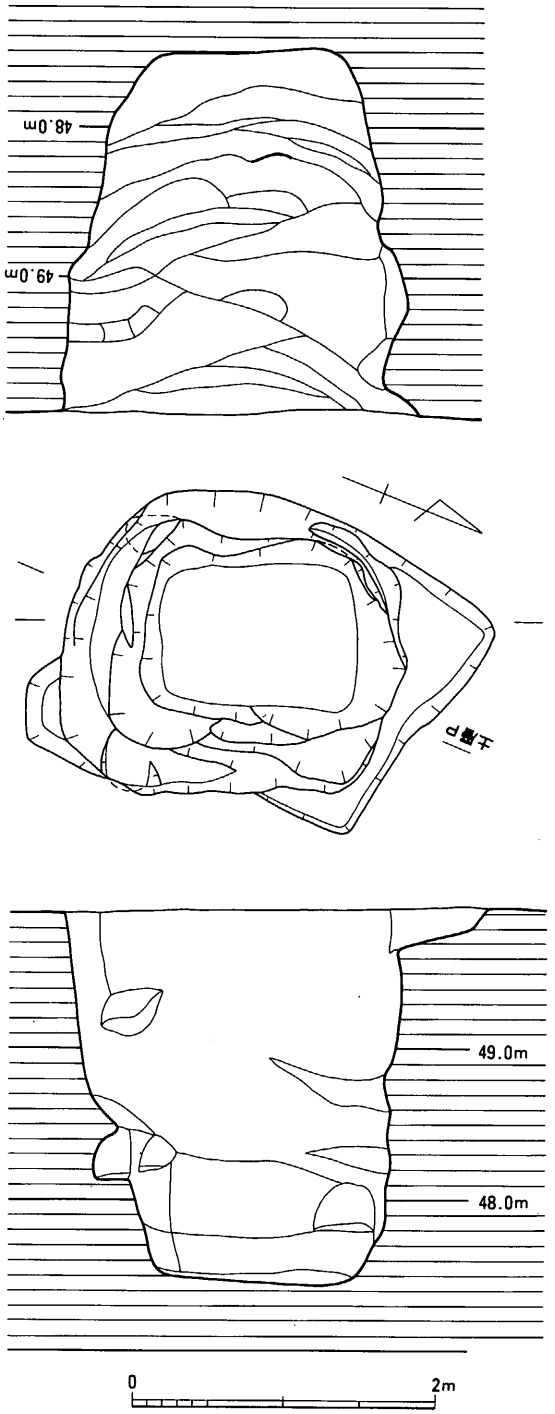
第49・50図の土器は，１号墳の盛土と石室周辺土壙及び墳丘下の旧地表から出土したもの。２～４・８・９・20・22・24が墳丘盛土，23が２号土壙，19が３号土壙，その他が旧地表出土である。

１・２は壺の底部片で，底外面が若干くぼむことから弥生中期後半に属するが，表面の大半が摩滅している。底径は１が７cm，２が10cmの大きさである。

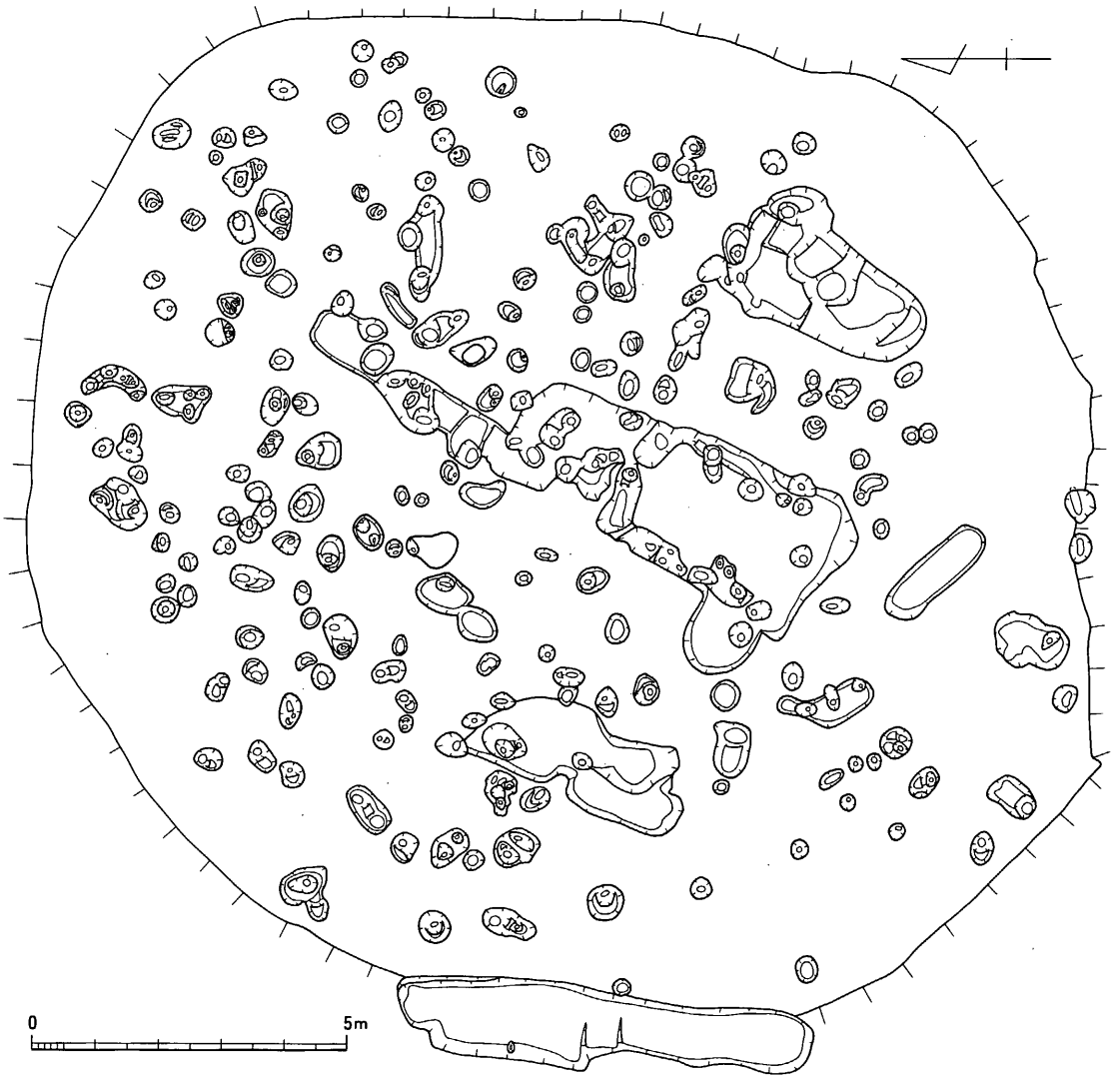
３は複合口縁壺の口唇部片で，頸部との接合面で剝離しており，剝離面に粗いハケ目が残っている。口唇部がわずかに内湾することと先端に角が明瞭なところが特徴。口径16.6cmの大きさで，胎土に細・粗砂粒を多く含む。

４は直口壺の頸部片で，わずかに外反している。外面に粗ハケ目，胎土に赤褐色粒・雲母・細砂をやや多く含む。口径14cmの大きさ。

５～７は小・中型鉢片で，内湾するのが特徴の粗製土器。５は，口径14cmで外面に粗いタタキ目，内面に粗いハケ目が残り，胎土に赤褐色粒・雲母・細砂を含む。６は，５と同一個体の可能性があり，器面調整と胎土が同じ。７は，手捏的な粗いナデ調整で，胎土



第47図　１号土坑実測図（1/50）

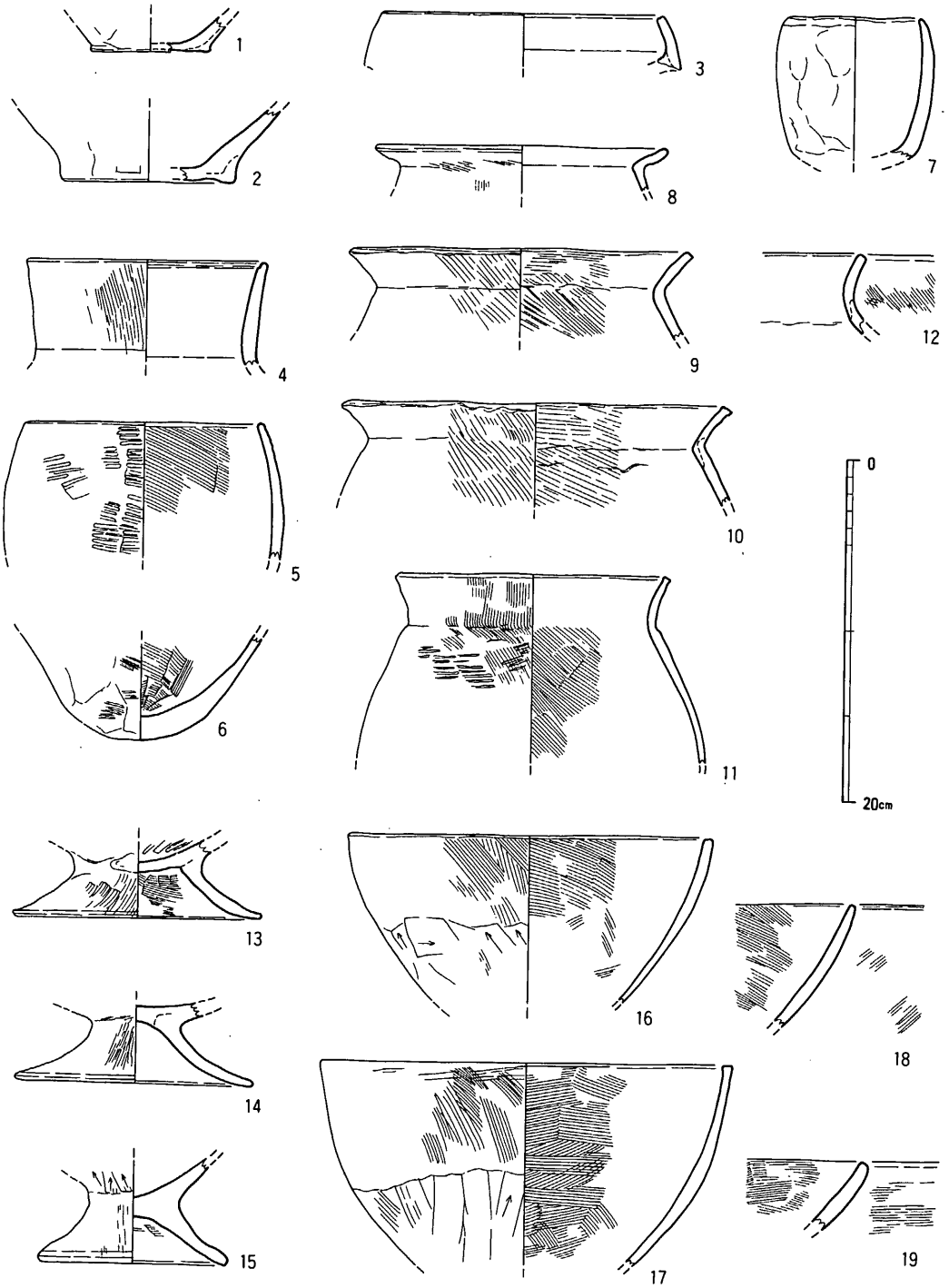


第48図　1号墳墳丘下層遺構実測図（1/120）

に赤褐色粒・雲母・細砂を含む，口径7.8cmの大きさ。

8～12は，甕の口縁部を含む破片で，8が口縁先端に丸味，9・10はく字に屈曲し，11・12が丸味をもって屈曲するのが特徴となっている。8以外は器面調整も粗く，11が外面にタタキ目，10・12が粘土継目が明瞭に観察できる。8～10の外面に煤が付着し，胎土に8が赤褐色粒・細砂を少量，9～12が赤褐色粒・角閃石・雲母を含んでいる。口径は，8が17cm，9が20cm，10が22.6cm，11が16cmの大きさ。

13～15は甕か鉢の台で，底径で13が14.4cm，14が13.8cm，15が11cmの大きさ。胎土には，13



第49図　1号墳墳丘下層出土土器実測図①（1/4）

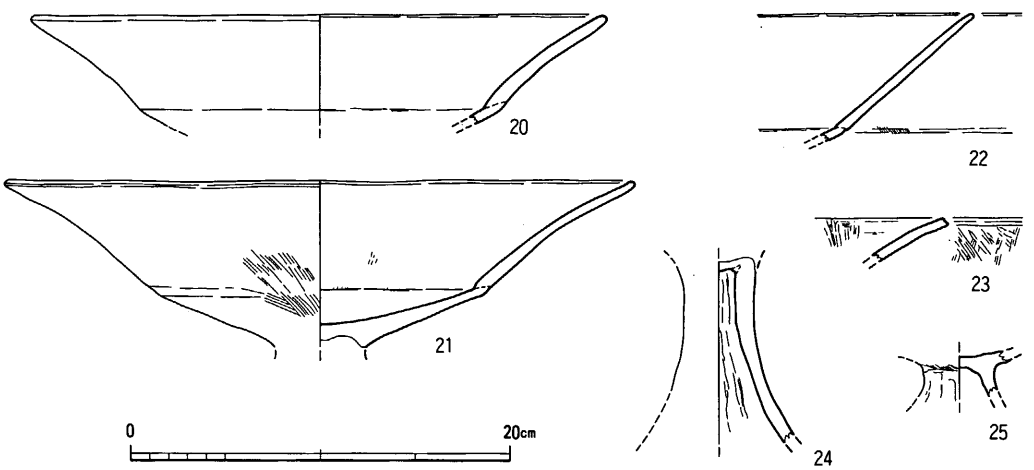
が赤褐色粒・角閃石，14が赤褐色粒・雲母，15が赤褐色粒・角閃石・雲母を含んでいる。

16～19は大型鉢の破片で，同一個体の可能性がある。16・17の外面下半がヘラケズリで丸底にし，他の内外面がハケ目調整となっている。胎土には，16・18に赤褐色粒・角閃石・雲母，17に赤褐色粒，19に赤褐色粒・雲母が含まれている。口径は，16が21.2cm，17が24cmの大きさ。

第50図20～25は高杯片で，20～23が杯部，24・25が脚部である。杯部の立上りは，20が他より割合短かく古い型式となり，22が直線的である。大きさは，20が口径30.5cm，21が33.3cmである。胎土は，杯部片全部に赤褐色粒と雲母を含み，20が暗褐色，21・23が黄褐色，22が茶褐色系である。20・21は，杯部底面と上立りの接合面が明瞭であるが，21が脚部との剝離面も観察できる。器面調整は，内外面に細ハケ目の後にヘラミガキされるが，摩滅しているものが多い。24・25の脚部は短脚で，24が21・22のような杯部と同型式であろうが，胎土に赤褐色粒を含み，全体に赤褐色を呈するところから別個体である。全体に摩滅しているが，内面にシボリ痕が明瞭に残っている。25は，表面が赤褐色，胎土内が黄褐色で赤褐色粒を含むが，砂粒をほとんど含まない土師器であり，1号墳の築造時に関連する土器であろう。

これらの土器は，1・2のような弥生中期，8のような後期前半のものが含まれるが，他の大半が弥生終末から古墳初期の在地系土器の西新式である。西新式の中でも，高杯の21・22・24に代表されるように，庄内式の新段階以後に共伴するものが多く含まれていると考える。

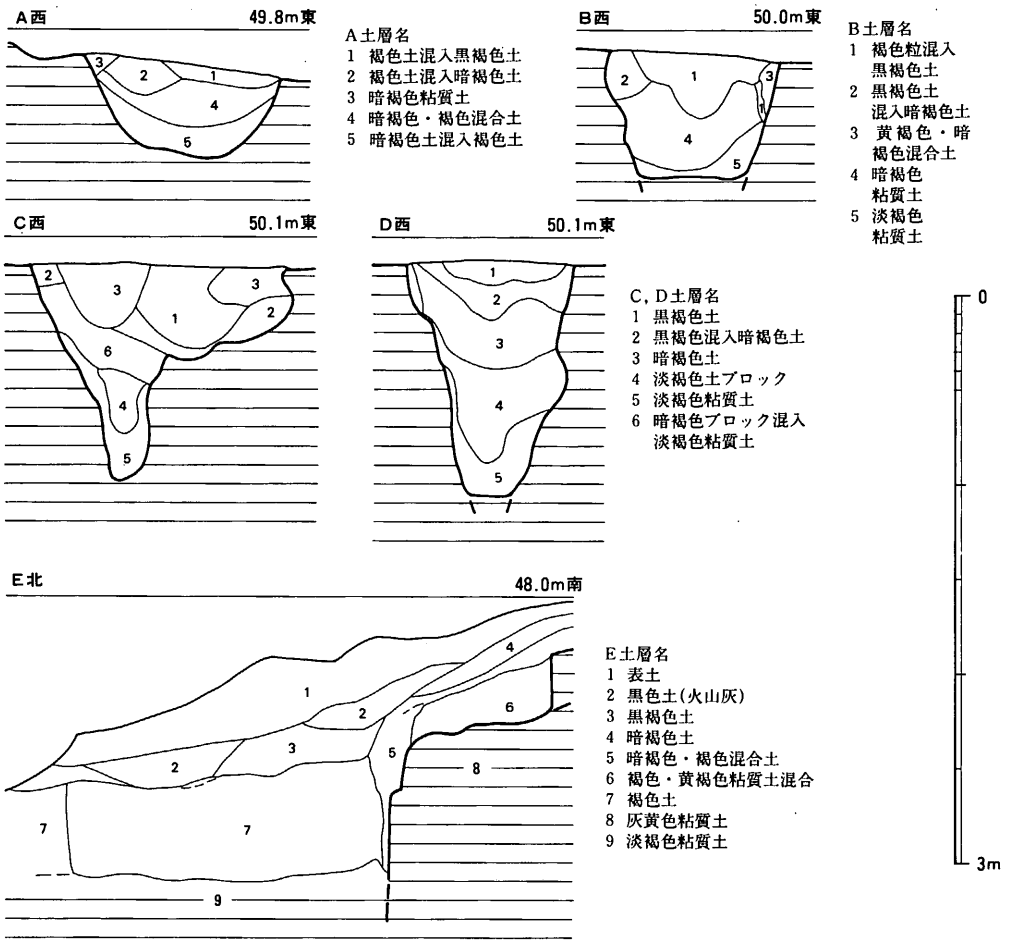
（柳田）



第50図　1号墳墳丘下層出土土器実測図②（1/4）

6）地割れの調査（図版19，第51図，付図1）

諸田仮塚調査区内の北東側において，遺構検出当初に溝状土壙としたものが4例ある。この溝状土壙を土層断面を観察しながら掘下げると，最上層の黒褐色系流入土は，古墳時代遺構内の土質などと変りなく，中世以後の埋土とは違い古いことを示していた。さらに，3～4層などを掘下げると，墓地遺構内土層のように複数の土質が混合するものとなった。ところが墓地遺構内での混合は，斑点状混合であるのに対し，ここではブロック状混合であり様相が違っていた。さらに下層の5・6層になると，地山上層の淡褐色粘質土が下層ほど軟質に詰っており，最下層が空洞に近いものとなり，ボーリング棒が抵抗なく1m前後突刺った。この結果から，この溝状土壙が人工の遺構ではないことが判明し，地割れとしての時期確認調査に変更した。溝状土壙は，北側から南側に向って1～4号の番号を付けたが，3号が6世紀後半の2号墳墳



第51図　溝状土坑（地割れ1）断面実測図（1/40）

丘内に位置することから，２号墳と地割れの新旧関係に注目した。ところが，２号墳は調査前に数個の大石が露出していたものの，墳丘が完全に削平され，その大石も大木の無数の大根が絡んでいた。大石と大木のうち，先ず大木を除去したところ，大石の位置が横穴式石室の中心であることが判明したが，この大石もすでに原位置のものは存在しなかった。しかも，石室墓壙の輪郭をかろうじて検出したものの，床面の大半が攪乱されていた。古墳調査後に，地割れに直交する小トレンチを設定したが，地割れは石室掘方内では検出できなかったことから，地割れと古墳の新旧関係を解明することができなかった。

一方，永岡地区の調査で，大溝２の東側に地滑り痕跡を確認したことから，諸田仮塚丘陵の北東側谷間に沿った地割れや地滑りであることが推定された。そこで，諸田仮塚調査区を平坦面だけではなく，北東側の斜面まで拡張して表土剝ぎを実施した。その結果，平坦面と斜面との変換線の下で，谷間に沿った段差を確認したことから，その東側端に小トレンチを設定して断面Ｅ（第51図）を観察した。この断面によると８の灰黄色粘質土の地山が垂直に地割れして，谷川に地滑りしたらしく，谷側では旧表土下の７の褐色土が沈下していたので，断層の大きさがわかる。

永岡地区の調査結果と総合すると，諸田仮塚丘陵の北東側谷間周辺全体で，地割れと地滑りが発生したものと考える。（柳田）

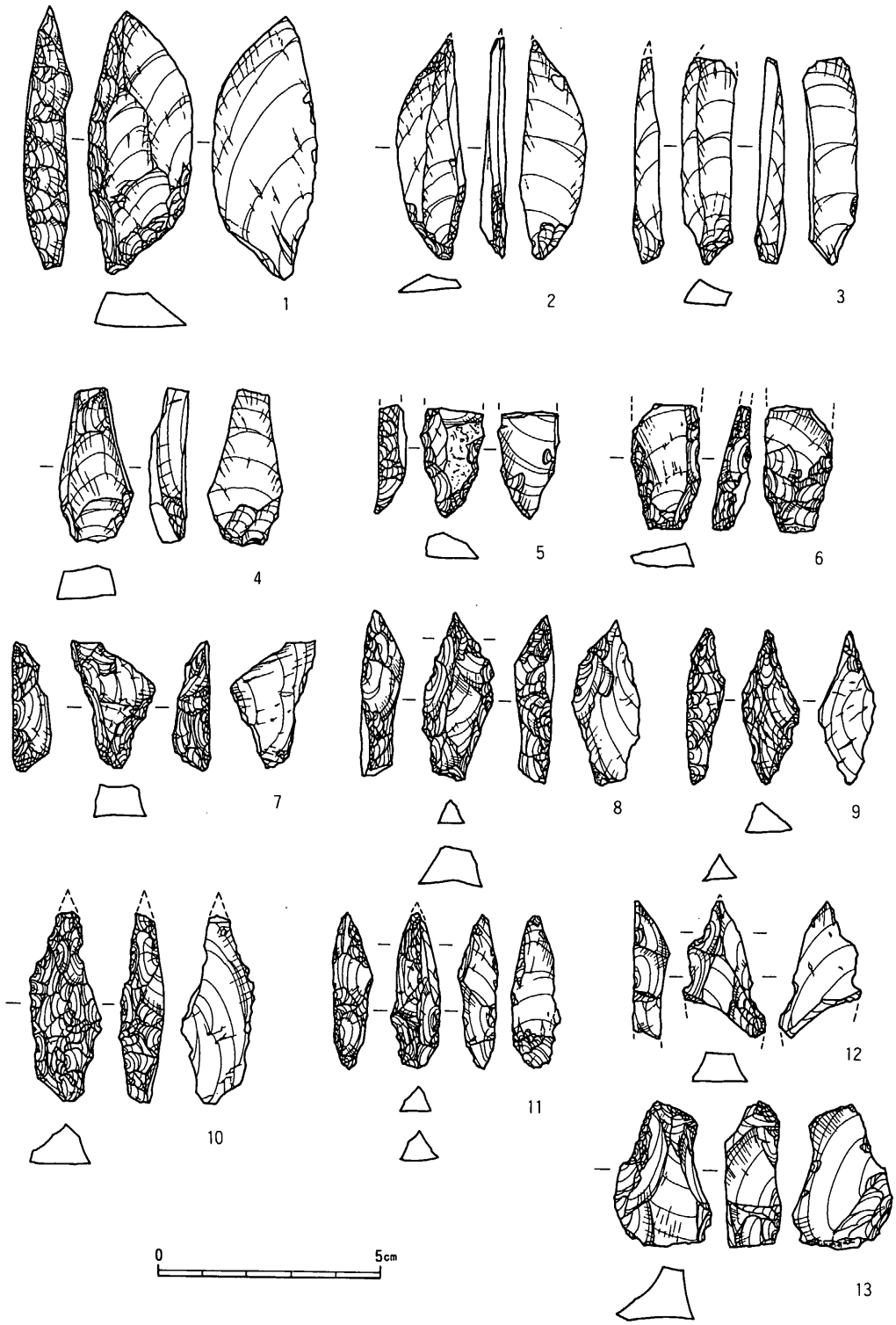
７）その他出土の遺物

石器（旧石器）（図版30～33，第52～56図）

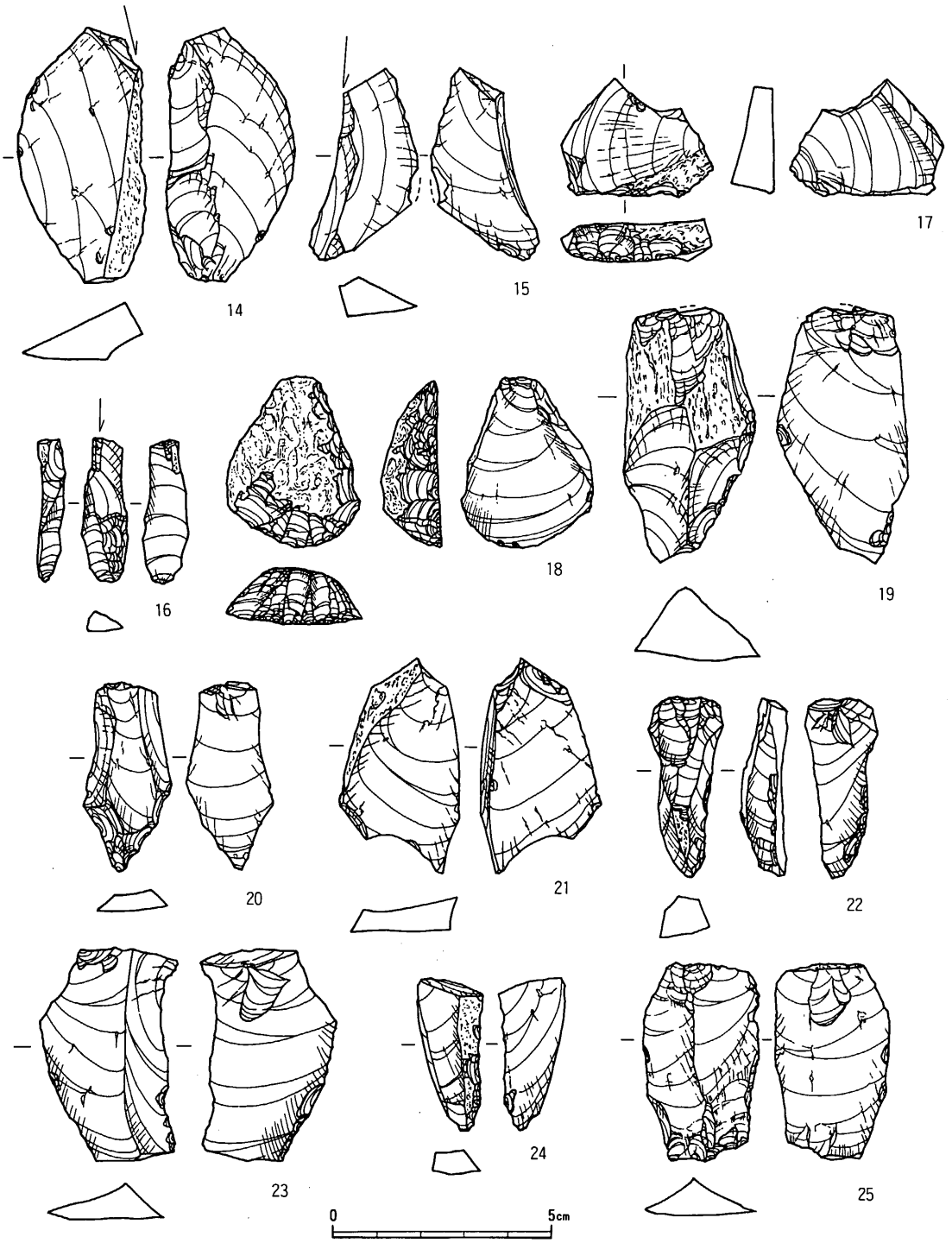
ナイフ形石器（１～６）　１は「ノ」字状に近いサヌカイト製横長剝片を素材としている。背面にはポジ面と，素材剝離以前にその面を切る打点部側からの剝離面がある。左側縁部の成形加工と右側縁部の基部加工によって仕上げられている。盤状剝片石核より得られた底面のある剝片を素材剝片に使用していることから瀬戸内技法の影響が考えられる。２～４はサヌカイト製の小型石刃を素材とするナイフ形石器である。２の背面左の剝離面はポジ面で，左側縁先端と基部に加工が行われている。３も背面に石核ポジ面を取り込んだ剝片にノッチ気味の基部加工が行われている。４も左側面にポジ面を持つ素材剝片の基部と背面の一部が加工されている。５は黒耀石製縦長剝片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器で半損品。６は黒耀石製縦長剝片を素材とし，左右側縁部を加工し腹面基部には平坦剝離が行われている。先端部から胴部を欠損。

台形石器（７）　７は幅広剝片の打点部と端部が急角度剝離によって加工されている。背面では左側方からの剝離により刃部付近の厚さを減じている。

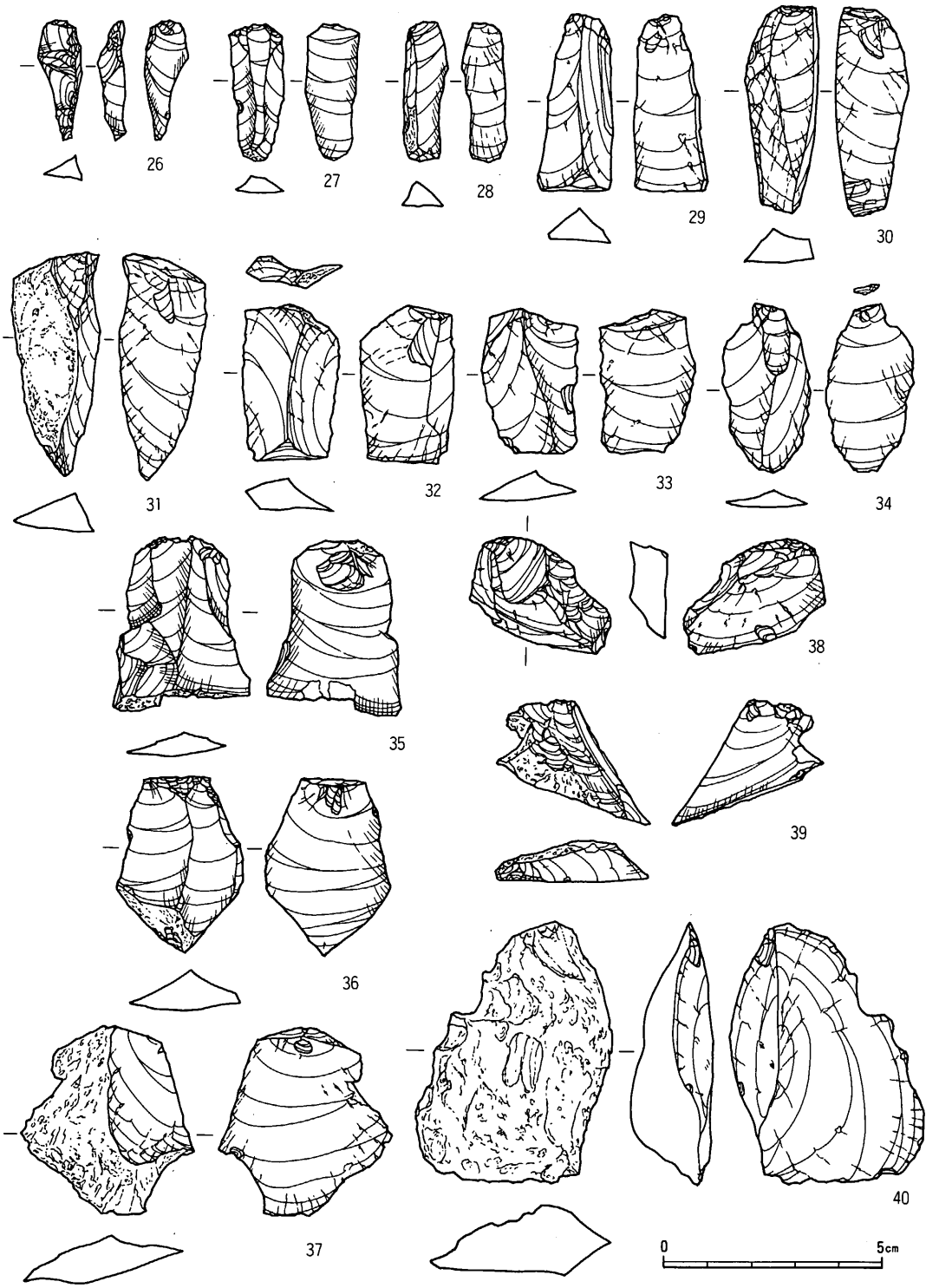
角錐状石器（８～13）　８は黒耀石製の横長剝片を素材としている。背面に残されている素



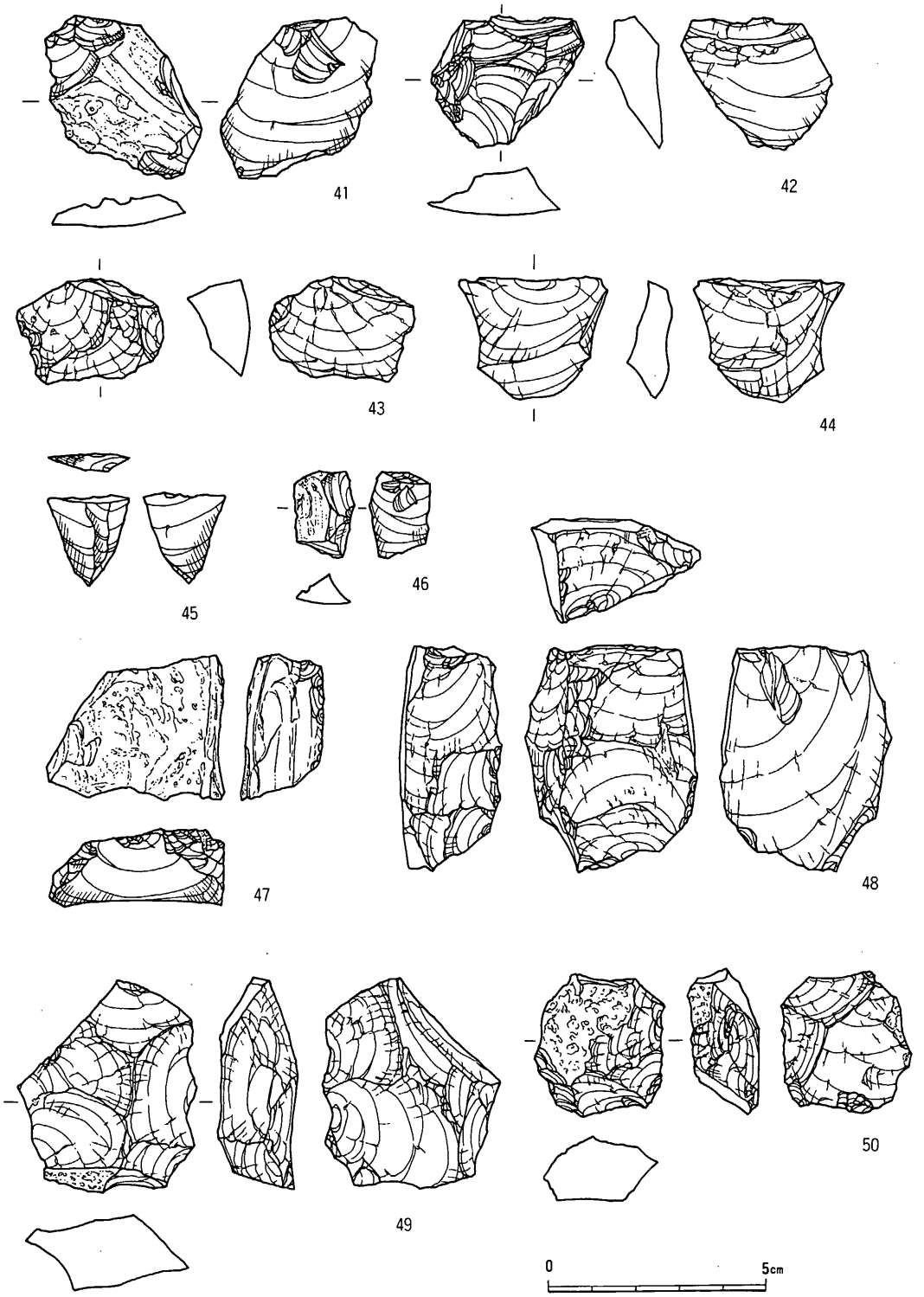
第52図　諸田仮塚地区出土石器実測図①（2/3）



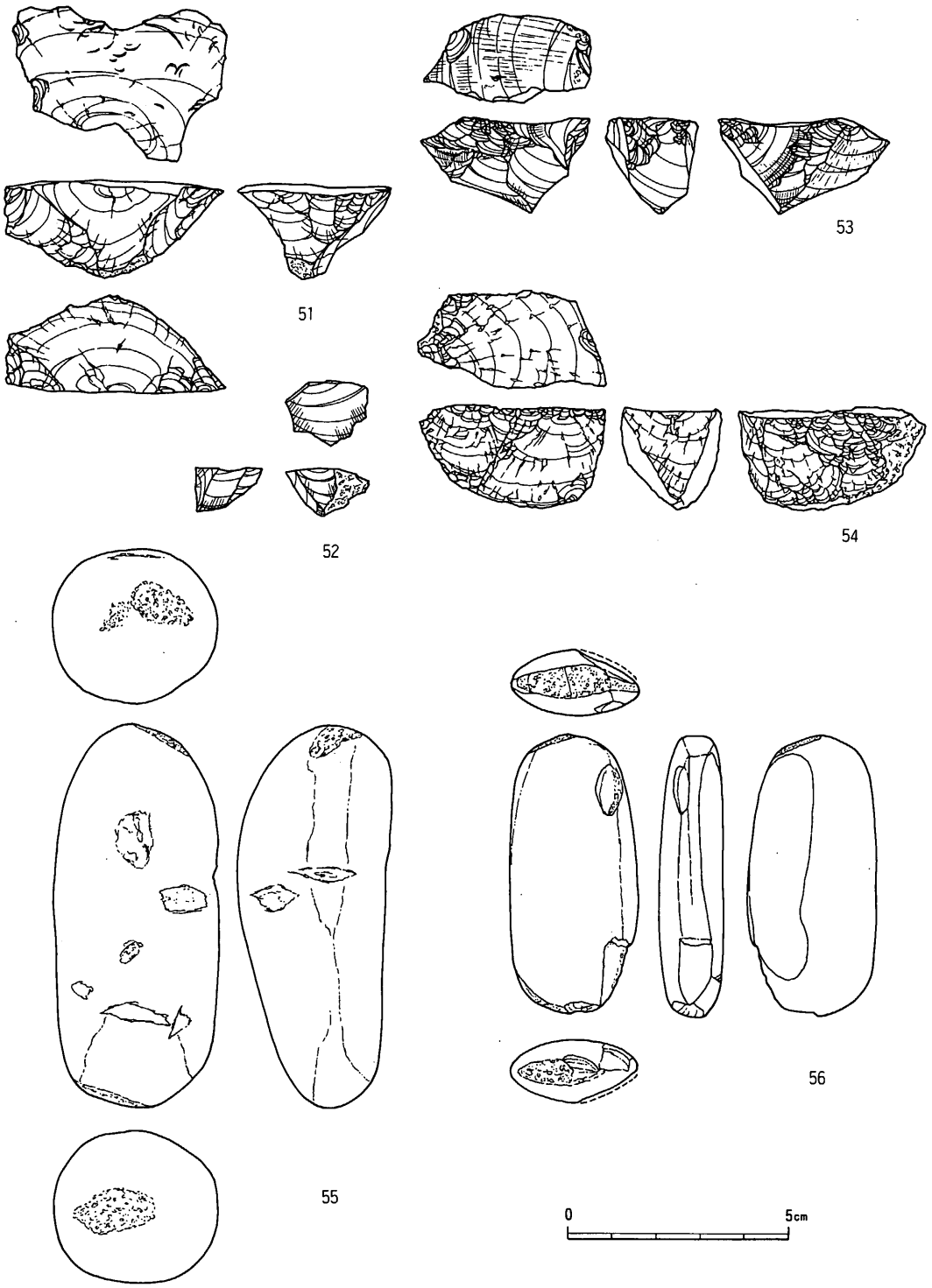
第53図　諸田仮塚地区出土石器実測図②（2/3）



第54図　諸田仮塚地区出土石器実測図③（2/3）



第55図　諸田仮塚地区出土石器実測図④（2/3）



第56図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑤（2/3）

材時の剝離面は腹面と同一方向である。急角度剝離によって加工されている。9はサヌカイト製の横長剝片を素材とし，主要剝離面を残す。10は黒耀石製横長剝片を素材とし，主要剝離面を残す。稜上調整が行われている。先端部欠損。11は黒耀石製の縦長剝片を素材とする。稜上調整も行われている。12は欠損資料。13は厚手の不定形の横長剝片に急角度剝離が行われており未製品と考えられる。

彫器（14～16） 14は剝片端部の折れ面よりフアシットが入る。サヌカイト製。15も打面部にフアシットが入る。16はスポール状剝片の打点部と端部にフアシットが入る。黒耀石製。

スクレイパー（17～20） 17は不定形な板状剝片端部が刃部加工されている。黒耀石製。18は礫面を残す厚手の剝片の端部から側縁部を中心に刃部加工されている。礫面部は全体に磨れている。黒耀石製。19は両設打面石核より剝離された厚手の剝片で右側縁端部が刃部加工されている。サヌカイト製。20は端部が尖頭状に加工されている。サヌカイト製。

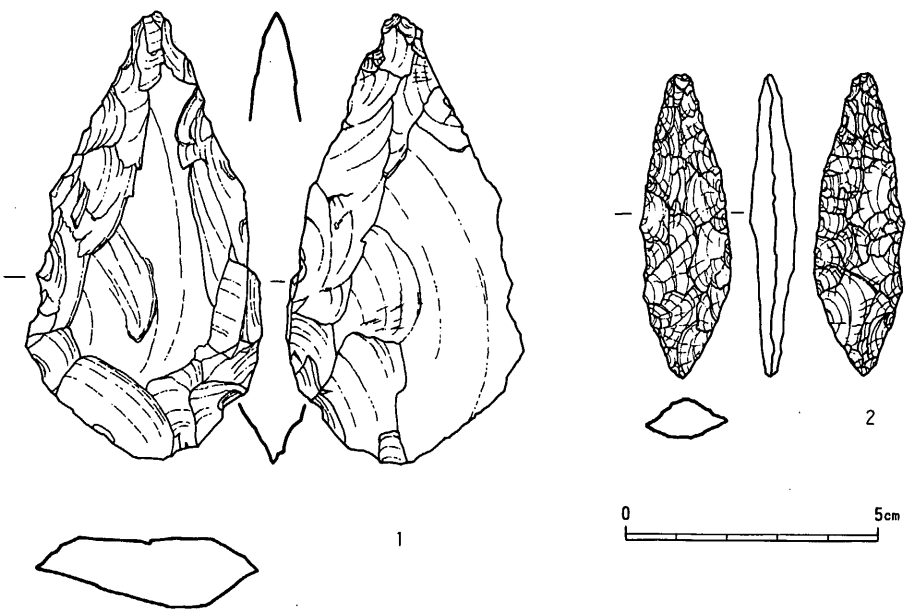
二次加工剝片（21） 21は板状に近い剝片の打点部付近がノッチ状に加工されている。

微細剝離を有する剝片（22～24） 22は右側縁端部付近に微細剝離が認められる。23は欠損端部付近の左右側縁部に認められる。24は右側縁端部に認められる。打点部から胴部を欠損。

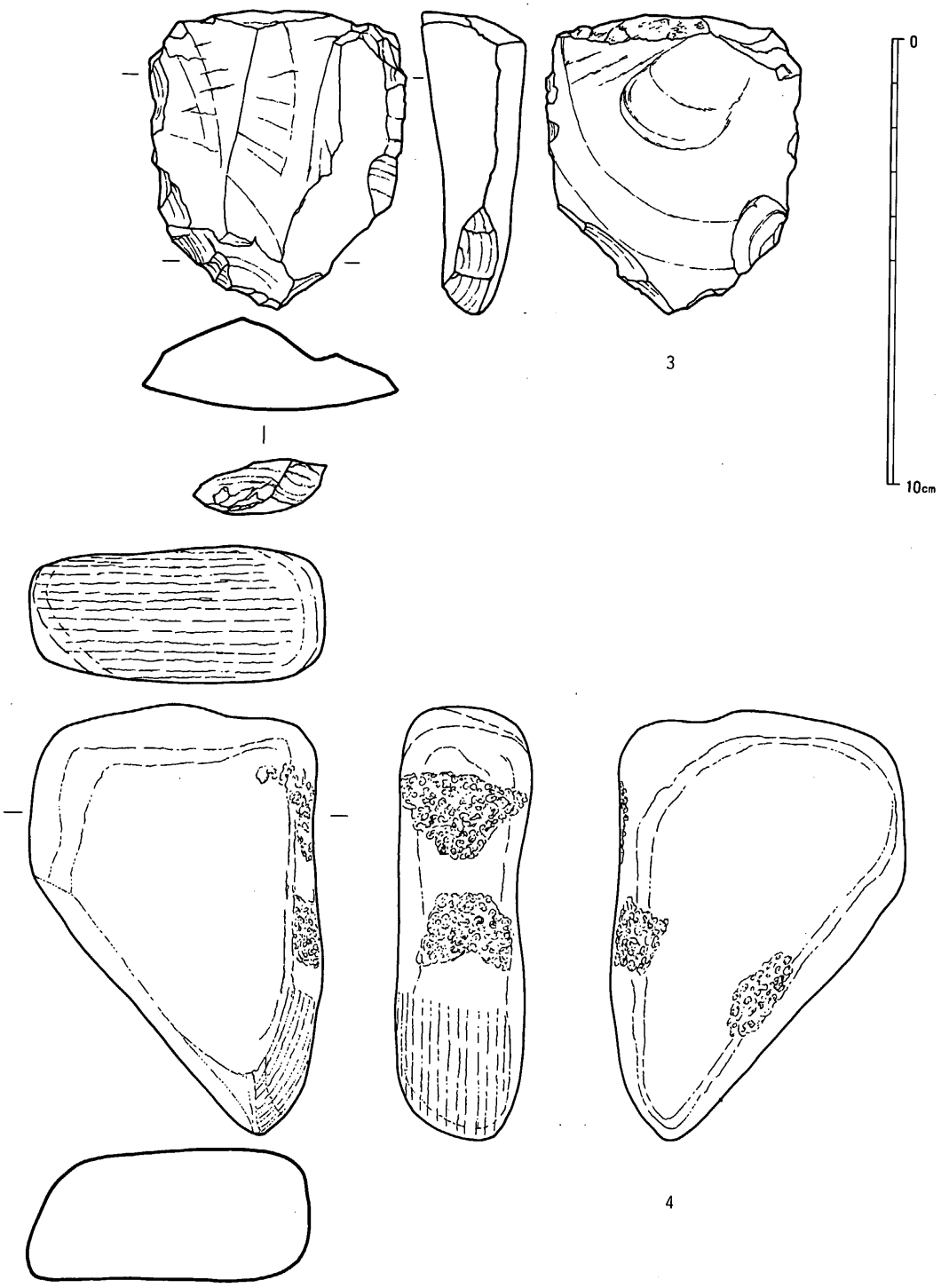
磨面のある剝片（25） 25は両面に磨面あり，特に背面の「樋状剝離」が著しく磨れている。

スポール（26） 26は背面に稜上剝離が行われた稜を持つ。細石刃核スポールであろう。

剝片（27～46） 27～34は縦長剝片である。特に28～30の背面の一部にポジ面を取り入れる小



第57図 諸田仮塚地区出土石器実測図⑥（2/3）



第58図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑦（2/3）

型縦長剝片は，２～４のナイフ形石器の素材剝片として対応する。35～37はやや幅広の剝片。38・39は底面を有するやや「ノ」字状の剝片，40は盤状剝片である。41～44は幅広不定形剝片だが，42と44は珪質岩で石材が異質である。45・46は切断剝片。

石核（47～52）　47は黒耀石の板状礫の端部より横長剝片が剝離されている。48は厚い大型剝片の背面や打面部などに打面を転移し小型不定形剝片が剝離されている。49の打面はやや求心状に移動。交互剝離の可能性もある。50は厚手剝片から打面を転移し一部交互剝離が行われている。51は剝片の腹面側を打面に設定。52は小型剝片の主要剝離面に打面を設定している。

ブランク（53・54）　53・54は分割された礫の剝離面を打面とし，そこを加撃し石核の側面調整が行われている。結果，「舟底状」のブランクが作出されている。この特徴から，両者は船野型細石刃核のブランクに相当しよう。ただ両者とも黒耀石製で，54は不純物が多い。

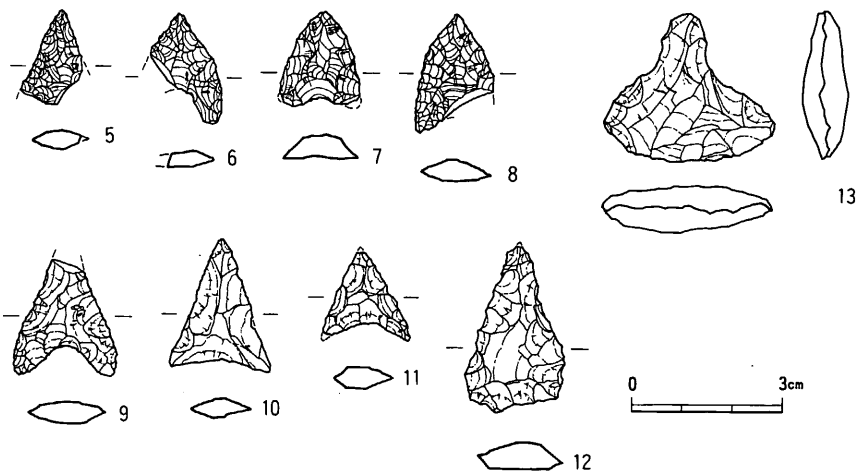
敲石（55・56）　55は風化が著しい。56の裏面には新しい大きな剝離面がある。

石器（縄文）（図版34，第57・58図）

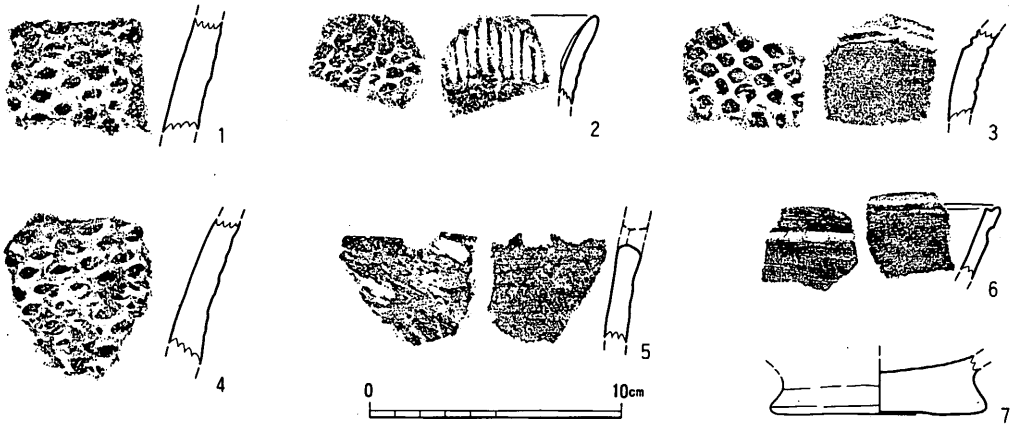
尖頭器（１・２）　１はサヌカイト製の横長剝片を素材とする槍先形尖頭器である。やや粗く鋸歯縁状に近い周縁調整により加工され，尖頭部の調整は入念である。表採資料で重さ56.90ｇ。２は全体が丁寧な剝離によって仕上げられている。また茎部が明瞭に作出されており，両側縁は摩耗している。有茎尖頭器の可能性がある。旧表土直下出土。重さ7.80ｇ。

磨面のある剝片（３）　サヌカイト製のやや寸ずまりの剝片を素材とし，粗く周縁加工されている。全体に磨られているが，端部の剝離面の摩耗は著しい。また素材面と二次加工面のパティナの進行に差があり時期差があるかもしれない。１号墳北西地山直上。重さ90.80ｇ。

磨石（４）　下端尖頭部や上面部は器面が著しく滑り磨痕の可能性が考えられるが，線状痕



第59図　諸田仮塚地区出土石器実測図⑧（2/3）



第60図　諸田仮塚地区出土縄文土器実測図（1/3）

などはない。側縁部を中心に叩き痕らしきものがある。1号墳丘下旧表下出土。重さ279.10g

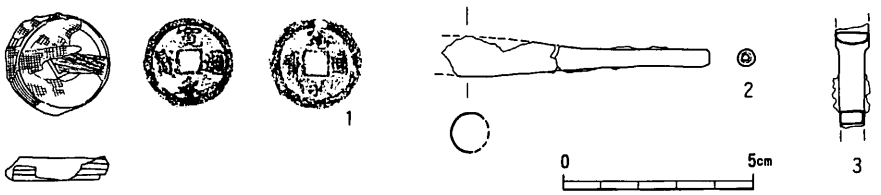
（杉原）

石鏃（5～12）　5～8は腰岳系黒耀石製，9～12は安山岩製。5～11は凹基鏃で，12は五角形に近い平基鏃。7・10～12は順に1.1g，1.2g，0.8g，2.9g。

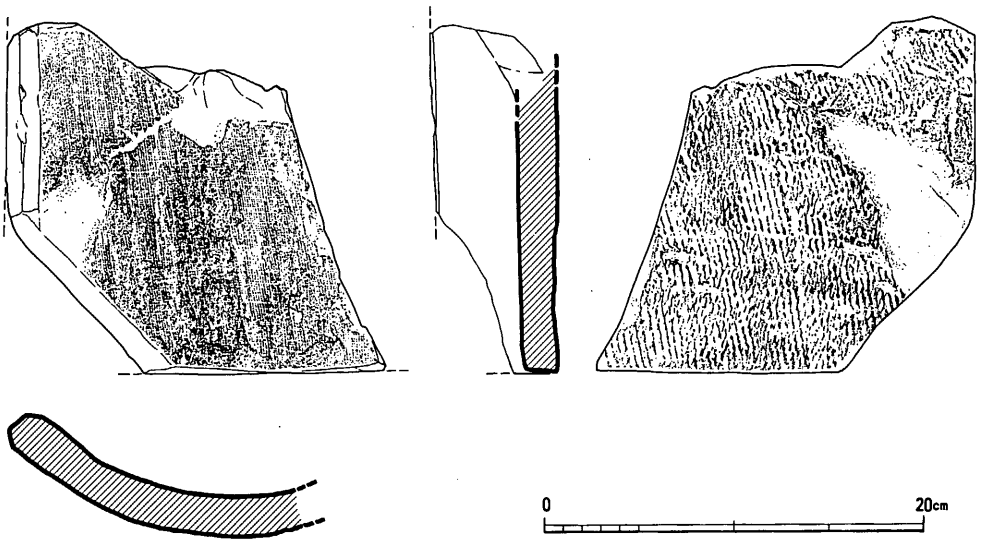
石匙（13）　安山岩製。横型で，刃部が丸く，厚味のあるずんぐりした形状である。6.7g。

縄文土器（図版35，第60図）

1～4は押型文土器。外面は楕円押型文が横位に施される。2は口縁部で，外反して開き，端部はシャープに仕上げる。内面は沈線文で縦方向の刻目を入れる。3も口縁部近くで，屈曲して開き，先端部に向かって器壁が薄くなる。口縁部内面には沈線文を施す。5は焼成前の穿孔のあるもの。外面は掻き撫でたようなナデ調整，内面は丁寧なヨコナデ調整。6は口縁部で，器壁が薄く，内外面はミガキ調整。胎土は精良で，黒褐色を呈する。7は底部で，厚い円盤状で平底。



第61図　諸田仮塚地区出土金属製品実測図（1/2）



第62図　諸田仮塚地区出土瓦実測図（1/4）

金属器（図版35，第61図）

銅銭（1）　銭緡が通ったままの4枚の銅銭を，布で包む。裏面には布の痕跡がなく，枚数はさらに多かったのかもしれない。4枚の銭を剝がすことはできなかったが，表と裏の各1枚は寛永通宝である。

煙管（2）　銅製の煙管の吸口部分で，7.1cm分が残存する。最大径1.0cm，厚さ0.5mm。1の銅銭とともに南崖面から出土した。近世墓が存在した可能性がある。

鉄鏃（3）　1号墳と2号墳の間から出土した。頸部から鏃身部にかけての部分で，頸部は断面長方形，鏃身部は片面が丸い。

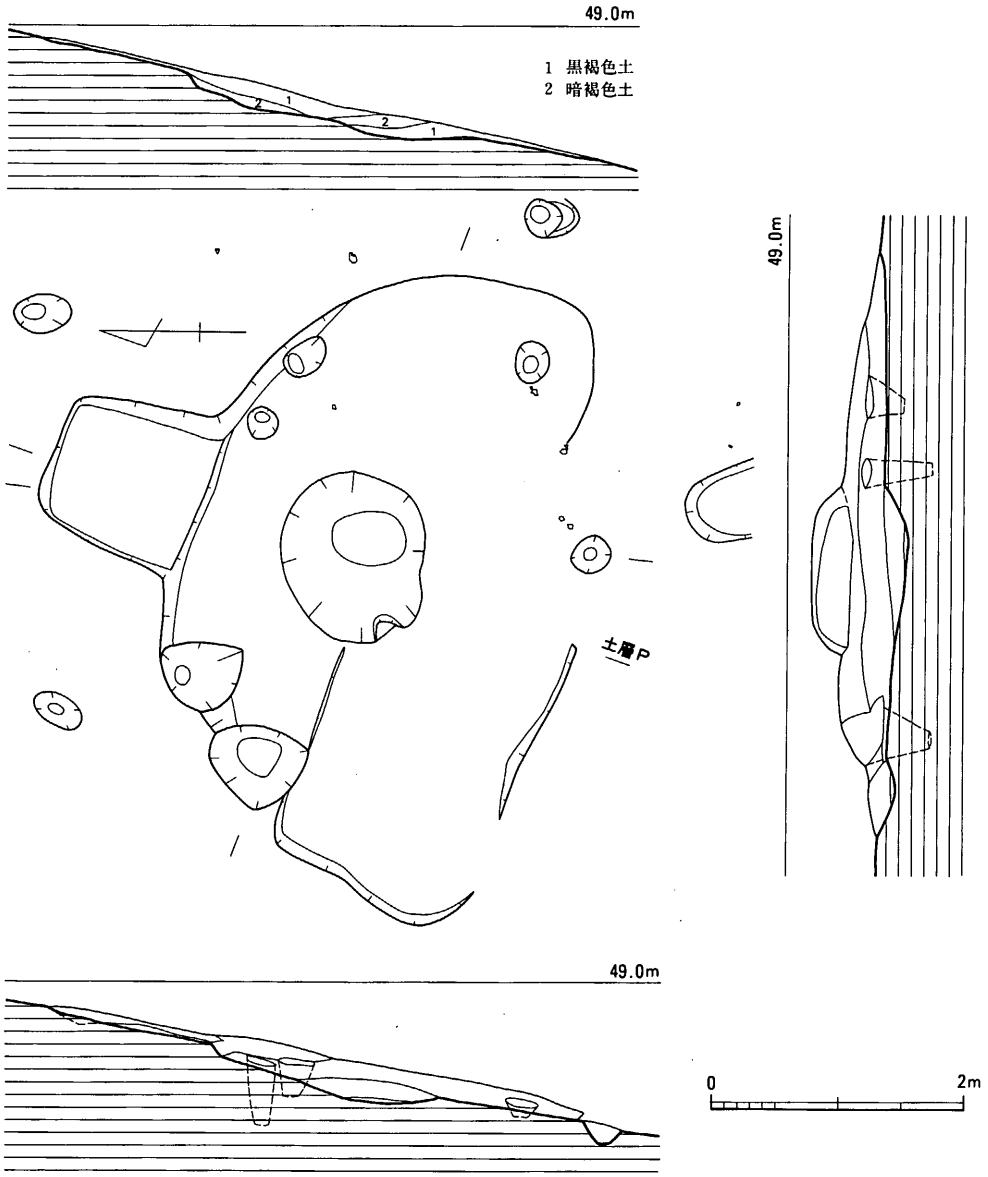
瓦（図版35，第62図）

平瓦　凹面には布目痕が，凸面には縄目叩文が残る。端面はヘラ切り，側縁部もヘラ切りだが3面に面取りする。　（小川）

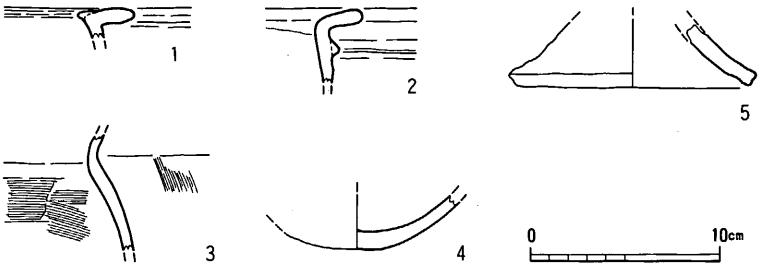
2　南斜面地区の調査

諸田仮塚の丘陵尾根を走る道路から南側の斜面を南斜面地区として区別して調査した。

南斜面地区の調査では，道路に近接した中央付近に遺構らしきものが集中していた以外に，東側で若干の小ピットが検出された。なお，西端の南北に走る小溝は新しく，その東側の土坑群も現代の攪乱穴で，遺構らしきものは中央付近の竪穴住居跡らしきもので，付近から若干の



第63図　住居状遺構実測図（1/60）



第64図　南斜面出土土器実測図（1/4）

弥生土器小片が発見された。

住居跡状遺構（第63図）　この遺構は，斜面に造られた円形竪穴住居跡らしく見えるもので，北側に幅1.2mの正方形プランが付設している。円形部は，現状で半円形を呈し，中央部に浅い鉢状くぼみがある。半円形部の東西径4.75m，中央くぼみ径1.35×1.15mで，周壁近くに6個の不定形のピットがある。なお，遺構の南西側に2.5×1.7mの浅い長方形土坑が重複しているが，時期や新旧関係も不明。これらの遺構の周辺から第64図のような土器片が検出されている。

出土土器（第64図）

第64図は，南斜面で遺構に伴なう土器が検出できなかったことから，遺構に伴なわないが実測可能な土器片を掲載した。

1～3は甕で，1が弥生中期中頃，2が中期末，3が弥生終末であろう。

4は丸底で，甕か鉢となるもので弥生終末以後に属することになる。

5は台状の土器で，2次的な加熱で赤変しており，弥生後期の古い段階に属する。（柳田）

3　北斜面地区の調査

北斜面では，表土下の堆積土も差してなく，表土直下に若干の遺構らしきものが検出できた。しかし，その遺構も数条の小溝と小ピットで，時期や性格な遺構は存在しなかった。

小溝は，長さ10m前後，幅10cm前後の規構で，埋土の状況などから中世以後の山路的なものである可能性がある。

小ピット群は不規則に散在するだけで，目立った出土品もなかった。

4　永岡地区の調査

永岡地区は，諸田仮塚地区丘陵の北斜面以北であるが，東側に大字常松字女久保地区の谷間と西側に大字永岡字七畝田地区の谷間が隣接しているので，これも永岡地区に含めて報告する。永岡遺跡は，昭和47・55・63年に３回の発掘調査が実施され，弥生中期の列状埋葬の墓地群として知られている。一方，永岡遺跡の南東側の広範囲は，常松遺跡として昭和45年度に別府大学によって発掘調査され，旧石器時代から中世に及ぶ集落や墓地が確認されている。とくに今回の永岡地区と関連するのは，永岡から常松地区に形成された３つの舌状台地を丘尾切断状に掘削された２本の「条溝」である。この条溝は，30ha前後と考えられている常松遺跡を略南北に３分割する方向に掘削されているが，その２本の条溝の間では若干の弥生の遺構が検出されているものの，条溝との関連が判明するような調査がなされていない。

永岡地区平坦地の調査

永岡地区の平坦部は，東西両側に幅４～５ｍの現在の道路があり，北斜面麓にある現代墓地に通じていた。この道路は，この平坦な低台地の両辺に沿って造られており，その外側が深い谷部を形成している。道路の設置の時期は，東側が西側の平坦面より高い地山上に直接載っているのに対し，西側が平坦面と同時に１ｍ前後削平された後の盛土上に造られていることから，東側が古くから存在していたと考える。このことから，遺構の存在する平坦面が，すでに南端で1.2ｍ前後，北側で50cm前後削られていることも明らかとなった。ただし，南端の現代墓地北側の幅２～３ｍが削平されずに残っている。

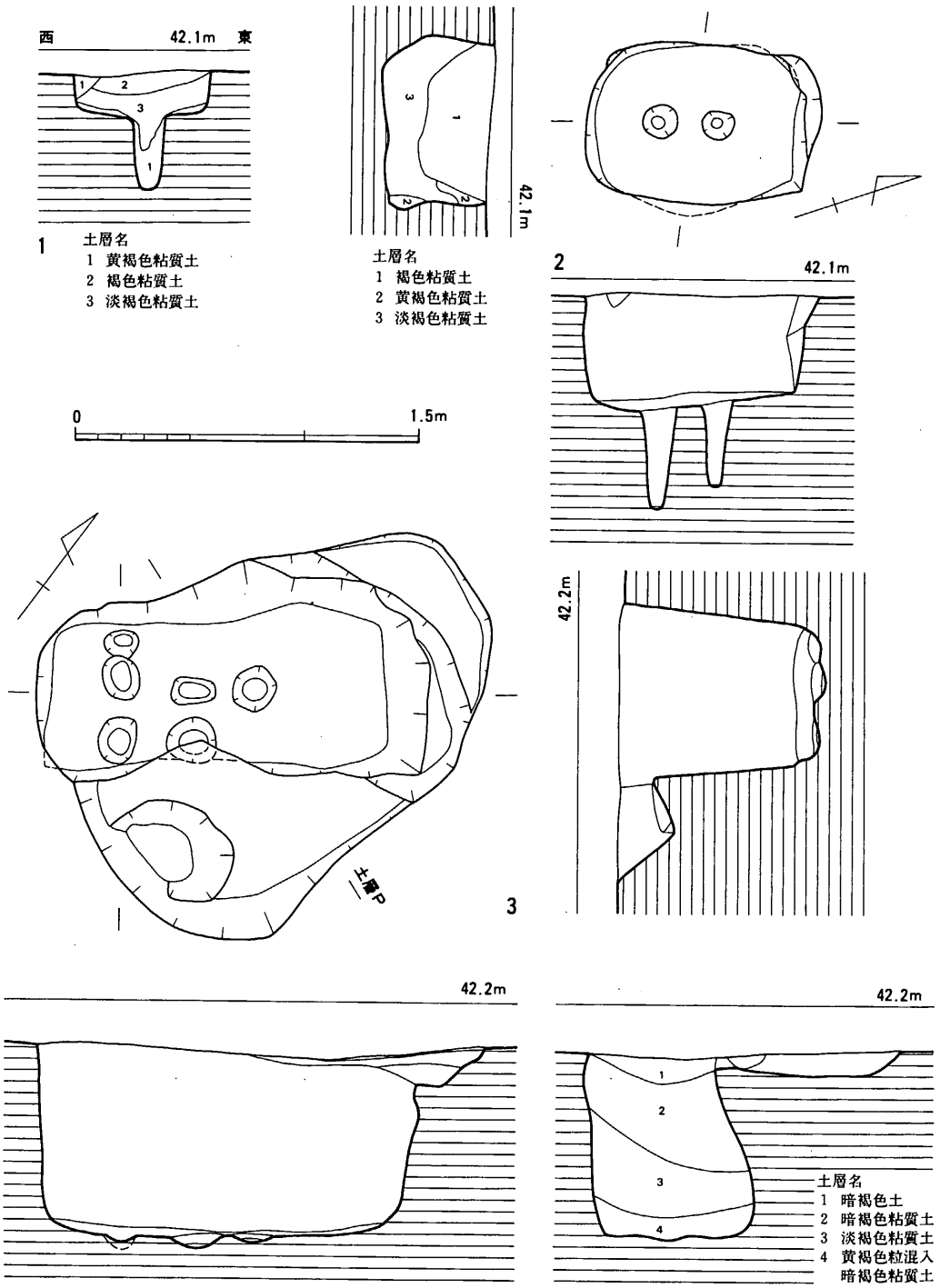
永岡地区の平坦面は，現国道３号線側がすでに建築物などで著しく攪乱され，遺構が検出できなかったが，その南側の中央地区とさらに南側の北斜面の麓付近に集中して遺構が検出された。したがって，中央地区に集中する一群の遺構を永岡原の北区，南側を永岡原の南区として調査した。

永岡原の北区では，大溝１条とその北側に４基の土坑群がある。大溝は，南側と区別するために大溝１，南側を大溝２とした。土坑群は，南側の土坑群と性格も違うことから，別に番号を付けたが，１号が調査の結果で風倒木と判明したので１号を土坑に含めない。

南区では，大溝２の北側に縄文期の落とし穴群と，南端で北斜面裾部分の削平されなかった部分で若干のピットなどから古式土師器が出土している。

１）落とし穴群（図版37～39，第65～67図）

大溝２の北側には，風倒木痕と思われるもの４～５個と縄文期の落とし穴と考えられるもの



第65図　落とし穴実測図①（1/30）

が8基検出された。落とし穴は，大溝2に接近した東側に1・2号，大溝2から10m～23m離れて3～8号が位置するが，1～8号全部が約4m離れた2基が対になって配置されている。

1号落とし穴（図版37－(1)，第65図1）

一群の中で最も南東側に配置されたものであるが，遺構実測図を紛失したので正確な数値ではないが，長さ約1.2m，上面幅0.6m，床面幅55cm，深さ0.2cm，床面中央ピット径14cm，深さ32cmの大きさである。この付近は地山が1m以上削平されていることから，落とし穴として充分な深さとなる。

2号落とし穴（図版37－(2)，第65図2）

2号は，1号の西側に1対として位置する隅丸長方形を呈する。大きさは，上面が長さ1.02m，幅0.7m，床面が長さ0.87m，幅0.75m，深さ0.5m，床面ピットが南側で径15cm，深さ45cm，北側が径14cm，深さ37cmである。竪穴の壁面は，垂直からわずかながら内湾している。この位置も1m以上の地山が削平されていることから，2号は1.5m以上の深さとなる。

3号落とし穴（図版38－(1)，第65図3）

3号は，3～8号のうちで最南端に位置する大型竪穴。深い竪穴は，浅い長さ2m，幅1.1m，深さ15cmの隅丸長方形の遺構と重複しているが，土層断面図で明らかなように，これより新しく掘込まれている。

竪穴の大きさは，上面が長さ1.9m，幅0.95m，深さ0.83m，床面が長さ1.46m，幅0.6～0.7mの規模。壁面の保存は割合よく，垂直に近く掘込まれている。床面は全体に平坦であるが，床面の主軸や直交方向に割合規則的な径12～22cmの浅いくぼみがある。竪穴の形態からは通例の落とし穴と違うが，埋土の流入が緩慢であることから墓壙ではない。

4号落とし穴（図版38－(2)，第66図4）

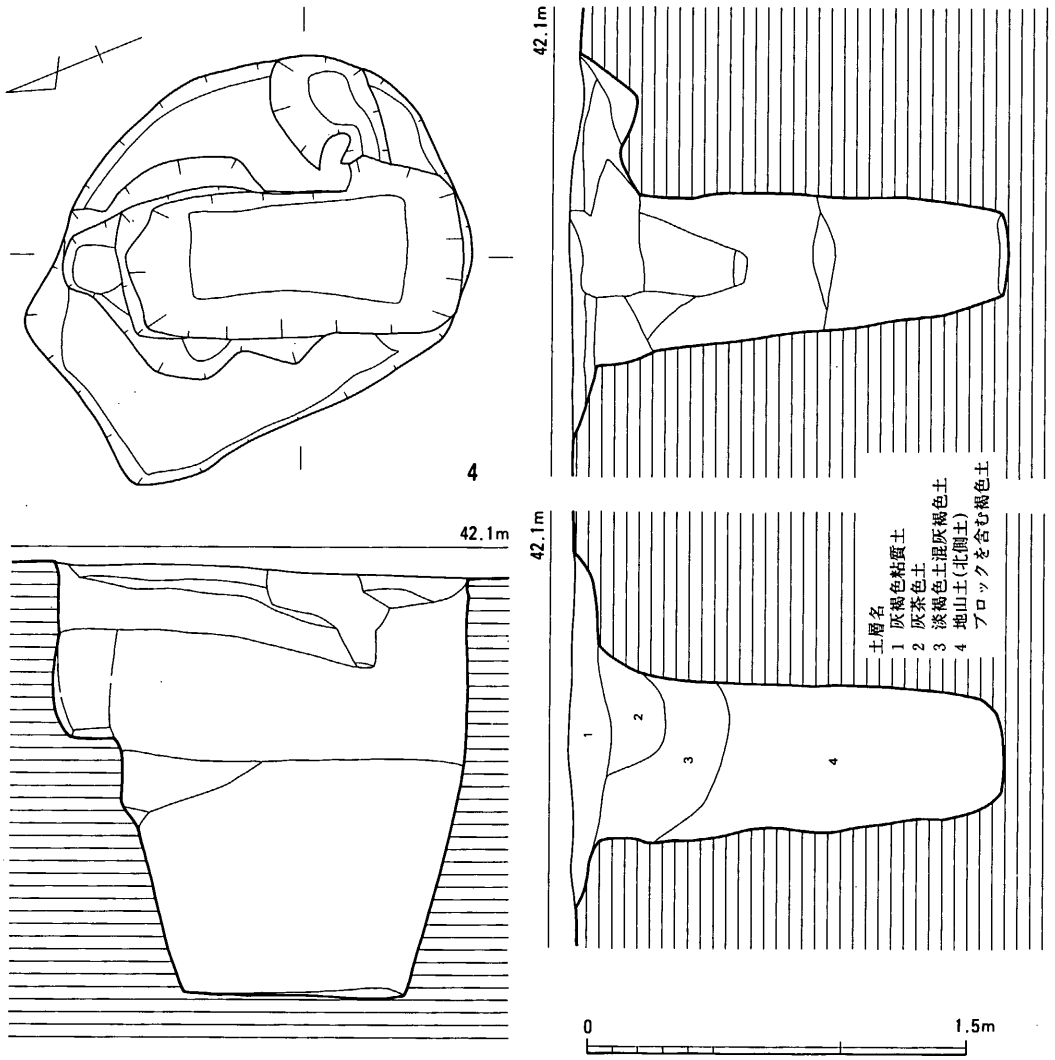
3号の北西側に位置し，これと対をなす位置にある。これも上面形は，主軸の違う浅い土坑が重複したように見えるが，土層断面図からは同一遺構である。一段目掘方は，長径1.75m，短径1.4m，深さ10cm，竪穴部上面が長1.62m，幅0.88m，深さ1.58mの規模となり，上部が1m前後削平されていることからすると，深さが2.5m前後となる。床面は，長さ86cm，幅33～43cmの広さで，割合平坦で，壁面も上半が若干崩壊しているものの，下半が垂直に近く保存がよい。

5号落とし穴（図版39－(1)，第67図5）

5号は，3号の北東側にあり，北西側に位置する6号と対をなす。大きさは，上面が長さ90cm，幅54cm，深さ27～33cm，床面が長さ88cm，幅49cmの規模。形状は，平面が隅丸長方形で，壁面が垂直，床面がわずかに傾斜し，不規則に小穴が6個配置されている。床面小穴は径5～15cm，深さ5～20cmの大きさで，これも不規則なものとなっている。

6号落とし穴（第67図6）

5号と対になる位置に配置されている。大きさは，上面が長さ95cm，幅58cm，深さ62cm，床面が長さ73cm，幅43cmの規模の隅丸長方形プランを呈する。壁面は垂直に近く，床面に径12～15cm，深さ4～7cmの浅い小穴をもつ。



第66図　落とし穴実測図②（1/30）

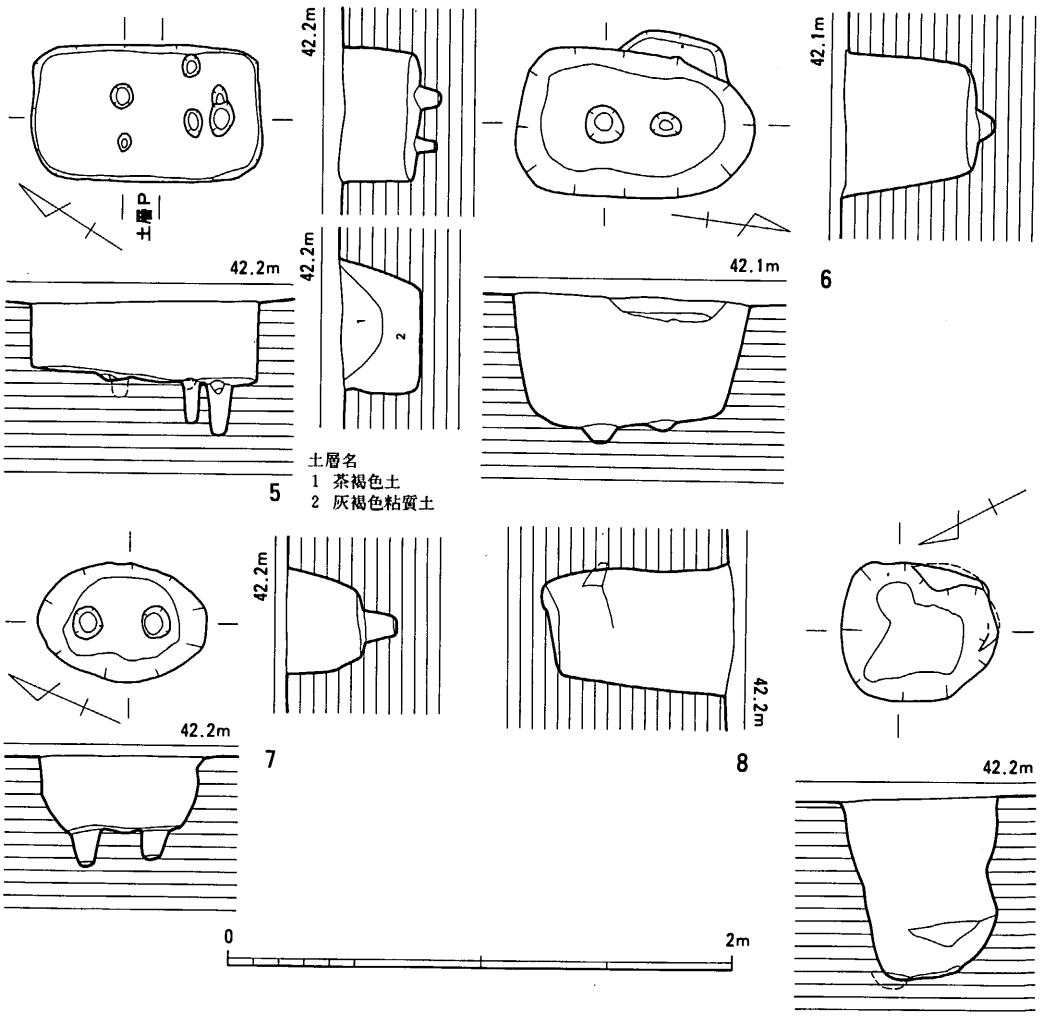
7号落とし穴（図版39－(2)，第67図7）

6号の北東側にあり，近接した東側の8号と対をなす。大きさと形状は，上面が長径67cm，短径47cm，深さ29cm，床面が長径46cm，短径33cmの楕円形で，壁面が湾曲し，床面に2個の小穴を穿つ。床面の両端に位置する小穴は，径11～13cm，深さ12～15cmの大きさである。

8号落とし穴（第67図8）

西側に位置する7号と対をなすが，平面と床面が不整形であることから性格不明な竪穴である。大きさは，上面径52×62cm，深さ73cmの規模である。

これらの落とし穴群は，2基が対になるほかに，2～8号が南西から北東方向に方向性をも



第67図　落とし穴実測図③（1/30）

つが，１・２号が主軸を略南北方向に向けるが，２～８号は一定していない。時期については，出土品が皆無であることから限定できない。

２）北区土坑群の調査

大溝１の北側に分布する土坑群で，西側から順に番号を付け，大溝１の東端に重複しているものを５号とした。

１号土坑（第68図）

１号は図のように不整形の平面形をし，土層図の中央上層に地山の褐色粘質土があるところから風倒木痕であった。縄文晩期土器片が混入していた。

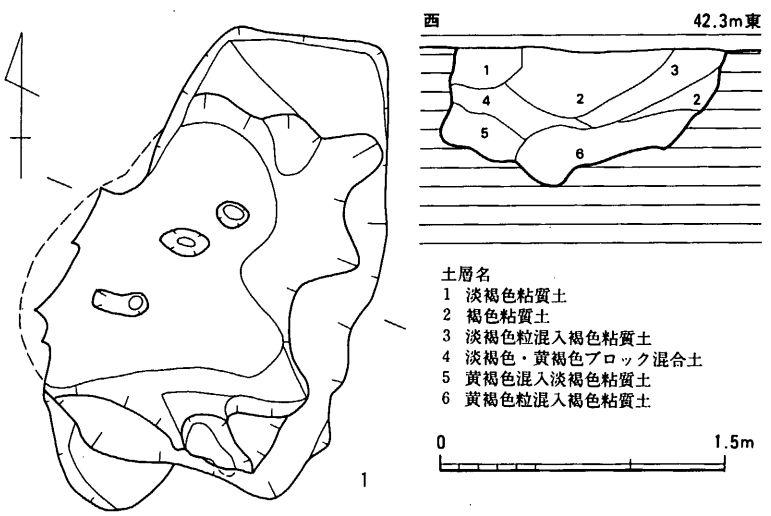
２号土坑（第69図２）

１号の東側にある長方形土坑で，一見すると一部に２段掘り状を呈するが，壁面が袋状を形成していたことから崩落したものと考える。したがって，上面の大きさの長さ1.2m，幅0.65mの大きさは崩壊した時点のもので，底面の長さ84cm，幅48cmが原形をとどめ，現状の深さ55cmもすでに50cm以上が削平されているものと考える。

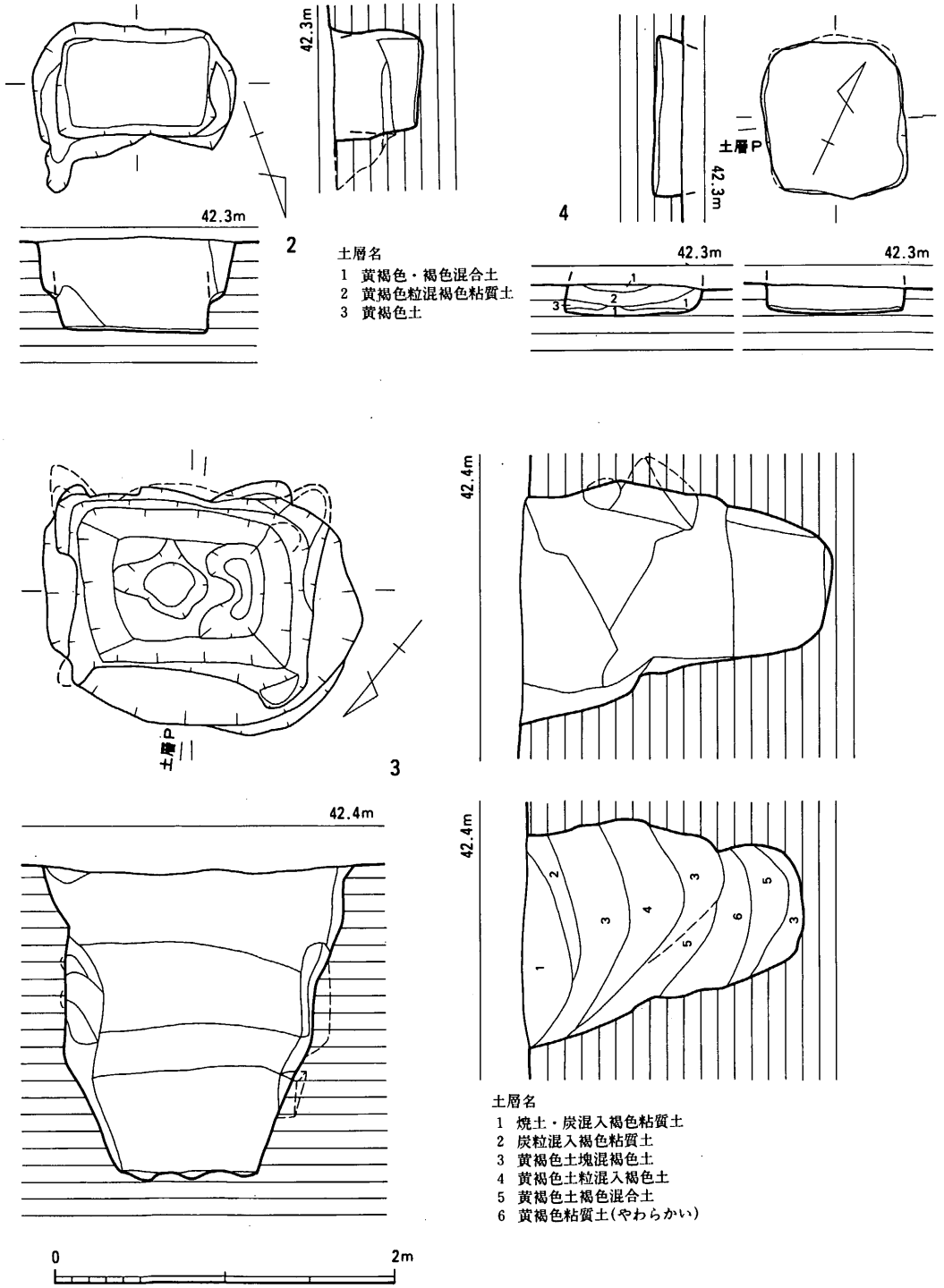
覆土に縄文晩期土器片が混入していた。

３号土坑（第69図３）

２号の北東側3.8mに位置する比較的深い竪穴。大きさは，上面が最大長1.85m，幅1.3m，

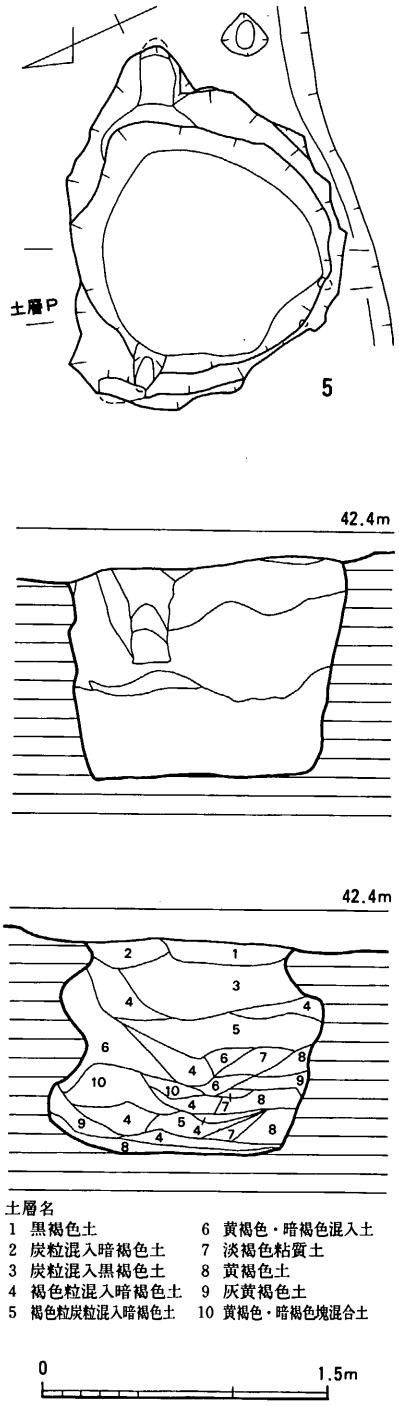


第68図　土坑実測図①（1/40）



第69図 土坑実測図② (1/40)

深さ1.83m，床面が長さ88cm，幅60cmである。形状は，床面が隅丸長方形で，平坦ではなく，原形をとどめている壁面から，垂直または袋状を呈すると思われるが，壁面中途で四隅の突出している部分をどう理解すべきであろうか。土坑が深い竪穴であるところから，四隅に柱状の構造物を設置して上部壁の崩落を防いだ可能性も考えられる。



第70図　土坑実測図③（1/40）

4号土坑（第69図4）

3号土坑の東側4.3mに位置する隅丸長方形土坑。大きさは，上面が長さ90cm，幅84cm，深さ20cm，床面が長95cm，幅78cmの規模である。形状は，壁面の保存の良いところが袋状を呈するところから，袋状貯蔵穴と考える。出土品はない。

5号土坑（第70図5）

大溝1の東側に重複した円形竪穴である。大溝1との新旧関係は不明であるが，上面プランが検出困難であったことから，大溝床面の凹凸と土坑上面覆土が混乱していたようだ。したがって，土坑検出時に覆土上層から出土した布留式甕（第78図10）は，大溝床面のくぼみに属する可能性をもっている。土坑の形状は，床面が径1.15mの平坦な円形で，壁面の崩壊が著しいながらも，部分的に袋状を呈することから，袋状貯蔵穴と考える。現状で深さが1.15mであるが，上部の50cm前後が削平されていることを考えると，原形は深さ1.5m前後であったことになり，入口も径60～70cmの小さなものであろう。この土坑にも，3号と同じように壁面中途に刳込みが東西両側に見られる。

これら4基の土坑は，床面の平面形で長方形が3基，円形が1基であるが，壁面が袋状を呈することから，弥生前期に通有の袋状貯蔵穴と考えられるが，遺跡全体で弥生前期に属する遺物が皆無であることから，貯

蔵穴と断定するのを避けた。しかし，永岡地区全体が50cmから１m前後削平されていることから，浅い遺構と遺物が失なわれている可能性があり，形態からも袋状貯蔵穴の可能性が最も強く，縄文晩期の可能性も残しておきたい。

出土土器（図版47－10，第78図10）

５号土坑と大溝床面の混合部分で出土した甕で，口径11.9cm，器高16.3cm，胴最大径15.6cmの大きさ。調整は，口縁が摩滅ぎみであるが直線的に外反し，胴部内面にケズリ，外面にハケ目がある。球形の胴部器肉は厚目で，胎土に赤褐色粒・角閃石と細砂を多く含み，外面が橙褐色，内面が暗黄茶褐色を呈する。時期は，布留式最新段階の５世紀前半代に属すると考える。

３）大　溝

大溝１

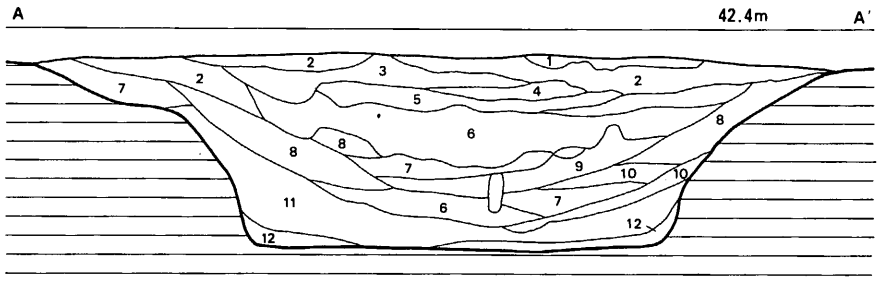
大溝１は，大溝２の北東側37mの間隔で，東西より10.5度東南側に向いて掘削されている。大溝１は，西側に傾斜して長さ21m，幅３～４m，最大深さ1.03mで検出され，横断面逆台形を呈している。大溝の壁面は，西側の深い部分程上半が崩壊して流れ，暖斜面となっているが，復原すると本来約80度の急傾斜であったことになる。したがって，大溝の底面幅2.2～2.5m，上面幅約2.7～3.0m，深さ１～２mの規模に復原できる。

大溝の埋土は，両側からほぼ均等に流入しているが，土器などの時期の明瞭な出土品が少ない。唯一時期の手掛りになるのが，大溝西端の中層（第71図Ａ土層断面⑥）の黒褐色土層から出土した大型圭頭形鉄鏃（第76図１）である。この黒褐色土層はＢ断面でも，床面から35cm程の高さで見られることから，大溝の半分の深さまでが鉄鏃の時期までに埋没したことになる。また，参考になるのが，大溝の東端に重複している５号土坑上層で布留式の新段階の甕が出土していることで，この５号土坑が半分程埋没した時点で大溝が掘込まれ，短期間で埋没したことになる。

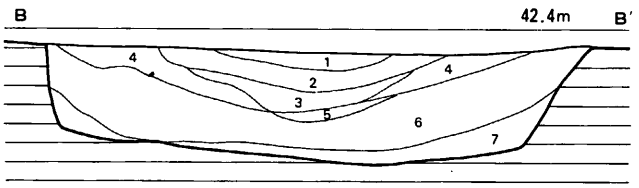
大溝１の造営の時期は，弥生終末から古墳前期の可能性が強いことになるが，埋土中にほとんど遺物を含まないことから見て，使用が短期間であったことより，周辺に集落などの生活遺構が少なかったことを意味していると考える。また，長期間重要な役割をはたした大溝であれば，頻繁な溝の浚渫の可能性もあり，大溝の役割が問題になってくる。大溝床面の不規則な小溝は，床面が傾斜しているために，雨水が流れた痕跡であろう。

出土遺物（図版46，第73図）

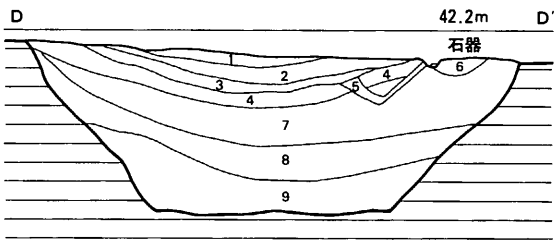
大溝１からはほとんど出土品が検出されなかったが，若干の弥生土器片と鉄鏃があった。



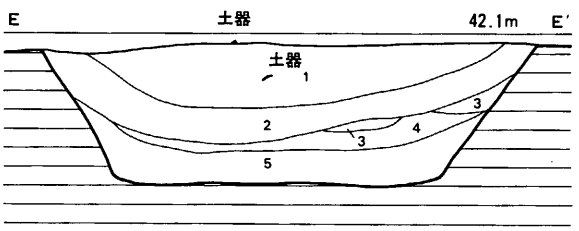
土層名
1 黄褐色土
2 炭混入暗褐色土
3 黒色土粒混入褐色土
4 焼土粒混入黒褐色土
5 黒色土
6 黒褐色土
7 暗褐色土
8 黒褐色土混入暗褐色土
9 黒褐色土塊混入暗褐色土
10 褐色粘質土
11 淡褐色粘質土
12 黄褐色混入淡褐色粘質土



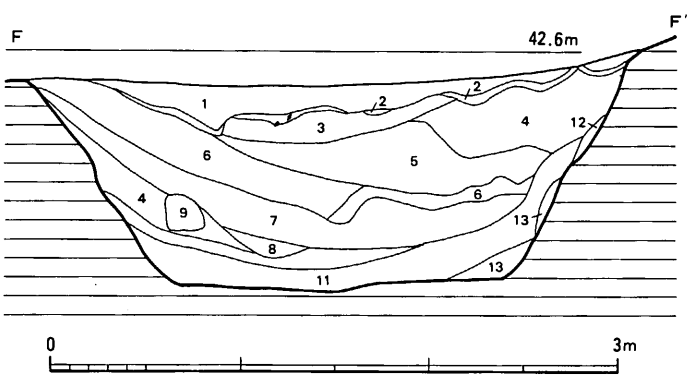
土層名
1 黒色土
2 黒褐色土
3 黒褐色土暗褐色混合土
4 暗褐色土
5 褐色・暗褐色混合土
6 茶褐色土
7 茶褐色土黄褐色混合土



土層名
1 黒茶色土
2 黒色土
3 ②と④の混合土
4 黄色土
5 ⑦と黒褐色土の混合土(攪乱)
6 褐色土
7 黄褐色土
8 黄褐色土(⑦よりやや暗い)
9 暗黄褐色土

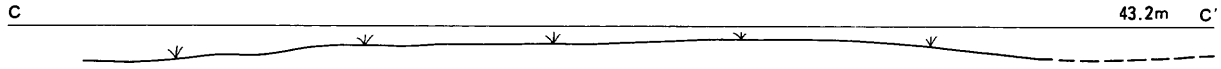


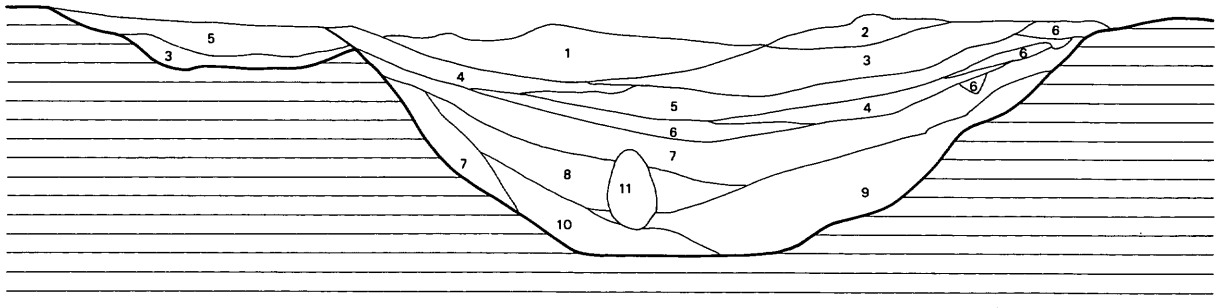
土層名
1 褐色土ブロック混暗褐色土
2 褐色土ブロック混暗灰褐色土
3 鉄分を帯びた灰色粘質土と暗茶灰色土の混合土
4 鉄分を帯びた灰色粘質土を若干含む暗茶灰色土
5 地山土(黄色土)ブロック混暗茶灰色土



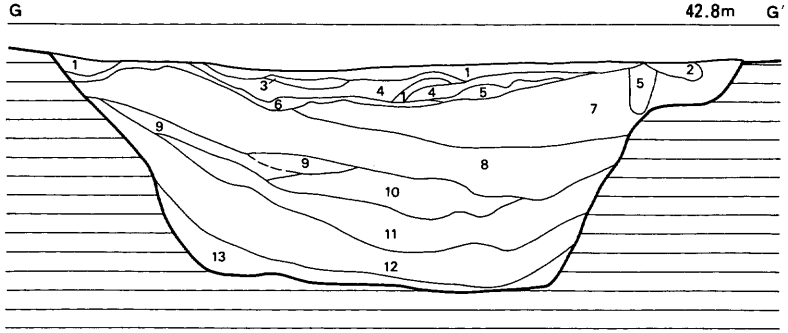
土層名
1 鉄分を多く含む灰色の粘質土
2 鉄分を多く含む淡褐色粘質土
3 炭化物混暗褐色土
4 灰褐色土
5 淡褐色ブロック混暗褐色土
6 地山土(黄色土)ブロック混褐色土
7 暗茶灰色粘質土
8 灰色土
9 淡褐色土
10 鉄分を帯びた灰色粘質土を含む暗茶灰色土
11 暗茶灰色粘質土
12 暗灰色土
13 地山土(黄色土)と⑫の混合土

第71図　大溝土層断面図①（1/40）





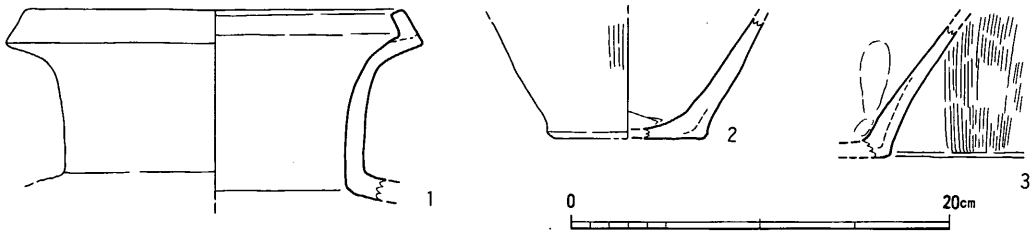
土層名
1 褐色土混入暗褐色土
2 褐色土・暗褐色混合土
3 黄褐色・黒褐色混合土
4 黒色土(火山灰)
5 黒褐色土
6 黒褐色・黒色混合土
7 暗褐色土混入黄褐色土
8 暗褐色土混入淡褐色粘質土
9 暗黄褐色粘質土
10 黄褐色粘土
11 淡褐色・暗褐色混合土



土層名
1 黒茶褐色土
2 黒褐色土
3 灰褐・黒茶褐色混合土
4 灰茶褐色土
5 炭粒混入黒褐色土
6 灰褐色土
7 炭粒混入暗褐色土
8 暗褐色土
9 灰褐色・暗褐色混合土
10 灰褐色混入暗褐色土
11 暗褐色混入灰褐色土
12 褐色塊混入暗褐色土
13 黄褐色粒混入暗褐色土

0 2m

第72図 大溝土層断面図② (1/40)



第73図　大溝１出土土器実測図（1/4）

弥生土器（図版46，第73図）

１は，埋土の上層にあたる２層目の黒色土下部から出土した複合口縁壺で，口径22cmの大きさ。器面は全体に摩滅しているので調整不明だが，胎土に角閃石と細砂を多く含み，茶褐色系を呈する。

２・３は，上層から出土した甕底部片で，２が底径7.8cmの大きさ。胎土には，赤褐色粒や細砂をやや多く含み，灰黄褐色を呈する。

土器の時期は，１が弥生後期中頃から後半，２・３が後期前半と考える。

鉄　鏃（図版46，第76図１）

大溝１の西端の中層から出土した大型圭頭形鏃鏃である。茎部を欠損しているが，現全長9.9cm，最大幅3.75cm，厚さ２mm前後で，関部を形成せず，最大幅から先端に刃部をもつ典型的な圭頭形をなす。茎部を欠くことから木質などの付着物の痕跡は見られない。鉄鏃の時期としては，大型であることなどから５世紀前半頃に属すると考える。

大溝２

大溝２は，諸田仮塚丘陵の北斜面裾から５～10mの位置でありながら，その裾からのびる永岡低舌状台地の最も幅が狭い根元を丘尾切断するかたちで設定されており，その全容を調査することができた。永岡低舌状台地根元の最狭窄部上辺幅は38mであり，大溝全長は49mであるから，永岡低舌状台地の東西両斜面の中途まで大溝が掘込まれていることになる。大溝の掘削方向は，わずかに弧状を呈した北西から南東方向で，大溝底面の高低が舌状台地上辺東側で標高41.347m，西側で41.360mで，その中間の大溝中央部が41.281mとなっている。さらに東西両側斜面中途の大溝両端の底面高は，東端が39.215m，西端が40.648mとなり，両端が斜面に沿って多少下がることになる。すなわち，大溝２は大溝１と違って台地上では中央部が若干くぼむものの，ほぼ水平に掘込まれ，両側が台地の斜面に応じて，中途まで傾斜して掘られていることになる。ただし，西端が71cmの落差であるのに対して，東端が2.1mの大差があるのは，

後述するように地震などによる地崩れのための段差である。

大溝２の横断面形態は，大溝１と同様な逆台形であるが，壁面の傾斜が約50度前後であることから，大溝１のような崩壊がおきていない。したがって，大溝幅も原形に近く，最も保存のよい東端で上辺が3.2mであるのに対し，底面幅が1.7m前後で，西端のみ横断面全体が幅広で丸底形態を呈している（第71図Ｃ）。

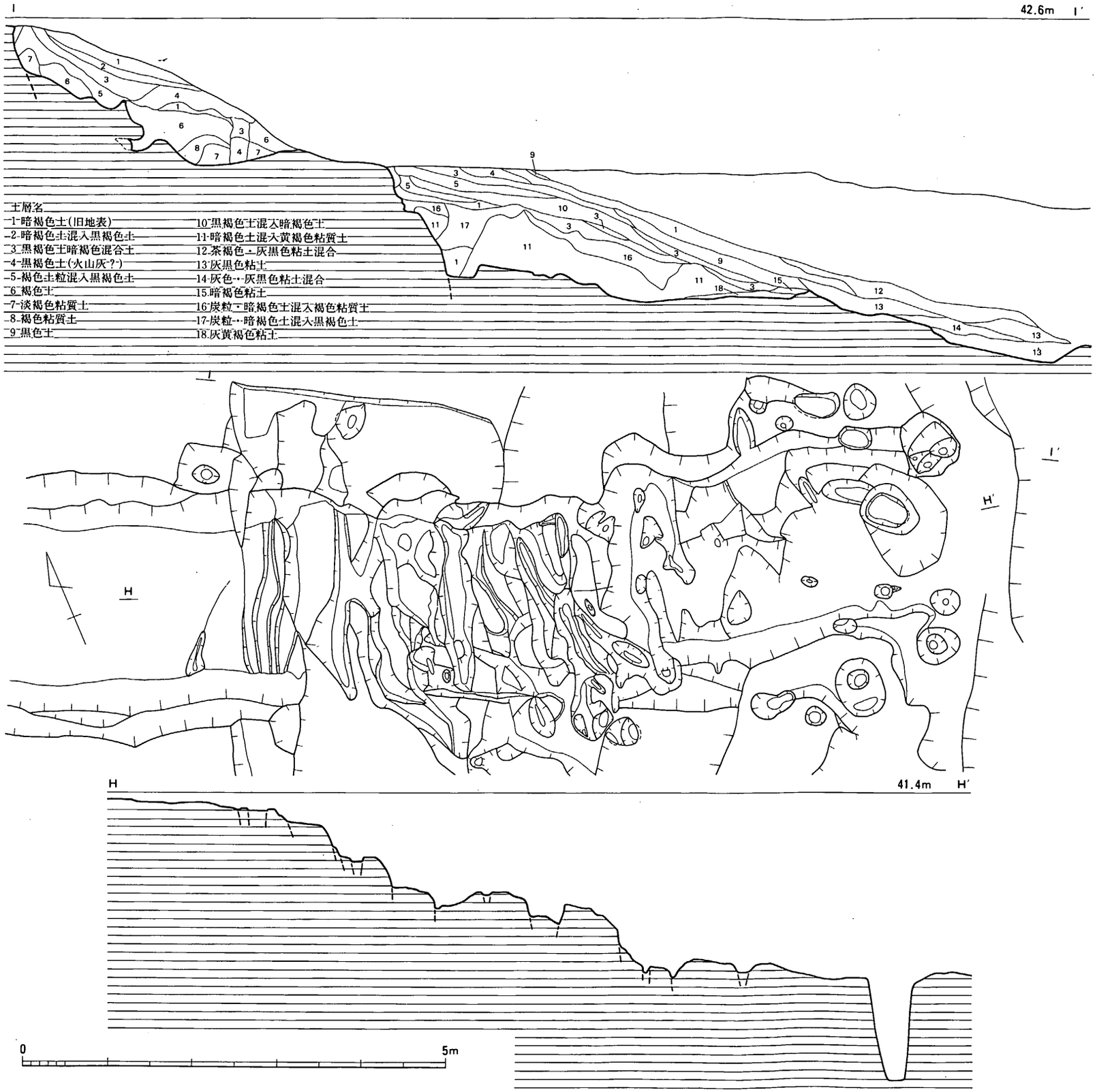
大溝の時期は，埋土下層から出土した完形土器から，弥生後期前半には埋没はじめていることから，掘削が弥生中期内であろうし，削平を免れた東端最上層には６世紀後半の須恵器を含んでいるので，埋没に６世紀以上を用している。

大溝２の地崩れ（巻頭図版３・図版45，第74図）

永岡低台地の東側斜面の表土剝ぎにおいて，現状では東側谷間が埋立てられていたことから，斜面の形状が観察できなかったが，整地層を除去するにしたがって，谷間に沿った段築が現われた。この段築は当然のこととして原地形ではなく，後世の造成であると考えていたが，斜面に直交したトレンチと大溝２の発掘によって，地山地形に段築が存在していたことが判明したのである。

第75図の大溝中心軸とこれに平行したトレンチ断面図で明らかなように，大別して２段の地山の段落が谷方向に落ちており，大溝北側の地山面でその差が１段目で1.65m大差，２段目がさらに1.2mの差となっている。大溝床面の差では，１段目が1.1m，２段目が0.8mであるから，段差が少ないのは大溝床面が本来斜面に沿って傾斜していたためである。トレンチ断面土層図によって，地上上層に堆積した土層を観察すると，１層が谷部を埋立てする前の旧地表で，２・３層もそれ以前の表土であることが考えられる。部分的には３・４層が逆転しているところもあるが，この程度は斜面の堆積でおこりうることであり，４層の下で５～７層の間に３・４層が割込んでいる部分から下が地崩れによって破壊された地層と考える。したがって，１～４層は地崩後に堆積したことになり，３・４層に包含する遺物以前に地崩れの時期が限定される。

地崩れした大溝床面と壁面を観察すると，大別した２段階の崩壊以外に無数の地割れと段差があり，地崩れエネルギーと規模の大きさがわかる。このエネルギー規模を数値など具体的に表現する術を知らないが，諸田仮塚丘陵部の北東側谷間に沿った地割れ規模と合せると，原因が大雨や地震のいづれであったにせよ，谷間の陥没や斜面の地滑りによる崩壊が，大溝２の埋没以後で，旧表土に含まれていた13世紀の青磁碗と平安期の土師器以前にこの現象が発生したものと考えられる。さらに，時期を限定すると，大溝２の崩壊を免れた東端土層の最上層の１～６には，古墳後期須恵器小片を含んでいることから，崩壊も６世紀後半以後で，平安期以前となり，『日本書紀』「天武７（679）年12月」の「筑紫国地震」が最有力原因となってくる。



第74図　永岡・常松地区大溝２崩壊状況実測図（1/60）

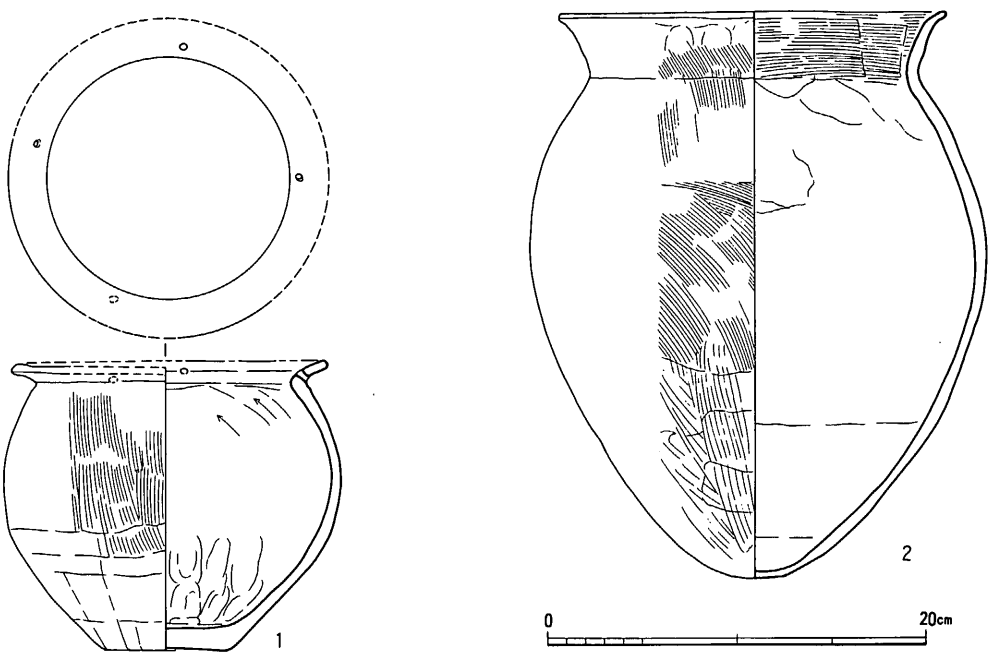
「筑紫国地震」は，約9kmにも及ぶ地割れを生じており，地震規模がマグニチュード7以上とされているが，その影響がこの地域まで及ぶのかどうかについて，今後の類例をまちたい。

出土遺物土器（図版46－1・2，第75図）

大溝2の埋土中には，ほとんど土器片が含まれていなかったにもかかわらず，2個の完形に近い土器が出土した。

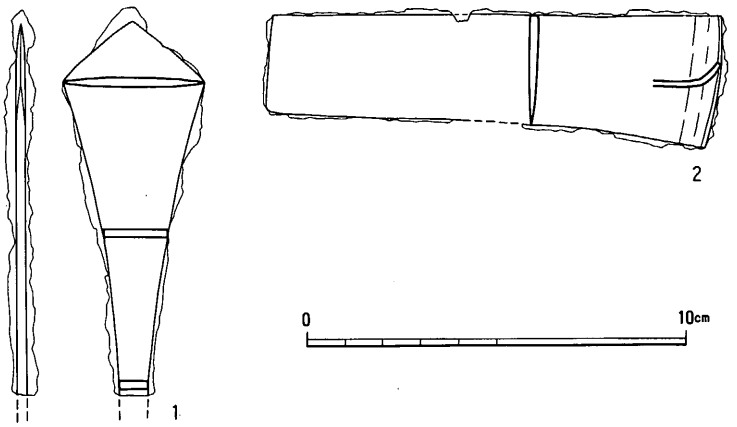
1は，大溝中央よりやや東側寄りの下層で，口縁の下に伏せて出土した短頸壺である。大きさは，口径16.6cm，高さ15.4cm，底径6.4cmで，口縁部がく字形に屈曲し，屈曲部に4個の小孔を穿つ。器面調整は，口縁内外面がヨコナデ，外面上半がタテハケ目，下半がタテケズリ後ナデ，内面が上半にタテナデ，下半に指圧痕がある。胎土には，赤褐色粒・角閃石や細砂を多く含み，外面が黄茶色，内面が黄茶色と黒色を呈する。土器の時期は，弥生後期前半頃と考える。

2は，大溝西端中層の七畝田地区の谷部から出土したが，大溝端と谷部との境界にあたることから，大溝中央部と層位を同一視することはできない。2は，口縁が外反する丸底甕で，胴部外面下半をケズリによって丸底としているところから，弥生終末以後に属し，内面をケズリ後にナデているが，古式土師器と共伴する可能性をもっている。大きさは，口径20.3cm，器高30cm，胴最大径24cmである。胎土には，細・粗砂と黒耀石・黒色粒などを含み，外面が黄茶褐



第75図　大溝2出土土器実測図（1/4）

色で，部分的に加熱による赤変と煤付着，内面が黄茶褐色を呈する。



第76図　大溝出土鉄器実測図（1/2）

鉄　鎌（図版46－2，第76図2）

大溝2の上層から出土した小型鉄鎌で，先端が角形である特徴をもつ。大きさは，全長12cm，柄着装部最大幅3.5cm，先端幅2.5cm，身厚さ2㎜前後である。刃部の長さは，先端から9.8cmまでで，その先が柄着装部とゆるやかな屈曲となる。柄着装部の背側に木質炭化物が付着していたが，屈曲部外であったところから木柄の残存ではなかった。鉄鎌の時期は，上層出土であることから，古墳前期に属するものと考える。

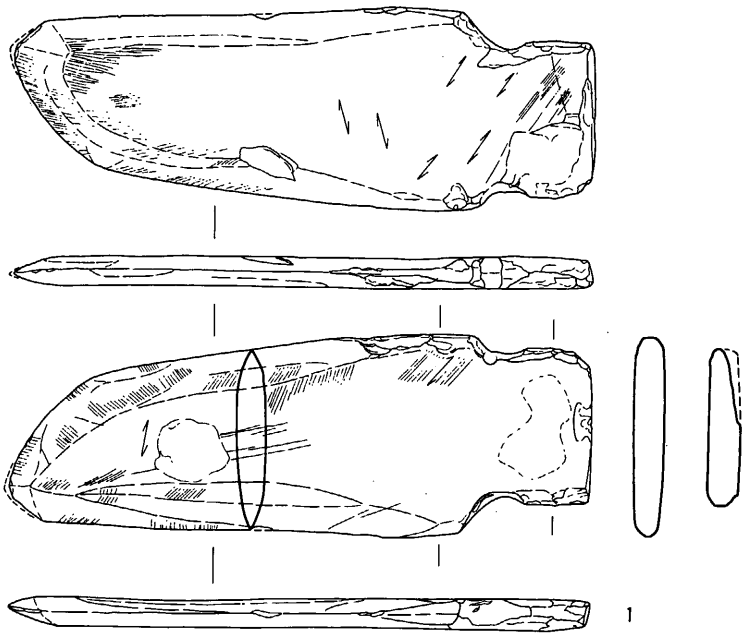
磨製石器（図版46－1・2，第77図）

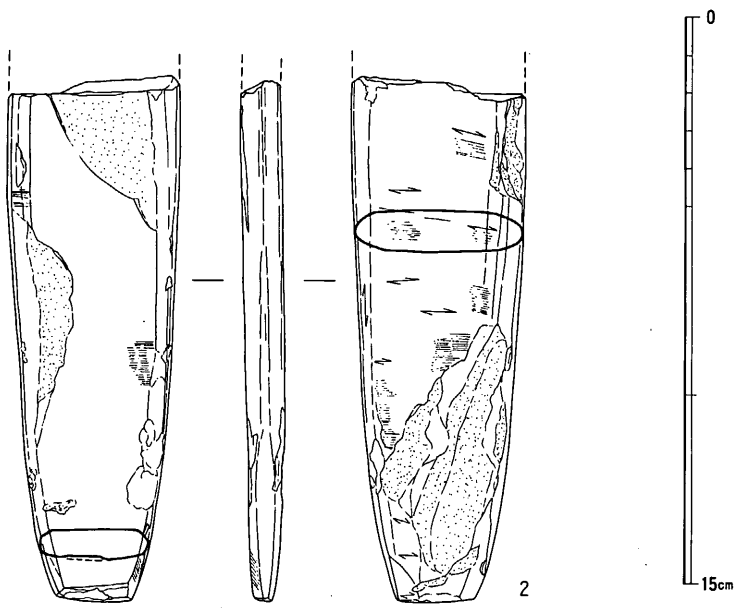
1は，大溝2の西側で上層下部から出土した完形の石戈である。大きさは，全長15.4cm，刃部最大幅5.35cm，厚さ8.1㎜で，茎部が両側の抉りからの長さ3.5cm，最大幅4.1cm，厚さ8.2㎜となっている。戈の両刃が片面が直線的であるのに対して，他方が屈曲するのは，形態的に中国の戦国以前の銅戈に類似している。刃部は，抉りから先端側の全部が刃を形成せず，2～3cmの幅で面取りによって刃つぶしされた丸味がある。刃部長の先端から半分程までは，使用による擦痕が観察され，先端ほど著しい。基部と茎の研摩痕は，製作時のもの。身部が左右対象でないのは，実用品として使用頻度が激しいことから，欠損して研ぎ直した可能性も考えられる。この石器を石戈としたのは，扁平で幅広であることが最大の理由である。これを剣として木柄を装着すると柄部幅が広すぎるし，石矛という説もあるが，これも形態的に扁平すぎる。弥生前期末からの石戈は，中期末頃から茎部の退化が知られており，この扁平石戈もこの時期に出現する。この石戈の石材は，灰褐色頁岩製で，重さ116.7gである。使用痕跡からは，先端を突刺す方向に使用した可能性があり，この点が弥生後期の銅製鋤先と類似する。

2は，先端を欠損して現全長13.85cm，最大幅4.48cm，最大厚さ1.05cmの大きさの石剣又は石棒であろう。基部端が最も幅が小さく2.0cmで，端から9.1cmまでが側面に面取りがあり，それから先端に向かって刃部を形成するが，鋭利な刃ではなく丸味が強いものとなっている。こ

れも扁平な作りであることから剣とすることに躊躇するが，木柄を直交して着装するような抉りなどがないのも確実である。石材は，灰緑色片岩状で，平坦面に製作時のヨコ方向の細い研摩痕が見えるが，使用痕は観察できない。

1・2の石器の時期は，大溝中のわずかな土器から，弥生中期末から後期に属するものと考えられる。





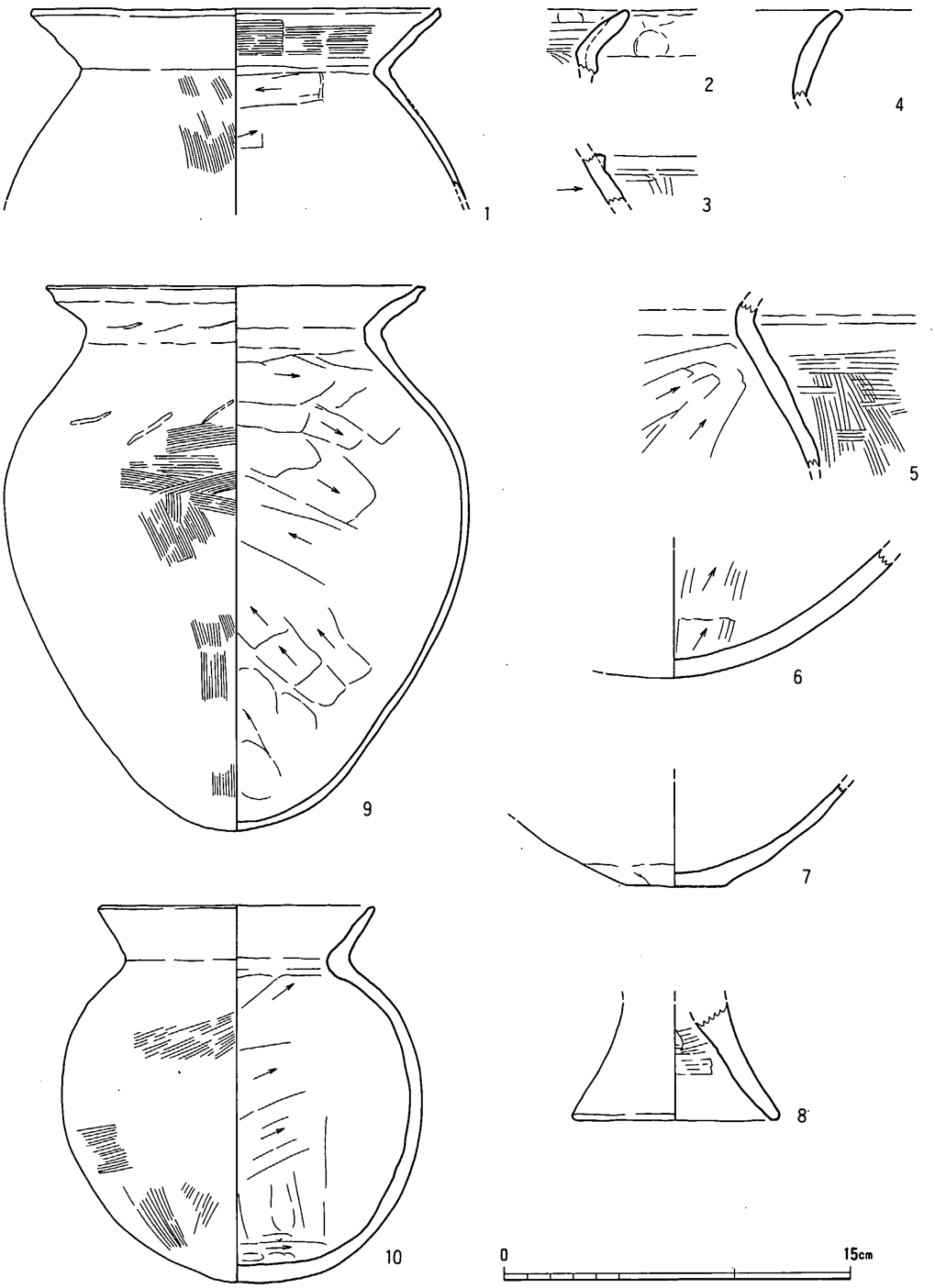
第77図　大溝2出土石器実測図（1/2）

4）永岡原地区出土土器

（図版47－1～9，第78図1～9）

1～9は，永岡原地区南端の未削平部分の表土直下から出土した土器で，出土地点No.で1～3がNo.6，4～6がNo.9，7・8がNo.8，9がNo.10地点出土である。

1は，口縁先端を摘上げ，口縁が外反するが，胴部外面がタタキではなくハケ目である。



第78図　永岡地区出土土器実測図（1/3）

内面はケズリ調整で，器肉を割合薄くしている。口径17.7cmの大きさで，外面に煤が付着している。時期は，口縁形態から庄内式新段階である。胎土には，細砂をやや含み，外面が黄褐色，内面が暗黄茶褐色を呈する。

2は，く字形口縁で先端に丸味があり，内面に粗いヨコハケ目，他はナデ調整。3は，口縁下の三角突帯である。

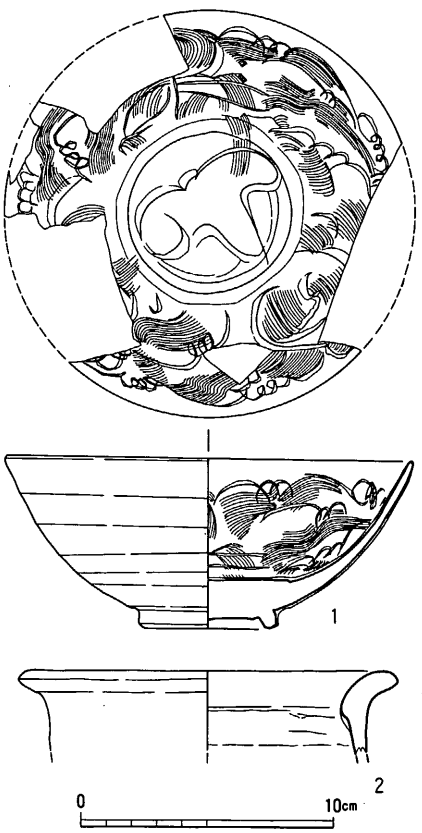
4～6は，同一個体の可能性がある外反口縁と口縁下の胴部片である。4は摩滅しながらもハケ目が残り，胎土に細・粗砂を多く含み，内外面共に茶褐色を呈する。5は，内面がケズリ，外面が粗いハケ目調整で，胎土に赤褐色粒と粗砂を多く含み，外面が暗黄茶褐色，内面が黄茶褐色を呈する。6は，内面にケズリとハケ目，外面にハケ目の丸底で，胎土に細・粗砂を多く含み，外面が暗茶褐色，内面が茶褐色を呈する。

7は，小さな平底の底部で，全体に摩滅しているが，外面にケズリ状ナデが残り，胎土に雲母や細・粗砂を多量に含み，内外面が黄茶褐色を呈する。外面に2次加熱による赤変が見られる。底径は4.3cmの大きさ。

8は，裾径9cmの台で，全体に摩滅しているが内面基部にハケ目が残る。胎土に赤褐色粒と細・粗砂を多く含み，内外面が黄褐色で，外面に赤変が見られる。

9は，口径16.4cm，器高23.7cm，胴最大径20.1cmの甕で，内面胴部にケズリ，外面にハケ目と肩部にハケ目木片によるキザミ文がある。口縁先端の屈曲に特徴がある。外面上半に煤が付着し，下半に2次加熱による赤変がある。布留式古段階に属する。

これらの1～9の土器は，1と9の時期幅である庄内式新段階から布留式古段階に属するものと考える。



第79図　常松地区出土土器・陶磁器実測図(1/3)

5）常松地区東斜面出土土器

(図版47－1・2，第79図)

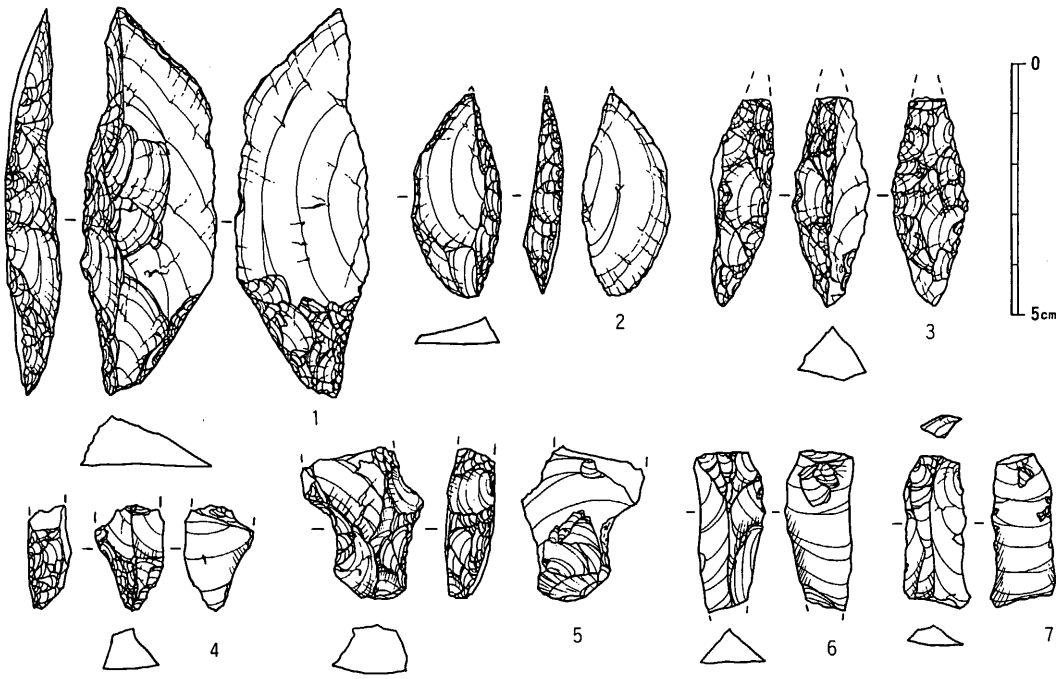
1は，東斜面の大溝2の北側旧表土出土の青磁碗で，口径16.15cm，器高6.8cm，底径5.0cmの大きさ。内面に櫛描花文，内外面に淡緑褐色釉をかぶせ，高台内側が露胎となる龍泉窯系青磁碗である。時期は，13世紀前半であろうか。

2は，1と同じく大溝2を覆う旧表土出土の土師甕で，口径約15cmの大きさ。口縁が分厚く外反し，胴部内面をケズリによって薄く，直立した胴部であるらしい。胎土には，赤褐色粒や細砂を含み，茶褐色を呈している。時期は，平安期に属するものであろうか。　　（柳田）

6）その他の出土遺物

石器（旧石器）（図版48，第80図）

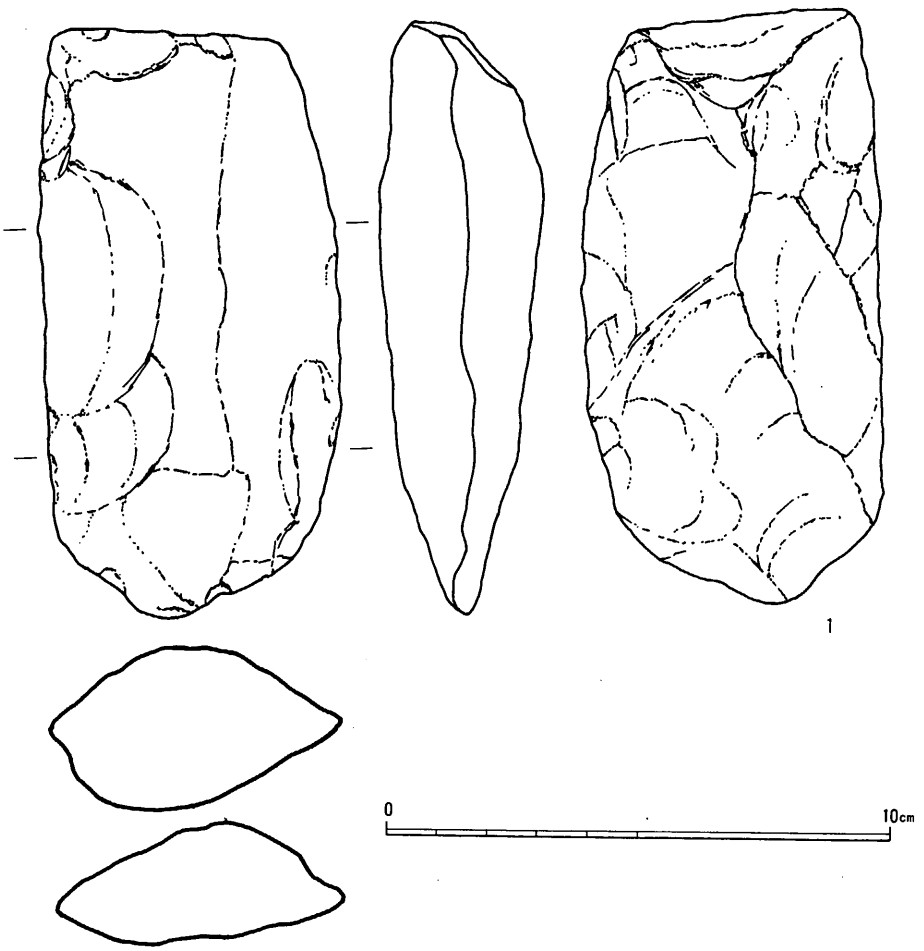
ナイフ形石器（1・2）　1はサヌカイト製横長剝片素材のナイフ形石器である。背面には，主要剝離面と同一方向の大きな剝離面を残し，それを切るネガ面が2面観察される。素材の打点部を除去する形で二次加工（背部加工）が行われている。また，基部加工については右側縁部に刃潰しと腹面側に平坦剝離が行われている。一見して，国府系ナイフ形石器に酷似しており，その影響下にあることは間違いないが，背面の観察から盤状（翼状）剝片石核より翼状剝片の連続剝離が行われる瀬戸内技法第2工程の認定は難しい。2もサヌカイト製の横長剝片を素材とするナイフ形石器である。背面には主要剝離面とほぼ同一方向の剝離面を残しており，横長剝片の連続剝離が行われた可能性がある。ただ，主要剝離面と刃部を形成する盤状剝片石核底面はわずかに残される程度であり，刃部側も大きく加工され尖頭器状に仕上げらている。このことから，瀬戸内技法国府系ナイフ形石器と積極的に評価するのは難しい。



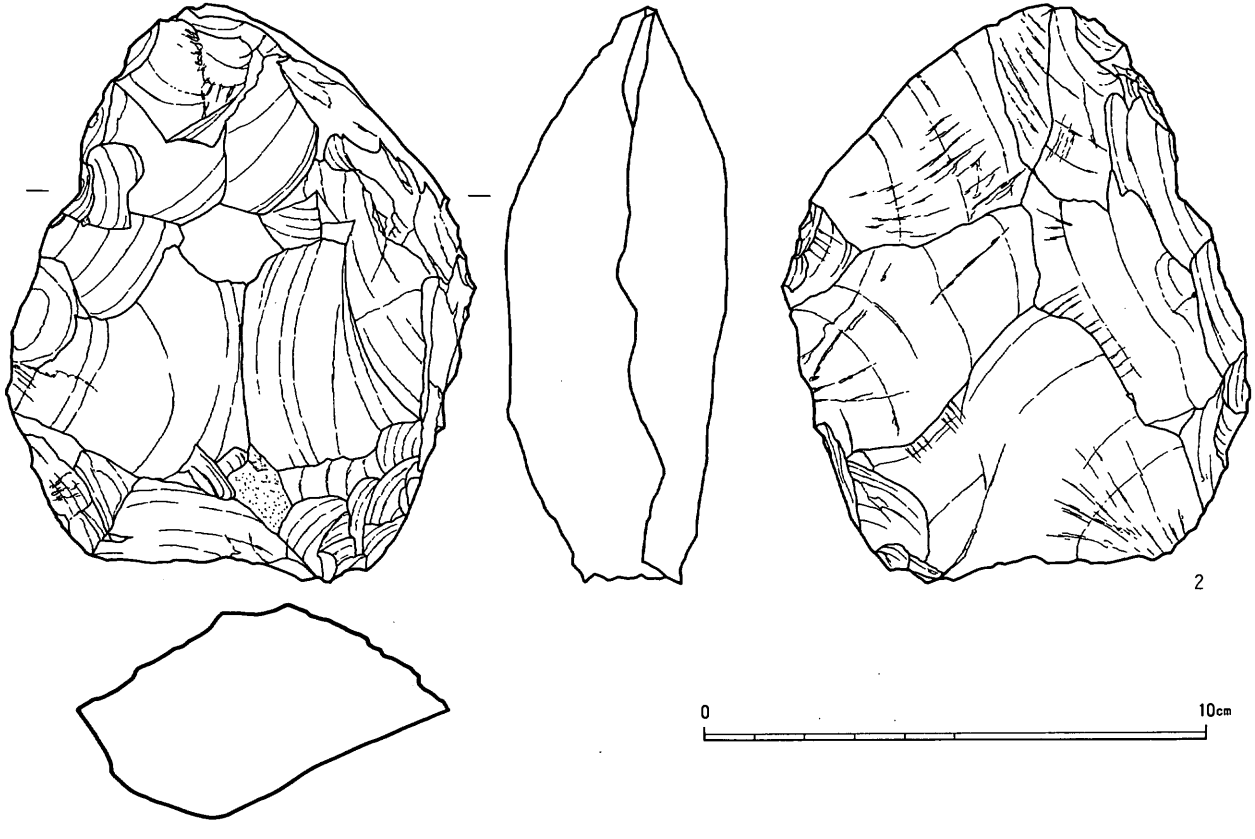
第80図　永岡地区出土石器実測図①（2/3）

角錐状石器（3～5）　3はサヌカイト製角錐状石器である。背面側の一部には素材獲得時の横方向の剝離面を大きく残すが，素材剝離面かは認定し得ない。その面を器体の一部に取り入れ，左側縁には急角度剝離が，腹面には両側縁からの平坦剝離が行われている。先端部を欠損している。4は厚手の黒耀石製縦長剝片を素材としている。左側縁部への急角度剝離と背面への稜状調整の介在から角錐状石器として取り上げた。5は黒耀石製の厚手不定形剝片にややノッチ気味の急角度剝離が行われていることから，角錐状石器の未製品と考えられる。

剝片（6・7）　6は無調整打面を加撃し剝離された厚手の石刃状の剝片である。下端部を欠損。7も無調整打面を加撃している端部はややつまり気味。　（杉原）



第81図　永岡地区出土石器実測図②（2/3）



第82図　永岡地区出土石器実測図③（2/3）

石器（縄文）（図版49、第81～83図）

石斧（1）　1は胴部付近は側縁部から，刃部付近は端部側からの成形剝離がそれぞれ両面に行われ，胴部から中央部に大きく厚みを残している。これらの製作技術の特徴から「神子柴型石斧」と認定できよう。また，背面左端部付近の剝離面や腹面の左胴部から基部付近にかけては，剝離面の残りかたの不自然さから研磨されている可能性が高いが、磨滅著しく断定し得ない。玄武岩製である。長さ11.80cm，幅5.80cm，厚さ3.30cm，重さ280.60ｇを測る。

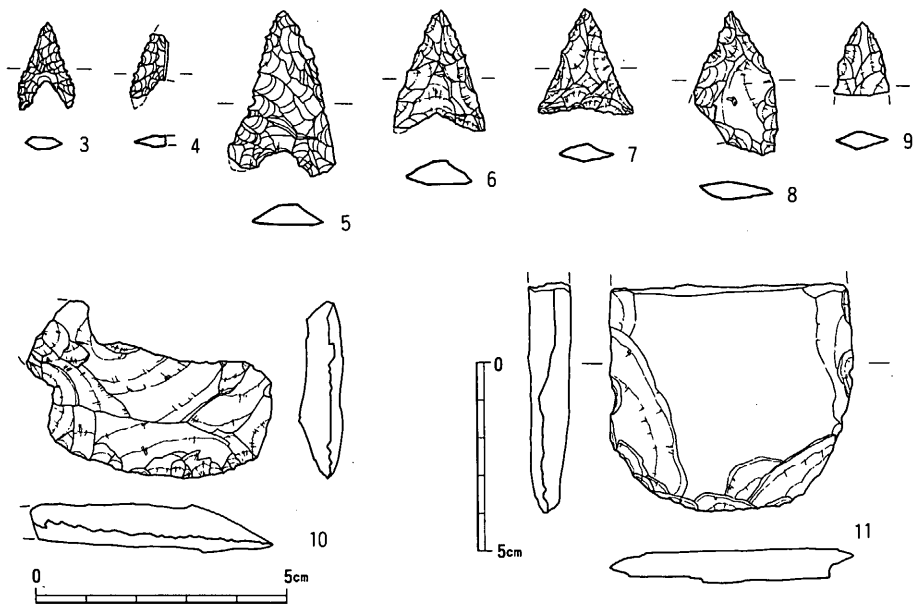
石核（2）　2は裏面に数面の素材剝片剝離が行われた石核と考えられるが，表面については側縁を急角度剝離によって調整を行っている。特に右側縁部に著しく，刃部を意図しているようでもある。石核転用のスクレイパーであろうか。地滑り褐色土層出土で重さ468.10ｇ。

（杉原）

石鏃（3～9）　3～5は腰岳系黒曜石製，6～9は安山岩製。3・4は小型の凹基鏃。7は三角形に近い。3・5～7は順に0.3ｇ，2.2ｇ，1.3ｇ，0.9ｇ。

石匙（10）　安山岩製で，把手が斜めに付く。11.2ｇ。

打製石斧（11）　緑泥片岩製で，短冊形のもの。　（小川）



第83図　永岡地区出土石器実測図④（2/3）・（1/2）

縄文土器（第84図）

1は，北区1号土坑（風倒木痕）出土の鉢で，両面共にヘラミガキされた精製土器。胎土に砂粒をほとんど含まず，内外面共にこげ茶色を呈している。2は同じく1号土坑出土の底部で，底径7cmの大きさ。胎土に粗・細砂を多く含み，内外面共に茶褐色をしている。

3は，北区2号土坑出土の浅鉢片で，両面共にナデ調整されている。胎土に細砂をやや含み，外面が灰黄褐色，内面が暗褐色を呈する。

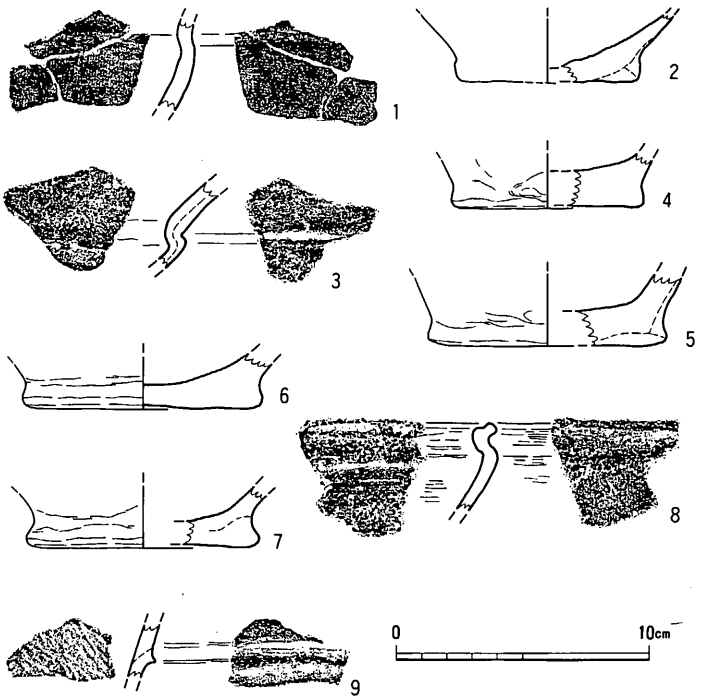
4・5は東側谷の常松地区出土の底部で，4が径7.6cm，5が径9.4cmの大きさ。胎土には，両方共に赤褐色粒・角閃石・雲母を含み，外面が黄褐色～灰黄褐色，内面が灰黄褐色～暗黄茶褐色を呈している。

6・7は北区大溝1出土の底部で，6が径9.4cm，7が径9.2cmの大きさ。胎土には，赤褐色粒と粗砂を多く含み，内面が暗褐色，外面が茶褐色を呈する。

8は南区大溝2出土の鉢で，内外面共にヨコヘラミガキされた精製土器。胎土には，赤褐色粒・雲母と若干の砂粒を含み，内面が黒褐色，外面が暗茶褐色を呈する。

9は南区の小ピットから出土した小片で，外面に三角突帯をもつが内面に斜方向の二枚貝による条痕がある。胎土には，細砂を多く含み，内外面共にこげ茶色を呈している。轟式ではなかろうか。

これらの土器片は，9以外が鉢や底部の特徴から縄文晩期に属するが，遺構との関連では土坑の時期の参考になる可能性をもっている。（柳田）



第84図　永岡地区出土縄文土器実測図（1/3）

III. おわりに

1. 1号墳について

1号墳は，墳丘・周溝ともに大きく削平されているものの，径約20mの円墳で周溝を巡らし，墳丘上には各種埴輪を樹立させる。古墳の築造は，出土した須恵器の年代から5世紀の中頃を前後する時期と考えられる。

石室は著しく攪乱を受けており石材もほとんどが抜き取られているため石室構造は不明な点が多いが，石室内全面に赤色顔料を塗布すること，横口部に段があること，高い位置から一旦前庭部に下りて石室内に入る構造になっていること等，初期横穴式石室の特徴を備えている。石室は長さ1m80cm，幅1m60cm程の長方形で，床面には礫を敷き，横口部には25cm程の段を持って石室内が低くなるものと考えられる。横口部に板石等で袖部を作っていたことも考えられなくもないが，無袖であった可能性が高いと思われる。横口部の外側には石室側壁と連続する石積を横口部から約50cm分検出し，前庭部側壁と考えた。石室周壁の最下段には比較的小振りな扁平な自然石を縦位に立て並べて腰石として，二段目以降を小口積みで構築したようである。この時期は，この種の石室で基部から小口積みするものと，腰石を持つものとの過渡期にあたると考えられ，腰石を持つ石室としては古例に属するものであろう。

北部九州地域の初期横穴式石室の研究は近年比較的盛んで，研究者間で若干の相違はあるものの，前方後円墳や大型円墳の主体部になり副葬品も豊富な大型石室と，小型古墳の主体部や大型古墳の非中心的主体部になり副葬品も貧弱な「竪穴系横口式石室」とも呼ばれる小型石室に分類することが可能で，両者の違いは被葬者の階層差に由来すると考える点ではほぼ一致している（註1）。小型石室（竪穴系横口式石室）については蒲原氏が詳細な概念規定を行っており，「形態的には単体埋葬を前提とした竪穴系の埋葬施設を基本的に踏襲したものでなければならない」ため，横穴式石室独自の技術である楣石の架構及びその上に構築する前壁を有さないもので，また竪穴系の埋葬施設同様に主軸平行葬を原則としていることから，玄室幅は1.4m以下としている（註2）。森下氏は基本的にこの考えを受けながら，古墳時代成年男子の平均身長から幅1.6m以下とした（註3）。ここで玄室幅1.4m以下とする蒲原氏と，同じく1.6m以下と考える森下氏の間には若干の違いがあるが，幅約1.6mの諸田仮塚1号墳は微妙な位置にいることになる。無袖になる可能性が高い点も小型石室的な要素である。しかしながら，時期的に大差のないと考えられる前原市狐塚古墳第1主体部では幅約1.65mで確実に主軸直行葬が行われており（註4），また諸田仮塚1号墳は径約20mと中規模の円墳ではあるものの，埴輪を伴うことなどから被葬者の階層が低位とも思われない。石室の階層性と墳丘など他の要素の階層性は必ずしも一致しないとする意見もあるが（註5），ここでは一応大型石室の部類

に入れて考えたい。

盛土下1～3号土坑は，土坑の長さが石室掘形の長さと幅にそれぞれ一致することと石室の三方を囲んで作られた土坑の配置から，石室に関連したものであることは確実である。土層観察の結果では盛土を積み上げる際に土坑も同時に埋めており，石室構築終了と同時にその役目を終えたことが窺える。土坑の形状と配置があまりにも規画的であることと遺物を全く伴わないことから，祭祀に伴う土坑と考えるには無理があるように思う。類例も見あたらず判断に苦しむが，石室を設計あるいは構築する段階で利用した何らかの施設と考えられる。　（小川）

註1　柳沢一男　1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻　森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会
　　1986「総括」『丸隈山古墳II』福岡市教育委員会
　　蒲原宏行　1983「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』雄山閣
　　土生田純之　1983「九州の初期横穴式石室」『古文化談叢』九州古文化研究会
　　森下浩行　1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜」『古代学研究』111号
　　1987「九州型初期横穴式石室考」『古代学研究』115号
　　土井基司　1989「竪穴系横口式石室小考」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』6　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
　　重藤輝行　1992「北部九州の初期横穴式石室にみられる階層性とその背景」『九州考古学』第67号　九州考古学会
註2　蒲原宏行　1983　前掲註1論文
註3　森下浩行　1987　前掲註1論文
註4　林覚　編　1982『曽根遺跡群』前原町教育委員会
註5　重藤輝行　1992　註1論文

2．土壙墓（馬土壙）について

諸田仮塚遺跡では4基の土壙墓を検出した。各土壙墓からは1号土壙墓を除いて馬歯が出土し，その出土位置と土壙の形状・規模さらに当時の馬の大きさを考え合わせれば（註1），それぞれの土壙墓に1頭づつを埋めたものと考えられる。この種の，馬歯・馬骨の出土する土壙の類例は近年増加し，論考・集成も行われている（註2）。

4基の土壙墓のうち，2号土壙墓から出土した須恵器杯蓋は小破片ではあるがIIIA期のもので，2号墳と同時期と考えて良い。4号土壙墓出土の轡は，岡安光彦氏の編年では第II段階にあたりMT85型式併行としており（註3），坂本美夫氏の編年によるとII期第2小期にあたり6世紀第3四半世紀であるという（註4）。2号墳と同時期か若干後出するものと考えられる。1号土壙墓出土の土師器甕は5世紀代のもので，むしろ1号墳に伴う時期のものである。しかしながら，この土器は破片が埋土に混入した状態で出土したもので土壙墓が1号墳の周溝内に掘られていることを考えれば，紛れ混みである可能性が高い。小郡市三沢20号墳南裾にある17

号土壙墓のように，土層観察から木蓋の上に置かれた土器が蓋が腐って落ち込んだと推定する例もあり（註５），共伴する可能性もあるが，ほぼ同様の４基の土壙墓のなかで約１世紀の隔たりがあるというのも不自然であり，また２・３号土壙墓と概ね主軸の方向が揃い近接していることからも，ここでは一応４基とも２号墳に伴った時期のものと考える。

４基の土壙墓を比較すると，１～３号土壙墓と４号土壙墓の間には相違点が多いことに気が付く。土壙墓の位置が１～３号土壙墓は２号墳から見て南西側にあり，土壙墓の主軸は古墳の周溝に対して直角に近く頭位が南西を向くのに対して，４号土壙墓は２号墳南東側周溝の外側にこれと平行して土壙を掘り，頭位は東を向く。さらに，最大の相違点として４号土壙墓だけが轡を伴うことが挙げられる。２号土壙墓は出土した須恵器から２号墳と同時期として良いが，４号墳から出土した轡は同時期としても良い範囲内ではありそうだが若干新しい要素があるようである。１～３号土壙墓と４号土壙墓の相違点が時期差によるものであるとすれば，不都合はないように思う。しかし，それではなぜ４号土壙墓だけを後から作る必要があったのかという疑問は残る。

４号土壙墓は，馬歯と轡の出土状態から轡を装着したままの馬を埋めたものと考えられる。出土した轡は鉄製環状鏡板付轡で，装飾性のない実用的な轡とされる。現代にも通じる乗用馬の馬具の基本は，頭絡，鞍，鐙の３点であるが，このうちの頭絡の轡部分だけが馬歯に伴って出土した。皮革製の部分は腐朽して失われたのであろう。

桃崎祐輔氏は古墳に伴う牛馬の歯・骨を我が国はもとより朝鮮半島・中国東北部にまで範囲を拡げて詳細な集成・検討を行い，日本列島の古墳から出土する馬歯・馬骨は特定の地域の中小古墳に集中する傾向があり，それらが古代牧比定地と隣接している場合が多く，また幼齢馬の出土比率が高いことから，古墳の被葬者は馬の生産や流通に関与した集団の一員であった可能性が高いとしている。さらに牧比定地がないにもかかわらず多数の馬歯・馬骨を出土した諸田仮塚遺跡を含む小郡周辺の古墳は，ここが軍事的に重要な地域であるために，軍用馬の集積や管理・調教に関与し，優先的に馬匹の配分にあずかった集団の墓地と想定している（註６）。

４号土壙墓からは鞍と鐙は出土していない。埋葬する際に外していたことも当然考えられるが，桃崎氏が想定したような馬に関する専門的な知識と技術を持った集団であれば，当然乗馬には長けているはずであり，こうした人間であれば鞍と鐙はかならずしも必要ではないという（註７）。増田精一氏は我が国の古墳から出土する突出居木を欠く鞍は激しい運動に耐えるものではなく，儀仗用のものであるとしている（註８）。馬の飼育・調教にも携わった専門家集団がそうした装飾性の高い鞍を使用することは考え難く，使用したとすれば増田氏が居木突出鞍の例として取り上げている佐賀県石木遺跡出土の木製鞍のような簡素で実用的なものであった可能性が高い（註９）。鐙も同様に木等の有機物製であれば，４号土壙墓の馬は鞍・鐙を装着していたが既に失われた可能性も考えられる。

一方1～3号土壙墓は，轡も伴っていない。埋葬に際して外されたか，最初から轡をしていなかったかのいずれかであろう。轡を装着しない馬としては，犠牲用の馬のほかに駄馬も考えられる。金属製銜をもつ轡は騎乗者が馬を自在に操作するためのものであり，乗用馬でなければそれほど必要なものではない。轡を伴わない頭絡には，無口頭絡，口籠，南西諸島に現在まで伝わる「オモゲー」「ウムエー」等と呼ばれる木製面繋等が知られており（註10），いずれも馬の制御能力には限界があり乗用馬には向かないが，駄馬等の使役馬であれば問題はない。あくまで想像の域を出ないが，1～3号土壙墓に埋葬された馬はこうした有機物製の馬具を装着していた可能性はないであろうか。

桃崎氏が集成・検討した結果では，ほぼ確実に馬頭，馬歯，四肢，肩甲骨等の一部分を石室内や周溝内に納めたと考えられる例は少なくない。松井章，神谷正弘両氏は「古墳の石室内から馬の部分骨が出土しただけでは，その他の供献された食物との区別が困難で，馬だけが殉葬されたかどうか疑問が残る。」として，殉葬と供献の区別を説いている（註11）。それはともかく，馬の一部分のみを納めたと考えられるこうした例は，殺馬儀礼が行われたことを物語るものであろう。しかし一方で，従来古墳に馬の一部分を供献したとされるものの中にも本来は全身が揃っていた可能性があるものが相当数あるという。諸田仮塚遺跡のように古墳の周囲に土壙を掘り，ほぼ間違いなく馬の全身を納めたと考えられるものは，これまで殉葬あるいは犠牲と考えられているが，その根拠は必ずしも明確ではない。「大化薄葬令」の馬の殉葬を禁止する部分や『播磨國風土記』の馬の殉葬を示す記載等の文献，あるいは中国東北地方や朝鮮半島からの影響を推定する論考が多いが，殉葬・犠牲と死んだ馬を埋めた墓とを区別する根拠にはなり得ない。千葉県大作遺跡の31号墳に伴う1号土坑からは馬歯と轡，鞍，鉸具が装着状態で出土し，報告者は鞍の位置から判断して，馬の首を切り落とし土坑に胴体を逆さまに落とし込んだ後に首を胴体の尻の部分に納めたものと想定し，殉殺の行われた確実な例であるとする（註12）。しかしながら，この復元案には反論もある（註13）。桃崎氏は馬歯等から査定する古墳出土馬は幼齢～壮齢馬が大半で老齢馬が少ないことを根拠に挙げているが，古墳の被葬者が桃崎氏の想定する馬の生産や流通に携わる集団の一員であるならば，種牡馬，繁殖牝馬あるいは本人達の乗用馬等を除けば一般に壮齢～老齢馬は手元に残さないのが通例であろう。馬の死亡原因には老衰以外にも病気，怪我等様々に考えられ，また儀礼以外にも経済性を考えて屠殺される分を合わせれば老齢に達する方がむしろ困難であるという（註14）。

諸田仮塚遺跡の2・3号土壙墓は主軸の方向が揃い並んでいるが，これを主軸の方向に沿って北東側に延長すると2号墳の南西側周溝に到達する。周溝のこの部分からは子持器台をはじめとする多量の須恵器が出土しており，ここで何らかの儀礼の行われた可能性が高い。儀礼にこの位置が選ばれたのは墓道とも関わる古墳の正面観に由来するものと思われ，したがって1～3号土壙墓は墓道沿いであった可能性があり，供犠的色彩が強い。しかし4号土壙墓はこ

れから離れた場所にあり，やや様相を異にする。

1～3号土壙墓と4号土壙墓にみられた相違の原因は，時期の差以外にも駄載用馬と乗用馬，犠牲用馬と被葬者の愛用馬等の関係が考えられる。馬の殉葬・犠牲を否定するものでは決してないが，もともと家族墓である横穴式石室を主体部に持つ古墳に，家族同然に可愛がった馬が死んだ時に追葬したと想定することは，可能性としては低くともあり得ないことであろうかと，2号墳に寄り添うように作られた4号土壙墓を見るときに思う。　（小川）

註1　林田重幸　1974「日本在来馬の源流」『日本古代文化の探求　馬』社会思想社
橋口　勉　1990「日本の在来馬」『月刊文化財』№316　第一法規出版
註2　乙益重隆　1985「馬の随葬例について」『古城横穴墓群』熊本県教育委員会
藤崎芳樹　1990「31号墳出土の馬について」『佐倉市大作遺跡』千葉県土地開発公社　財団法人千葉県文化財センター
桃崎祐輔　1993「古墳に伴う牛馬供犠の検討」『古文化談叢』第31集　九州古文化研究会
松井　章　神谷正弘　1994「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺」『考古学雑誌』第80巻1号　日本考古学会
註3　岡安光彦　1984「いわゆる「素環の轡」について」『日本古代文化』創刊号　古墳文化研究会
註4　坂本美夫　1985『馬具』ニューサイエンス社
註5　宮田浩之編　1990『三沢古墳群Ⅰ』小郡市教育委員会
速水信也編　1992『三沢古墳群Ⅱ』小郡市教育委員会
註6　桃崎祐輔　前掲註2論文
註7　江上波夫　佐原真　1990『騎馬民族は来た!?来ない!?』小学館
註8　増田精一　1996『日本馬事文化の源流』芙蓉書房出版
註9　髙島忠平編　1976『石木遺跡』佐賀県教育委員会
註10　中村潤子　1991「騎馬民族説の考古学」『考古学　その見方と解釈　上』筑摩書房
下野敏見　1986「オモゲーとウリナリガミの世界」『日本の古代2　列島の地域文化』中央公論社
註11　松井　章　1990「動物遺存体から見た馬の起源と普及」『日本馬具大鑑』第一巻古代上
松井　章　神谷正弘　前掲註2論文
註12　藤崎芳樹　前掲註2報告書
註13　桃崎祐輔　前掲註2論文
註14　原田俊治　1997「馬のすべてがわかる本」ＰＨＰ文庫

3．朝倉窯系初期須恵器

1　はじめに

九州の須恵器編年については，小田富士雄氏らによって昭和42年に佐賀市神籠池窯跡の採集資料の紹介（註１），昭和45年の福岡市西区新貝窯跡の調査によって，一気に古式須恵器の生産が明らかになった。ところが，その後神籠池窯跡の発掘調査は実施されず，新貝窯跡資料も報告されずに経過し，調査・報告され研究が進展したのは６世紀以後の窯跡資料であった。

そこで，昭和53年度の甘木市池の上墳墓群の発掘調査，昭和56年度の古寺墳墓群の発掘調査によって大量の伽耶系土器群が出土した（註２・３）ことによって大きな画期を向えることになった。報告書では，これらの土器をⅠ～Ⅳ式に編年し，Ⅰ～Ⅲ式を陶質土器，Ⅳ式を須恵器として，「Ⅲ式には須恵器生産が開始されながら，ひきつづき陶質土器も舶載されている段階」とした。また，陶邑Ⅰ型式１段階は，Ⅲ式とⅣ式の間に位置付けられるともした。

ところで，拙稿の『甘木市史』「原始」では，池の上Ⅰ～Ⅳ式の器形の変化などが小差であることからⅠ～Ⅲ式に分類し，墳墓群の時期も下げた（註４）。これより先の昭和53年の小田茶臼塚古墳の発掘調査では，古式須恵器大甕をａ～ｃ式に分類し，ａ式が池の上Ⅲ式（拙稿のⅡａ式）であることと，ｃ式が陶邑Ⅰ型式２段階，瑕が３段階に対応させていた（註５）。

さらに，昭和59年の『甘木市史資料－考古編』では，「朝倉の初期須恵器窯跡」として夜須町の小隈・八並窯跡，三輪町の山隈窯跡の採集資料を紹介すると同時に，胎土分析結果も報告した（註６）。とくに小隈窯跡の資料は，拙稿分類の池の上Ⅰ～Ⅲ式が含まれており，採集品ながら一気に初期須恵器として認識できるようになった。同時に，筑紫野市隈遺跡群の初期須恵器の胎土分析においても同様な結果となり，池の上Ⅰｂ式と陶邑TK87型式が共伴していた（註７）し，小田茶臼塚古墳出土大甕ｃ式も陶邑産であった。

小隈窯跡採集品の中には，池の上墳墓群で見られない杯類や高杯および中型甕があることから，初期須恵器だけでなく古式須恵器段階を含んでいることが考えられる。そこで，今回の諸田仮塚１号墳出土須恵器の胎土分析結果も含めて，初期須恵器の概念および範囲を示しておく。九州の須恵器研究において，最初に初期須恵器の用語を使用したのが，『甘木市史資料－考古編』の平田定幸氏と同年の中村勝氏（註８）であったが，その概念は示されていなかった。次いで蒲原宏行氏らによって1985年に佐賀平野の初期須恵器についてまとめられ，その範囲が示された。それは，田辺昭三氏の「定型化以前の須恵器の総称」（註９）で，陶邑TK208型式前半までに賛同され，TK216型式（Ⅰ型式２段階）までを初期須恵器の範囲とされたもので（註10），ここでも以下の型式分類・時期・分布などからこれに賛同する。

2　型式分類と時期

池の上・古寺墳墓群出土の土器群は，その全部が初期須恵器と古式須恵器に属すると考えるが，胎土分析されたことはない。

前述したように，池の上・古寺墳墓群出土土器群の形態変化が小差であるにもかかわらずⅠ～Ⅳ式に分類されたが，これに対し拙稿でⅠ～Ⅲ式分類を示していた。今回の編年も全体的にはこれに準じるが，大きく変更したのは口唇部のみの変化ではなく，器形の全体的な変化である。第85図は，1991年に説明もないままに「伽耶はなぜほろんだか」というシンポジウムで発表したものであるが，その器形の変化とセット関係を編年図としたものである（註11)。それは，広口壺の口唇部と頸部，胴部形態の変化であり，小田茶臼塚古墳出土大甕の分類での基本的なものであった。口唇部の小変化と同時に頸部の直立から傾斜へ，突帯の発達から退化へ，胴部の長胴や角張りから丸胴や底部のすぼまりである。それまでは，D－7例を最古型式としたが，胴部や底部全体に丸味があり，口頸部が直線的に開口するのに対して，6号墳例は頸部が直立に近く，胴部の肩が張り，長胴気味で平底である。池の上の報告でのⅠ式とⅢ式の高杯の脚部，Ⅱ～Ⅳ式の把手付鉢の変化も小差であることから，この編年図を提示する。この編年では，池の上の報告のⅠ～Ⅲ式全体とⅣ式の一部をⅠ・Ⅱ式に分類したのであるが，これとて小差であることから，九州の須恵器全体の編年を考えると，Ⅰ・ⅡをⅠ式またはO式としてⅠをⅠa式（Oa式)，ⅡをⅠb式（Ob式）とすべきかもしれない。この時，小田富士雄氏が提示されている，神籠池や新貝窯を1－B期として，「加耶色の強いこれらの須恵器1－A期」（註12）とすることには賛同できない。それは，このⅠ・Ⅱ式には蓋杯を含まないなど，器形全体がいわゆる定型化以前であり，小田氏の1期と明確に区分できる型式であることによる。小隈窯跡の確認調査は実施されているものの，出土品が報告されていない現状では不安があるものの，山隈窯跡の発掘調査では蓋杯が共伴しなかったことが確認されている（註13)。さらに，朝倉窯産が確実となった諸田仮塚1号墳出土の蓋杯を含むセットが，Ⅱ式を一部含んでⅢ式に分類できることから，小隈窯跡に散布している蓋杯を含む古式須恵器のセットをⅢ式として，小田氏の1期より古式か，1期の中の古式に含まれるものと考える。

つぎに第85図の編年図について概要を述べておく。

Ⅰ式

Ⅰ式は，広口壺の口頸部の直立や胴部の肩の張り，底部の平底などが，瓮・袋口縁壺・短頸壺に顕著な特徴としてとらえられ，朝鮮半島の陶質土器に系統的に通じている。広口壺や器台の波状文も同じで，定型化した古式須恵器の繊細さとは違っており，粗雑さの中に大陸的なおおらかさがあり，D－1，D－7，D－5・7の波状文は簡略化されたものである。

高杯は，杯部の丸味と立上りの大きさと湾曲，蓋の深さがあり，脚部の器台に通じる突帯と屈曲が明瞭なこと。

把手付鉢は，口縁部の湾曲が明瞭なこと。

Ⅰ式の下段の土器群は，セット関係で不明確であるが，広口壺の胴部に丸味があり，Ⅰ・Ⅱ式の中間的な型式である。

Ⅱ式

Ⅱ式は，広口壺の口頸部が外反して大きく開口し，胴部に丸味がある。波状文は，器台に粗雑さが残るが，広口壺に繊細なものが出現している。

器台は，鉢部の口縁屈曲が少なく，丸味をもった深味のものとなり，脚部を含めて装飾的となるが，小田茶臼塚例のように簡素なものもある。

高杯は，杯部の立上りが低く，全体に浅くなり，脚部の透しなど切込み線を加えて，簡素化の傾向も見られ，粗雑な作りが多い。

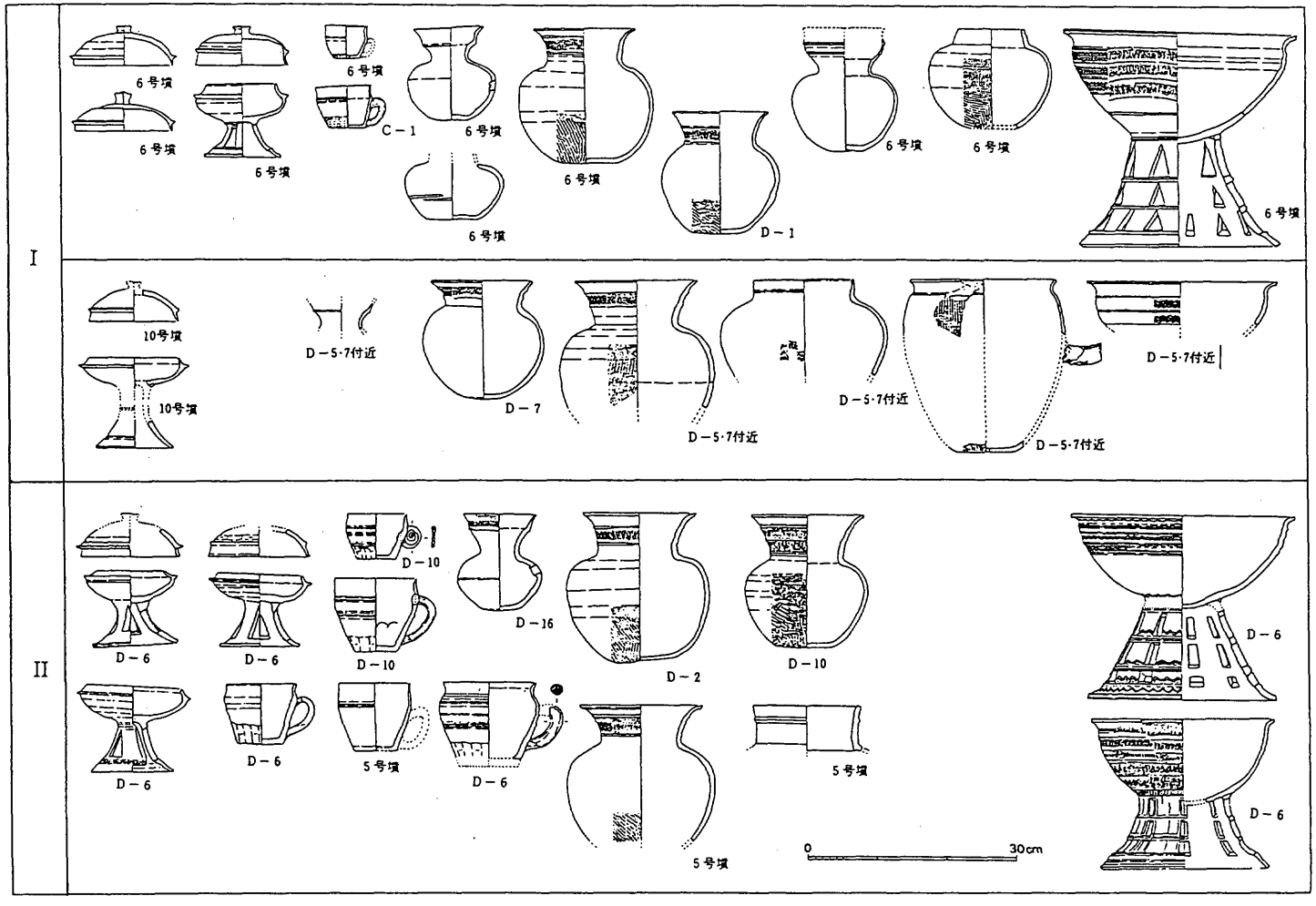
把手付鉢は，口縁部が直線的なものと，外反するものに胴部の肩が張り突線を多用するものがあり，把手が粘土紐の渦文を貼付したものもある。

Ⅱ式には，器高50～100cmの大型甕と，30cm前後の中型甕が伴なうことが確実で，大甕の頸部が直立して，上半で外反する口縁部下に三角突帯1本をめぐらし，胴部が長胴で肩が張るところが，Ⅰ式の壺の特徴と同様で，大型品ほど古式の様式を残すのは土器に限定されるものではない。胴部の調整は，古式のものほど内外面のタタキを完全にナデ消しており，朝倉窯の特徴の1つともなっている。中型甕は，胴部の内外面のタタキを消すものもあるが，一般的に外面に粗い平行タタキを残して数本の平行沈線をめぐらすのを特徴とし，内面タタキは消してある。また口頸部は低く外反して，口唇部の作りに小差の変化があるが，全体的には大型と同じように胴部の肩部が張るものが古式になるものと考える。

時期は，『甘木市史』で示したように，土師器などの共伴関係からⅠ式を5世紀前半の中頃，Ⅱ式を5世紀前半の5世紀中頃に近い頃，Ⅲ式を5世紀中頃とし，諸田仮塚1号墳の大半をⅢ式とするが，実年代には不確定要素が多く，前期古墳全体が古く位置づけられれば，それに応じて変動する。

3　分布

これらの朝倉窯産の初期須恵器は，第86図と地名表（表4）で示すように現在確認できたもので，46遺跡があり，その分布が窯跡が所在する朝倉郡西部を中心に，北側で福岡市西部の早良平野と那珂川中流域，東側が大分県日田盆地，西側が佐賀平野の中心地の佐賀市と大和町，南側が熊本県菊水町に達している。地名表に掲載した全部について胎土分析を実施したものではないが，その限界地に達している資料は三辻利一氏によって報告されたものである。地名表にある未分析の資料は，型式分類で示したように，広口壺・短頸壺・袋口縁壺・甕・器台・甕



第85図　池の上・古寺出土初期須恵器編年図（1/10）

に陶質土器や陶邑産初期須恵器にない特徴的なものを選定しており，90%以上が朝倉窯産である確信をもっている。

分布において，福岡市西部に達していながら，福岡平野と糸島で確認できなかったこと，日田盆地にありながら浮羽地方に少ないこと，佐賀平野に近年増加しないことは，資料収集における未確認要素があるかもしれないが，糸島・福岡・浮羽には地域に応じた特性をもっているものと考える。

朝倉窯が所在する朝倉平野西部には，前期古墳として焼ノ峠前方後方墳が営まれているものの，5世紀代になると東部の甘木市に権力が集中するらしく，前期古墳の神蔵古墳以後，当正寺古墳・小田茶臼塚古墳と中期古墳が造営され，初期須恵器も池の上・古寺墳墓群に集中している。両墳墓群に隣接している当正寺古墳の主体部内の副葬品は不明であるものの，小田茶臼塚古墳に先行することから，両墳墓群の盟主であることが明らかである。池の上墳墓群が地域の小墳墓群でありながら，初期須恵器を多量にもつことは，副葬されていた工具や初期馬具とも合わせて，渡来系工人集団の墳墓である可能性が強く，その工人集団を統率するのが当正寺古墳の被葬者達であると考える。

朝倉窯産の初期須恵器を供献する最大の墳墓は，筑紫平野最大の古墳群である八女古墳群初代の盟主ともいえる石人山古墳である。石人山古墳は，これまで5世紀後半とされることもあったが，初期須恵器が確認されたことにより，5世紀中頃以前となることによって，北部九州のこの時期で浮羽の月岡古墳に次ぐもので，朝倉地域と筑後地域が密接なものとなり，朝鮮半島との関連においても重要な位置を占める。窯跡の所在地も，諸田仮塚1号墳付近のと同じく，東西南北方向に対する交通の要所であると同時に，窯業としての地勢的な適地として選定されたものであろう。

（柳田）

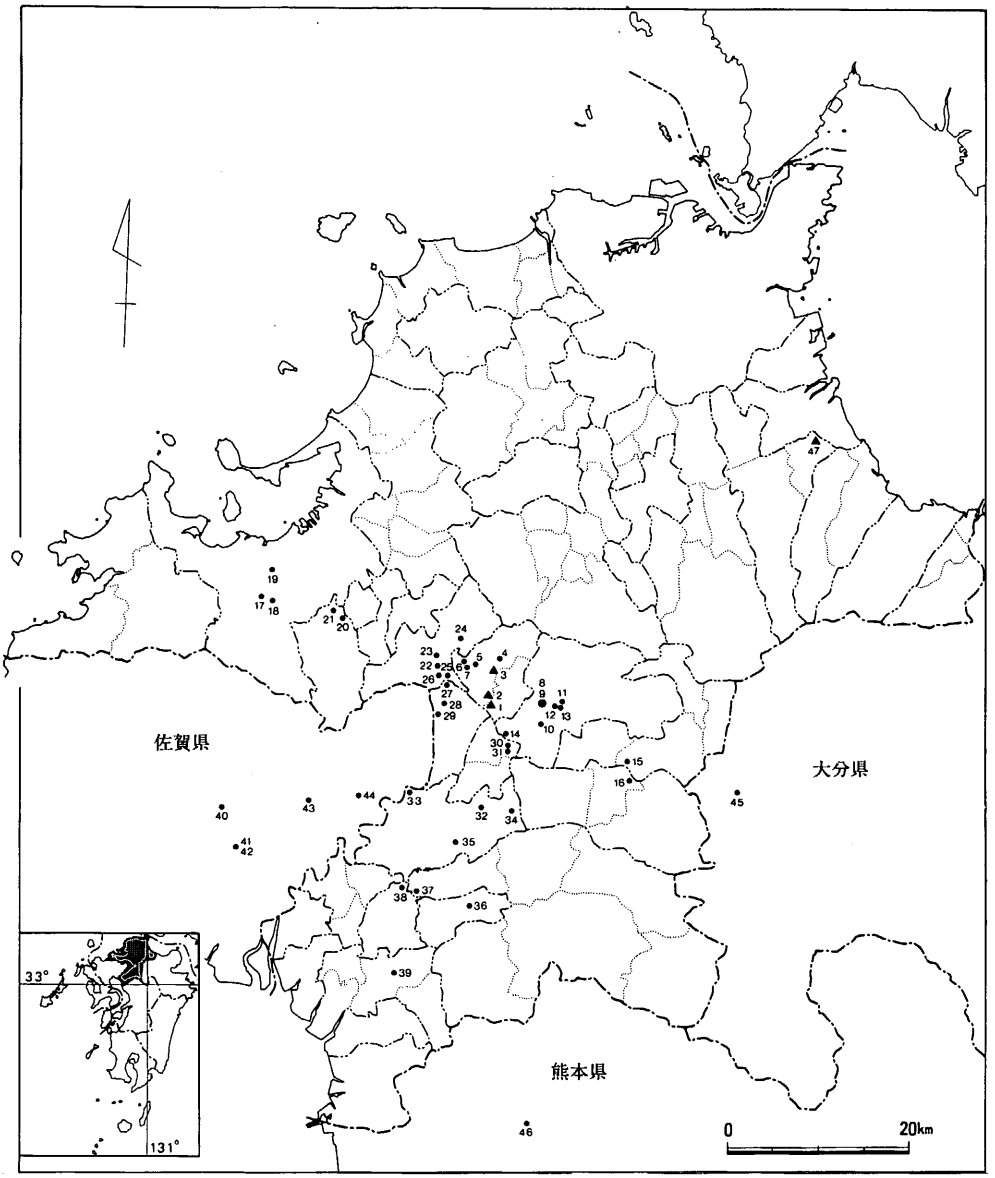
註1　木下之治・小田富士雄「周辺の遺跡遺物」「帯隈山神籠石とその周辺」『佐賀県文化財調査報告書』16，1967
註2　「池の上墳墓群」『甘木市文化財調査報告』5，1979
註3　「古寺墳墓群」『甘木市文化財調査報告』14，1982
註4　柳田康雄「原始」『甘木市史』上巻，1982
註5　「小田茶臼塚古墳」『甘木市文化財調査報告』4，1979
註6　柳田康雄編『甘木市史資料－考古編』1984
註7　「国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報」『福岡県文化財調査報告書』67，1984
註8　中村勝「甘木・朝倉地方の初期須恵器」『地域相研究』14，1984
註9　田辺昭三『須恵器大成』角川書店，1981
　　田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集，平凡社，1982
註10　蒲原宏行・多々良友博・藤井伸幸「佐賀平野の初期須恵器」『古文化談叢』15，1985
註11　柳田康雄「倭と伽耶の文物交流」『伽耶はなぜほろんだか』大和書房，1991
註12　小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2，日本古代，小学館，1979
註13　九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学』65，1990

表 4　朝倉窯系初期須恵器出土地名表

No.	遺跡名	遺　構	所在地	器　種	型式	伴出品	分析	文献
1	山隈窯跡	窯跡	福岡県三輪町山隈字城山	大甕・器台	初II・III	埴輪	○	1～4
2	小隈窯跡群	窯跡	夜須町下高場字小隈	大・中甕・広口壺・器台	初I～III		○	1～3
				杯・高杯				5～7
3	八並窯跡	窯跡	三並字鳥巣	中甕・壺・手捏土器	初I・II		○	1～3・8
4	梶原古墳群	3号墳石室	三並	杯	古I		○	9
		4号墳周溝		中甕	古I		○	
5	切　杭	21号住居跡	松延	広口壺・短頸壺	初II	土師器(IIIb)		10
		23号住居跡		広口壺	初II	土師器(IIIb)		
6	八ケ坪A	大溝	中牟田字八ケ坪	広口壺	初II		○	11
				広口壺	初II		○	
7	石　櫃	採集品	石櫃	紡錘車	初II			1・12
8	池の上古墳群	D－1	甘木市堤字池の上	広口壺・紡錘車	初I	土師甕(IIIb)		1・13・14
		D－2		広口壺・把手付鉢	初II			
		D-4		広口壺・小甕・甑	古I	土師壺・鉄器		
		D-7		広口壺	初I	鎌・刀子		
		D-5・7付近		広口壺・器台・高杯・甕	初I			
		D-14～16付近		把手付鉢・大甕・杯蓋	初II			
		D-16		甑	初II	鏃		
		D-19		紡錘車	初II			
		D-25付近		紡錘車・短頸壺・中甕	初II			
				大甕	古I			
		C-1		把手付鉢・杯蓋	初I			
		C-1北側		広口壺・高杯	初I			
		5号墳		広口壺・把手付鉢	初II			
				長・短頸壺・杯蓋				
		D-26		紡錘車2	初II	鎌・斧		
		6号墳		広口壺・直口壺・袋口壺	初I	鋏・鎚・武器・斧		
				高杯・把手付鉢・器台		金環・馬具		
		10号墳周溝		高杯・短頸壺・紡錘車	初I	土師高杯(IIIb)		
9	古寺古墳群	D-2	甘木市菩提寺字古寺	紡錘車	初II	有孔円盤・刀子		12
		D-3		紡錘車	初II			
		D-6棺外		高杯・把手付鉢	初II	鏃・鎌・刀子・斧		
		D-6周辺		広口壺・高杯・大甕・器台	初II	鋤先・大刀		
				把手付鉢	初II			
		D-9		短頸壺・紡錘車	初II	有孔円盤・臼玉		
						剣・鏃・鎌		
		D-10		広口壺・把手付鉢	初II	管玉・刀子・針		
		表採		広口壺・把手付鉢・蓋	初I・II			
		1号墳西南隅	字後牟田	大甕片	初II	土師器(IIIc)		13
				甑・杯蓋	古I	埴輪・馬具		
		12号墓周溝		中甕	古I	土師杯(IIIc)		
		16号墓周溝		中甕	古I	蓋杯・銅釧・玉		
		19号墓周溝		中甕・高杯・甑	古I	土師器(IIIc)		
						鎌・斧・鋤先・鏃		
						刀子・弓金具		
10	小田茶臼塚古墳	墳丘上	小田字茶臼塚	大甕・器台	初II・III	短甲・冑・武器	○	1・16
				甑	古I	玉・四環鈴		
11	柿原古墳群	G地区表採	柿原字大谷	甑	初II			17
		I地区7号墳		広口壺・中甕	初II	鎌・斧・刀子・土師器		18
		8号墳		広口壺・甑	初II	土師甕(IIIb)		
		19号墳		小甕	初II	土師高杯(IIIb)		
						鏃・鎌・刀子・斧		
		C-3		甑・小甕	古I	土師椀		
		C-4		甑	古I	土師椀・刀子		
		C-13		広口壺・甑	古I	土師椀		
		C-19		広口壺・短頸壺	初II	大刀		
		C-23祭祀		短頸壺	初II	土師坩・椀・鋤先		
		C-25		広口壺・蓋	初II			
		C-39		広口壺・甑	初III	土師椀・須恵器		
		表採		広口壺	初I			
12	柿原新池	表採	柿原字東	広口壺	初II			5

13	柿原コモ池	表採	柿原字林	小甕	初II			5
14	宮原遺跡	B・C地区3号住居跡	下溝字宮原	小甕	初I			19
		AI地区37・40・41号住		高杯・壺	初II	混入品		20
		45号住居跡		甕	初II	混入品		
		46号住居跡		壺・甕	初II	混入品		
		103号住居跡		大甕	初II	混入品		
		7号土壙		高杯	陶質・初			
		表採		甕	初II			
15	宝満宮古墳	石棺内	杷木町志波宝満宮	把手付鉢	初II			12
16	塚堂遺跡	C地区古墳前方	吉井町徳丸字宮田	把手付鉢・大甕・器台	初II			21
				大甕	古I			
17	吉武遺跡第3次	3号水路SD-02溝	福岡市西区吉武	広口壺	初I		○	22
		26-1,SH-01土壙		把手付鉢	初I		○	
	第4次			高杯蓋	初I		○	
		試掘		台把手付壺	初I		○	
		M・N16土壙墓		広口壺	初I		○	
	第5次	SK-05		広口壺・高杯・小甕	初II	蓋杯等・土師器		
	第11次	1号墳周溝		器台	初II	新しい須恵器		
18	金武小学校蔵	採集品	西区吉武	広口壺	初I			23
19	有田第6次	2号住居跡上層	早良区有田1丁目	台把手付壺・高杯	初II	土師高杯(IIIb)		24～26
		SK-09		広口壺・鉢・大甕	初II			
		SD-07		器台	初II			
		SK-01		器台・大甕	初II			
		ピット,表土		広口壺・器台・高杯	初II			
				把手付鉢	初II			
20	松　木	140街区祭祀遺構	那珂川町松木字瀬戸口	広口壺・小甕	初II	土師高杯・坩・(IIIa)	○	27
21	井河古墳群	1号墳	片縄字井河	壺・小甕	初II		○	28
22	諸田仮塚古墳群	1号墳	筑紫野市諸田字仮塚	甑・中甕・大甕	初II・III		○	本報告
				壺・杯蓋	古I		○	
23	木　山	採集品	永岡字木山	広口壺	初I			29
24	八ケ坪	6・7地点22a・b住居跡	山家	器台	初II			30
25	天　神	小溝	隈字天神	小甕	初III	甕(陶邑)	○	31
26	平原古墳群	2号墳石室・周溝	字平原	広口壺・短頸壺・甕	初II	中甕(陶邑)	○	
27	津古片曽葉古墳群	1号墳周辺	小郡市津古字片曽葉	甑・袋口壺・大甕	初I	土師甕(IIIa)		32
28	三沢栗原	86号住居跡	三沢	大甕・杯・坩	初II			33
29	西　島	1号住居跡	三沢字栗崎	大甕片	初II	土師器(IIIb)		34
		13号住居跡		広口壺	初II	土師器(IIIb)		
30	西森田	IV次SD-1	大刀洗町本郷字西森田	広口壺・中甕	初II	土師器(IIIb)・瓦質壺		35
		SD-3		甑	古I			
31	町　浦	1号甕棺墓	本郷字町浦	大甕	初III	土師甕(IIIb)		36
32	木塚古墳		久留米市善導寺町木塚	大甕・器台	初II	樽形瓮	○	37
33	小森野	川底採集品	小森野町宝満川	広口壺	初II	土師器		12
34	草野	採集品	草野資料館	広口壺	初II			38
35	西行古墳群	2号墳周溝	高良内町	小甕	初II～	中甕(陶邑)		39
		11号墳周溝		大甕・中甕・器台	初II	樽形甑(陶邑)	○	
				把手付鉢		土師器(IIIb)		
36	立山山古墳群	12号墳周溝	八女市本字立山	中甕	初II	土師器	○	40
						玉・鎌・斧・刀子		
		24号墳周溝		大甕	初II	土師器(IIIb)	○	
						鏡・剣・鉄環・玉		
37	石人山古墳	墳丘採集	広川町	器台・広口壺	初II	埴輪	○	41
38	瑞王寺古墳	墳丘	筑後市西牟田字松尾	器台・高杯	初II	鏡・馬具・埴輪	○	41
				杯身・大甕	古I	(陶邑)		
39	瀬　高	採集品	瀬高町女山	中甕	初II			42
40	礫石古墳群	8号墳表採	佐賀県大和町久池井字野口	壺・甑・把手付鉢	初II	土師高杯・壺	○	43～45
41	西原古墳群	ST004古墳墓道	佐賀市久保泉町川久保	大甕	初II	須恵器IIIcと共伴	○	44・45
42	鈴熊古墳群	ST001古墳周溝	川久保	袋口縁壺・中甕	初II	土師杯・壺	○	44・45
		ST002古墳周溝		壺・中甕	初II	須恵甑・甕(陶邑)	○	
43	狼嶽A		神埼町城原字湯原	甕	初II		○	45
44	東尾大塚古墳		北茂安町東尾字大塚	広口壺	初II	蓋杯(陶邑)	○	44・45
45	小迫墳墓群	第1区	大分県日田市	把手付鉢	初II		○	46
46	竈門寺原古墳群	1号墳石室	熊本県菊水町竈門字寺原	袋口縁壺	初II	樽形甑(陶邑)	○	47
47	居屋敷窯跡	窯跡内	福岡県豊津町徳永字居屋敷	甑・大甕	初II		○	48

註49



第86図　朝倉窯系初期須恵器分布図

文　献

註1　柳田康雄「原始」『甘木市史』上巻1982
　　柳田康雄編著『甘木市史資料－考古編』甘木市，1984
註2　三辻利一「茶臼塚古墳・隈遺跡群及び古窯跡出土の須恵器の胎土分析」『甘木市史資料－考古編』1984
註3　平田定幸「朝倉の初期須恵器窯跡」『甘木市史資料－考古編』1984
註4　九州大学考古学研究室「山隈窯跡群の調査」『九州考古学』65，1990
註5　中村勝「甘木・朝倉地方の初期須恵器」『地域相研究』14，1984
註6　中村勝「朝倉古窯跡群の一姿相」『九州考古学』66，1991

註７　「小隈窯跡群Ⅰ」『夜須町文化財調査報告書』12，1988
註８　中村勝「福岡県朝倉郡八並窯跡群出土の祭祀遺物」『九州考古学』60，1986
註９　「梶原遺跡」『夜須町文化財調査報告書』22，1991
註10　「切杭遺跡」『夜須町文化財調査報告書』36，1997
註11　「夜須地区遺跡群Ⅲ」『夜須町文化財調査報告書』９，1988
註12　「古寺墳墓群」『甘木市文化財調査報告』14，1982
註13　「池の上墳墓群」『甘木市文化財調査報告』５，1979
註14　柳田康雄「倭と伽耶の交物交流」「伽耶はなぜほろんだか」大和書房，1991
註15　「古寺墳墓群Ⅱ」『甘木市文化財調査報告』15，1983
註16　「小田茶臼塚古墳」『甘木市文化財調査報告』４，1979
註17　福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』４，1984
註18　福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』６，1986
註19　福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』14，1988
註20　福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』17，1990
註21　福岡県教育委員会「塚堂遺跡Ⅰ」『一般国道210号線浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告』１，1983
註22　横山邦継・下村智・三辻利一・杉直樹「福岡市・飯盛遺跡出土陶質土器の産地推定」『古文化談叢』18，1987
註23　中村勝・横山邦継「福岡市金武小学校蔵の須恵器」『古文化談叢』18，1987
註24　山崎純男「福岡市有田遺跡出土の陶質土器と古式須恵器」「古文化談叢」６，1979
註25　三辻利一・杉直樹「北九州の初期須恵器の胎土分析」「古文化談叢」16，1986
註26　「有田・小田部」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』377，1994
註27　「松木遺跡Ⅰ」『那珂川町文化財調査報告書』11，1984
註28　「井河古墳群」『那珂川町文化財調査報告書』10，1983
註29　緒方俊輔「筑陽学園高等学校所蔵（筑紫野市木山遺跡出土）の初期須恵器」『福岡考古』14，1989
註30　「八ケ坪遺跡第６・７地点」『筑紫野市文化財調査報告書』22，1989
註31　「国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報」『福岡県文化財調査報告書』67，1984
註32　「津古片曽葉遺跡」『小郡市文化財調査報告書』78，1992
註33　「三沢栗原遺跡Ⅲ・Ⅳ」『小郡市文化財調査報告書』23，1985
註34　「三国地区遺跡群６」『小郡市文化財調査報告書』109，1996
註35　大刀洗町教育委員会の赤川正秀氏の御教示。
註36　「大刀洗町内遺跡群」『大刀洗町文化財調査報告書』３，1993
註37　「木塚遺跡」『久留米市文化財調査報告書』14，1977
註38　久留米市教育委員会の立石雅文氏の御教示。
註39　「西行古墳群」『久留米市文化財調査報告書』84，1993
註40　「立山山古墳群」『八女市文化財調査報告書』10，1983
註41　「瑞王寺古墳」『筑後市文化財調査報告書』３，1984
註42　瀬高町在住の故村山健二氏の採集品
註43　「礫石遺跡」『佐賀県文化財調査報告書』91，1989
註44　蒲原宏行・多々良友博・藤井伸幸「佐賀平野の初期須恵器・陶質土器」『古文化談叢』15，1985
註45　三辻利一・杉直樹「北九州の初期須恵器の胎土分析」『古文化談叢』16，1986
註46　大分県教育委員会「小迫墳墓群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書』３，1995
註47　「竈門寺原遺跡」『熊本県文化財調査報告書』149，1995
註48　福岡県教育委員会「居屋敷遺跡」『一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』６，1996
註49　土師器の型式は，柳田康雄「土師器の編年－九州－」『古墳時代の研究』６，1991，雄山閣出版

3．埴輪について

円筒埴輪は黒斑をもたず外面調整に横ハケを採用することから川西宏幸の編年によればⅣ期に該当する。また薄い器壁や丁寧な横ハケ調整，シャープな突帯等から考えてⅣ期の中でも古く位置付けられるが，これは須恵器から考えられる年代観と矛盾がない。

本古墳の円筒埴輪の特徴として挙げられるのは，須恵質・半須恵質のものが約半数を占める点であり，中には須恵器と見紛う程に硬質に焼き上がっているものもある（註1）。福岡県内で明らかに須恵質と呼べる埴輪は少なく，同時期のもので出土埴輪の大半が須恵質で占められるもとしては八女市釘崎2号墳が挙げられる程度である。他にも若干量の須恵質埴輪は出土しているが偶発的と呼べるような頻度に過ぎない。おそらく焼成段階の技術が独自のものであり，埴輪工人の性格の一端を垣間見ることができる。

形象埴輪は家・鶏・馬・靫が確認できた。これをセットとして捉え，当該期の周辺の資料と比較していえることを纏めておきたい。

まず共通して含まれるものを挙げれば，家・馬がそれに当たる。この2種はこの時期の形象埴輪を有するほとんどの古墳で揃って出土している。

そしてこの古墳の特徴として鶏の存在がある。鶏の出土は県下においては少なく，筑後市瑞王寺古墳・八女市岩戸山古墳で出土しているのみで，さらに同時期といえるのは前者に限られる。その他にも埴輪と呼ぶかどうかは疑問を残すが小郡市津古生掛古墳からは鶏を象った二重口縁壺が，また岩戸山古墳からは石製品の鶏が出土している。本例のように鶏形埴輪の全容がある程度理解できるのは九州においては初例である。羽根の表現・尾羽の造形等にダイナミックなものがあり，本州で出土するものと比べても遜色ない優品である。

他の古墳にあってここにないものとしては，盾・蓋といった器財埴輪と人物が挙げられる。器財埴輪に関しては靫と思われる小片を確認できたのみであり，他古墳とは対照的である。那珂川町カクチガ浦10号墳では家形埴輪と馬形埴輪が1体づつ樹立されていたのみであるが，このように比較的小規模な円墳の場合は形象埴輪のセットにおいて欠落する要素が多いのであろうか。

本古墳の円筒埴輪・形象埴輪の供給元については埴輪窯の調査例が極めて少ない現段階においては具体的な地を述べることはできない。本地域には円筒埴輪が出土する古墳に関して十分な情報がないが，隣接する甘木・朝倉地域及び福岡平野の同時期の円筒埴輪と比較すれば，先に述べた特徴に加えて横ハケの手法・透孔の大きさ・口縁部の形態等において類する資料はなく，この周辺の狭い地域内で活動する工人集団が存在したことが想定でき，後で論じられる胎土分析の結果もそれを裏付けるものである。ただし小地域で活動する工人集団とはいえ，立派な形象埴輪を伴う等その技術は高く，単発的に組織された工人集団ではなく熟練した工人が関与していたことが想定できる。おそらくこの地域以外でも埴輪生産に従事していたと考えられ，

埴輪の類似度から工人集団の動向を理解していく必要があろう。

1号墳から出土した円筒・形象埴輪は残存状況は良好とは言えないが，数多くの新情報を与えるものである。また形象埴輪とのセット関係も把握でき，しかも共伴する須恵器や石室の形態から時期が判明するといった資料は北部九州において未だ少ない。本古墳の資料が当該期を論じる際の基準資料の一つとして加えられることは間違いない。（岸本）

註1　ここで「須恵質」と呼んでいるのは焼成が須恵器に近いものであり，整形・調整に関してはごく一般的な埴輪と何ら変わる所はない。

参考文献
川西宏幸　1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
宮原千佳子編　1990『カクチガ浦遺跡群』那珂川町文化財調査報告書第23集
川述昭人編　1984『瑞王寺古墳』筑後市文化財調査報告書第3集
宮田浩之・柏原孝俊編　1987『津古生掛遺跡』Ⅰ　小郡市文化財調査報告書第40集

4．諸田仮塚・永岡遺跡出土石器群について

今回報告した諸田仮塚遺跡と永岡遺跡は南北に近接する遺跡である。南調査区である諸田仮塚遺跡より多量の石器群が出土した。この諸田仮塚遺跡は西方の基山より東に派生している舌状丘陵上に立地するが，古墳築造時，遺跡内は大きく改変されている。そのため，丘陵上にあったと推測される石器包含層の一部はこのとき破壊されたと考えられる。また，石器群の大半は古墳の周溝や周辺で採集されたものであり，一括資料の認定は容易ではない。

諸田仮塚，永岡の両遺跡出土石器群は量的な差はあるが，基本的には大きな時期差を持たないと考えられる。その一方でこれらは，一時期の所産ではなく多時期に及んでいる。旧石器時代に関してみると，ナイフ形石器文化後半期と細石刃文化期の大きく2時期に分けられる。ここでは，石器群そのものの分析が不可能なため，主要石器を中心にみてみたい。

1　ナイフ形石器文化後半期

ナイフ形石器文化後半期では，横長剥片素材ナイフ形石器，角錐状石器，小型縦長剥片素材ナイフ形石器の3つの主要器種が注目される。

横長剥片素材ナイフ形石器は，瀬戸内技法の影響によるものと考えられるが，個別観察ではいずれも国府系ナイフ形石器とは認め難い。ただし，盤状剥片石核より素材剥離が行われていることや，諸田仮塚遺跡40の交互剥離による盤状剥片などから瀬戸内技法に近い剥片剥離技術が存在したことは間違いない。一方，両側縁への加工や腹面基部への平坦剥離調整は，古い時期の国府系ナイフには認められない様相である。このことからも，瀬戸内技法の影響により出現する時期的に少し新しいナイフ形石器と理解できよう。一方，この筑紫平野において，瀬戸内技法の存在を認定しうる資料が検出された遺跡は多数あるが，瀬戸内技法の各工程がセット

で確認できる遺跡は現在報告されている限りでは佐賀県船塚遺跡とサヌカイト原産地の東分遺跡に限られる。この両遺跡の内容から，九州地域においてもほぼ純粋な瀬戸内技法が一時期存在したことは確かだが，筑紫平野という小地域において，その展開が普遍的なものであったかは今後さらに検討する必要がある。すなわち，石材消費の状況によっては製作技術が柔軟に変異し，多少タイプの異なるナイフ形石器が製作されることも考えられるのである。

角錐状石器はかなりまとまって出土しており，全て5cm以下の小型品である。形態にバラエティーがあるが，急角度剝離と稜上調整の介在や尖頭部の作出と大半が腹面に素材面を残すという点で共通している。このような角錐状石器主体の石器群は周辺では宗原遺跡がある。宗原遺跡は槍先形尖頭器を組成に持つ大型石器群で特異だが，角錐状石器が卓越する点では共通している。また，極端に大きさが違うものの，どちらも尖頭部作出が明瞭で製作技術的には大きな差はない。このことから両者遺跡は時期的に並行関係にあり，器種の大小差は遺跡の機能差による結果として理解される。それは，8の黒耀石製角錐状石器が宗原石器群に含まれていることからも肯定されよう。

今回の石器群では，接合資料がないものの比較的製品と素材の関係がわかる資料として2～4の小型ナイフ形石器と28～30の小型縦長剝片がある。剝片の一部に石核のポジ面を取り入れており，板状の石核より石核ポジ面を取り入れる形で打点を移動しながら剝片剝離が行われたことが考えられる。このような技術基盤を持つ石器群は福岡地域においてはいまのところ報告事例はなく，東九州地域の製糸工場前遺跡などに近い内容を持つものと考えられる。東九州地域におけるこの種の技術基盤を持つ石器群はナイフ形石器文化の終末期に近い時期が与えられており，福岡地域において不明であったこの時期の石器群の内容の一端が確認された点は評価されよう。

2　細石刃文化期

細石刃文化期では諸田仮塚遺跡で出土した53・54の細石刃核ブランク2点が注目される。分割された礫の剝離面より側面への石核調整を行い，舟底状のブランクを作出する製作工程は，船野型細石刃核の技術的範疇に含まれるものである。この船野型細石刃核は，細石刃文化期の初期より東九州を中心に分布し，技術的に変容しながらも比較的長い間存続したと考えらている。そして，同地域の主要石材である流文岩の分布域と基本的には一致している。ところが，今回出土した船野型と考えられる細石刃核はいずれも黒耀石製である。西北九州黒耀石地帯では，わずかに上場台地等で散見される程度であり，主体的なものではない。福岡地域においては，福岡市有田遺跡15次，夜須町中島堤遺跡，久留米市赤池遺跡等で確認されている程度である。報告した2つのブランクは想定される作業面幅も比較的ひろく，船野型細石刃核の新しい時期の特徴である積極的な下縁部への調整が行われていないことから細石刃文化期のそう新しくない時期が考えられる。　（杉原）

表 5　旧石器時代の石器観察　諸田仮塚遺跡

No.	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考	出土地点
1	ナイフ形石器	サヌカイト	5.90	2.35	0.85	13.60	先端部わずかに欠	1号墳西周溝内
2	ナイフ形石器	サヌカイト	(4.95)	1.60	0.55	3.70	先端部欠	1号墳丘下東斑点層
3	ナイフ形石器	サヌカイト	(5.65)	1.20	0.70	4.20	先端部欠	1号墳西周溝内
4	ナイフ形石器	サヌカイト	(3.50)	1.75	0.85	5.90	先端部から胴部欠	1号墳西側
5	ナイフ形石器	黒耀石	(2.80)	1.55	0.65	3.00	先端部から胴部欠	1号土坑墓
6	ナイフ形石器	黒耀石	(2.40)	1.35	0.65	2.10		1号墳東斑点層
7	台形石器	黒耀石	2.85	1.85	0.80	3.10		2号土坑墓
8	角錐状石器	黒耀石	3.75	1.55	1.00	4.30		1号墳北西側地山
9	角錐状石器	サヌカイト	3.40	3.35	0.80	2.60		1号墳丘東盛土中
10	角錐状石器	黒耀石	(4.25)	1.65	1.10	5.40	先端部欠	1号墳丘北盛土中
11	角錐状石器	黒耀石	3.45	1.15	0.80	2.70	胴部以下欠	南斜面⑨
12	角錐状石器	黒耀石	(3.15)	1.85	0.80	2.90	未製品	1号墳南東裾地山直上
13	角錐状石器	黒耀石	3.30	2.20	1.25	8.20		1号墳西北側
14	彫器	サヌカイト	5.90	2.95	1.20	19.10		1号墳丘下層⑩
15	彫器	サヌカイト	4.40	2.50	1.00	7.50	両端にファシットが入る	1号墳丘上1号土坑埋土中
16	彫器	黒耀石	3.30	1.00	0.65	1.90	スポール転用	1号墳周溝内
17	スクレイパー	黒耀石	2.70	3.50	0.85	8.60		1号墳南周溝
18	スクレイパー	黒耀石	3.90	3.15	1.35	15.00		1号墳丘北西トレ盛土中
19	スクレイパー	サヌカイト	5.85	3.05	1.80	23.10		1号墳丘下北斑点層
20	スクレイパー	サヌカイト	4.30	2.00	0.70	5.10		1号墳丘下旧表土下
21	二次加工剥片	サヌカイト	4.95	2.70	0.95	10.00		1号墳丘石室内カクラン
22	微細剥離を有する剥片	黒耀石	4.10	1.70	1.10	5.90		1号墳丘北東盛土中
23	微細剥離を有する剥片	黒耀石	(4.90)	5.15	1.20	11.40	末端部欠	1号墳丘南盛土中
24	微細剥離を有する剥片	黒耀石	(3.50)	1.50	0.60	3.10	打点部欠	1号墳丘下北斑点中
25	磨面ある剥片	サヌカイト	4.50	2.60	0.90	12.00		1号墳南東盛土
26	スポール	黒耀石	2.70	0.65	1.00	1.00		1号墳南側
27	剥片	黒耀石	3.15	1.25	0.40	1.50		遺構面
28	剥片	黒耀石	3.20	1.00	0.60	2.00		1号墳丘下北斑点層
29	剥片	サヌカイト	4.05	1.70	0.85	5.20		1号墳丘下黒色地土内
30	剥片	サヌカイト	5.80	1.60	0.95	8.00		1号墳丘下北斑点層
31	剥片	黒耀石	5.50	2.00	1.20	8.50	質悪い黒耀石	2号不整土坑上層
32	剥片	サヌカイト	4.60	2.20	0.85	6.80		1号墳西側地山直上
33	剥片	サヌカイト	(3.30)	2.20	0.90	4.80		1号墳丘南東トレ盛土中
34	剥片	サヌカイト	3.85	2.00	0.45	3.10		1号墳丘上
35	剥片	黒耀石	4.05	3.10	0.70	6.70		1号墳北西側
36	剥片	黒耀石	4.05	2.90	1.25	10.00		1号墳丘上
37	剥片	サヌカイト	4.30	3.95	1.00	14.50		1号墳丘下層
38	剥片	黒耀石	2.65	3.20	0.90	6.20		1号墳周辺
39	剥片	黒耀石	3.80	3.45	1.05	4.80		1号墳西側
40	剥片	サヌカイト	4.45	6.00	1.55	41.30	盤状剥片	1号墳北東盛土内
41	剥片	黒耀石	3.75	3.55	0.95	10.00		1号墳丘上北西トレ
42	剥片	珪質岩	3.00	3.50	1.45	12.80		1号墳丘下旧表以下東側
43	剥片	黒耀石	2.45	2.20	1.40	8.80		1号墳南周溝
44	剥片	珪質岩	2.85	3.45	1.10	8.70		1号墳西側
45	剥片	黒耀石	(2.10)	1.95	0.45	1.10	「切断剥片」	1号墳丘上北東盛土中
46	剥片	黒耀石	(2.00)	1.35	0.75	1.80	「切断剥片」	1号墳南側
47	石核	黒耀石	1.75	4.00	3.30	27.50		1号墳丘北東盛土中
48	石核	黒耀石	5.25	2.30	3.95	48.70	質悪い黒耀石	1・2号墳間ドテ
49	石核	サヌカイト	1.90	5.00	4.00	36.90		1号墳丘北盛土中
50	石核	黒耀石	1.60	3.50	3.10	15.60		1号墳丘下2号土坑
51	石核	サヌカイト	2.20	4.85	3.50	25.60		1号墳丘下東斑点層
52	石核	黒耀石	1.00	1.45	1.50	2.30		1号墳西側
53	ブランク	黒耀石	4.00	2.10	2.20	13.30		1号墳北周溝

No.	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考	出土地点
54	ブランク	黒耀石	4.25	2.30	2.25	21.20	不純物多い黒耀石	2号不整形土坑上層
55	敲石	花崗岩	8.75	3.65	3.50	135.50	磨滅著しい	1号墳丘下・旧表下
56	敲石	硬質砂岩	6.40	2.85	1.50	36.70	裏面に新しいワレ	2号墳周溝⑧

旧石器時代の石器観察　永岡遺跡

No.	器　種	石　質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考	出土地点
1	ナイフ形石器	サヌカイト	7.70	2.70	1.10	16.50		大溝2上層下部
2	ナイフ形石器	サヌカイト	4.00	1.70	0.70	4.50		大溝2東中層
3	角錐状石器	サヌカイト	(3.15)	1.50	1.15	5.80	先端欠	大溝1中層
4	角錐状石器	黒耀石	(2.10)	1.45	0.85	2.00	欠端～胴部欠	大溝1西下層
5	角錐状石器	黒耀石	3.05	2.40	1.00	6.00	未製品	地すべり黒褐色土
6	剝片	黒耀石	3.00	1.30	0.60	1.60		大溝1中層
7	剝片	黒耀石	(3.25)	1.40	0.65	2.60	未端部欠	褐色土

参考文献

九州旧石器文化研究会編　1997『九州の細石器文化』
杉原敏之　1997「筑紫平野の尖頭器石器群」『九州旧石器』第3号　九州旧石器文化研究会
松藤和人　1985「九州における国府系旧石器の系譜」『肥後考古』5　肥後考古学会
水ノ江和同編　1994『宗原遺跡』福岡県文化財調査報告第116集　福岡県教育委員会
八尋実編　1984『船塚遺跡』神埼町教育委員会
山下実・富永直樹　1984「佐賀県東分の旧石器」『旧石器考古学』27　旧石器文化談話会

5．田中幸夫氏収集の諸田仮塚遺跡出土遺物

田中幸夫氏が生涯をかけて収集された考古資料および蔵書は，現在九州歴史資料館に収蔵されているが，この中に諸田仮塚遺跡出土の須恵器3点と耳環2点が含まれる（図版47)。九州歴史資料館　1982『田中幸夫寄贈品目録』90頁の132-1～132-3は「福岡市博多区諸岡仮塚」とあるが誤りで，土器には「筑紫郡筑紫村諸田仮塚」と注記がされている。今回調査した1・2号墳からの出土品とは限らないが，131-2の須恵器高杯1組は1号墳と，131-1の須恵器杯1点および131-3の耳環2点は2号墳と，それぞれ同時期として良いものである。この場を借りて，報告するとともに，目録の訂正を行いたい。　（小川）

Ⅳ．科学的分析

諸田仮塚１号墳出土初期須恵器と埴輪の蛍光Ｘ線分析

奈良教育大学　三 辻 利 一

１）はじめに

九州北部地域の初期須恵器の窯としては，朝倉窯群，神籠池窯，新貝窯，筑紫野窯，居屋敷窯などが知られている。これらの窯のうちで，朝倉窯群の製品のみが筑紫領国と推定される地域内の古墳から出土することが蛍光Ｘ線分析法によって確認されている。神籠池窯の製品は窯周辺の古墳からしか検出されていない。残りの窯については，その製品がどの古墳に供給されているのか全く不明である。

他方，九州北部地域の古墳から出土した須恵器も相当数，分析されており，朝倉窯群の製品とともに，かなりの数の大阪陶邑窯群産と推定される須恵器が検出されている。古墳によっては朝倉窯群の製品のみが検出され，その逆の，大阪陶邑産の製品のみが出土する古墳もある。多くの古墳では朝倉群産と陶邑群産の製品が共存している。このような，古墳における初期須恵器の分布は考古学的にみて，何を意味するのか，これは重要な問題である。いよいよ，この問題について何らかの考察を加えるべき段階に入って来た。すでに，大阪陶邑産の製品は九州北部地域のみならず，全国各地の古墳から出土することは常識となりつつある。果して，すべての前方後円墳に陶邑産の製品が埋蔵されているのか，また，円墳，方墳，さらには，時期が少し下って，横穴墓群にも陶邑産の須恵器が配布されていたのだろうか。いずれも倭王国に関する重要な情報を秘めていると思われる。いよいよ，考古学者と分析化学者の緊密な共同研究が必要な時機が到来したのである。

本報告では諸田仮塚１号墳，それに西行２号，５号，11号墳から出土した初期須恵器の分析データを報告するとともに，これまで，その化学特性が知られていなかった居屋敷窯の初期須恵器の分析結果についても報告する。さらに，諸田仮塚１号墳から出土した埴輪胎土の蛍光Ｘ線分析の結果についても併わせて報告する。

２）分析法とデータ解析法

すべての資料は表面を研磨して付着汚物（自然灰釉も含めて）を除去したのち，胎土をタングステンカーバイド製の乳鉢を使って粉砕した。100メッシュ以下の粒度の粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして，約13トンの圧力を加えてプレスし，内径20㎜，厚さ５㎜の錠剤試

料を作成した。錠剤試料は試料ホールダーに詰められ，6列8行の自動試料交換機にセットされた。波長分散型の蛍光X線分析装置（理学電機製3270型機）でK，Ca，Fe，Rb，Sr，Naの6元素の蛍光X線強度を測定した。標準試料としては岩石標準試料JG-1を使用した。通常，標準試料の蛍光X線強度との比較から，含有量が%濃度やppm濃度に変換されるのであるが，筆者は1日に測定される1セット，48個の試料中に1個，岩石標準試料JG-1を入れておき，JG-1に標準試料としての役割とともに，分析装置の安定性をチェックするためのモニターとしての役割ももたせることにした。そのため，普遍化された蛍光X線強度として，JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で分析値を表示することにした。測定の結果，分析装置が打ち出してくるネットの蛍光X線強度はKcps（すなわち，10^3カウント/秒）であるが，JG-1による標準化値は単位のない蛍光X線強度である。この値は電流・電圧の測定条件が変わっても，また，エネルギー分散型，波長分散型のように機種が変わっても大きな変動はしない。再現性の良い値をもつ。古代土器の産地推定法の開発研究はロングランの研究であり，それだけに，再現性の良い分析値を得るようにしておくことは必要である。勿論，その日に測定した分を検量線からJG-1の蛍光X線強度を使って%やppm濃度に変換してしまうのが通常の方法である。しかし，JG-1による標準化値を使えば，いちいち，%やppm濃度に変換する必要もない。この研究は大量の分析試料を取り扱うので，分析手法をできるだけ簡素化しておくことが必要である。以上が分析値としてJG-1による標準化値を採用する理由である。勿論，いくつかの標準試料を使って，JG-1による標準化値と%，ppm濃度の間に直線性があることが確かめられているので，JG-1による標準化値から%やppm濃度に変換することは可能である。

K，Ca，Rb，Srの4元素が地域差を有効に示す因子であることが全国の窯跡出土須恵器の分析データから立証されている。このうち，K，Caは主成分元素であり，母岩の長石類中に主として，存在したと推定されている。Rb，Srは土器中には通常，数10ppm程度は含有されているが，一応，微量元素である。しかし，RbはKと，また，SrはCaと良好な正の相関性をもつところから，Rb，Srもまた，母岩中では長石類にそれぞれ，K，Caと共存したと考えられる。

このような背景を考慮に入れて，K-Ca，Rb-Sr分布図を作成し，定性的に試料の特徴を把握することにした。通常，窯跡出土須恵器は両分布図上で集中して分布する。したがって，この窯跡出土須恵器が分布する領域内に，遺跡出土須恵器が分布すれば，その窯跡が産地ということになる。作図法による産地推定は目に見える形で産地に対応させるので，理解し易い点で優れる。しかし，定性的にしか対応させることはできない点で改良が必要となる。定量的に産地推定をしようとすると，統計学の手法の導入が必要である。その方法を2群間判別分析法という。簡単にいえば，可能性のある2つの産地のどちらに帰属するかを決定する方法なのであ

る。この方法については分析結果の項で説明する。

3）分析結果

初期須恵器の分析データは表1にまとめられている。全分析値はJG-1による標準化値で表示されている。このデータを使って作成した分布図から，定性的に産地を推定してみた。

図1には，諸田仮塚1号墳出土初期須恵器の両分布図を示してある。両図にはまた，多数の陶邑群，朝倉群の試料を使って描いた陶邑領域と朝倉領域を示してある。No. 1，4，7，12の4点を除く他の試料は両図において朝倉領域に対応することがわかる。ここで，これらの試料について，陶邑群と朝倉群の2群間で判別分析を試みることにした。そのために必要な因子がマハラノビスの汎距離という統計学上の距離である。この値を求めるための公式は統計学の本に書かれているので，ここでは省略する。正負両方の符号をもつと，データ解読が煩雑になるので，二乗して負符号を除去して使用する。陶邑群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をD^2（陶邑），朝倉群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値をD^2（朝倉）という記号を使って表示する。この値を筆者はK，Ca，Rb，Srの4因子を使って計算している。計算値は表1の最右欄に示されている。難しいので説明は省略するが，ホテリングのT^2検定と呼ばれる一種のF検定にかけると，各母集団の領界，別のいい方をすれば，各母集団への帰属条件が決定する。通常，D^2（X）≦10が各母集団（X）への帰属条件となる。古墳出土の須恵器にこの条件を適用すると，産地（X）に帰属するための条件ともなる。表1をみると，No. 2，3，5，6，8，9，10，11の8点がD^2（朝倉）≦10の条件を満足する。したがって，これら8点は図1からも予想されるように，朝倉群産の初期須恵器と推定される。No. 1，12の2点は陶邑群に対応するようにみえるが，Rb-Sr分布図では陶邑領域をずれており，目下のところ，対応する初期須恵器の窯が見つかっていないので，産地不明としておく。しかし，No. 1とNo. 12は全因子で類似しており，同一産地の製品とみられる。他方，No. 4とNo. 7は図1から明らかに陶邑領域にも，朝倉領域にも対応しない。両群の重心からのD^2値も大きい。これに対応する窯跡も見つかっていないので，産地不明とした。No. 4とNo. 7も同一産地の製品である可能性もある。

次に，西行古墳群の初期須恵器の両分布図を図2に示す。No. 14，17の2点は両図で陶邑領域に，また，No. 13，19，20の3点も両図で朝倉領域に対応しており，それぞれ，陶邑群産，朝倉群産の須恵器と推定される。表1でも，D^2（陶邑）≦10，D^2（朝倉）≦10の帰属条件を十分満足していることがわかる。No. 15は両分布図では陶邑領域の境界附近に分布しており，D^2値も陶邑群からは8.4であるので，陶邑群産の可能性もあるということで，陶邑群産と推定しておいた。No. 16，18の2点はD^2値で満足する母集団はなく，産地不明としておいた。

以上の結果，諸田仮塚1号墳には陶邑産と推定されるものはなく，すべて，朝倉群産と推定

された点が注目された。他方，西行古墳群では朝倉群産の製品も検出されたが，1号墳，11号墳にともに陶邑群産と推定される初期須恵器が検出された点が注目されよう。ここに，両古墳群の性格の違いが認められる。

図3には，居屋敷窯から出土した須恵器の両分布図を示してある。同じ九州北部地域の朝倉群の分布領域とは異なる領域に分布することが両図で確認される。また，時代は異なるが，北九州市の天観寺山窯群の須恵器とはCa，Sr量が全く異なった。また，陶邑領域とはRb，Sr分布図上では全く対応しない。なお，今回分析した古墳出土須恵器の中には，居屋敷領域に対応するもは皆無であった。居屋敷窯周辺の古墳出土初期須恵器の中に含まれている可能性があり，今後，探査の必要がある。

次に，諸田仮塚1号墳から出土した埴輪の分析結果について説明する。はじめに，K-Ca，Rb-Sr分布図を図4に示す。両図とも，全体としてよくまとまって分布しており，同一産地の製品であることを示している。円筒埴輪と形象埴輪の胎土も同じであり，ともに，同じ場所で作られたものと推定される。問題はその産地である。埴輪は大量生産の目的をもって焼成される場合には，窖窯で焼成される。例えば，畿内でも，応神天皇陵の大量の埴輪は古市古墳群の中にある土師の里窯群で焼成されたものである。また，大阪府高槻市の三島野古墳群には，一際大きい2基の前方後円墳がある。太田茶臼山古墳と今城塚古墳である。両古墳からは大量の埴輪が出土する。胎土分析によって，これらの埴輪胎土は新池窯群の埴輪胎土と一致した。すなわち，両古墳の埴輪は新池窯群で製作されたものである。両古墳に大量の埴輪を供給するために，新池窯群は操業に入ったのである。高槻市埋文センターの森田克行氏によると，新池窯群の操業は両古墳の築造に対応するように，2期に亘るという。要するに，窯で大量に生産される埴輪は大王ないし，地方首長クラスの人物の墳墓に供給されるためのものである。普通の古墳には出土しない。九州北部地域でも，岩戸山古墳の埴輪胎土は一色であり，立山山窯群の埴輪胎土と一致する。したがって，岩戸山古墳に埴輪を並べるために，立山山窯群では埴輪生産に入ったと推定される。立山山窯群産の埴輪はその周辺の，ごく限られた古墳からしか出土しない。九州北部地域の多くの古墳出土埴輪は別胎土である。図4には立山山窯群の埴輪領域を示してある。諸田仮塚1号墳の埴輪胎土はRb-Sr分布図では立山山領域にほぼ，対応するが，K-Ca分布図では全く対応しない。しかし，比較的類似していることは確かである。また，図4には小隈古墳から出土した埴輪の分布領域も示してある。この領域は初期須恵器の朝倉領域に近く，朝倉窯群の周辺で作られた埴輪と推定される。諸田仮塚1号墳の埴輪胎土は小隈古墳の埴輪胎土とも一致しない。目下のところ，諸田仮塚1号墳の埴輪胎土と一致する埴輪をもつ古墳は見つけられていない。このことから，諸田仮塚1号墳の周辺で，この古墳に並べるための目的をもって作られた埴輪であるとの解釈が有力である。

図1　諸田仮塚1号墳出土初期須恵器の両分布図

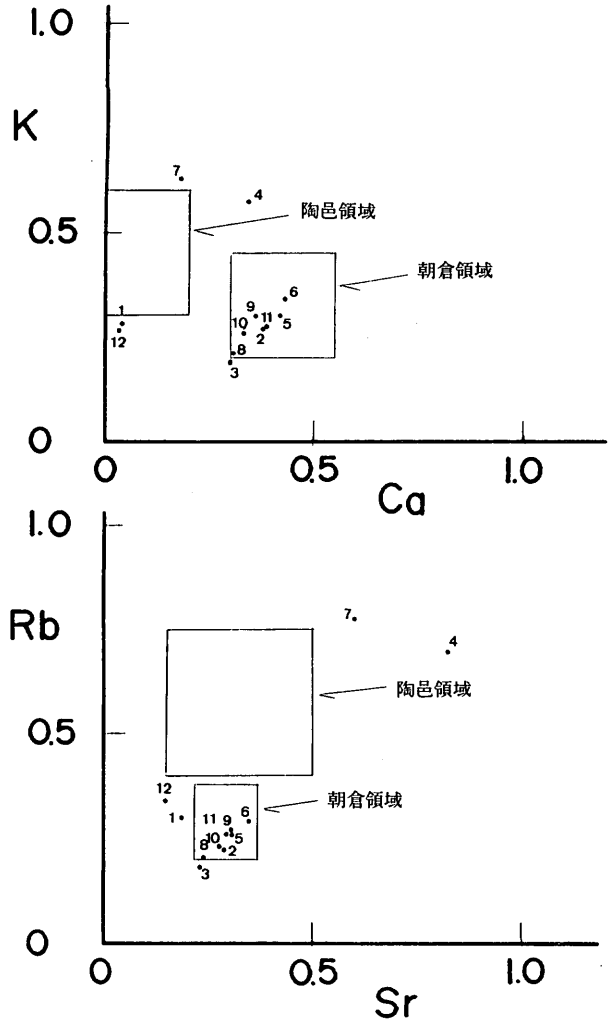


図2　西行古墳群出土初期須恵器の両分布図

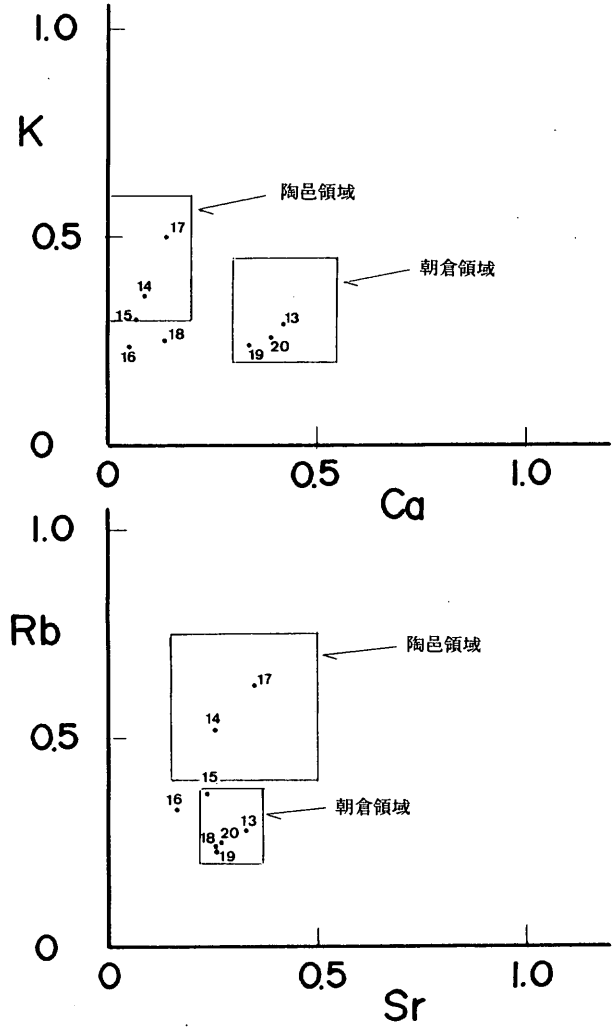


図 3　居屋敷窯出土須恵器の両分布図

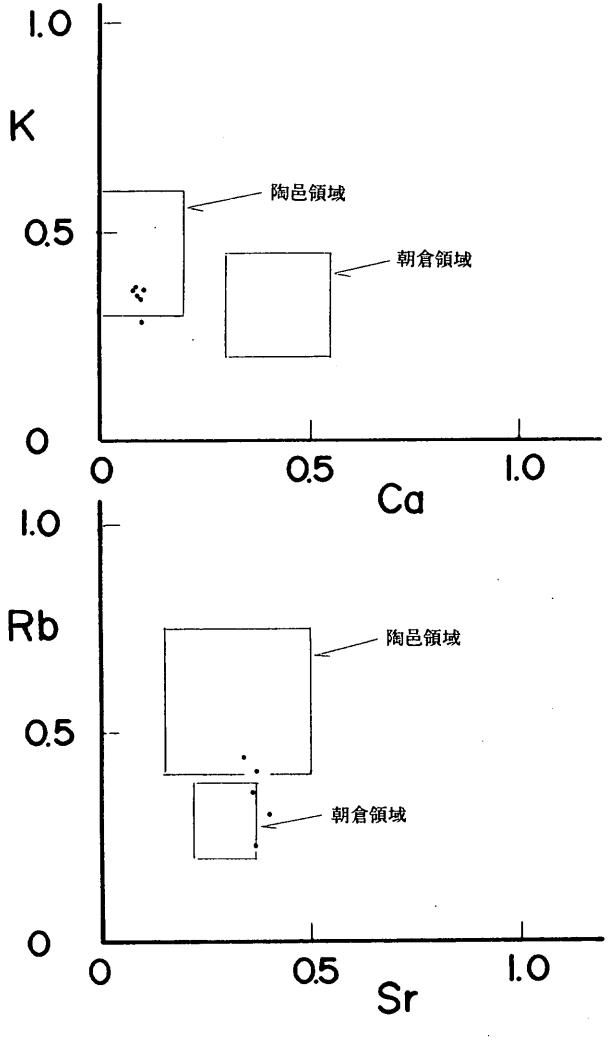
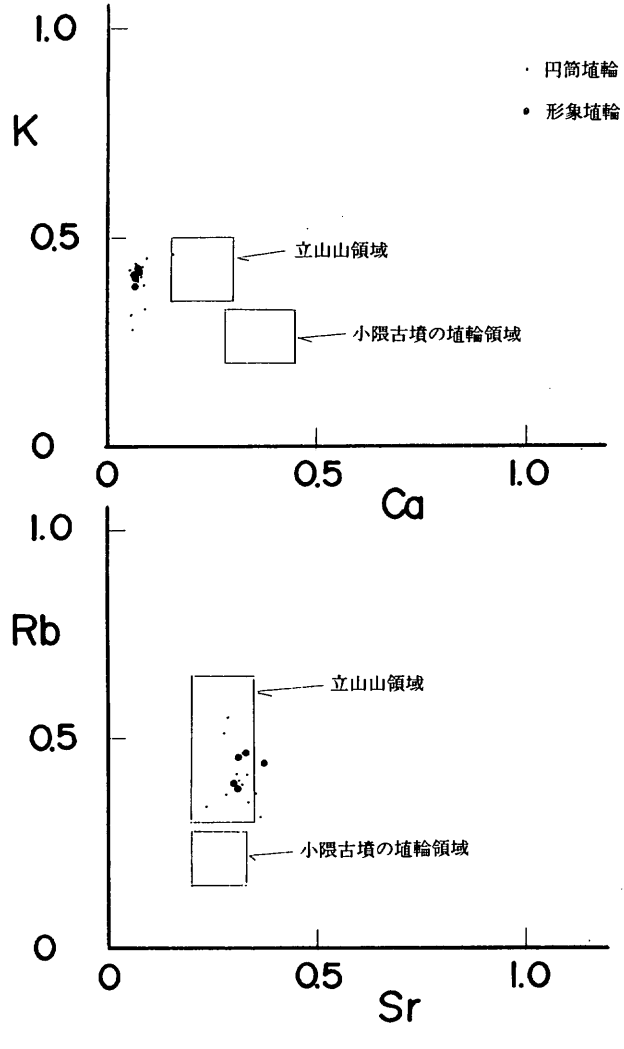


図 4　諸田仮塚 1 号墳出土埴輪の両分布図



遺跡名		器種	挿図番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D^2(朝倉)	D^2(陶邑)	推定産地
諸田仮塚1号墳	№1	杯蓋	第11図4	0.281	0.038	3.73	0.305	0.186	0.086	41.0	10.4	不明
	2	杯蓋	第11図5	0.270	0.380	2.75	0.219	0.288	0.130	8.9	140	朝倉群
	3	杯蓋	第11図6	0.186	0.298	3.12	0.180	0.228	0.114	7.9	102	朝倉群
	4	杯蓋	第11図7	0.575	0.344	2.18	0.695	0.825	0.515	734	31	不明
	5	瑕	第11図9	0.300	0.416	2.70	0.264	0.305	0.185	1.1	155	朝倉群
	6	壺	第11図12	0.337	0.428	2.59	0.287	0.347	0.224	9.9	147	朝倉群
	7	小型甕	第11図13	0.626	0.183	1.53	0.776	0.602	0.158	414	12.0	不明
	8	小型甕	第11図14	0.210	0.307	2.80	0.202	0.239	0.123	5.2	101	朝倉群
	9	小型甕	第11図15	0.300	0.366	2.51	0.273	0.307	0.192	3.9	112	朝倉群
	10	小型甕	第11図16	0.257	0.332	2.62	0.234	0.280	0.153	5.5	100	朝倉群
	11	大型甕	第11図22	0.276	0.385	2.62	0.259	0.296	0.187	1.1	133	朝倉群
	12	中型甕	第11図23	0.274	0.033	2.35	0.341	0.150	0.046	71	8.8	不明
西行2号墳	13	小型甕	第12図29	0.291	0.423	2.74	0.279	0.326	0.200	2.5	154	朝倉群
	14	大型甕	第12図31	0.362	0.089	2.27	0.523	0.255	0.161	183	2.8	陶邑
西行5号墳	15	杯蓋	第25図83	0.298	0.070	3.12	0.367	0.236	0.112	51.4	8.4	陶邑
	16	無蓋高杯	第25図87	0.239	0.055	2.61	0.329	0.165	0.068	65.2	12.9	不明
西行11号墳	17	樽型瑕	第39図136	0.496	0.140	2.58	0.625	0.352	0.211	203	0.62	陶邑
	18	大型甕	第39図137	0.252	0.135	3.47	0.240	0.259	0.163	41	22	不明
	19	中型甕	第39図138	0.238	0.337	3.21	0.237	0.256	0.159	2.3	113	朝倉群
	20	器台	図なし	0.260	0.387	3.25	0.247	0.266	0.164	2.4	27.0	朝倉群
居屋敷窯	21	大型甕	第109図1	0.288	0.095	1.80	0.233	0.369	0.094			
	22	大型甕	第109図2	0.352	0.092	1.59	0.439	0.338	0.159			
	23	大型甕	第109図3	0.367	0.086	1.70	0.360	0.363	0.116			
	24	大型甕	第109図4	0.365	0.107	1.70	0.408	0.372	0.151			
	25	大型甕	第109図5	0.341	0.102	1.88	0.305	0.399	0.127			
	26	大型甕	第110図7	0.369	0.084	1.68	0.384	0.368	0.132			

表1　初期須恵器の分析データ

遺跡名						K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
諸田仮塚1号墳	9-3352	MRT-1	円筒	須恵質	タテハケ後横ハケ	0.282	0.059	2.75	0.339	0.236	0.124
	3353	2	円筒	須恵質	タテハケ後横ハケ	0.331	0.089	2.99	0.370	0.355	0.205
	3354	3	円筒	須恵質	タテハケ後横ハケ	0.317	0.057	2.58	0.373	0.284	0.168
	3355	4	円筒	須恵質	縦ハケ	0.409	0.080	3.16	0.391	0.325	0.286
	3356	5	円筒	須恵質	縦ハケ	0.398	0.074	3.16	0.398	0.315	0.271
	3357	6	円筒	土師質	縦ハケ	0.427	0.081	3.08	0.416	0.334	0.288
	3358	7	円筒	土師質	不明	0.385	0.086	3.33	0.315	0.364	0.273
	3359	8	円筒	土師質	不明	0.452	0.091	3.39	0.352	0.337	0.307
	3360	9	円筒	土師質	タテハケ後ヨコハケ	0.442	0.077	3.10	0.418	0.311	0.304
	3361	10	円筒	土師質	タテハケ後ヨコハケ	0.426	0.062	2.43	0.548	0.290	0.278
	3362	11	円筒	土師質	タテハケ後ヨコハケ	0.458	0.158	2.41	0.515	0.284	0.282
	3363	12	朝顔	須恵質	タテハケ	0.398	0.075	3.26	0.382	0.313	0.275
	3364	13	朝顔	須恵質	タテハケ	0.393	0.073	3.22	0.387	0.315	0.269
	3365	14	形象	土師質	ハケ	0.431	0.073	2.06	0.441	0.375	0.264
	3366	15	形象	土師質	ナデ(?)	0.423	0.074	2.06	0.474	0.334	0.241
	3367	16	形象	土師質	ナデ	0.426	0.070	2.10	0.460	0.313	0.263

表2　埴輪の分析データ

分析番号	器　種	部　位	焼　成	外面調整	備　考
MRT-1	円筒	口縁部	須恵質	縦ハケ後横ハケ	
MRT-2	円筒	口縁部	須恵質	縦ハケ後横ハケ	
MRT-3	円筒	口縁部	須恵質	縦ハケ後横ハケ	不明瞭なハケメ
MRT-4	円筒	胴部	須恵質	縦ハケ	
MRT-5	円筒	胴部	須恵質	縦ハケ	
MRT-6	円筒	胴部	土師質	縦ハケ	
MRT-7	円筒	胴部	土師質	不明	焼成不良
MRT-8	円筒	胴部	土師質	不明	焼成不良
MRT-9	円筒	胴部	土師質	縦ハケ後横ハケ	
MRT-10	円筒	口縁部	土師質	縦ハケ後横ハケ	粗ハケメ
MRT-11	円筒	口縁部	土師質	縦ハケ後横ハケ	粗ハケメ
MRT-12	朝顔	口縁部	須恵質	縦ハケ	
MRT-13	朝顔	口縁部	須恵質	縦ハケ	
MRT-14	形象		土師質	ハケ	浅い沈線
MRT-15	形象		土師質	ナデ？	平坦片
MRT-16	形象		土師質	ナデ	沈線2

表 3　諸田仮塚1号墳出土埴輪胎土分析試料一覧

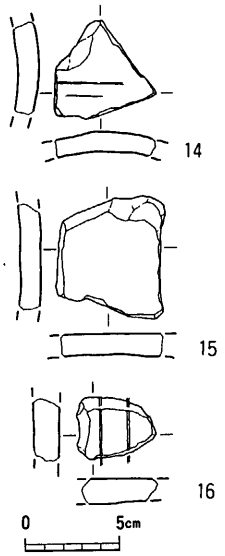


図 5　1号墳出土形象埴輪胎土分析試料実測図(1/4)

筑紫野市諸田仮塚遺跡出土の馬歯

鹿児島大学獣医学科解剖学教室
西中川駿・吉野文彦・塗木千穂子

1．はじめに

わが国に馬がいつ頃，どこから渡来してきたかについては，未だに明らかにされていない。長谷部は熱田，轟，出水貝塚からの馬骨，馬歯を調査し，石器時代に馬のいたことを論考し，また，林田は出水貝塚出土の馬歯，馬骨を検索し，縄文後期に小型馬のいたことを報告している。しかし，近年，近藤らのフッ素による年代測定で，過去に発掘された縄文の出土遺物はことごとく年代が新しくなっている。

九州で馬歯，馬骨の出土した遺跡は，73ケ所あり，また，福岡県下では金山，板付，博多，寺内遺跡など23ケ所以上からの報告例があるが，中世のものが多い。

今回調査を依頼された諸田仮塚遺跡は，筑紫野市大字諸田字仮塚にあり，一般道路３号筑紫野バイパス建設に伴い，福岡県教育委員会が，平成２年８月～平成３年４月まで事前調査を行ったものである。調査区内には縄文時代から古墳時代までの遺構があり，馬の遺体は３基の土壙墓（馬土壙）から出土し，６世紀中頃から後半と推定されている。ここでは各土壙墓から出土した馬歯について，その概要を報告する。

2．出土状況

当教室の持ち込まれた資料は２号～４号土壙墓の遺体である。各土壙墓共に頭部（歯）のみ検出されているが，土壙墓の大きさから一体分を埋葬したもので，他の骨格は酸性土壌のために消失したものと思われる。２号土壙は上顎臼歯片54.4ｇの出土で，３号土壙は上顎，下顎の臼歯がみられ，496.9ｇである。４号土壙から轡を伴う臼歯片34.3ｇが検出されている。６世紀中頃の築造の２号墳に隣接し，また，須恵器や轡の出土から６世紀中頃～後半（古墳時代後期）のものと推定されている。

3．出土遺体の概要

２号土壙墓馬（写真３参照）

上顎臼歯片10個で，歯の形状はとどめておらず，エナメルヒダ片がバラバラになっており，上顎臼歯であることのみ同定できる資料である。年齢，体高の推定は不可能である。

３号土壙墓馬（写真１，２参照）

上顎と下顎が咬み合った状態で出土し，上顎を上にしている。上顎は右側の第一（M^1），第二（M^2），第三（M^3）後臼歯，左側の第四前臼歯（P^4），第一～三後臼歯，下顎は左右の第四前臼歯（P_4），第一～三後臼歯（M_1～M_3）が，ほぼ完全な状態で検出されている。各臼歯のエナメルヒダの形状は，現生の御崎馬とよく似ている。これらの臼歯の計測値は表1，2に示した。各計測値から筆者らの方法で，臼歯列長および頭蓋最大長，下顎最大長を推定し，林田らの方法で体高を推定すると，129.0±3.5cmとなる。これは現生の御崎馬（130cm）とほぼ同じ大きさである。また，臼歯の中心高より筆者らの方法で年齢を推定すると3才で，若い個体であることがわかる。

4号土壙墓馬（写真4参照）

轡を伴って出土しており，九州では非常に珍しい出土例である。歯は下顎臼歯片13個で，2号土壙墓馬と同様に，エナメルヒダ片のみであり，体高，年齢の推定は不可能であるが，3号土壙墓馬よりも年とった馬である。

4．考察

古墳に伴う馬の埋葬例は，全各地でみられ，九州でも熊本県の塚原古墳，上の原遺跡II（表1，2参照），福岡県小郡のハサゴ古墳などから報告されている。本遺跡の馬の埋葬は，2号墳の周囲に1号～4号土壙があり，4頭の馬が埋葬されている。4号土壙馬は臼歯片のみであるが，轡を伴っていた。また，3号土壙馬は上顎，下顎の臼歯がほぼ完形で検出されている。2号土壙馬は上顎臼歯片のみで，いずれの馬も臼歯のみで，他の骨は検出されていない。しかし，土壙の広さおよび臼歯の出土位置などから1個体全身が埋葬されたことは確かであろう。これらの馬が何の目的のために埋葬されたかはわからないが，2号墳の主人と関連のある副葬の可能性も考えられる。

3号土壙馬の臼歯は，若いために歯冠長が大きいが（表1，2），年齢，体高は，3才，129cmと推定された。これは近年発掘された福岡県の高野遺跡，博多遺跡群，上唐原稲本屋敷遺跡などから出土した馬ともほぼ同じ大きさであり，また，現生の御崎馬（130cm）と同大で中型馬に属する体型を有していたことが想像される。

馬がいつ頃，どこから渡来してきたかは未だに明らかでないが，古墳時代になると全国各地から馬の出土例が数多く報告されるようになる。しかし，最近の縄文，弥生遺跡からの馬の出土例は全く報告がなく，縄文時代の牛，馬の出土は皆無である。現在のところ馬の出土の最も古いのは福江市の大浜遺跡の馬歯で，弥生中期とされている。また，その経路としては朝鮮半島経由で北部九州などに渡来したことが想定されており，諸田仮塚の馬もこれらの末裔であろう。

諸田仮塚遺跡を遺した人々は，馬を飼育し，運搬や交通の手段とし，また，農耕などに使役

していたことが考えられるが，３号土壙馬など若い個体であることから，殉葬や儀礼的なことも考えられる。

５．まとめ

筑紫野市諸田仮塚遺跡出土の馬の遺体について調査した。

１．古墳時代後期の土壙から出土した３体の馬歯は総重量585.7ｇで，３号土壙馬は上，下顎臼歯は保存状態はよかったが，２，４号土壙馬は臼歯片のみであった。

２．３号土壙馬は，上顎右側第一～第三後臼歯，左側第四前臼歯～第三後臼歯，下顎左右の第四前臼歯～第三後臼歯の計測値から，３才，体高129cmと推定された。

３．２号土壙馬は，轡を伴い検出され，２号墳の主人の乗馬用であったのか，また，２号墳の周囲に４頭が埋葬されていることから，殉葬の可能性も考えられるが確証はない。

参考文献

１．長谷部言人：石器時代の馬に関して，人類誌，40（４），131－135（1925）

２．林田重幸：日本馬の系統に関する研究，Ｐ１－180，日本中央競馬会，東京（1978）

３．近藤恵他：野田市大崎貝塚縄文後期貝層出土ウマ遺残のフッ素年代判定，人類学雑誌，99（１），93－99（1991）

４．桃崎祐輔：古墳に伴う牛馬供犠の検討，古文化談叢，31，１－142（1993）

５．西中川駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛，馬の渡来時期とその経路に関する研究，科研費（一般Ｂ）研究成果報告書，Ｐ１－197（1991）

６．芝田清吾：日本古代家畜史の研究，Ｐ100～189，学術出版会，東京（1969）

表 1　諸田仮塚遺跡出土の上顎臼歯

(mm)

		諸田仮塚 3 号土壙馬		上の原古墳		トカラ馬	御崎馬
		L	R	L	R	n＝12(雄＋雌)	n＝24(雄＋雌)
P^4	EGL	26.3+		28.3	27.2	24.3±1.0	25.6±1.3
	EGB	20.2+		26.0	26.5	24.4±1.4	24.9±1.7
	TH(C)	56.8+		64.5+	64.8+	41.0±15.4	43.1±19.6
M^1	EGL	26.6		24.8	25.9	23.4±2.3	23.3±2.0
	EGB	24.9		25.0	25.7	23.9±1.0	24.6±0.8
	TH(C)	58.0+	55.2+	59.2+	39.5+	36.9±18.1	37.3±17.8
M^2	EGL	27.6	26.7	24.2	23.6	23.2±1.7	24.0±2.4
	EGB	25.6	25.0	24.8	24.2	22.8±1.3	23.6±1.3
	TH(C)	67.0+	66.0+	62.9+	63.7+	42.1±19.1	42.1±21.3
M^3	EGL	25.5	25.2			25.0±1.5	27.1±2.6
	EGB	22.3	21.8			20.2±1.6	21.0±1.9
	TH(C)	59.2	57.6			38.6±12.6	35.2±18.9

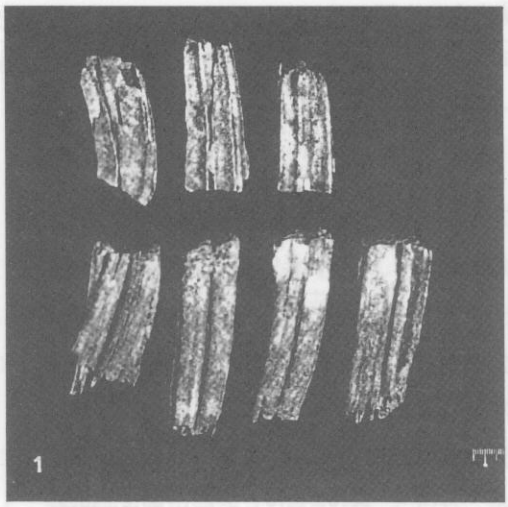
EGL：エナメル歯冠長　　TH(C)：中心高　＋：不完全
EGB：エナメル歯冠幅　　L：左側
R：右側

表 2　諸田仮塚遺跡出土の下顎臼歯

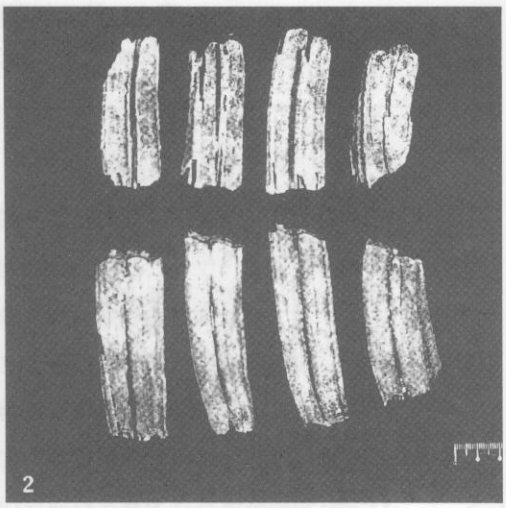
(mm)

		諸田仮塚3号土壙馬		上の原古墳		塚原古墳		祇園原地区遺跡		トカラ馬	御崎馬
		L	R	L	R	L	R	L	R	n＝13(雄＋雌)	n＝24(雄＋雌)
P_4	EGL	30.1	31.4	27.7	27.5	27.0		26.0+	26.4	23.9±1.7	24.7±2.6
	EGB	14.1	15.8	15.2	15.9	15.0		15.1	15.5	13.6±1.6	14.5±1.1
	TH(C)	84.5	82.6+	89.9+	80.5+	−		40.3+	53.3	37.0±15.9	45.5±22.6
M_1	EGL	27.8	27.7	24.6	26.1	24.0		22.6	24.7	24.3±2.6	23.4±2.0
	EGB	14.3	14.2	13.9	13.8	14.5		15.0	14.1	13.8±1.1	14.3±2.1
	TH(C)	83.8	79.9	68.1+	69.4+	52.0+		35.0+	41.0+	42.1±16.0	41.6±18.8
M_2	EGL	27.8+	28.3	24.5	25.2	24.0			21.7	24.6±2.0	24.6±2.1
	EGB	13.6	13.2	13.3	13.3	12.0			14.6	12.4±1.2	14.0±2.9
	TH(C)	86.8	84.2	73.3+	−	57.0			46.3+	44.8±16.6	44.8±20.7
M_3	EGL	27.8+		−		28.0+				28.4±2.7	29.4±3.4
	EGB	12.7		12.1		10.0+				11.3±1.3	12.3±1.4
	TH(C)	68.8		54.5+		45.0+				40.0±14.9	43.8±18.0

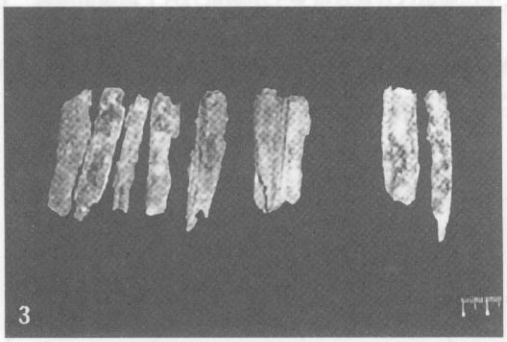
EGL：エナメル歯冠長　　TH(C)：中心高　＋：不完全
EGB：エナメル歯冠幅　　L：左側
R：右側



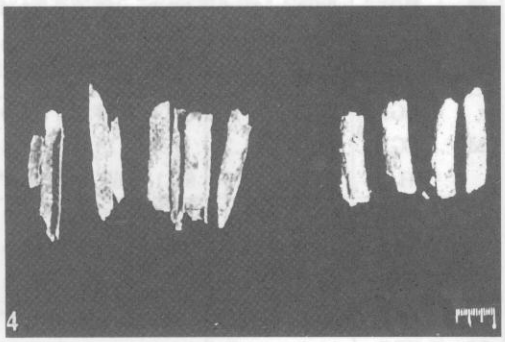
1．3号土壙馬：
上段右から右側上顎第一～三後臼歯
下段右から右側下顎第四前臼歯～
後一後臼歯



2．3号土壙馬：
上段左から左側上顎第四前臼歯～
第三後臼歯
下段左から左側下顎第四前臼歯～
第三後臼歯



3．2号土壙馬：上顎臼歯片



4．4号土壙馬：下顎臼歯片

図　　版

(1)　諸田仮塚遺跡全景(空中写真、北上空から)

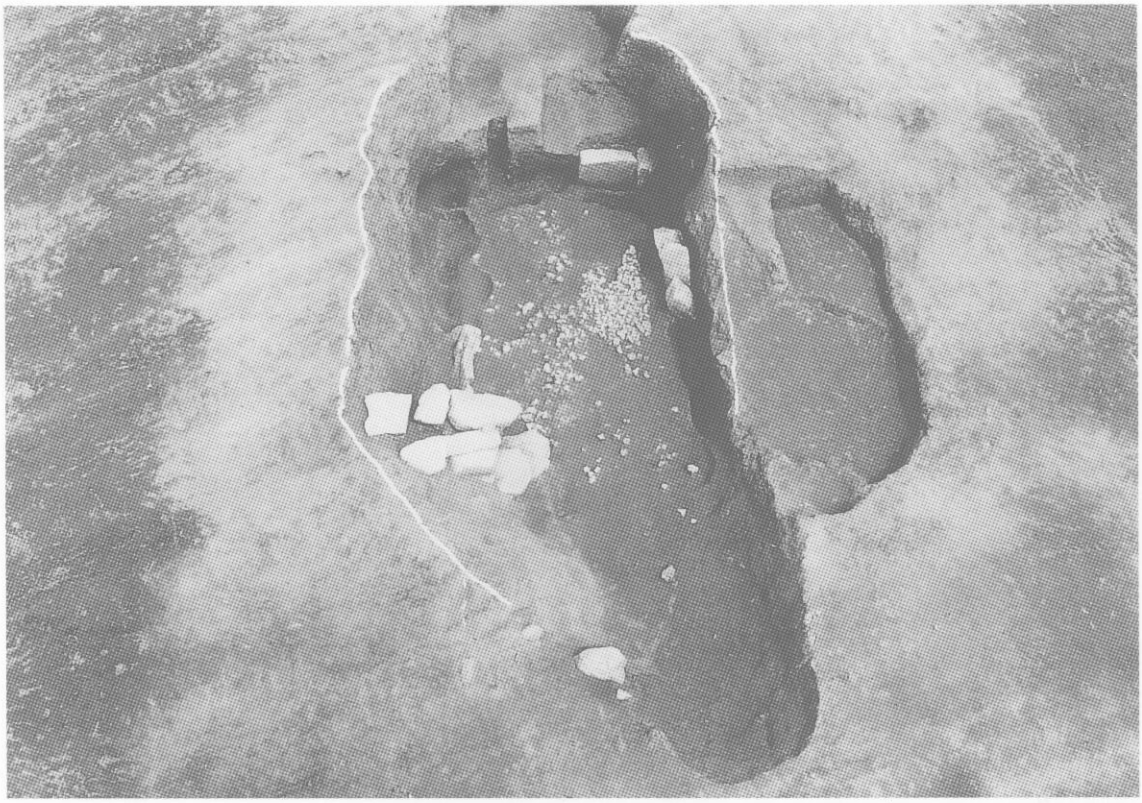
(2)　諸田仮塚遺跡全景(空中写真、東上空から)

(1)　1・2号墳全景(空中写真、南西上空から)

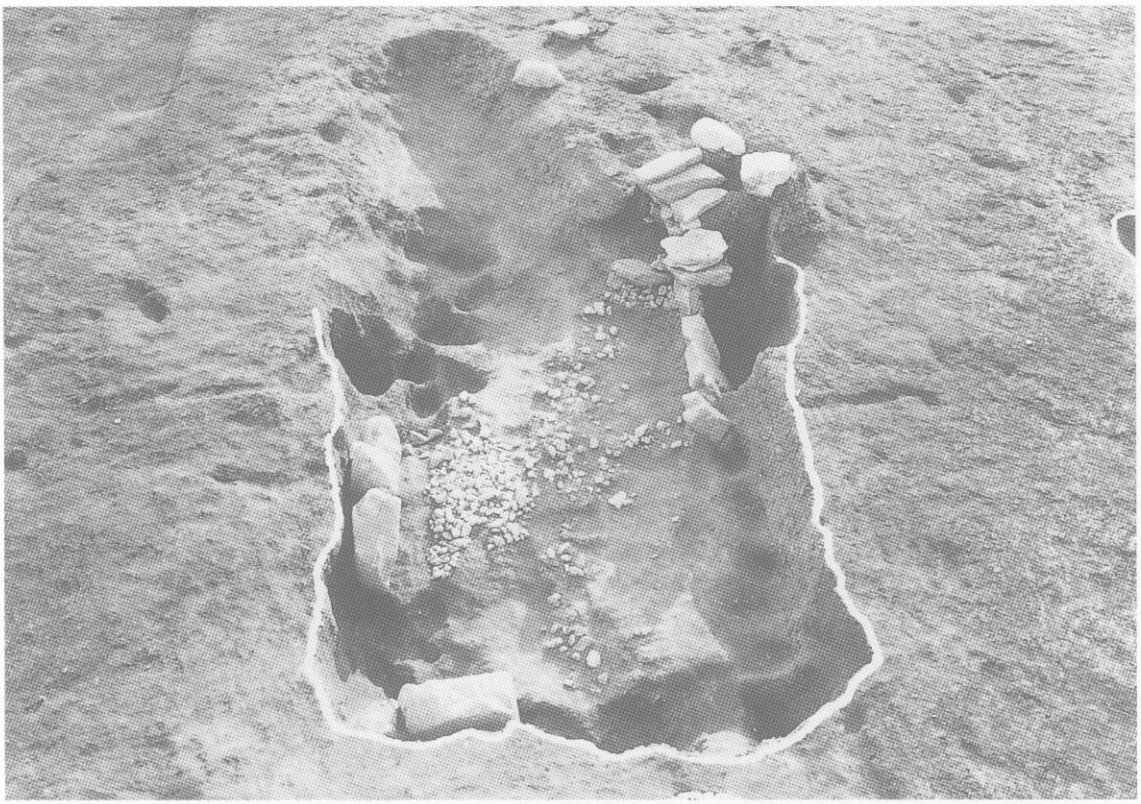
(2)　1号墳全景(調査前、南東から)

(1)　1号墳全景(空中写真、南西上空から)

(2) 1号墳全景(空中写真、上空から)



(1)　1号墳石室(南西から)



(2)　1号墳石室(盛土除去後、北東から)

(1)　1号墳石室奥壁石材(南西から)

(2)　1号墳左側壁石材(南東から)

(1)　1号墳右側壁石材(北西から　内側に倒れていたものを復元)

(2)　1号墳左手前隅部(東から)

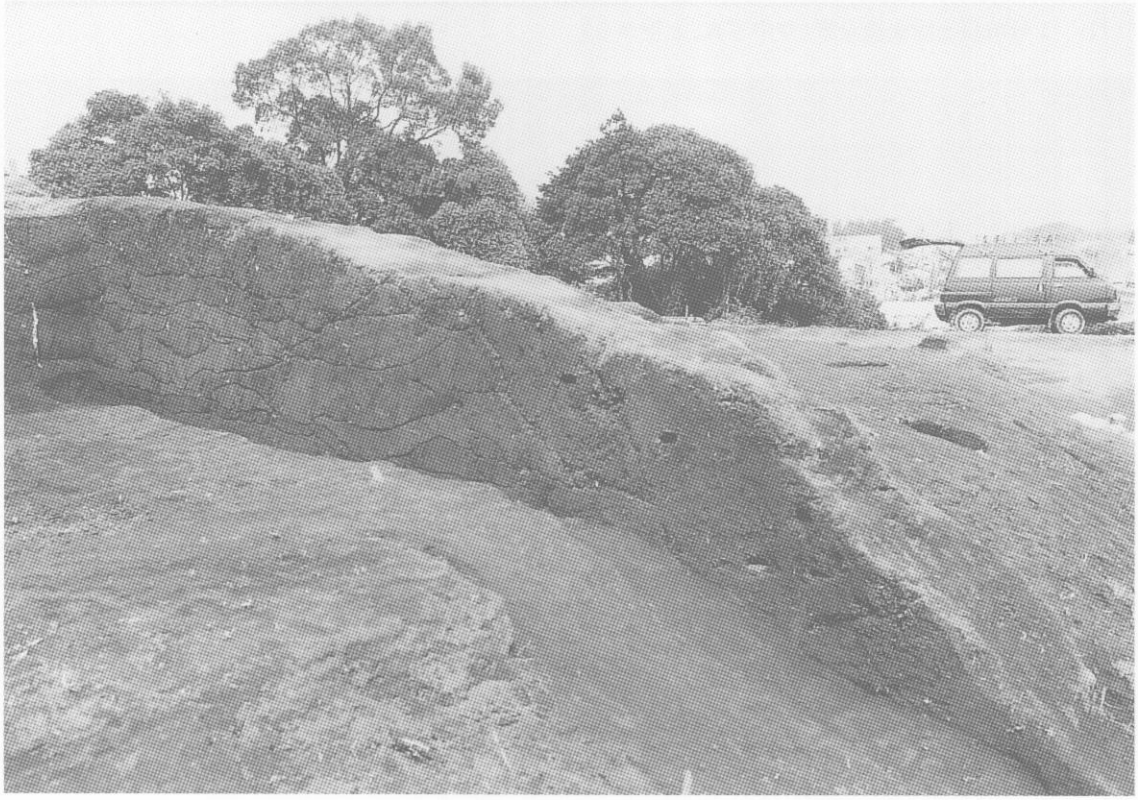
(1)　1号墳横口部(北東から)

(2)　1号墳横口部と前庭部側壁(北西から)

(1)　1号墳盛土土層(北東から)

(2)　1号墳北東ベルト土層(北から)

(1)　1号墳北西ベルト土層(西から)

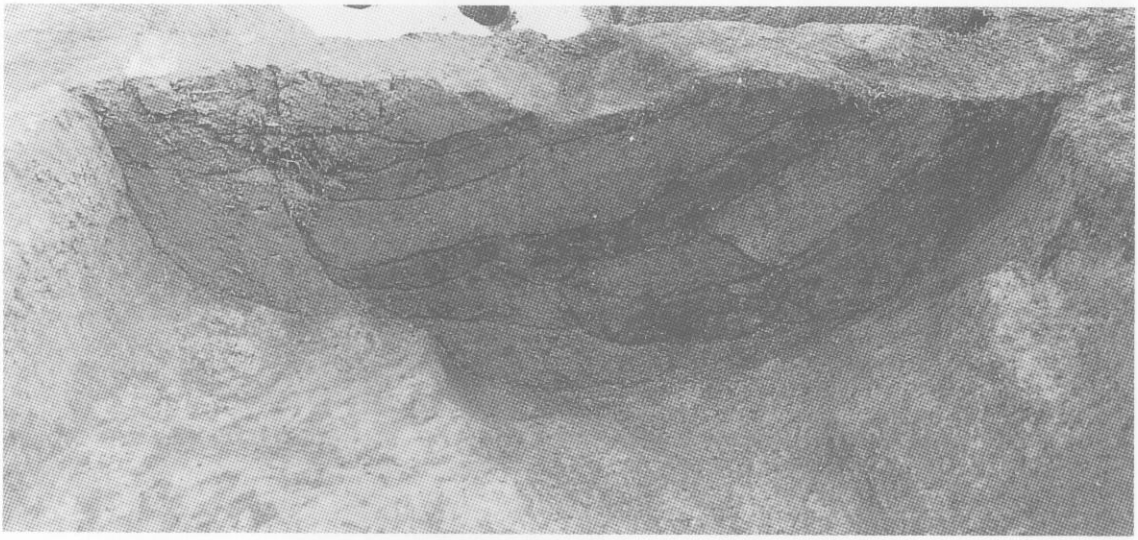


(2)　1号墳南東ベルト土層(南から)

(1)　1号墳盛土除去後全景(空中写真、上空から)

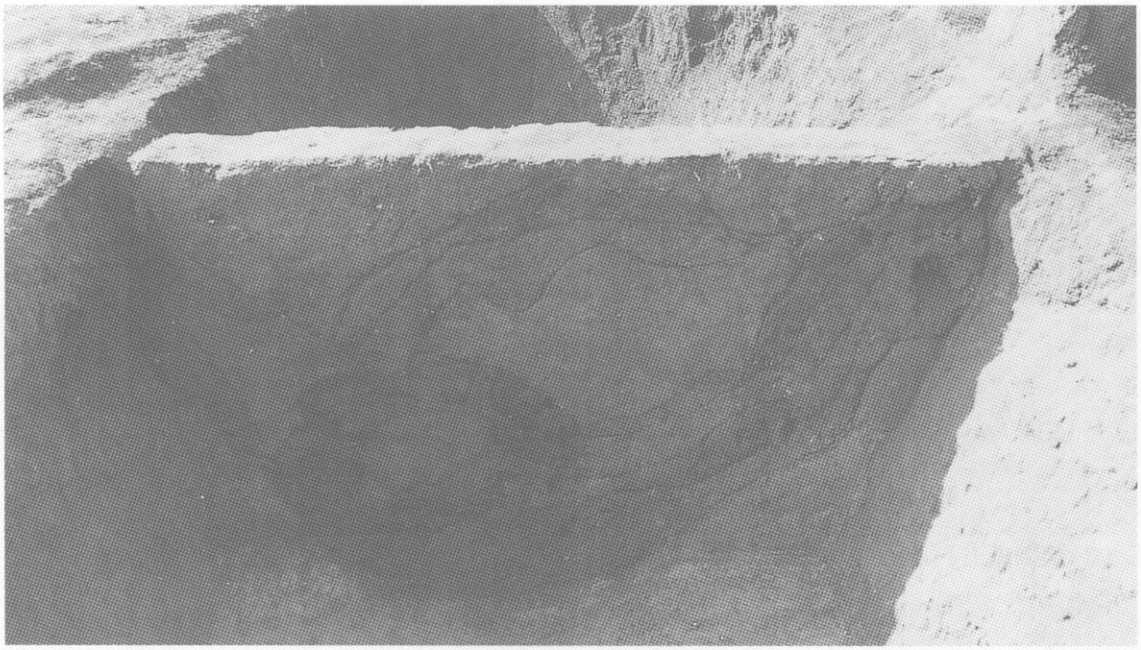
(2)　1号墳石室と盛土下1～3号土坑(空中写真、上空から)

(1) 1 号墳盛土下 1 号土坑(南東から)



(2)　1 号墳盛土下 1 号土坑埋土土層(北東から)

(3)　1 号墳盛土下 2 号土坑(北西から)

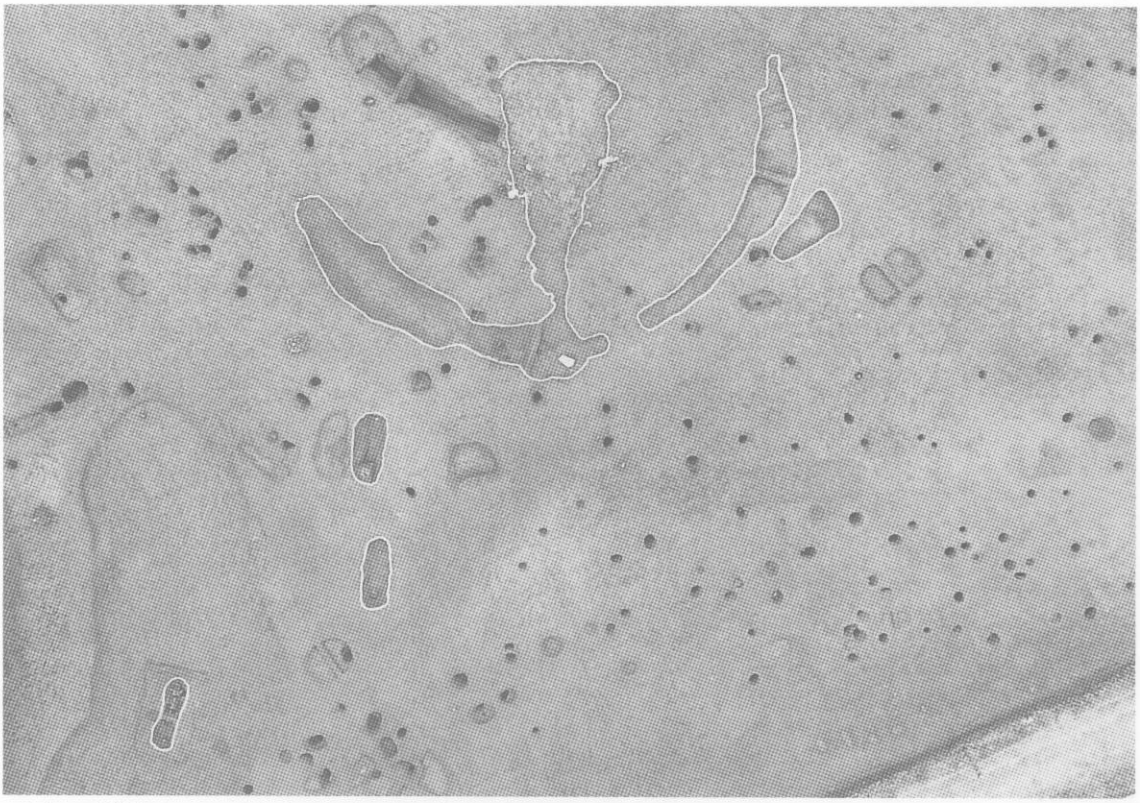


(1)　1号墳盛土下2号土坑埋土土層(北東から)

(2)　1号墳盛土下3号土坑と盛土土層(南から)

(1)　2号墳全景(空中写真、上空から)

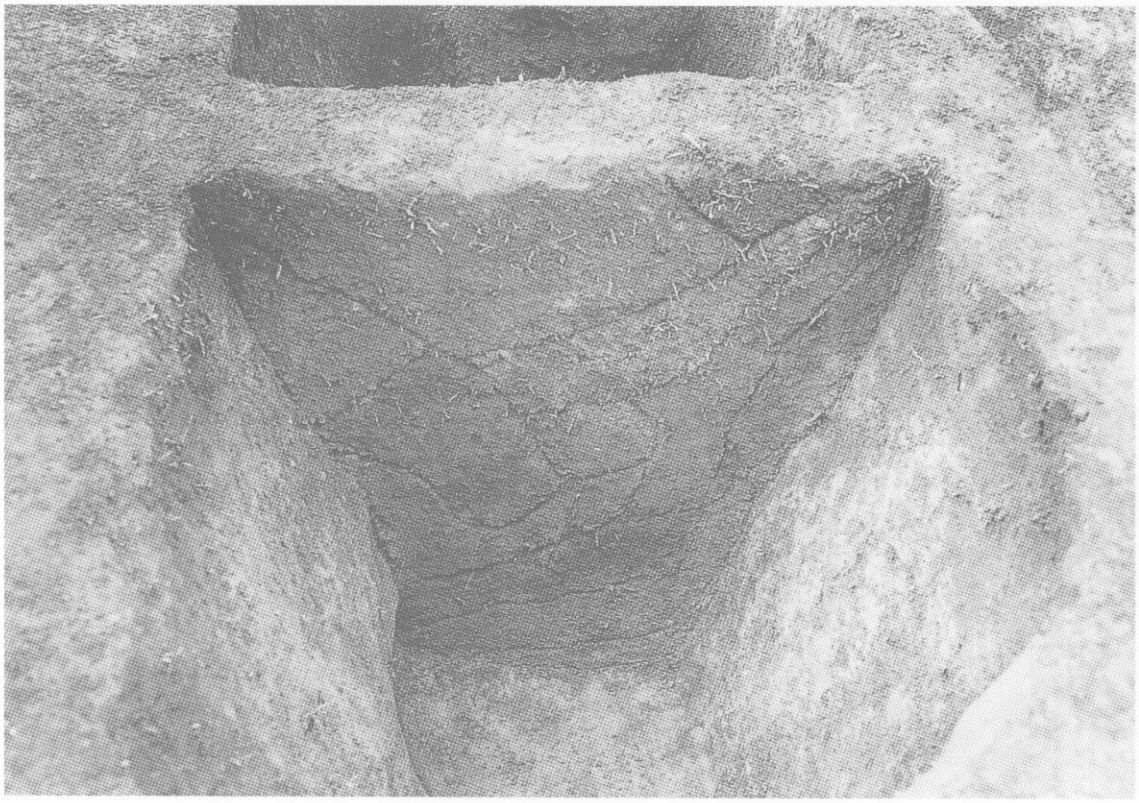
(2)　2号墳石室(北西から)



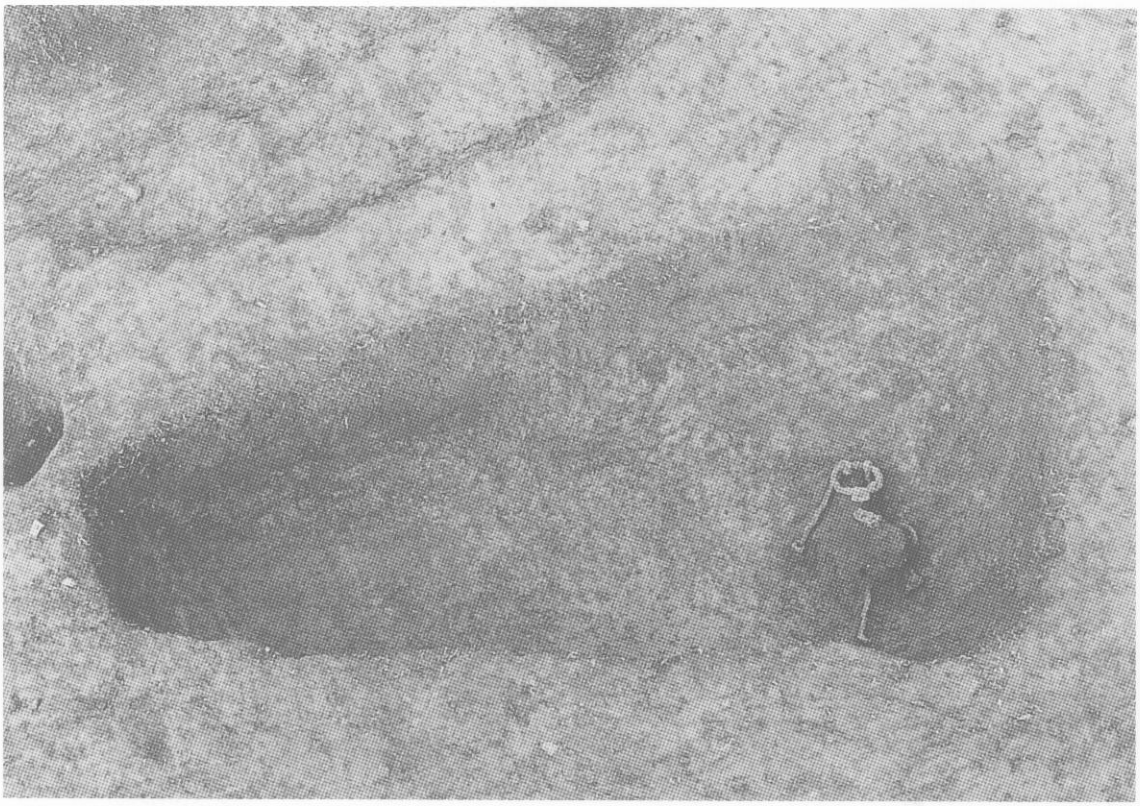
(1)　2号墳と1～4号土壙墓(空中写真、上空から)

(2)　3号土壙墓(南東から)

(1)　3号土壙墓馬歯出土状況(南東から)

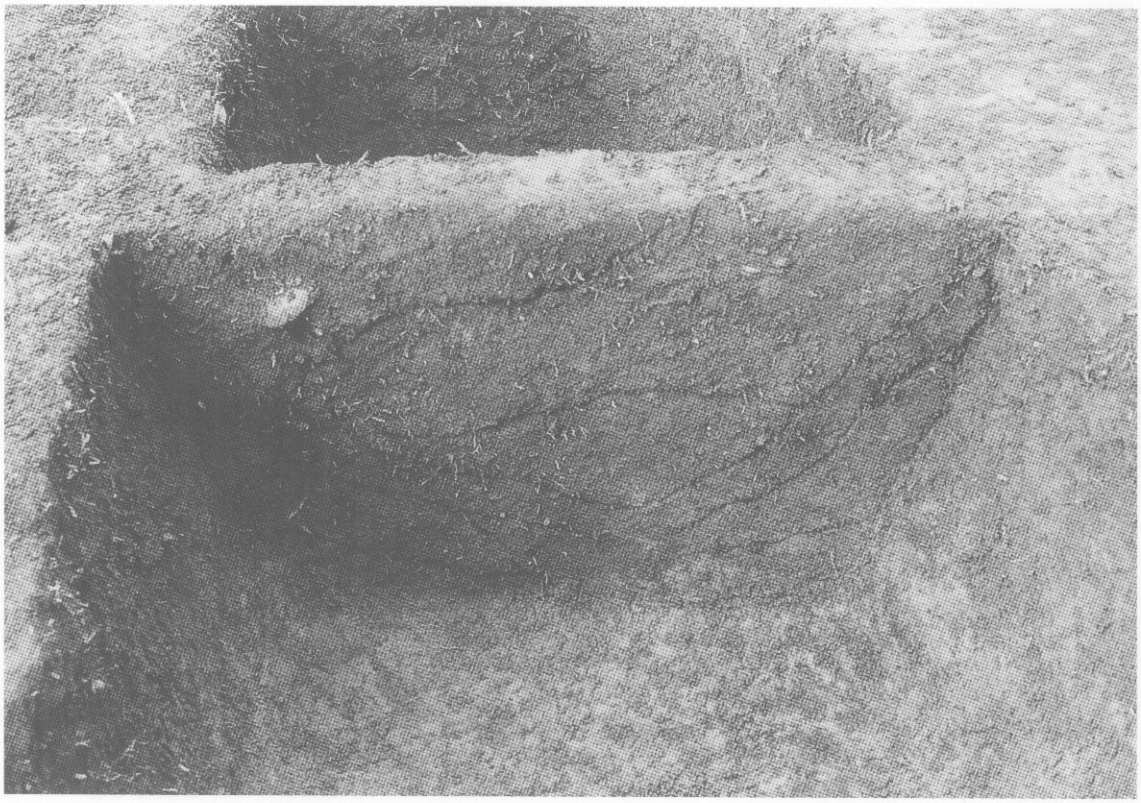


(2)　3号土壙墓埋土土層(北東から)

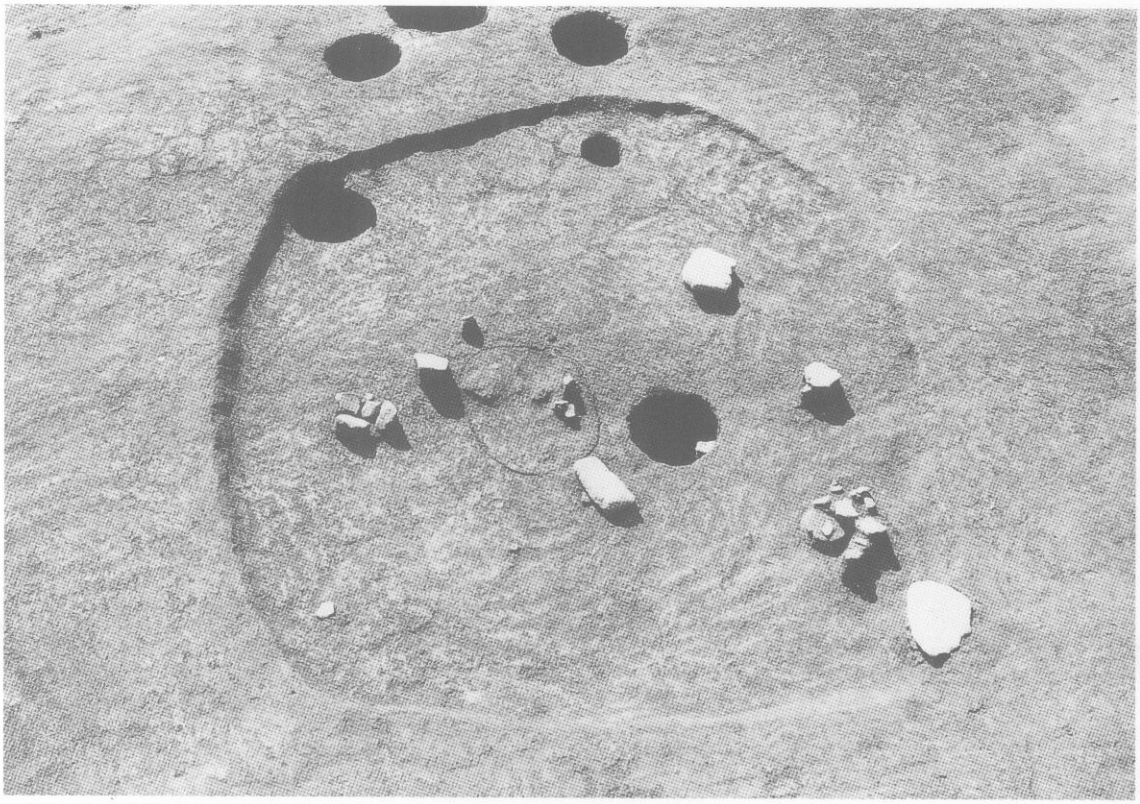


(1)　4号土壙墓(南から)

(2)　4号土壙墓轡と馬歯出土状況(南から)



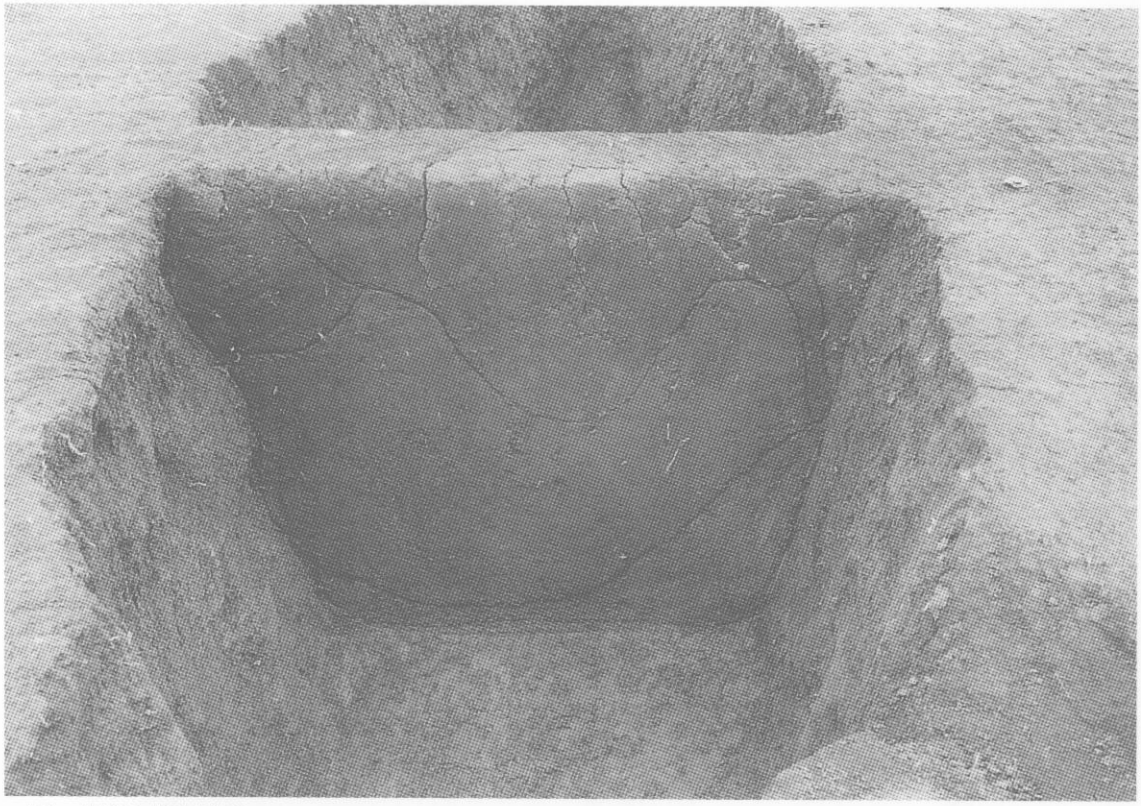
(1)　4号土壙墓埋土土層(東から)



(2)　1号竪穴状遺構(北東から)

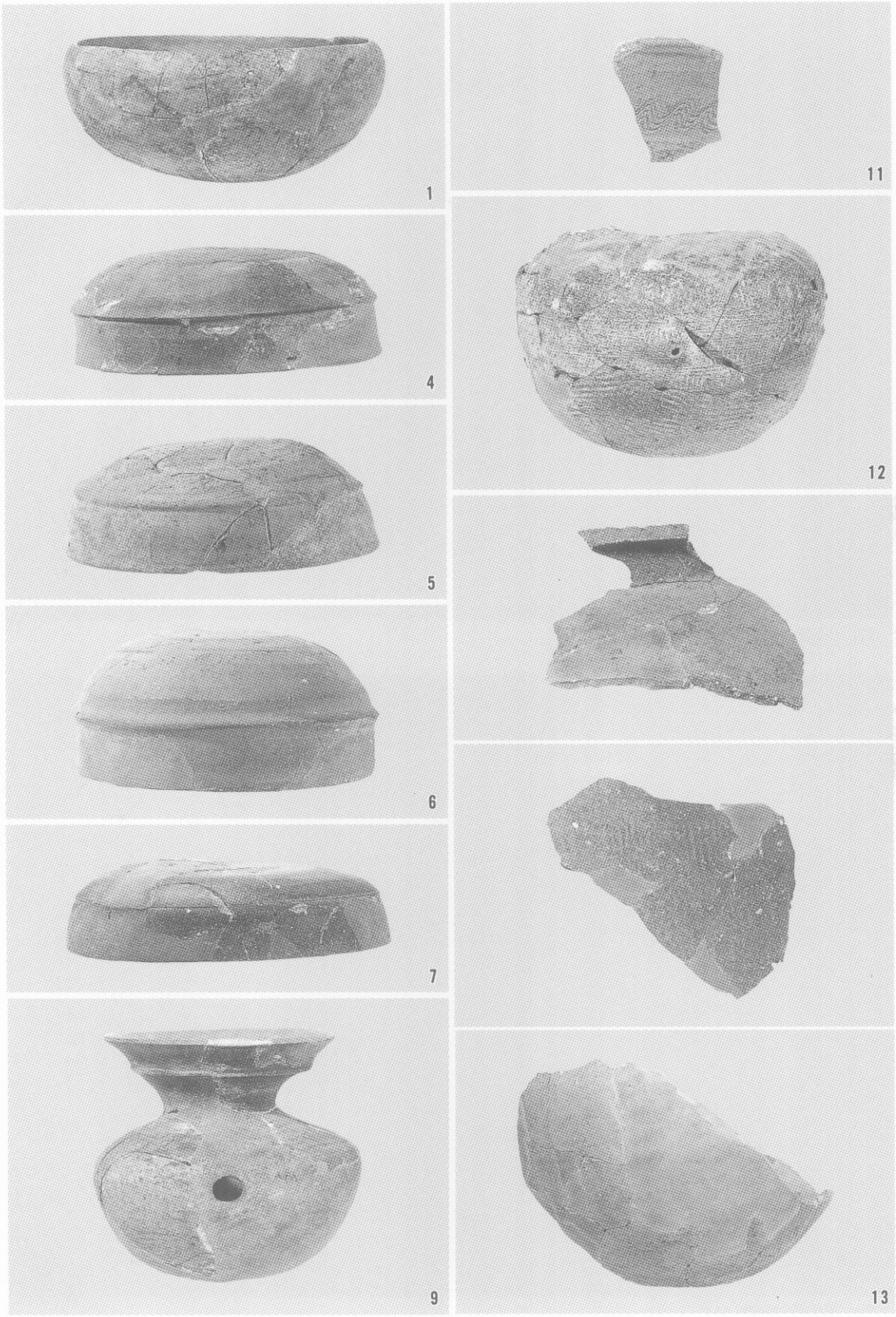
(1)　1号土坑(南から)

(2)　1号土坑埋土土層(南から)

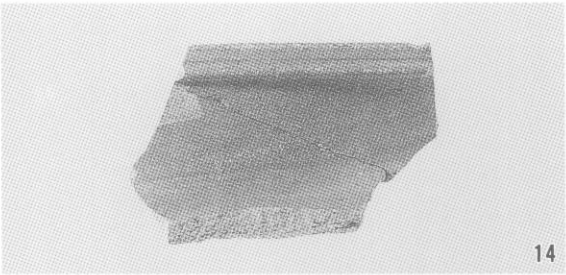


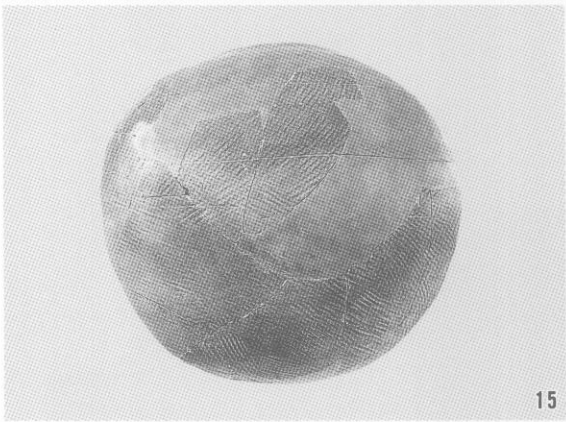
(1)　地割れ断層(B)

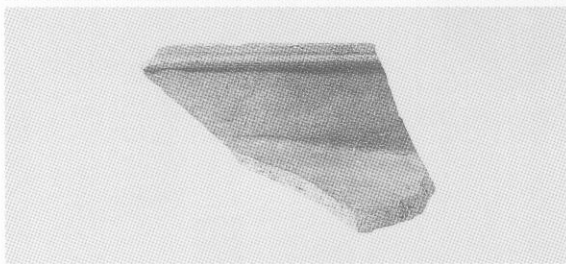
(2)　地割れ断層(D)

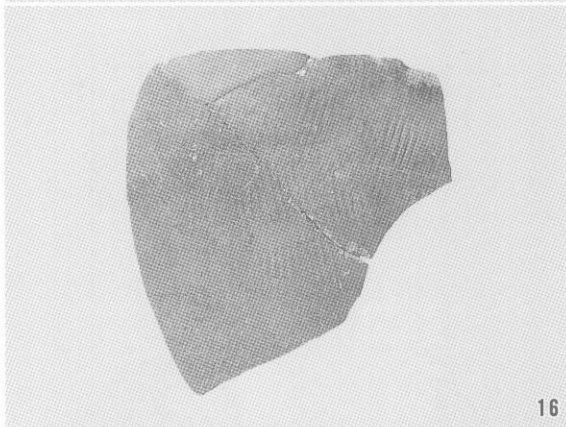


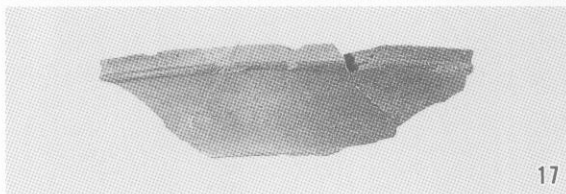
1号墳出土土器①

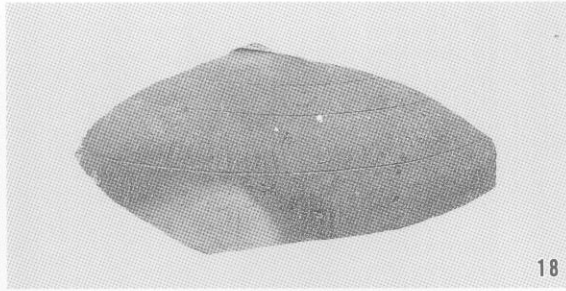


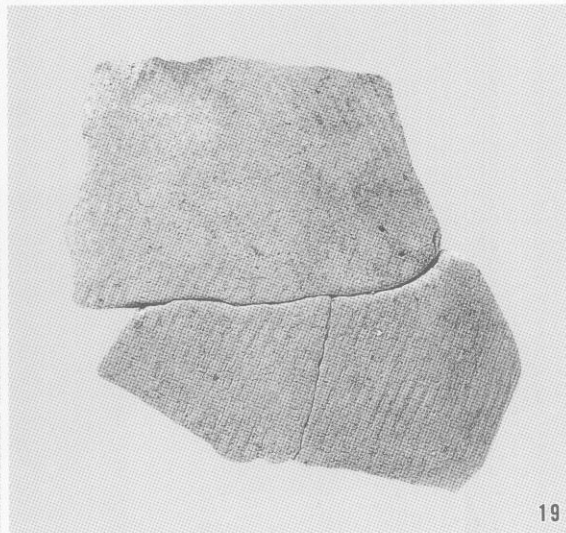


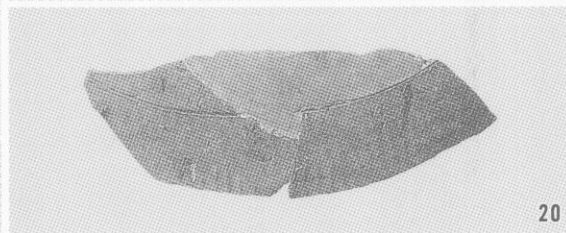


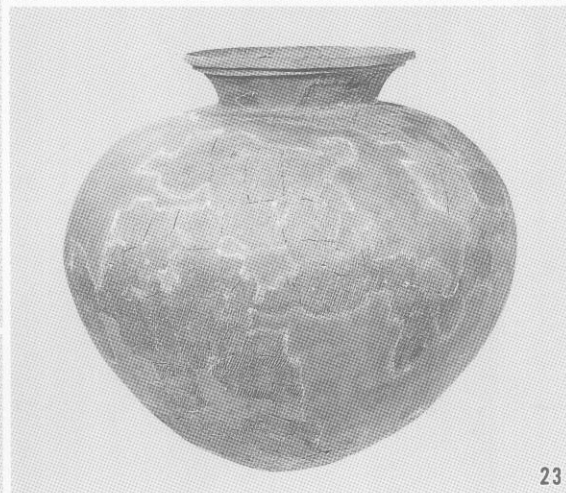




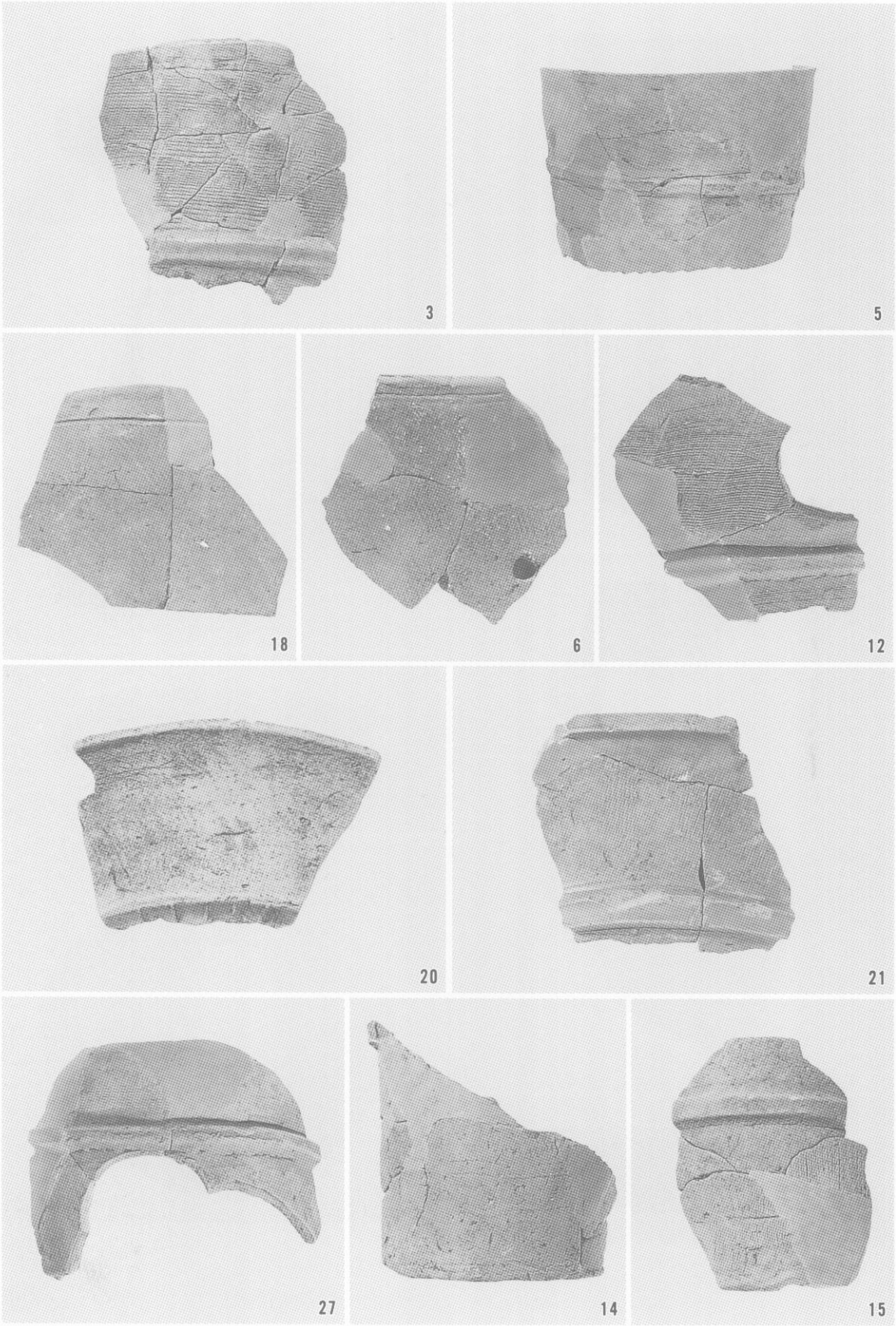




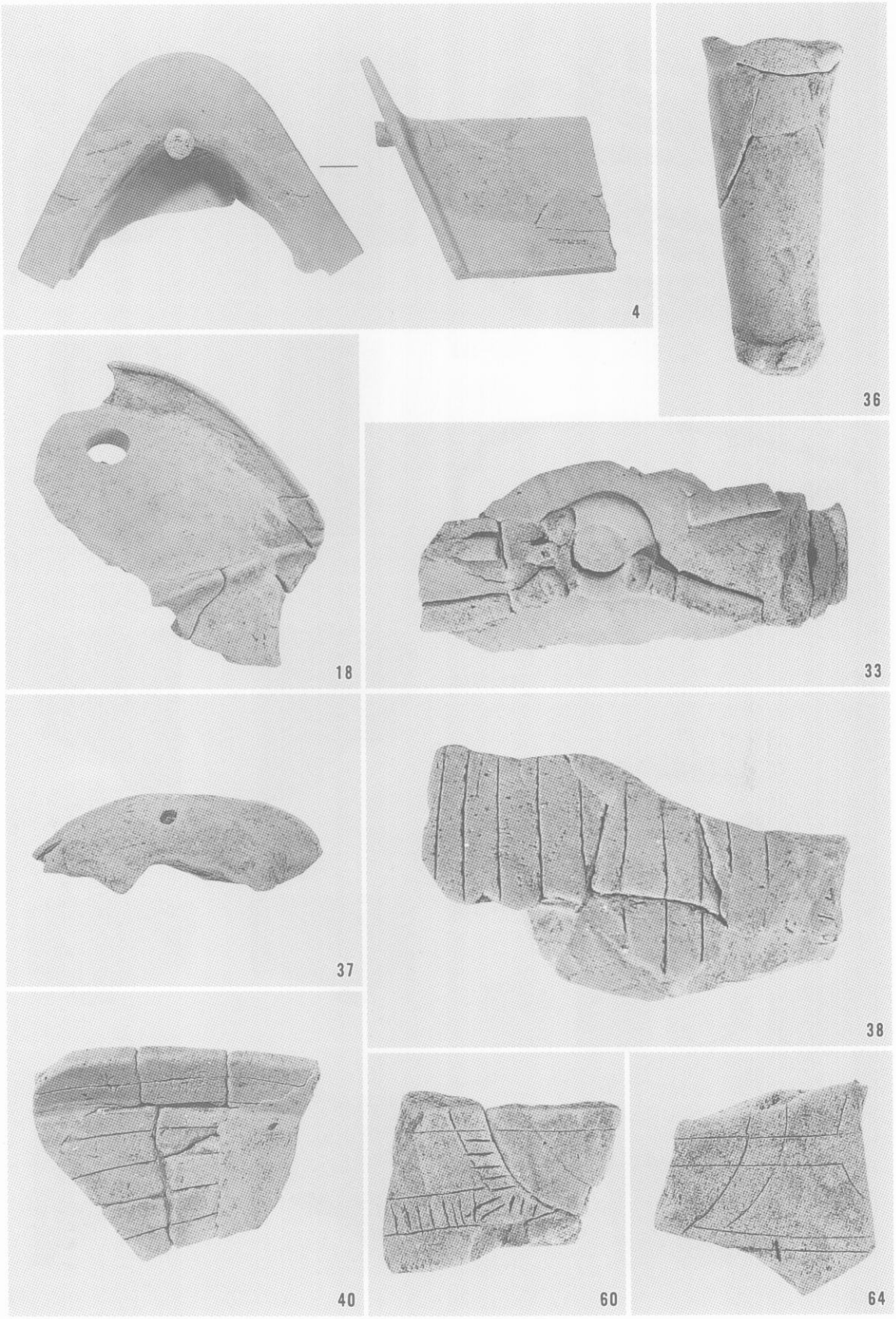




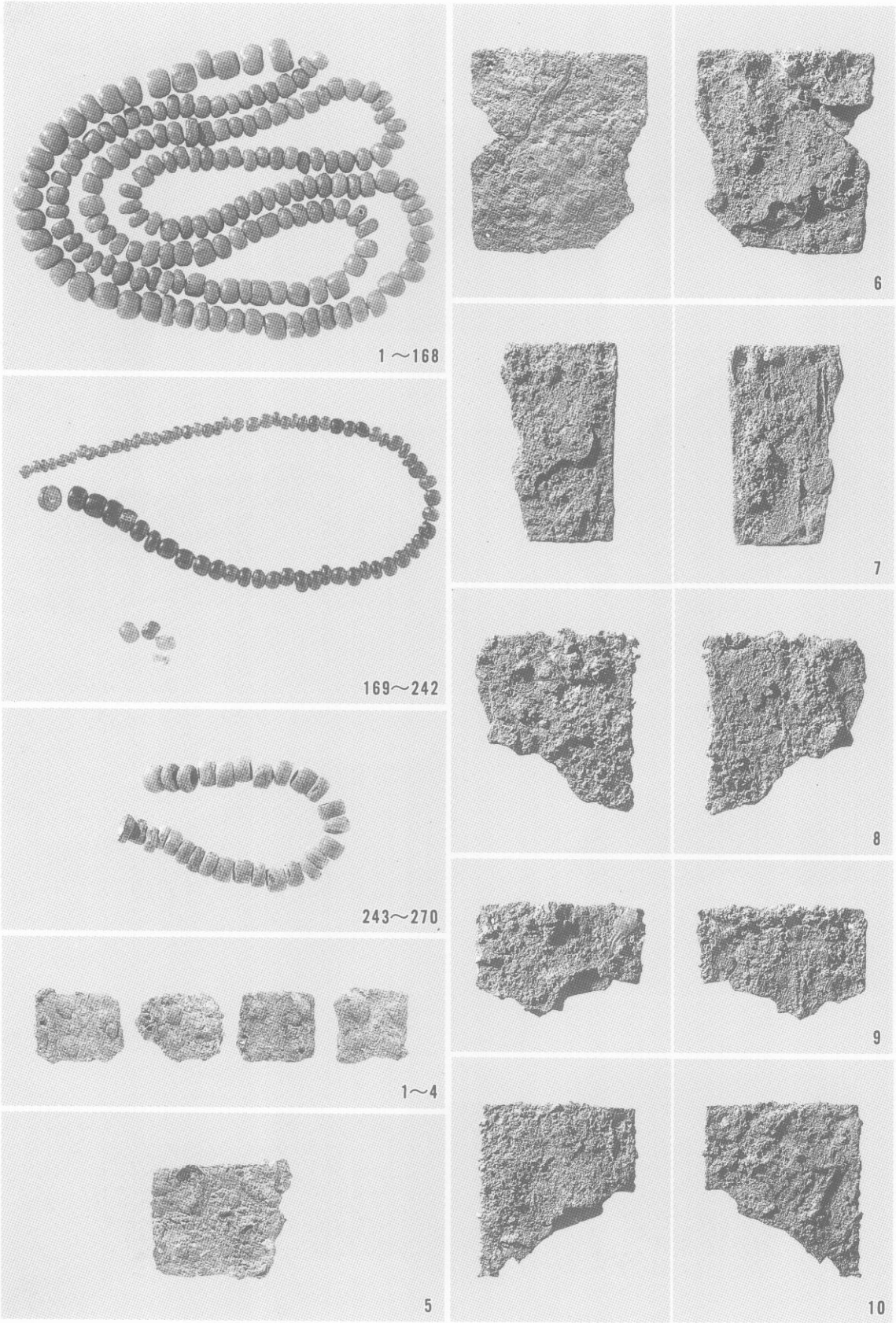
1号墳出土土器②



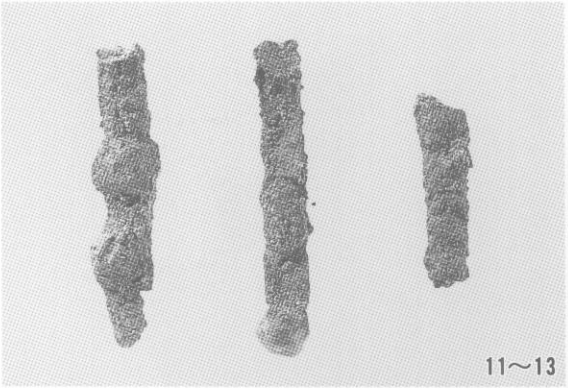
1号墳出土埴輪(円筒・朝顔形)

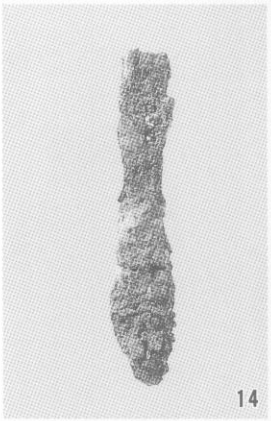


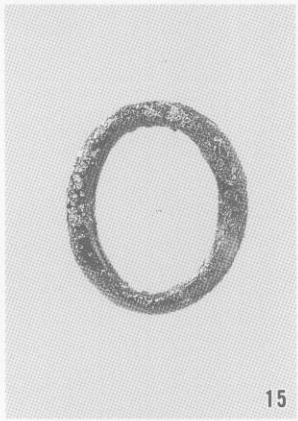
1号墳出土埴輪(形象-家・馬・鶏・靫)

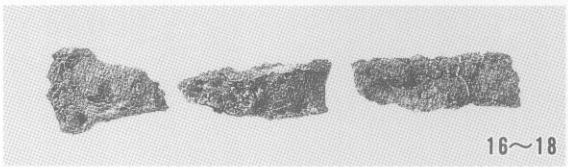


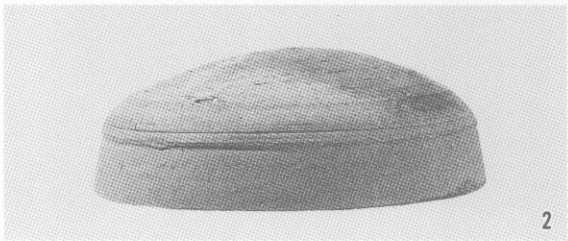
1号墳出土玉類・鉄器①

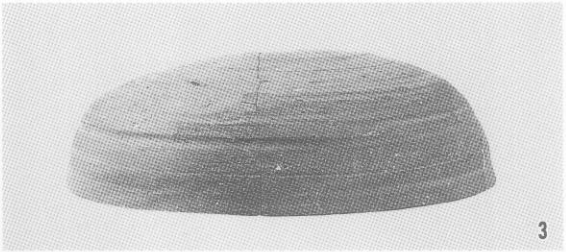


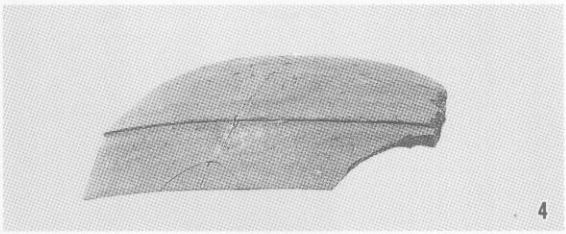


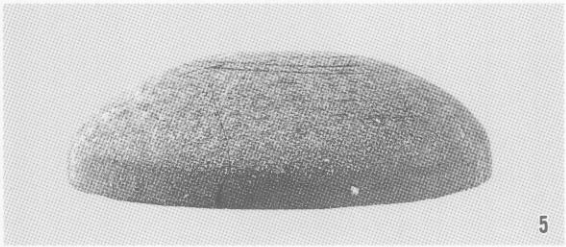


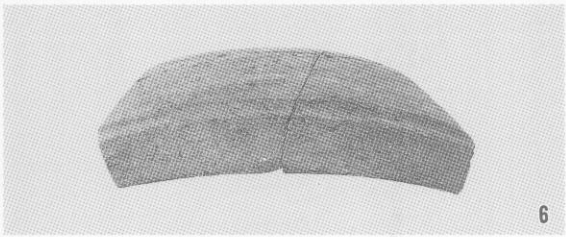


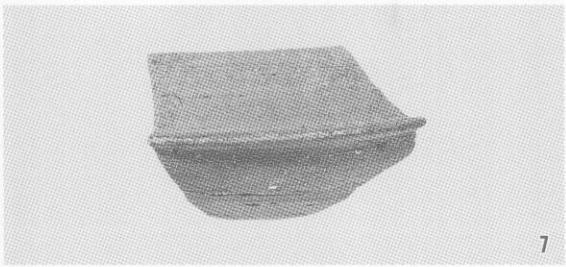


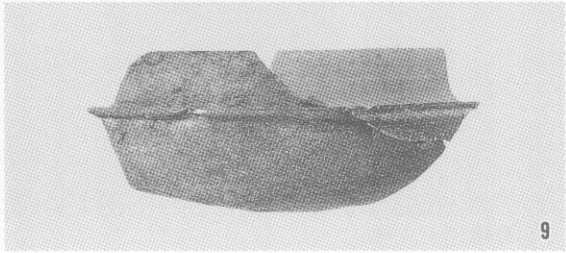




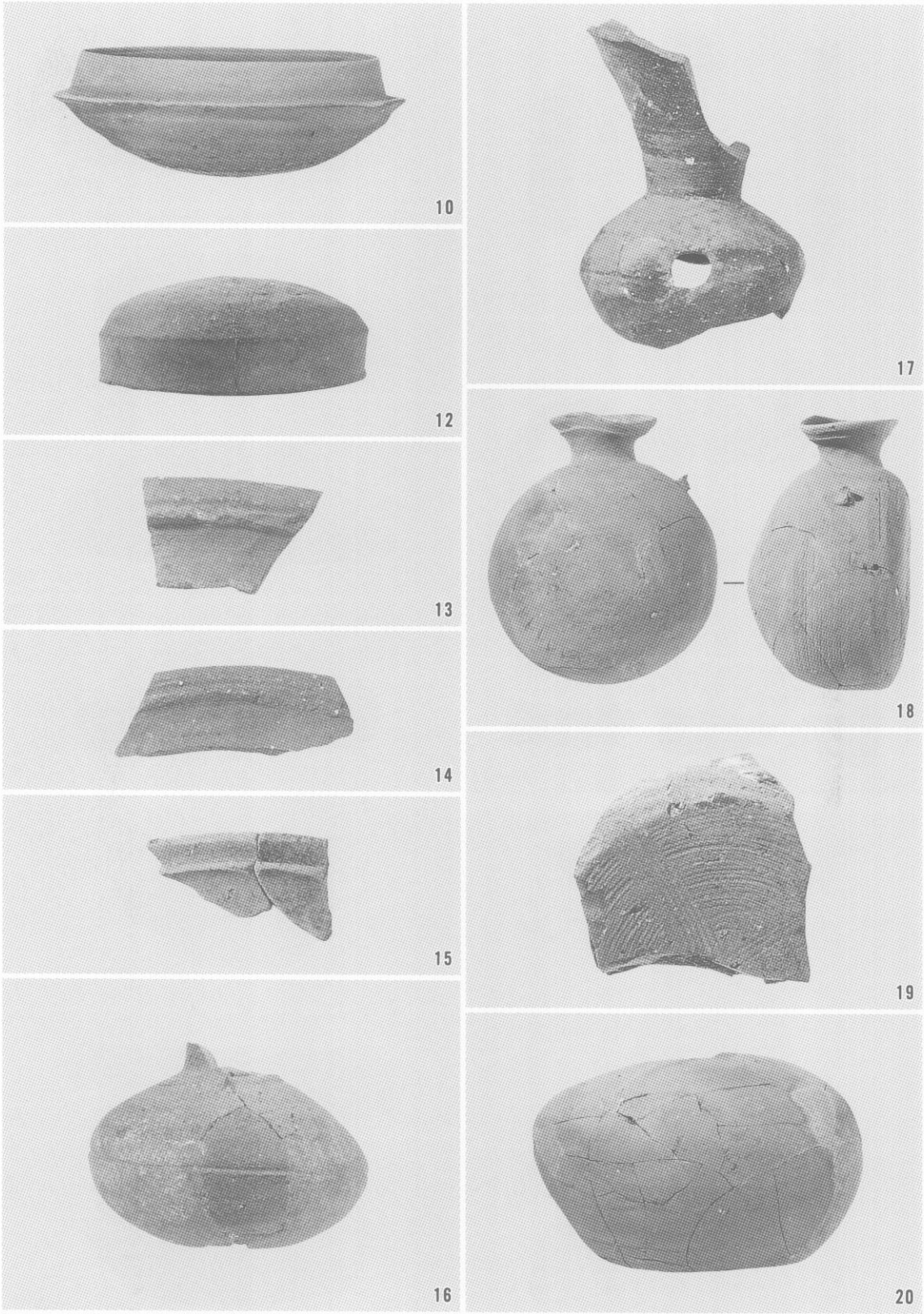




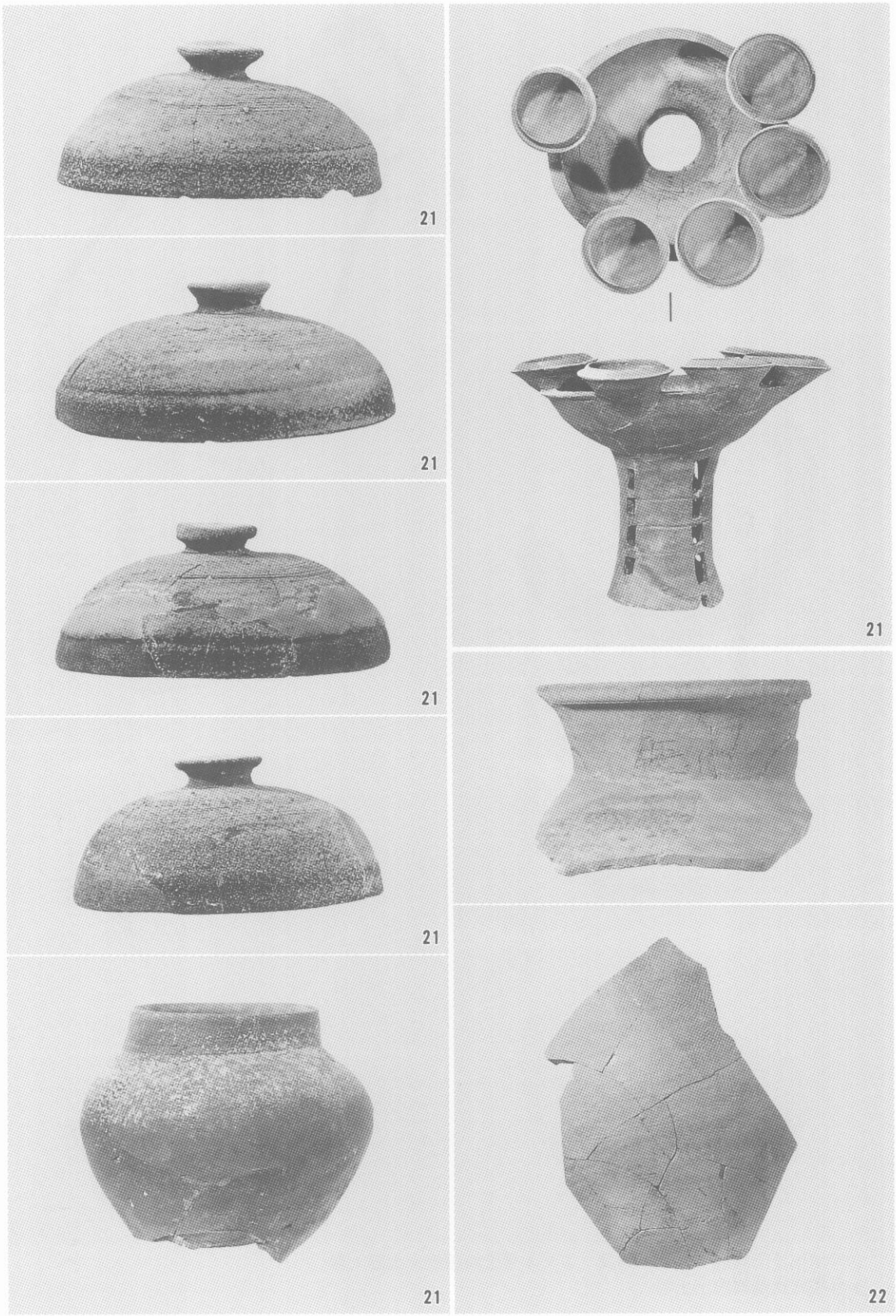




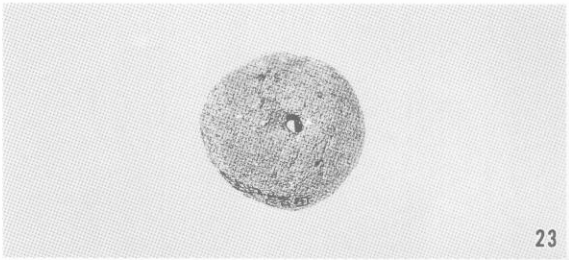
1号墳出土鉄器②・2号墳出土土器①

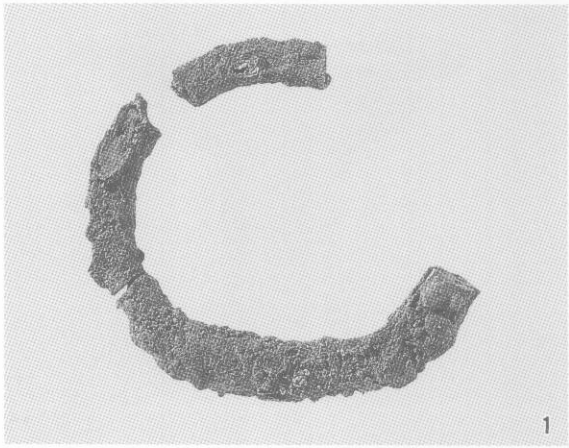


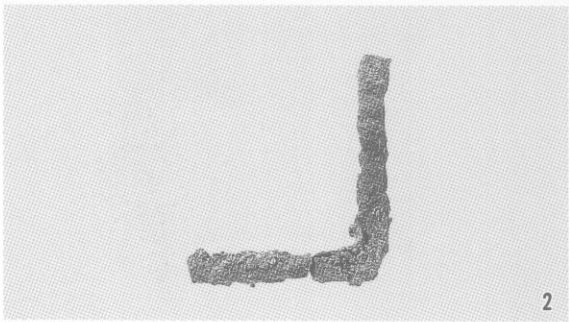
2号墳出土土器②

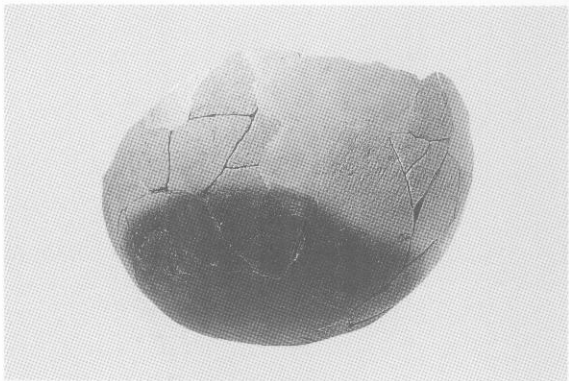


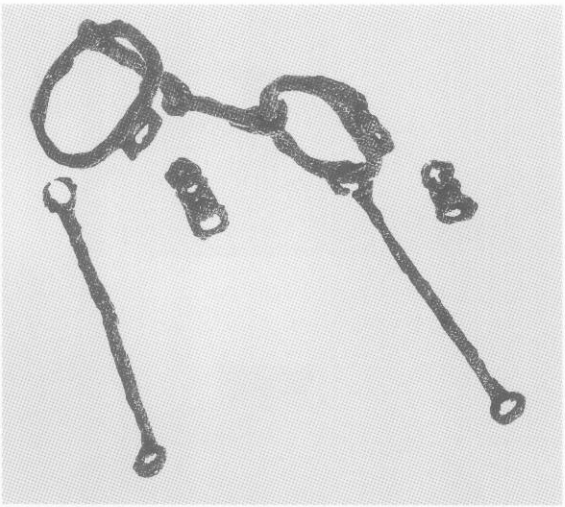
2号墳出土土器③

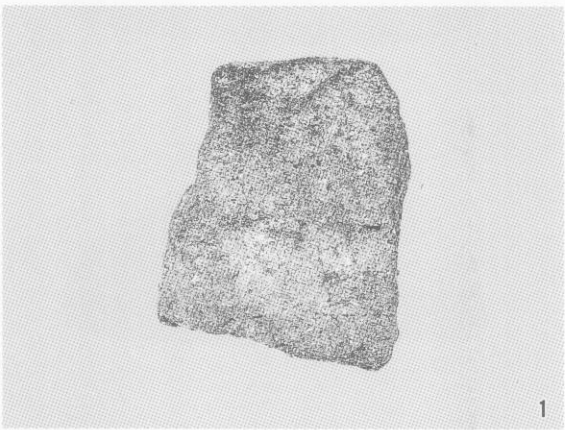


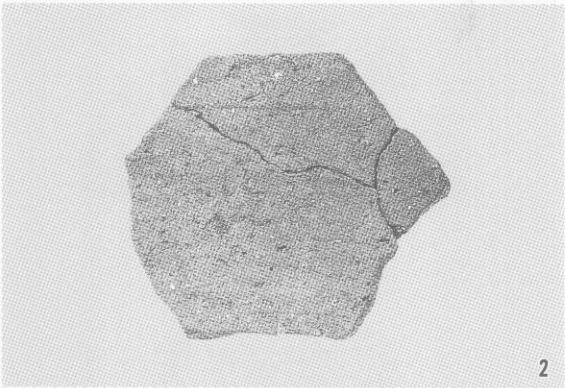


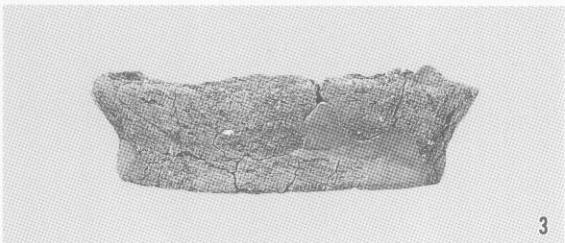




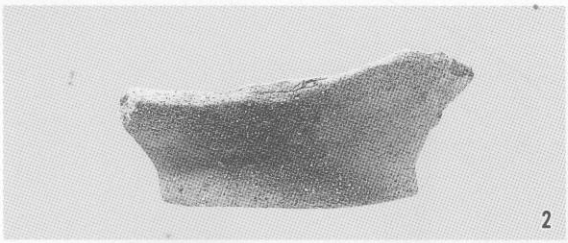


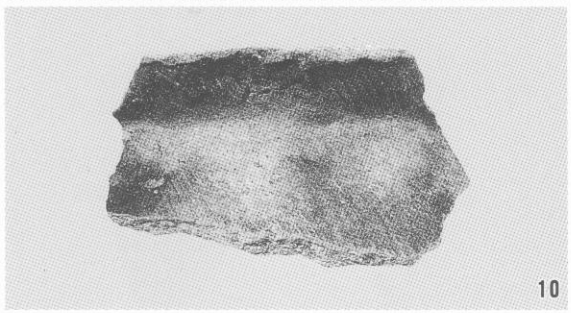


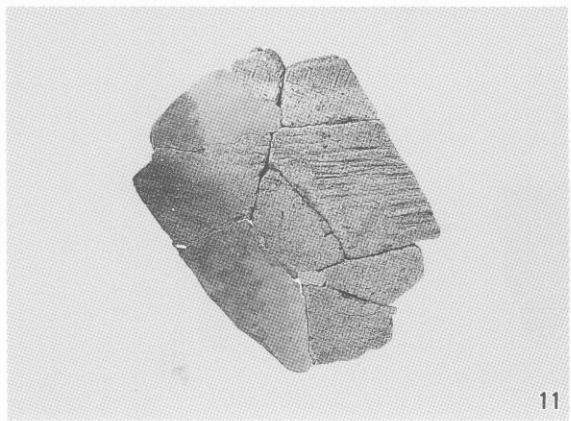


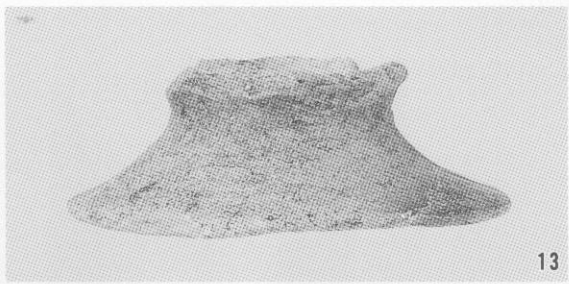


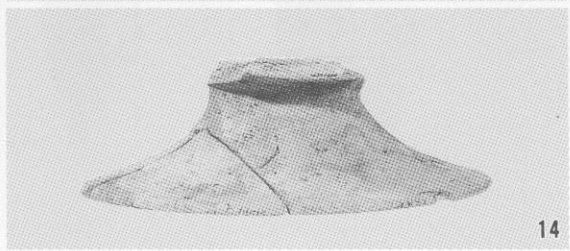
2号墳出土土製品・玉類・馬具　1・4号土壙墓出土土器・轡
1号竪穴状遺構出土土器

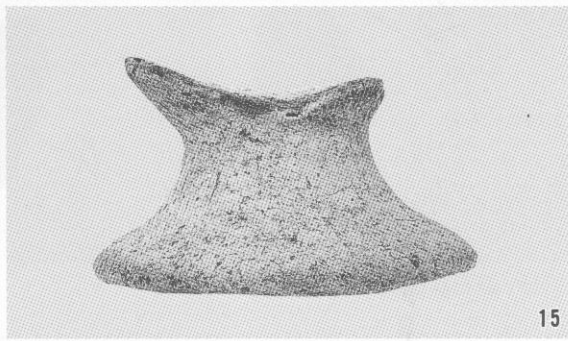


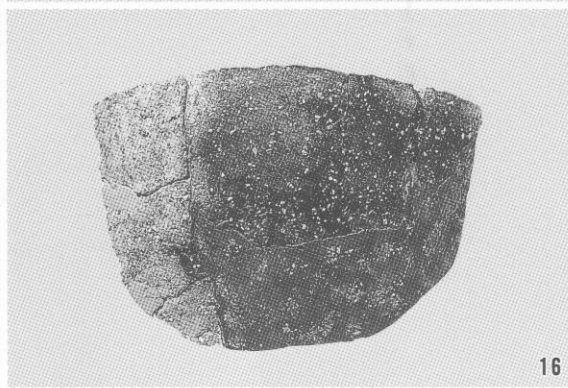


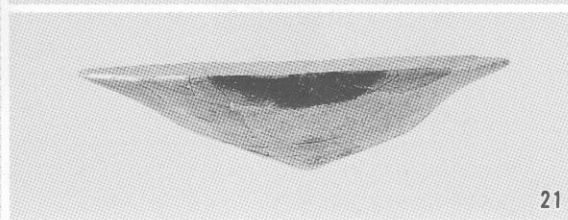




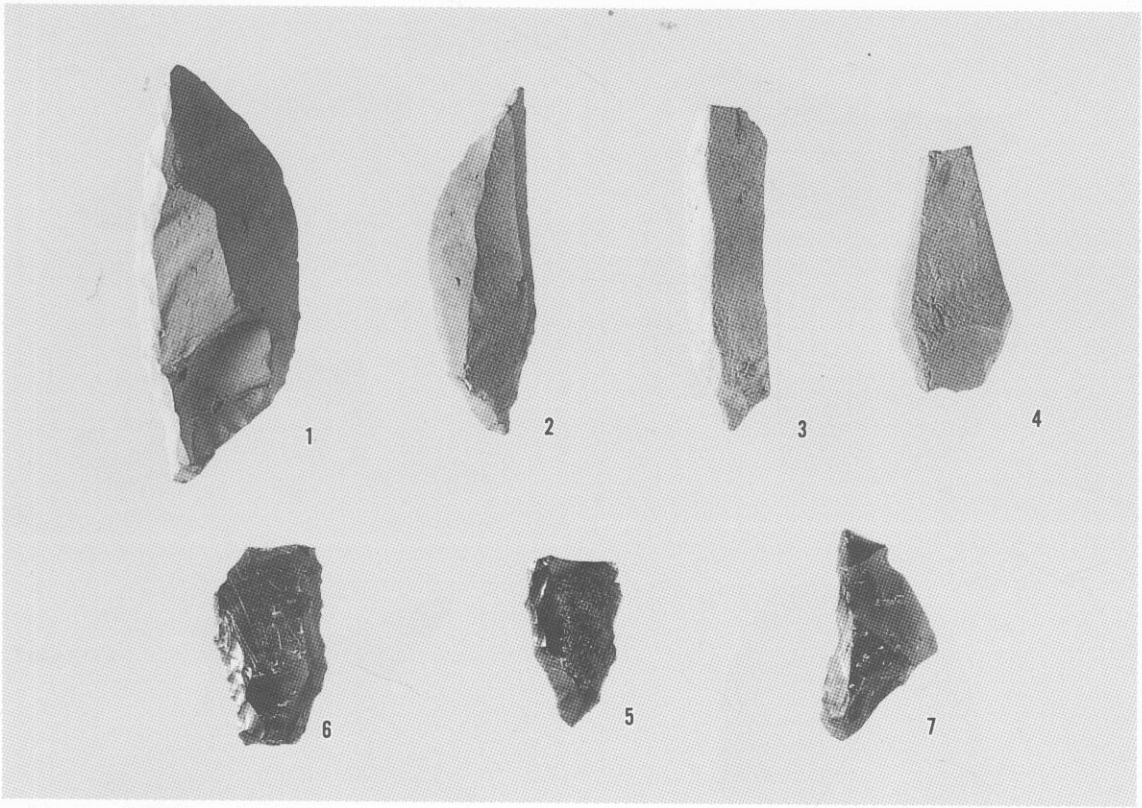




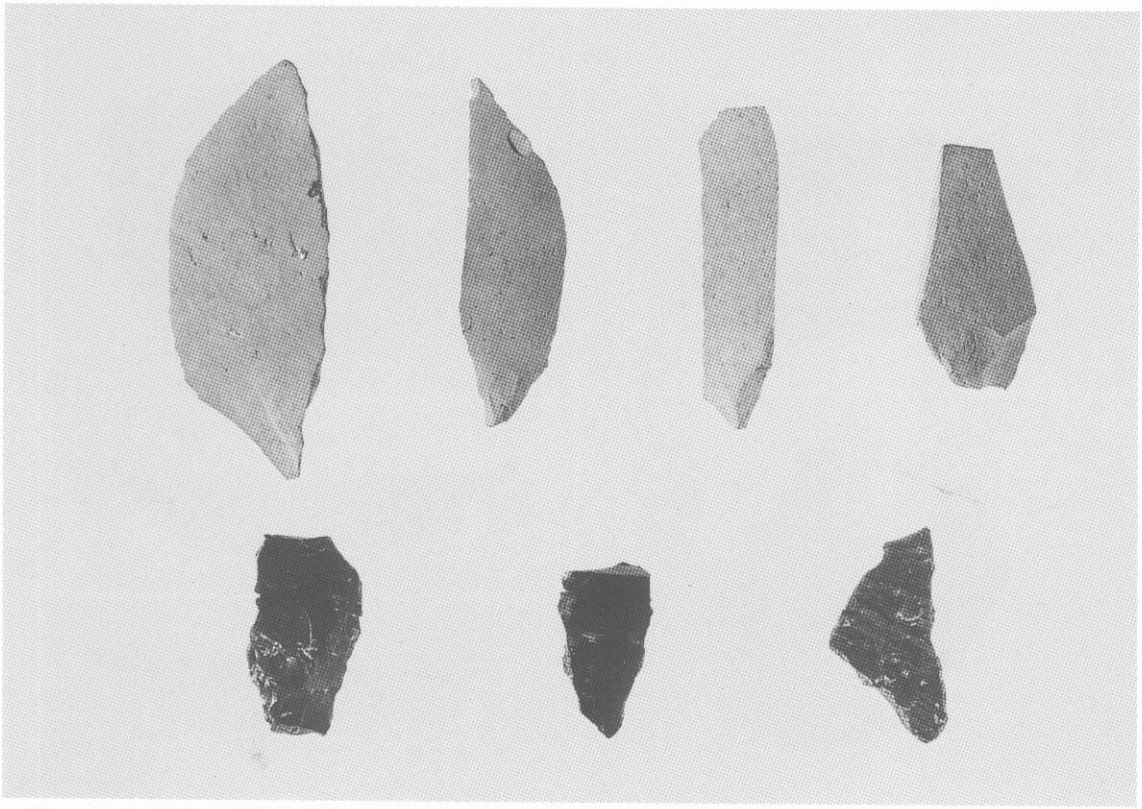




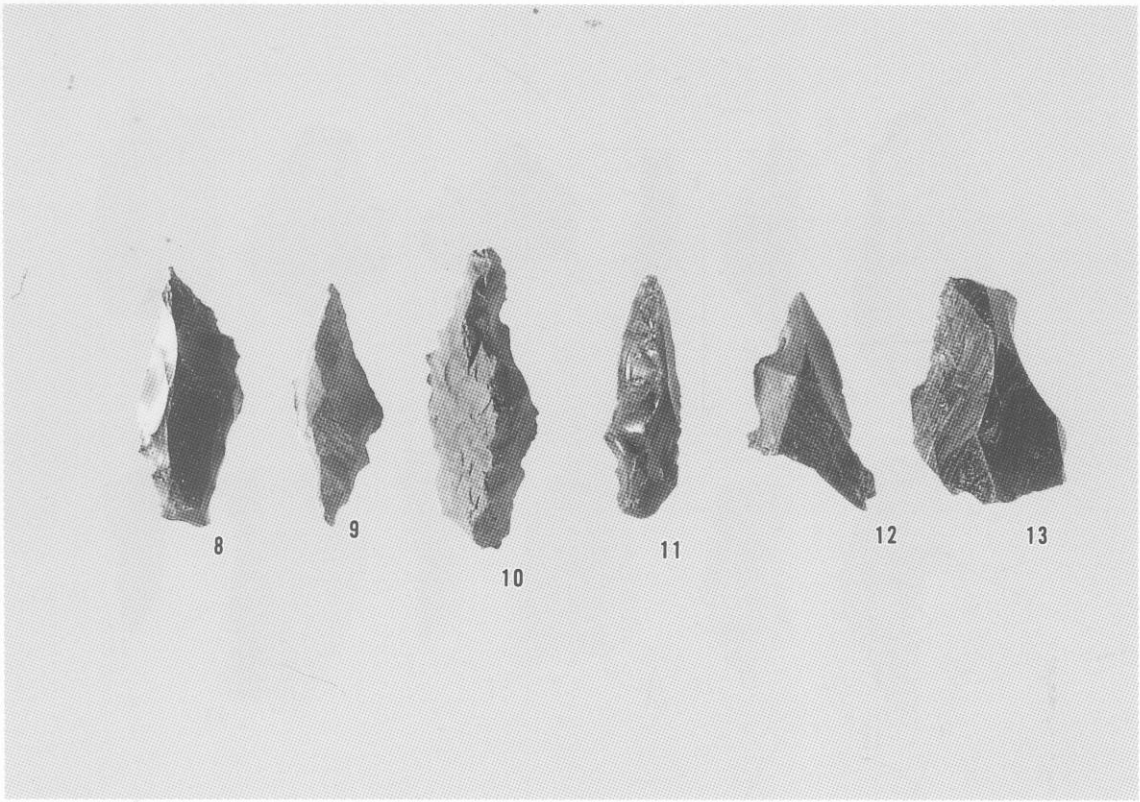
1号墳墳丘下層出土土器



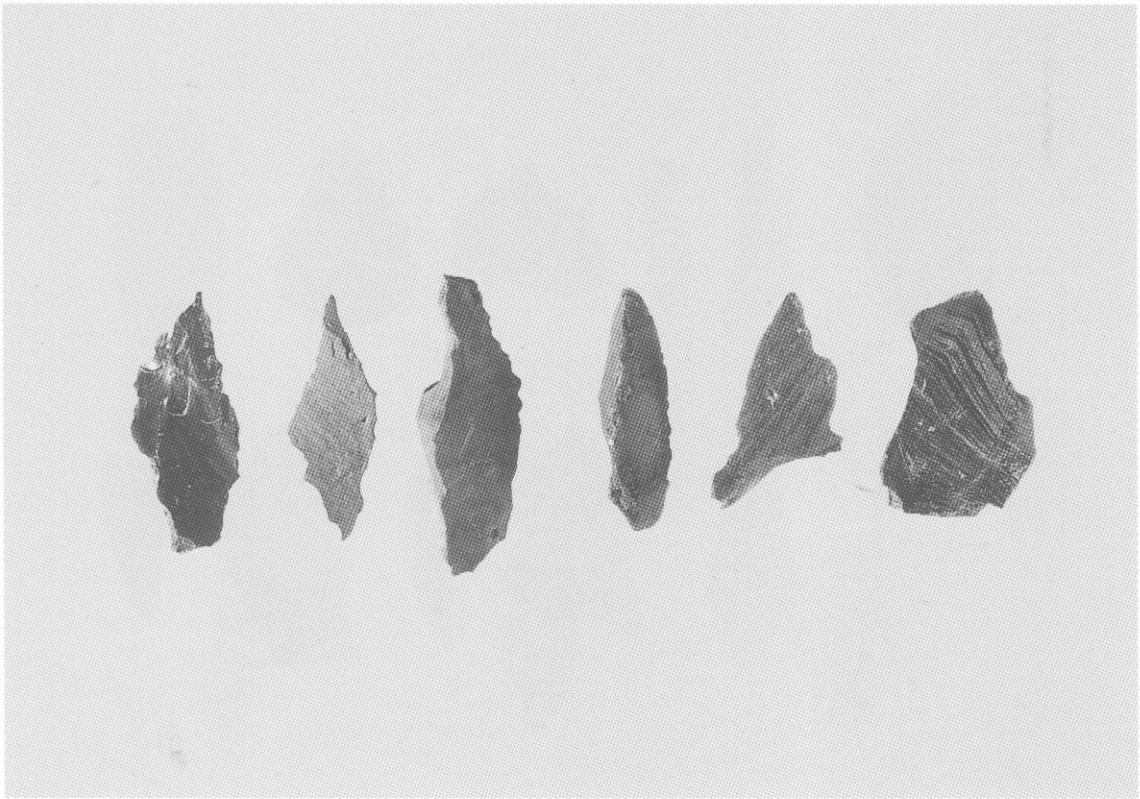
(1)　旧石器時代の石器①(表)



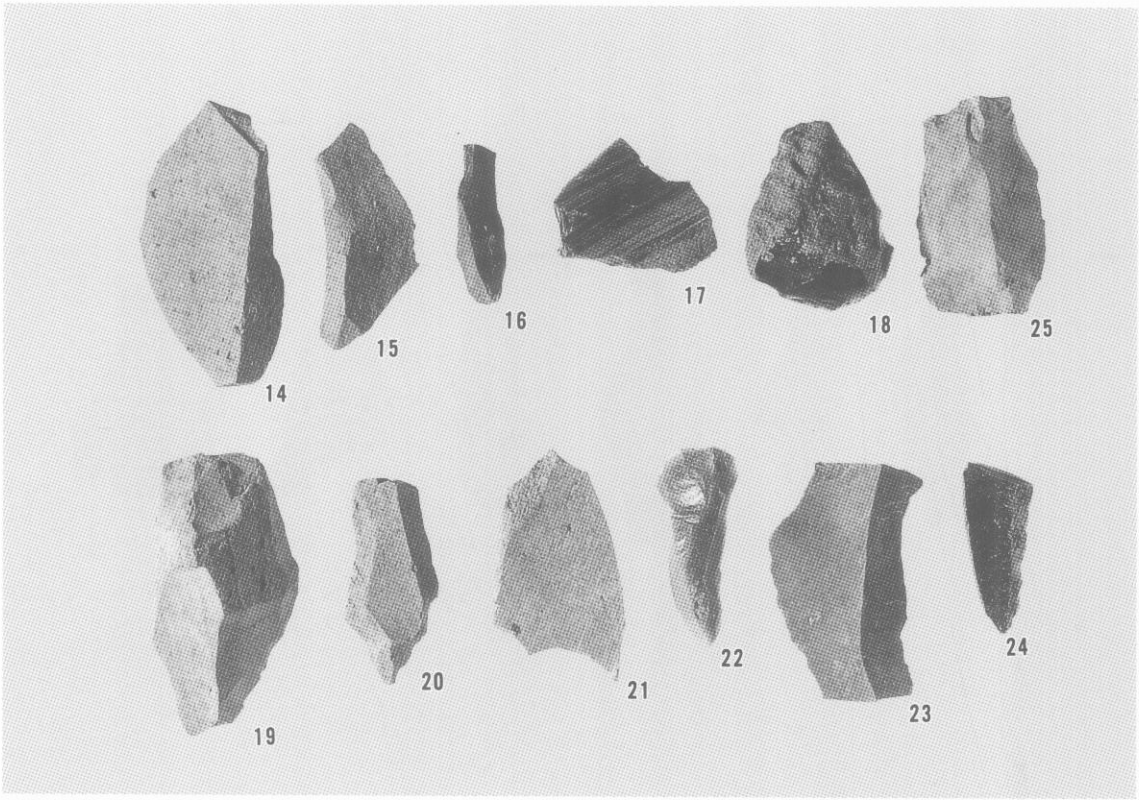
(2)　旧石器時代の石器①(裏)



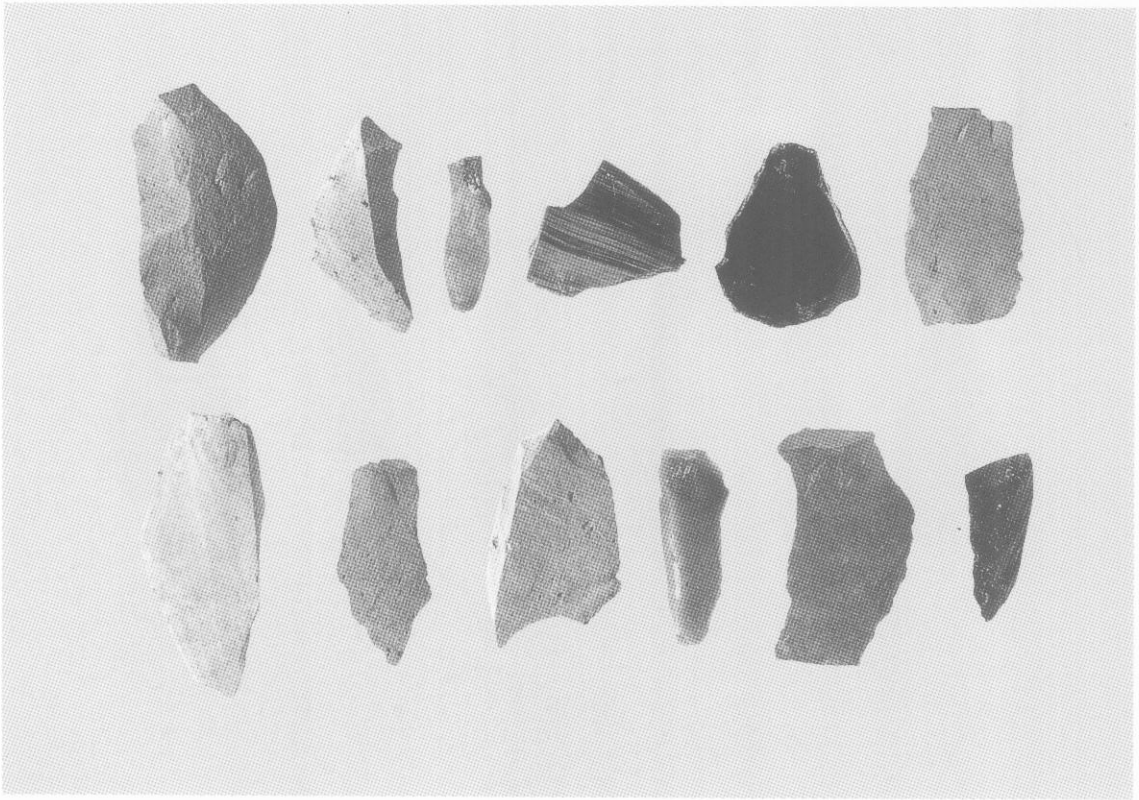
(1)　旧石器時代の石器②(表)



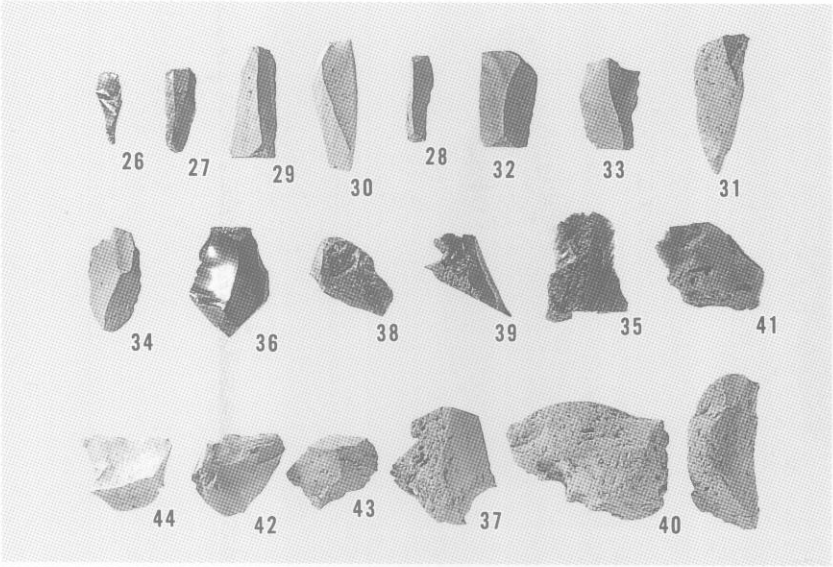
(2)　旧石器時代の石器②(裏)



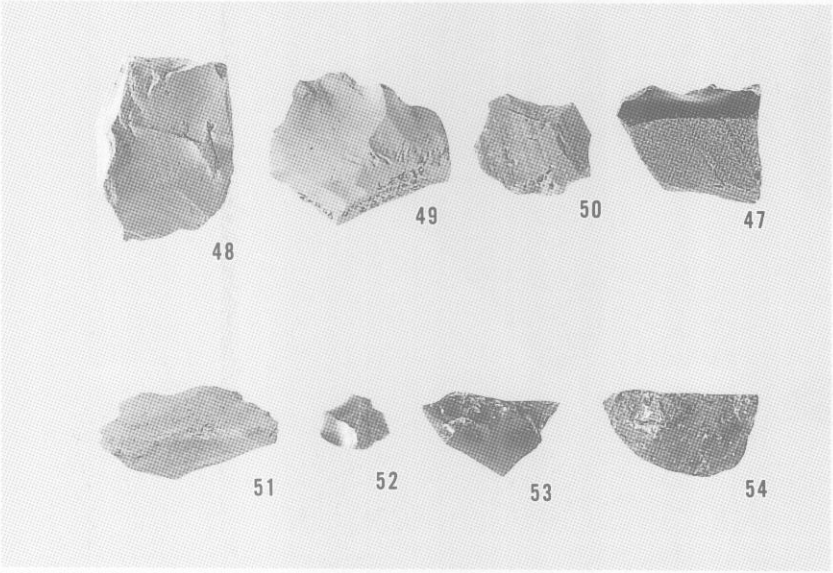
(1)　旧石器時代の石器③(表)



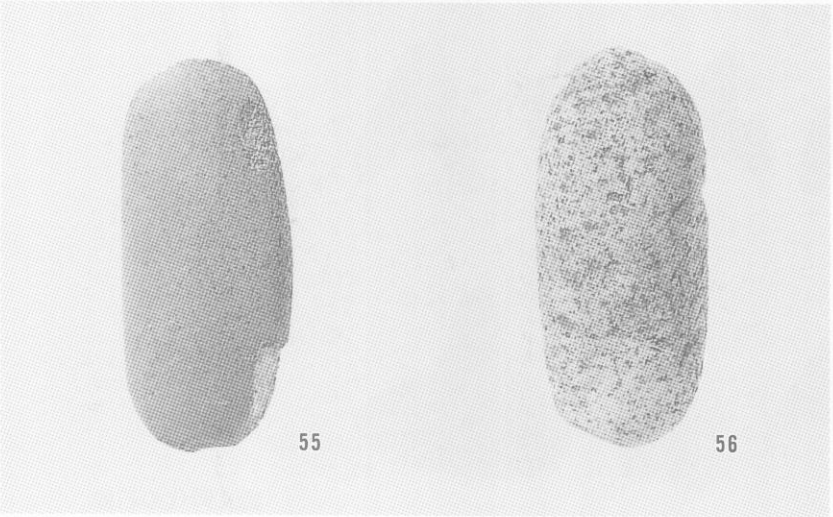
(2)　旧石器時代の石器③(裏)



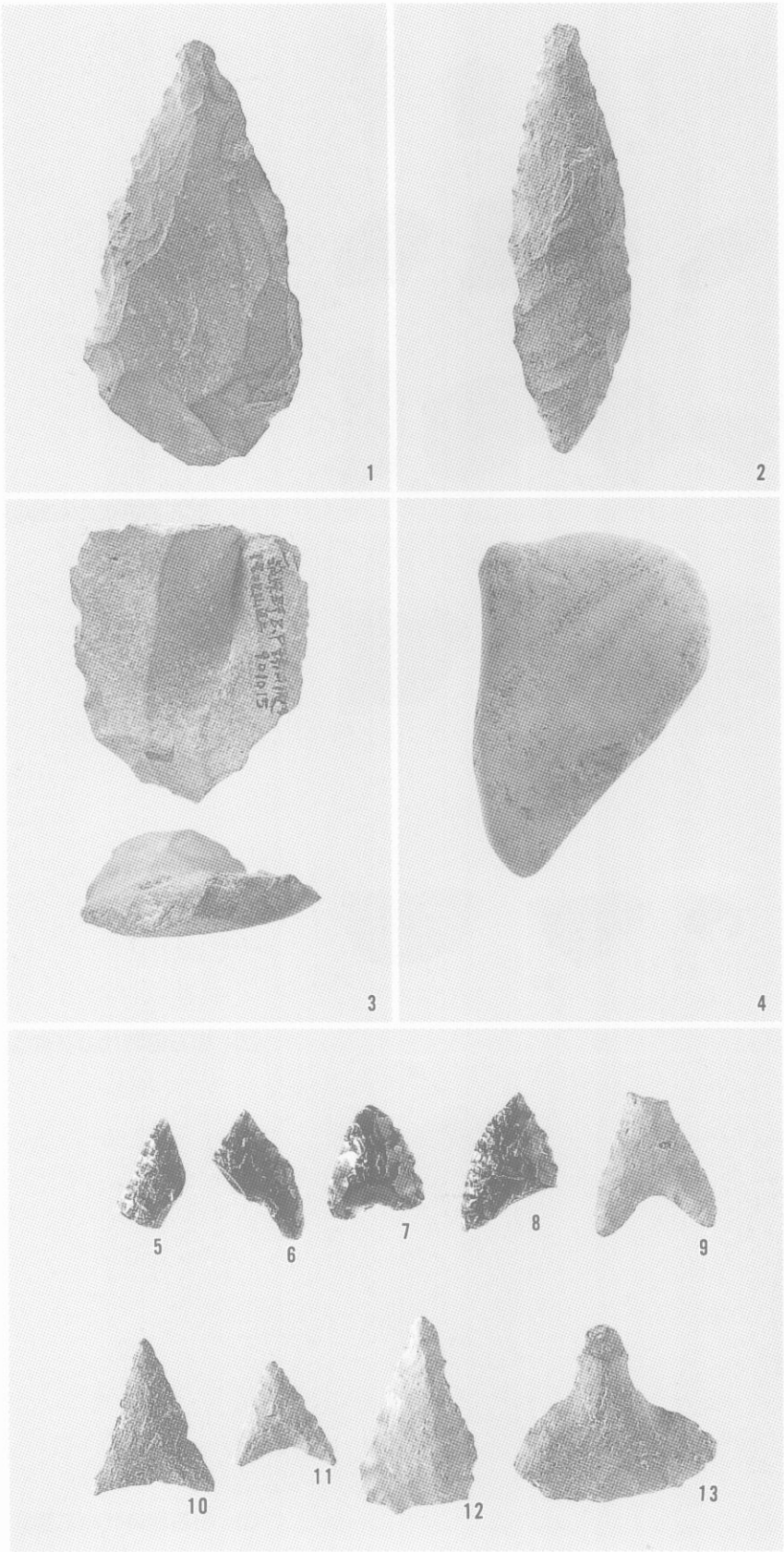
(1)　旧石器時代の石器④



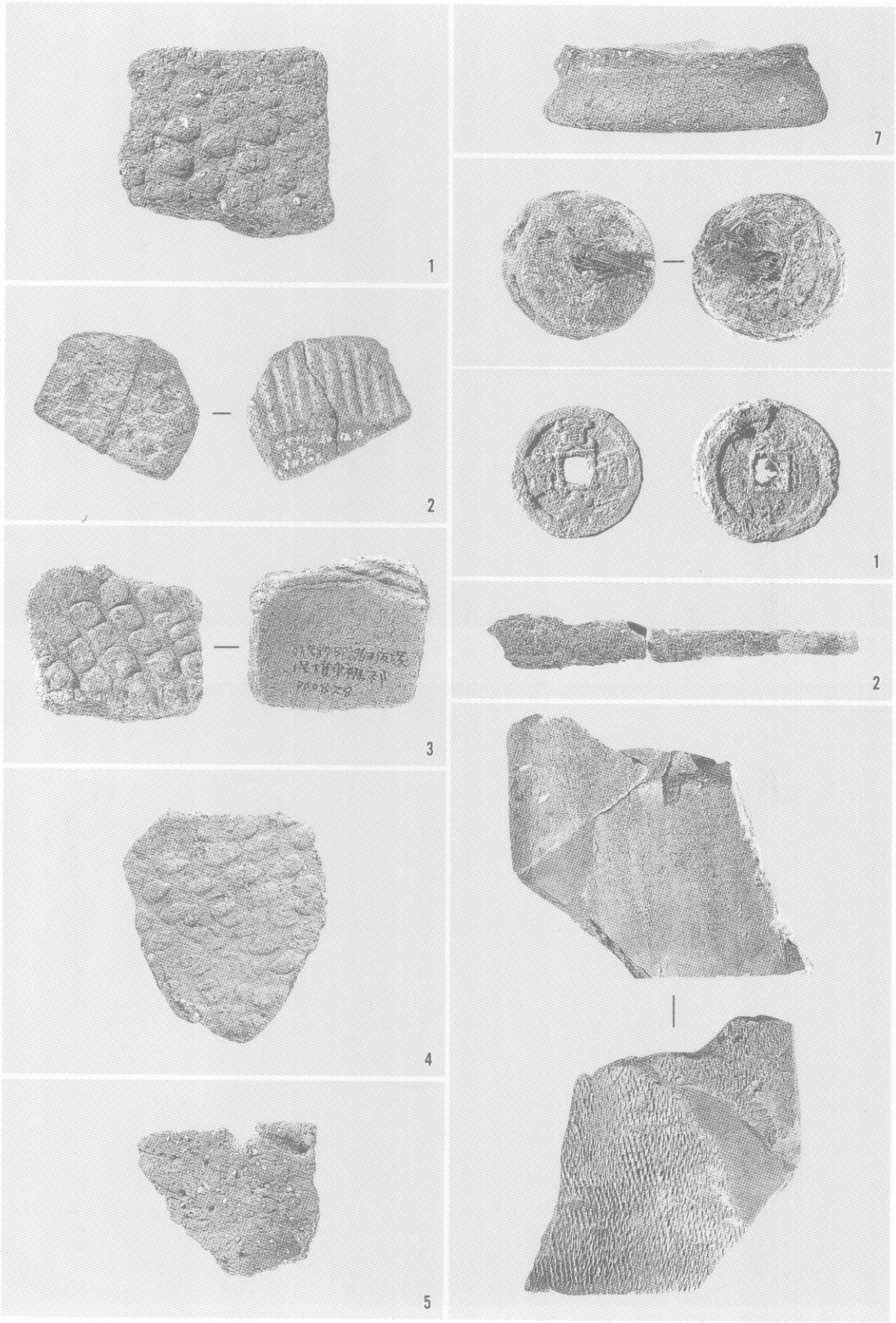
(2)　旧石器時代の石器⑤



(3)　旧石器時代の石器⑥



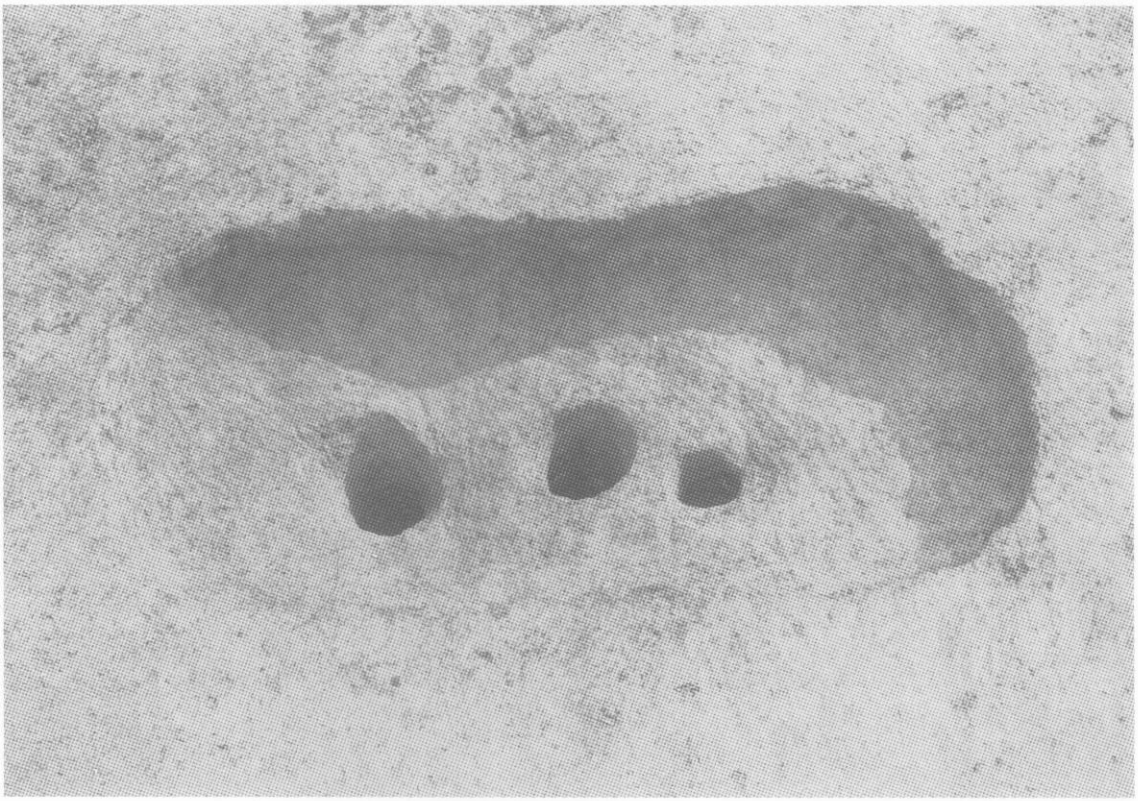
縄文時代の石器



その他出土の縄文土器・銅製品・瓦

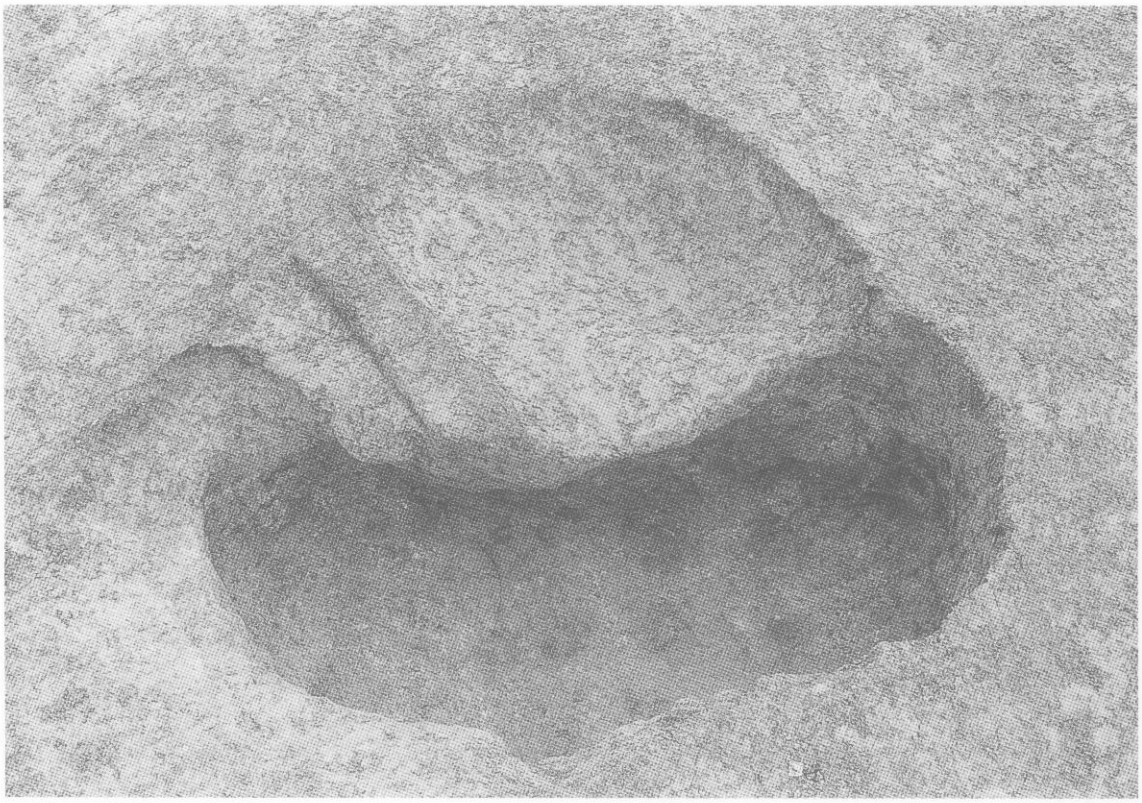
(1)永岡地区全景(空中写真、上空から)

(2)　永岡地区南部(空中写真、上空から)



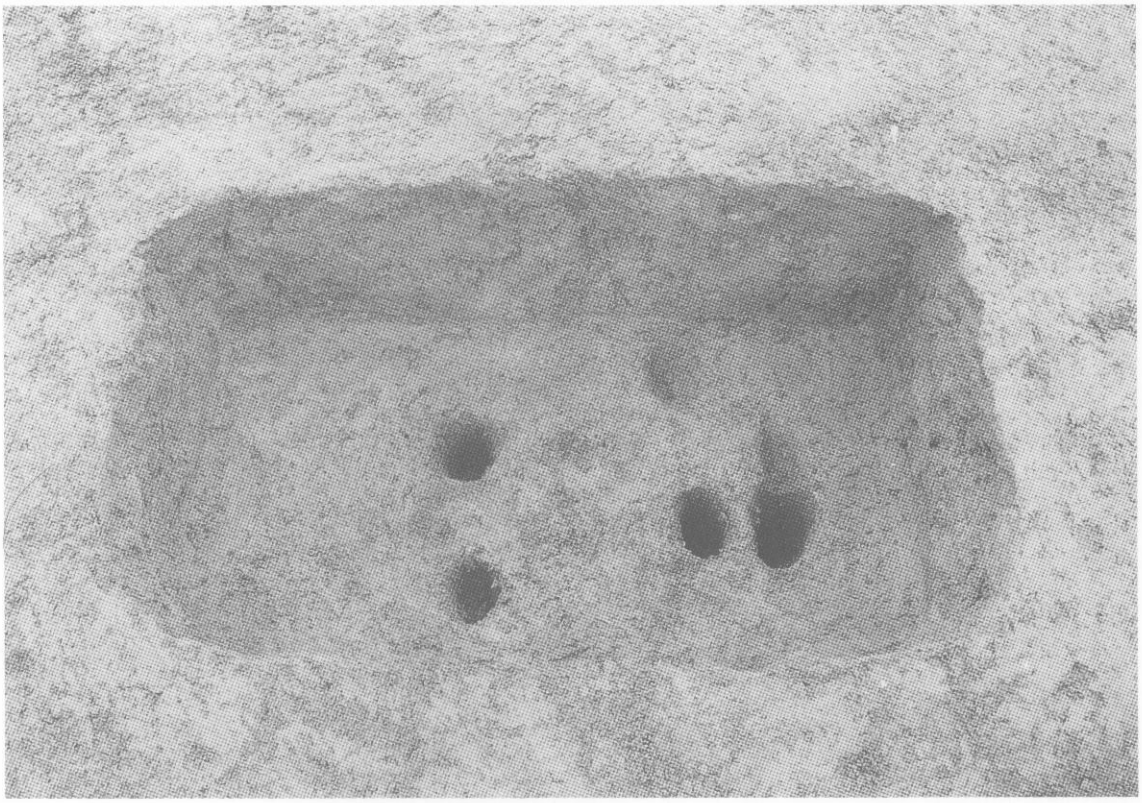
(1)　1号落とし穴

(2)　2号落とし穴(東から)



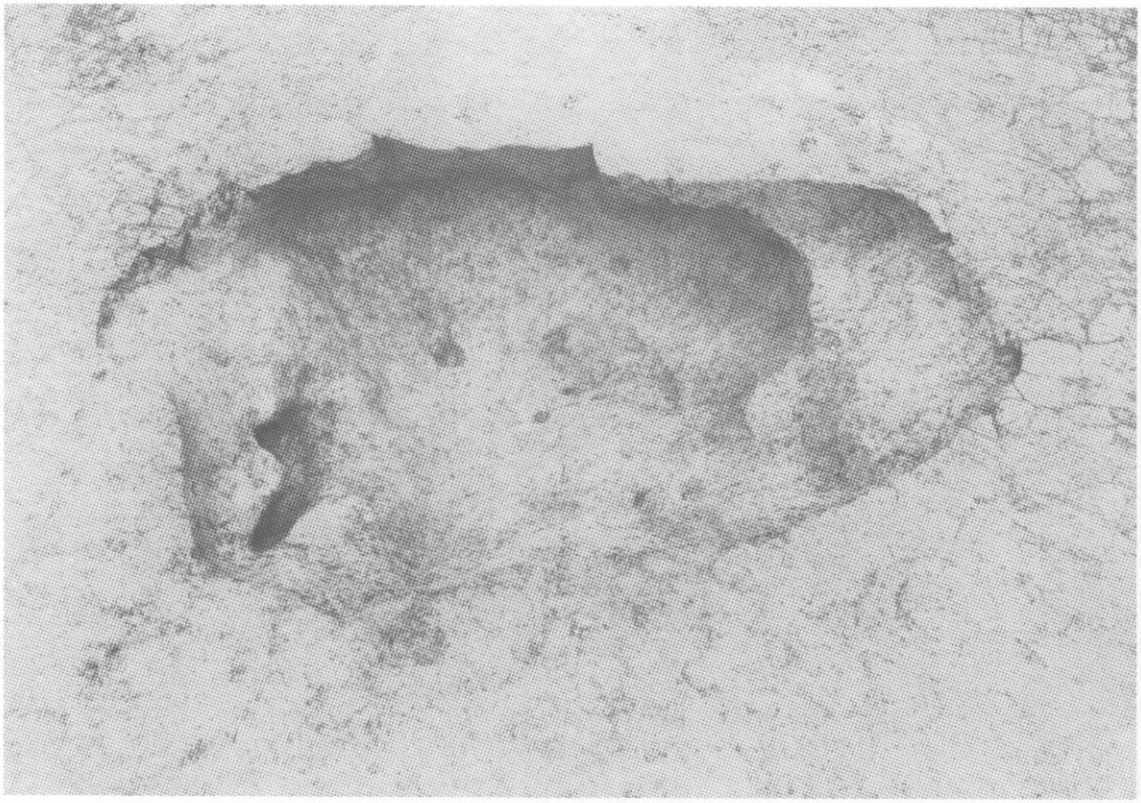
(1)　3号落とし穴(南東から)

(2)　4号落とし穴(北西から)

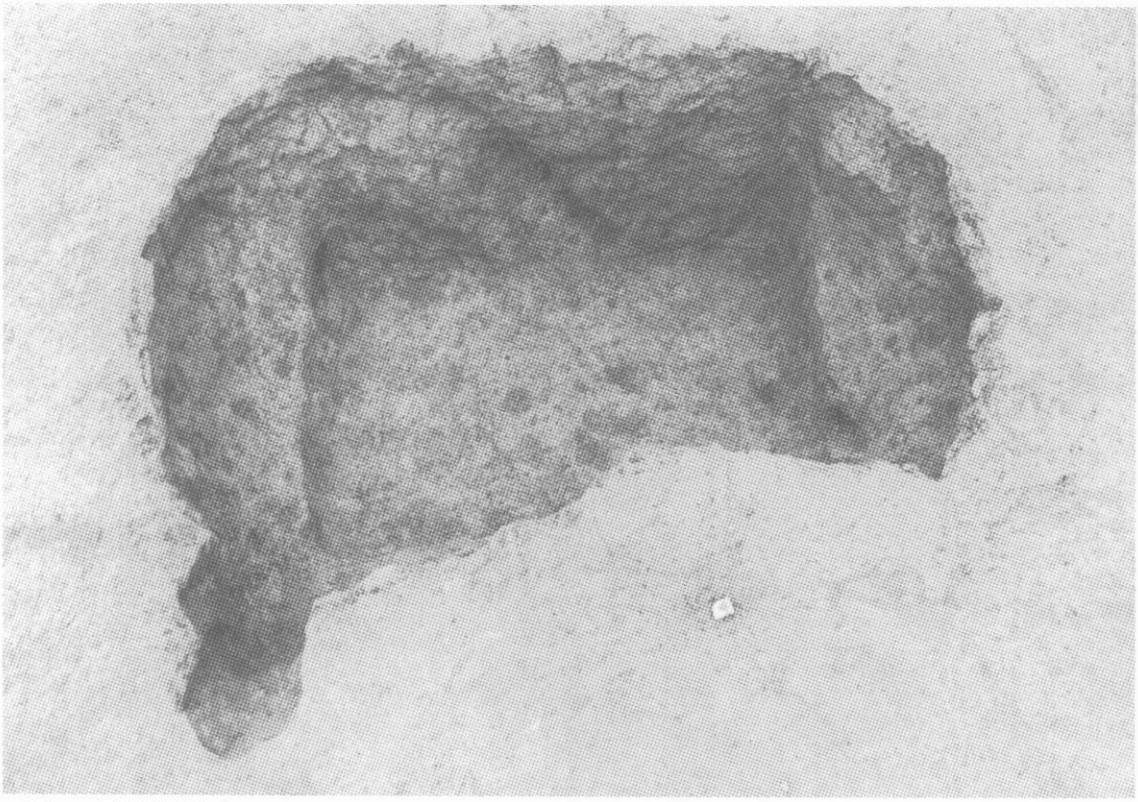


(1)　5号落とし穴(南西から)

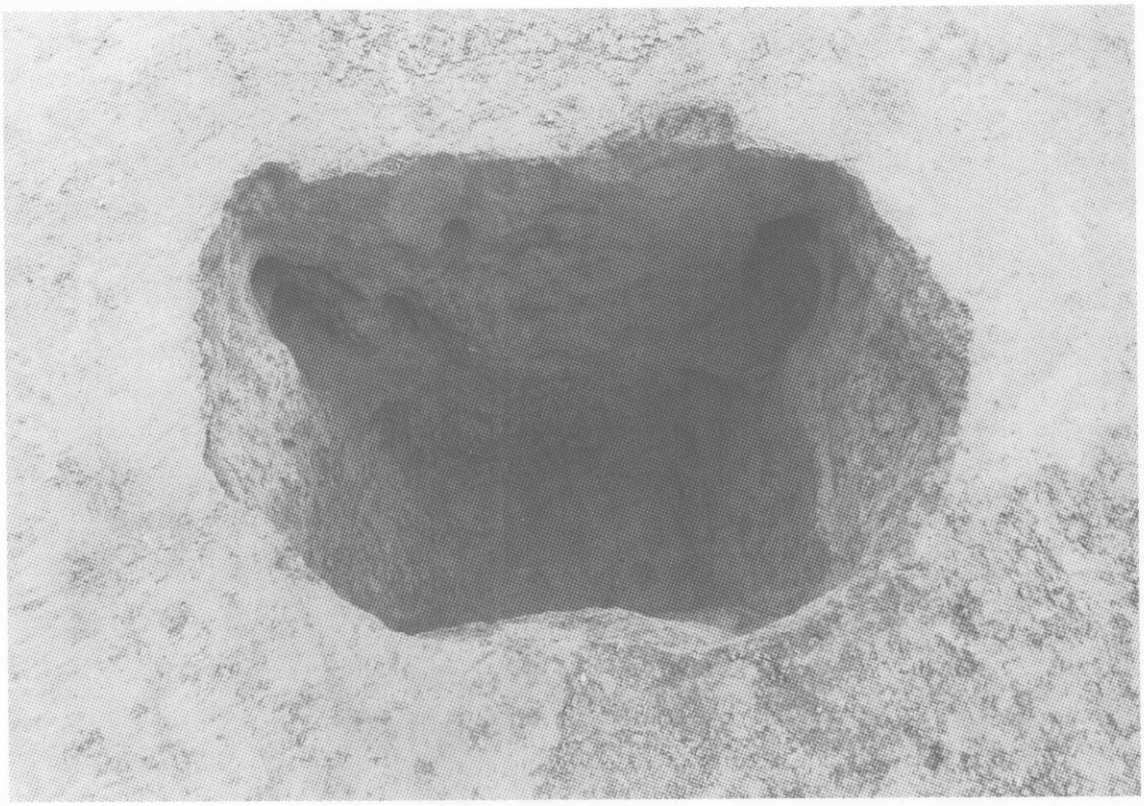
(2)　7号落とし穴(南西から)



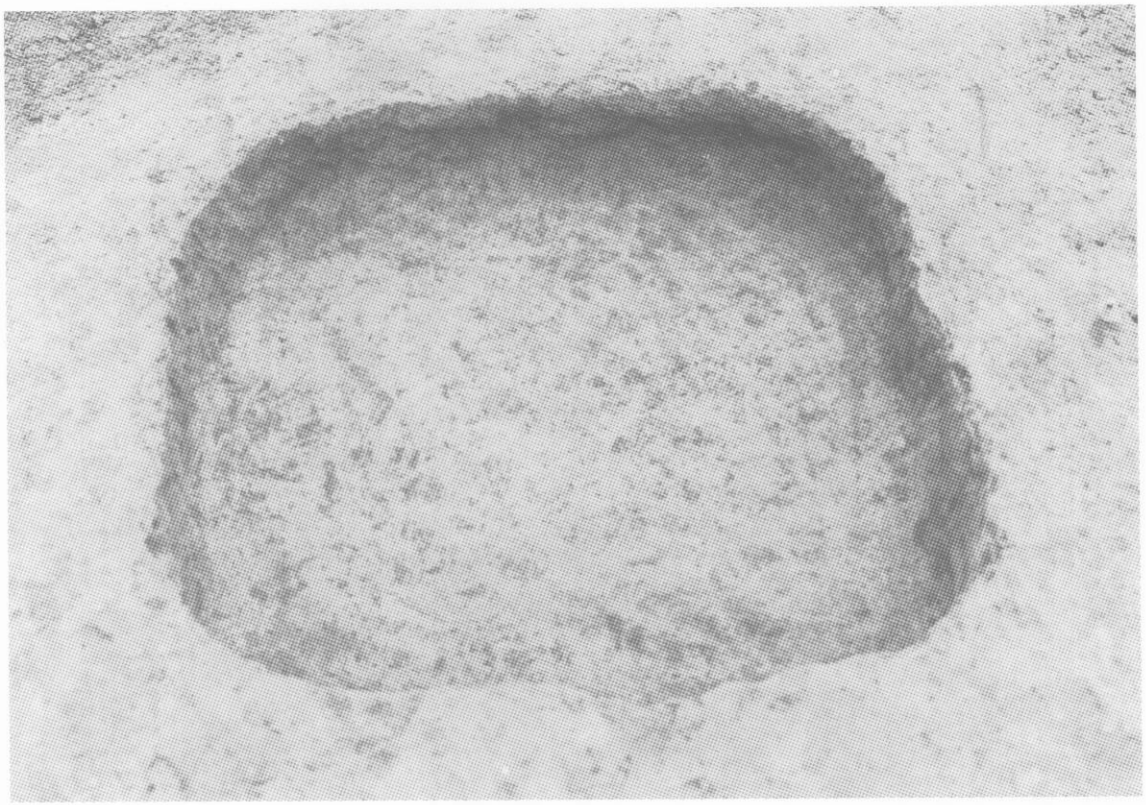
(1)　1号土坑(風倒木)(東から)



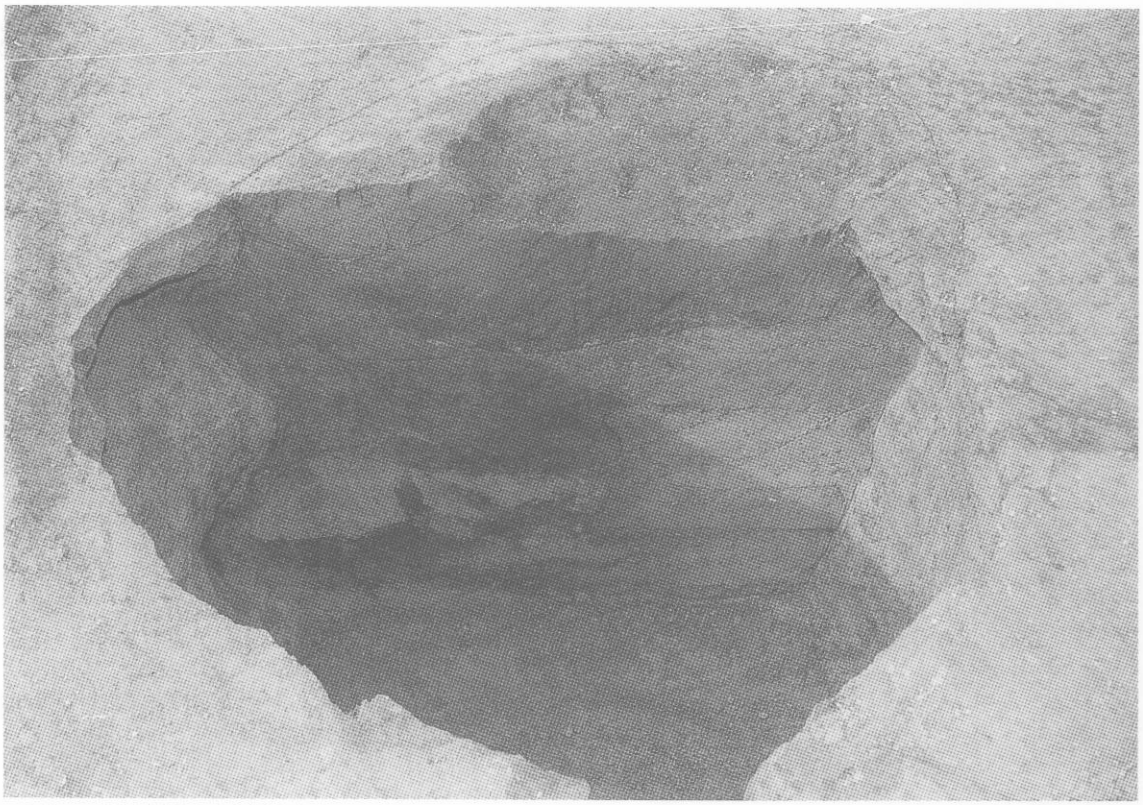
(2)　2号土坑(北東から)



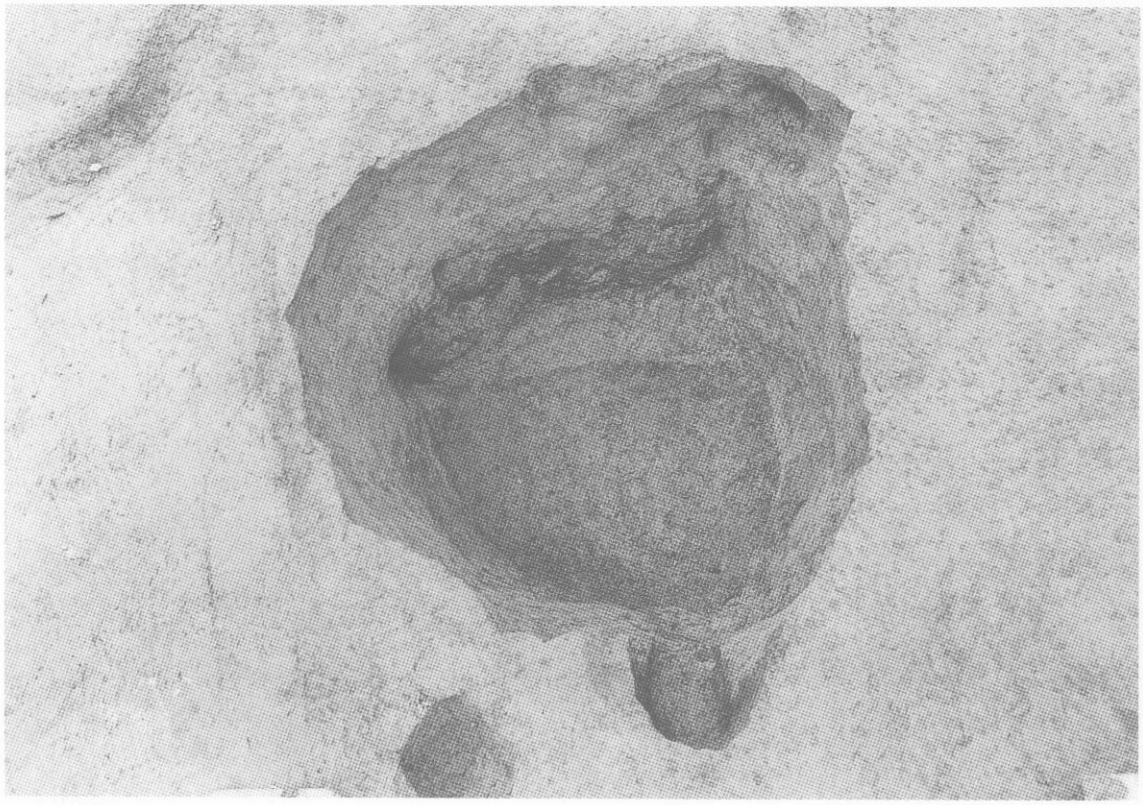
(1)　3号土坑(北西から)



(2)　4号土坑(南東から)



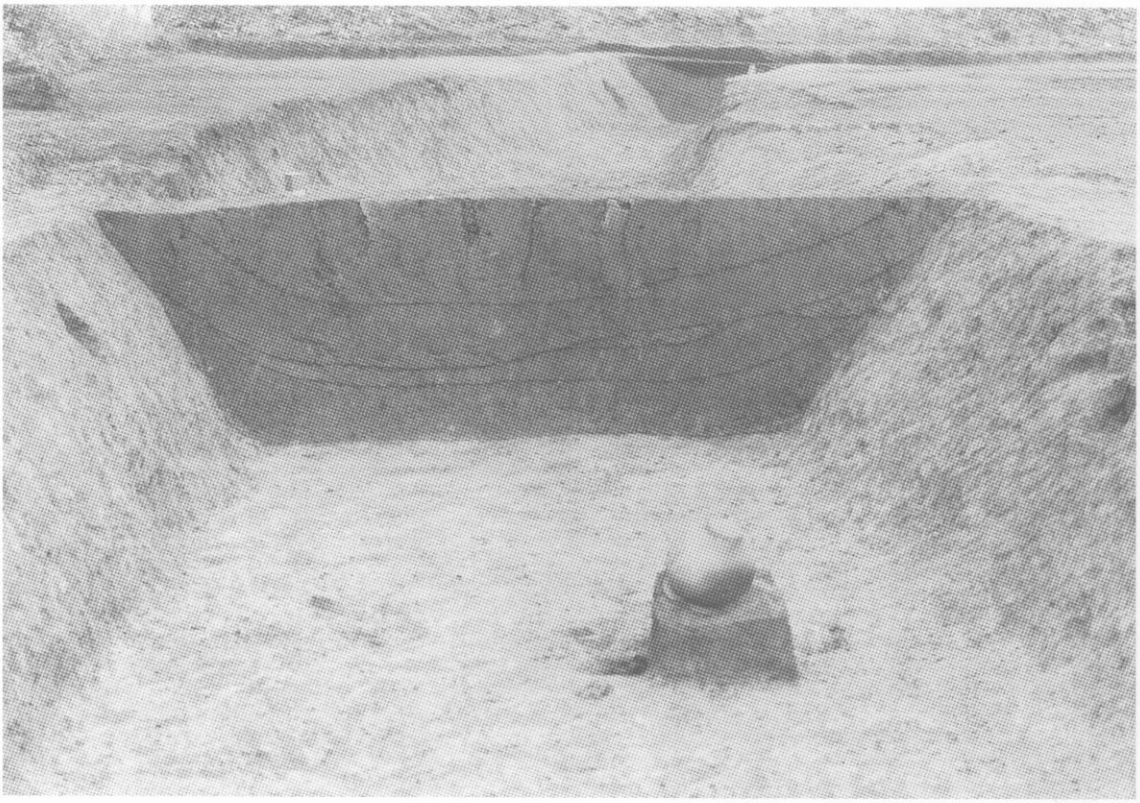
(1)　5号土坑断面土層(南東から)



(2)　5号土坑(南東から)

(1) 大溝１(東から)

(2) 大溝１(西から)

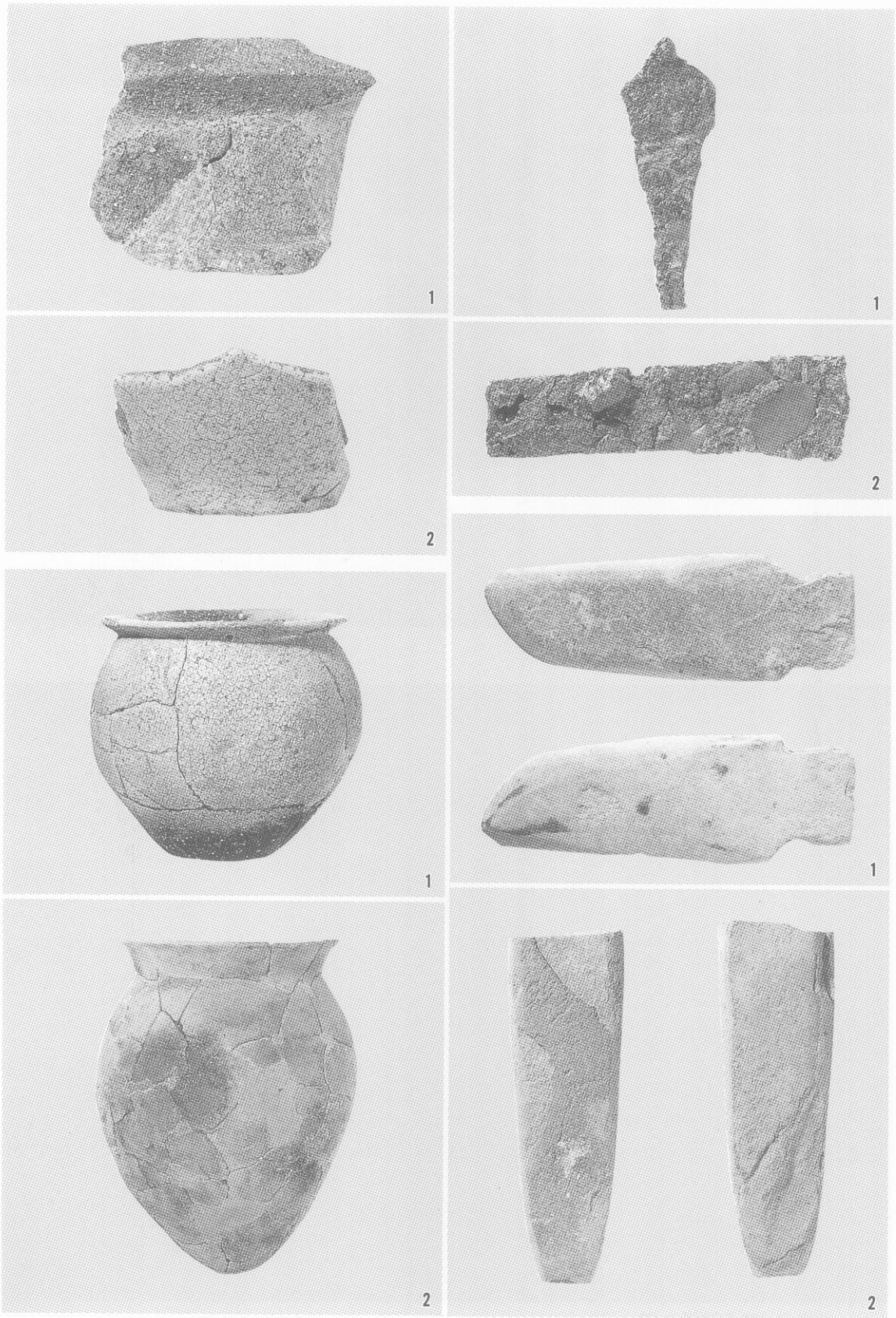


(1)　大溝２（東から）

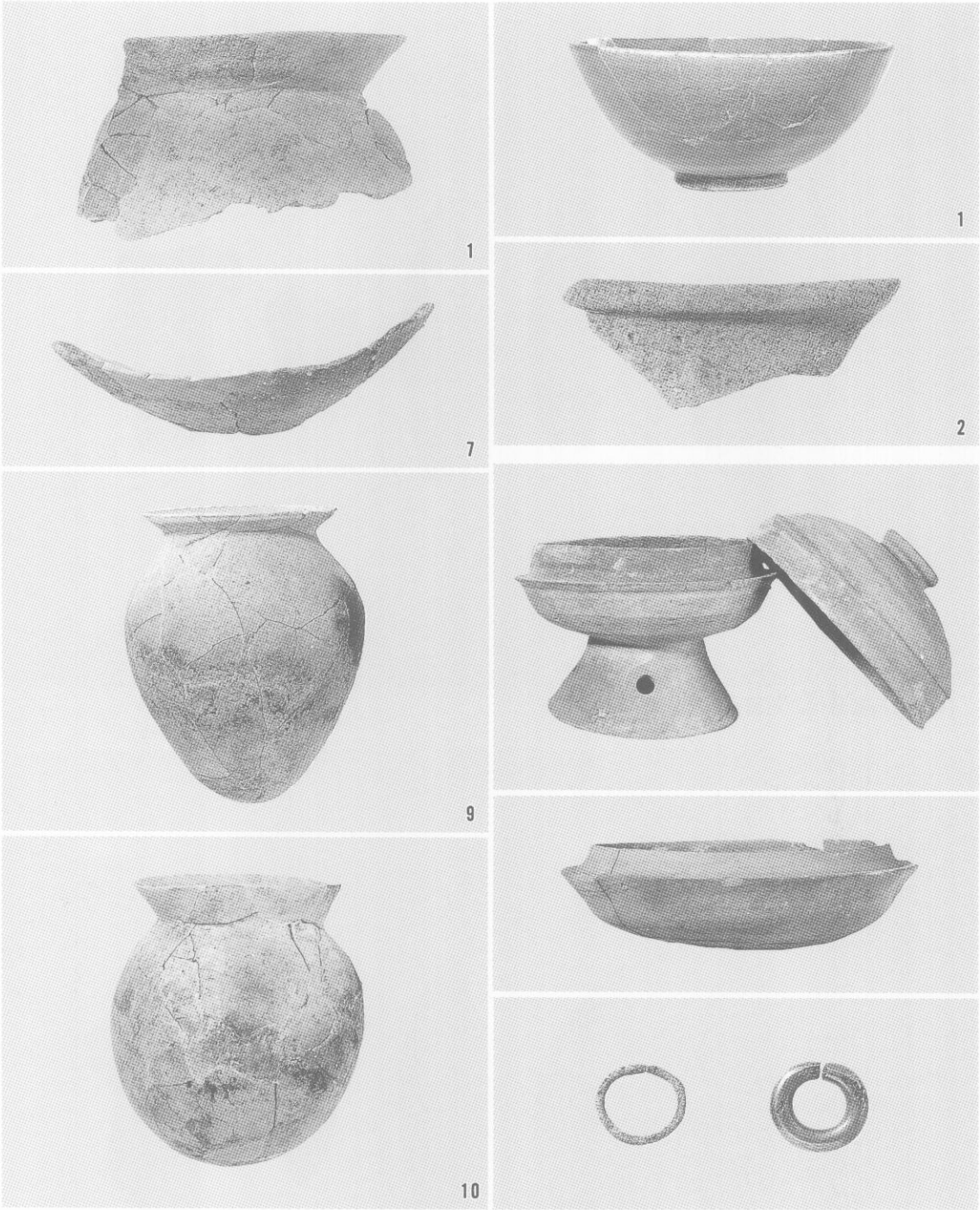
(2)大溝２（西から）

(1)　大溝２の東側地滑り（東から）

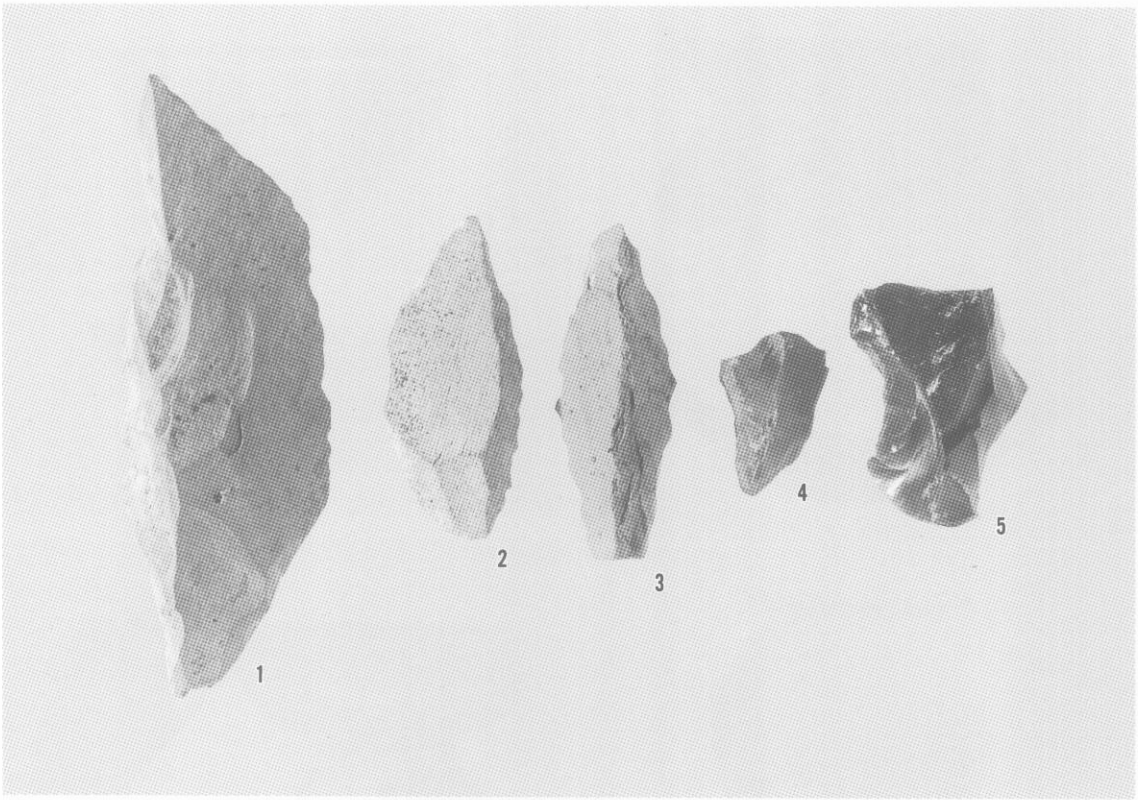
(2)　大溝２の東側地滑り（南から）



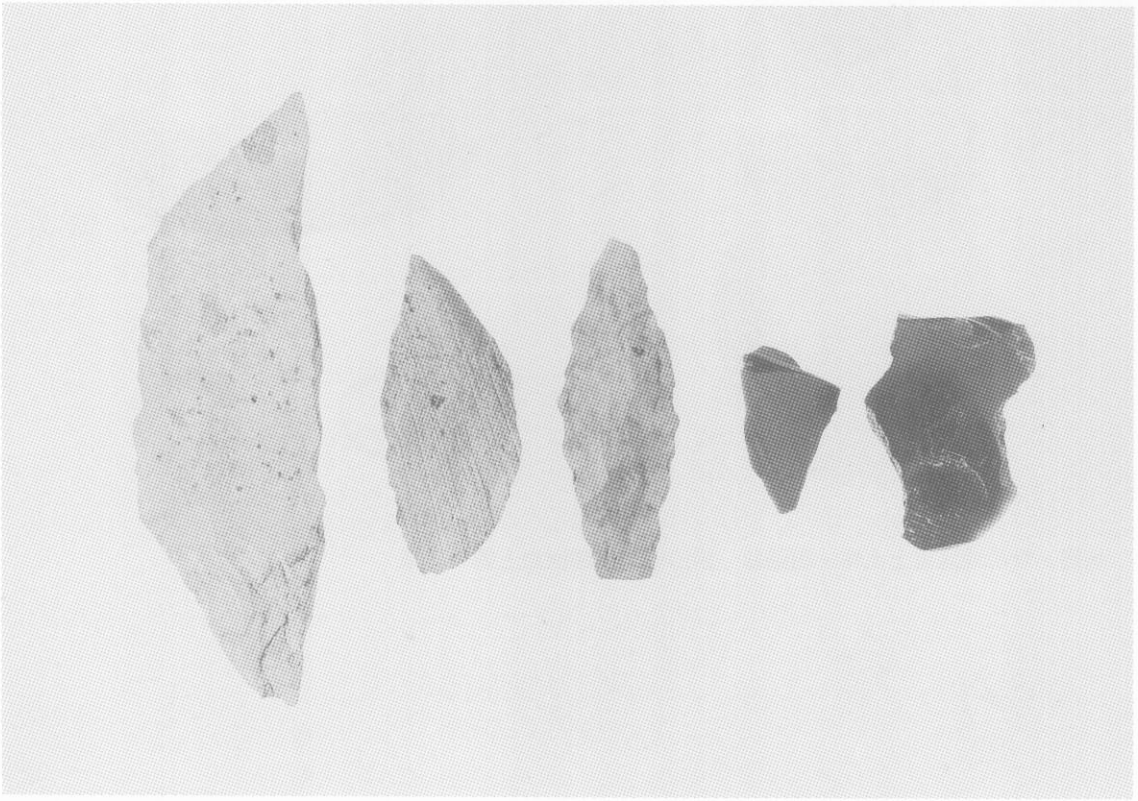
大溝１・２出土の土器・鉄器・石器



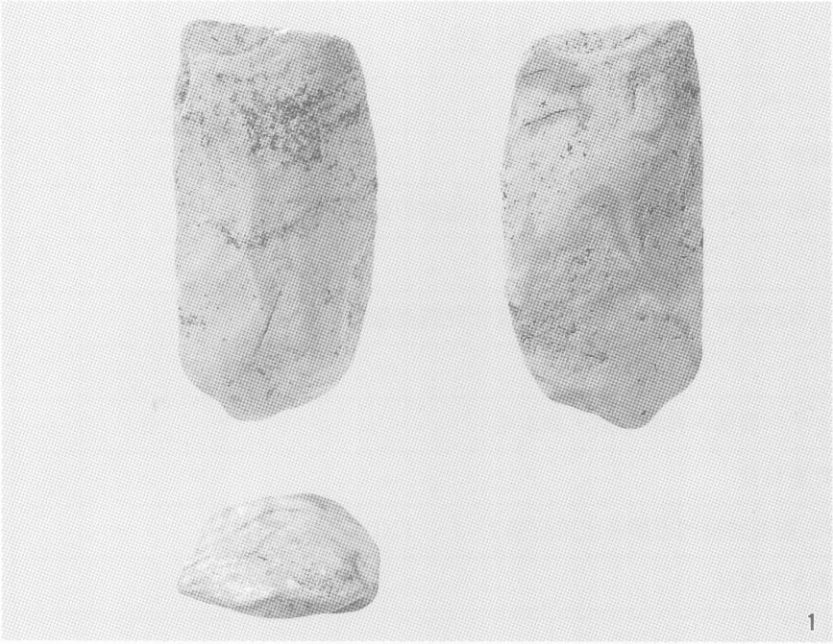
永岡・常松地区出土土器・陶磁器　諸田仮塚遺跡採集土器・耳環



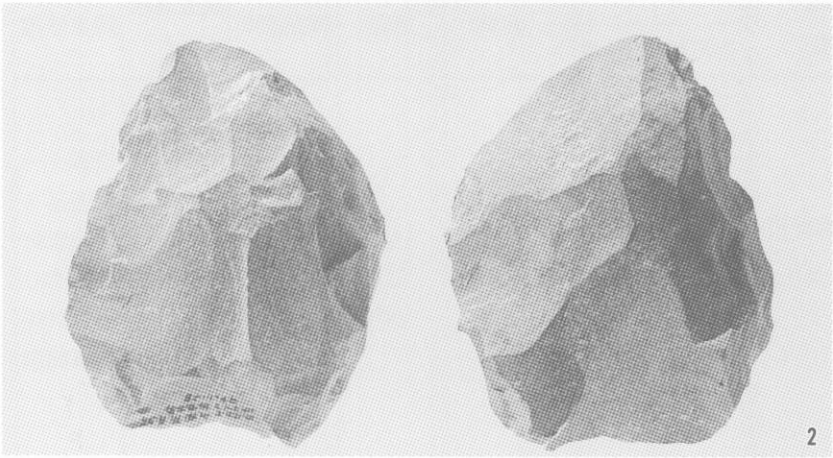
(1)　旧石器時代の石器(表)



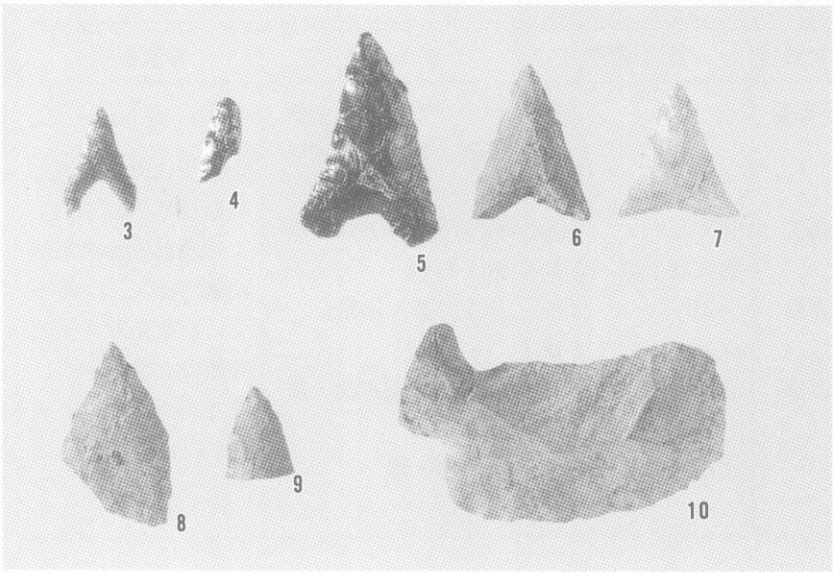
(2)　旧石器時代の石器(裏)



(1)　縄文時代の石器①



(2)　縄文時代の石器②



(3)　縄文時代の石器③

報告書抄録

ふりがな	もろたかんづか
書名	諸田仮塚遺跡
副書名	福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第5集
編著者名	柳田康雄・小川泰樹・杉原敏之・岸本圭
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7　TEL092-651-1111
発行年月日	西暦1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
諸田仮塚 (もろたかんづか)	福岡県筑紫野市 (ふくおかけんちくしのし) 大字永岡・常松・ (おおあざながおか・つねまつ) 諸田 (もろた)	402176	170335	33° 28′ 03″	130° 32′ 28″	19900803 ～ 19910408	8,000m²	道路(一般国道3号筑紫野バイパス)建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
諸田仮塚	墳墓 集落	旧石器 縄文 弥生 古墳	落とし穴　8基 竪穴状遺構　1基 大溝　2条 土坑　1基 古墳　2基 土壙墓　4基	ナイフ形石器・台形石器・彫器・スクレーパー 縄文土器・石鏃・石匙・石斧 弥生土器・鉄器 土師器・須恵器・鉄器・玉類 須恵器・轡	大溝2は地崩れのため崩壊している。 1号墳は主体部が初期横穴式石室。盛土下に石室を取り囲む3基の土坑がある。 馬を埋葬した土壙墓。2号墳に伴う。

福岡県行政資料

分類番号JH	所属コード213305
登録年度 9	登録番号16

一般国道3号 筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集

諸田仮塚遺跡

福岡県筑紫野市大字永岡・常松・諸田所在遺跡の調査

平成10年3月31日

発行 福岡県教育委員会
〒812-8575 福岡市博多区東公園7番7号
電話 (092) 651-1111

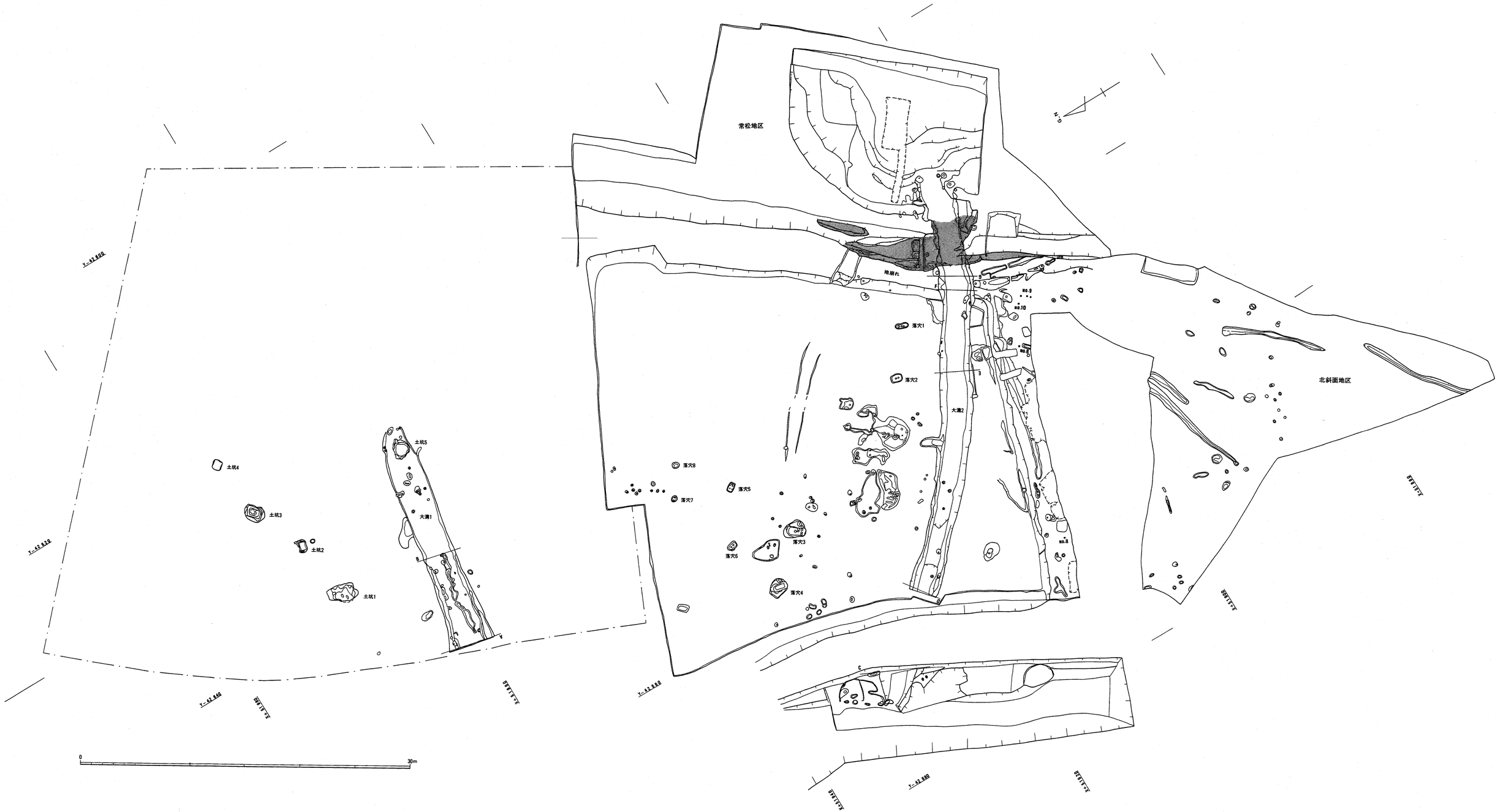
印刷 株式会社 秀巧社
〒810-0004 福岡市中央区渡辺通り1丁目12-9
電話 (092) 731-8214

付　図

付図 1　諸田仮塚地区遺構配置図(1/200)

付図 2　永岡地区遺構配置図(1/200)

付図1　諸田仮塚地区遺構配置図(1/200)



付図 2　永岡地区遺構配置図(1/200)